

# イーマーンとイスラーム： 信仰と実践

メヴラーナ・ハーリディ・バーダディ著



フセイン・ヒルミ・ウシュク編



# イーマーンとイスラーム： 信仰と実践

メヴラーナ・ハーリディ・バーダディ著

フセイン・ヒルミ・ウシュク編

1. Baskı : Ocak 2022

**Baskı ve Cilt**

Çınar Matbaacılık

Yüzyıl Mah. Matbaacılar Cad. Atahan No: 34 Kat: 5

Bağcılar / İSTANBUL

Sertifika No : 45103

Tel: (0212) 628 96 00

[www.hakikatbooks.com](http://www.hakikatbooks.com)



スプハーナッラーヒ ワ ビハムディヒ  
スプハーナッラーヒル アズィーム

この賞賛の言葉を朝晩 100 回唱える人の罪は許されます。再び罪を犯すことから守られます。このドゥアーは「メクトゥーバット・テルジェメシ/書簡集」の翻訳版の 307 ページと 308 ページにあります。全ての苦しみを取り除く要因となります。

第 I 部

皆が必要とする信仰

信仰とイスラーム

前書き

アッラーの御名を唱えることによってこの本を始めましょう

アッラーの御名はこの上ない庇護の場

その恵みは数えることなど不可能で

大いに憐れまれ、許すことを好まれるお方です

アッラーは、この世界で全ての人に憐みをかけられます。必要とされるもの全てを創造され、皆に与えられます。永遠の幸福へと至る道を示されます。我欲や悪い友人、有害な書物や外国のメディア等をうのみにしてこの幸福の道から逸脱した人、憎悪や逸脱の道に落ち込んでしまった人のうち、後悔して許しを求める人々を導かれます。彼らを永遠の災いから救われます。残酷で無慈悲な人々にはこの恵みを与えられません。そのような人々と彼らが気に入るもの、求めるものを憎悪の道に放っておかれます。来世では、地獄へ行かなければならない信者たちのうち、ご自身の望まれる人々を許され、天国へと至らされるのです。全ての生命体を創造され、全ての存在を維持され、全てを恐れや不安から救われるのはただアッラーです。このようなアッラー

の崇高な御名に庇護を求めつつ、すなわちアッラーのお助けを期待しつつ、この書物を記し始めます。

アッラーに感謝します。その愛すべき使徒、預言者ムハンマドに祝福と平安がありますように。この崇高な預言者の清らかなご家族と、公正で誠実なそのサハーバの全てに、ドゥアーいたします。

ハムドとは、全ての恵みをアッラーが創造され、遣わされたことを信じ、それを口に出すことです。シュクルとは、全ての恵みをイスラームに適した形で用いることです。

イスラームの教えの信条、命じていること、禁じていることを教える何千もの貴重な書物が記されてきました。これらの多くは外国語に訳され、各国に広まりました。一方で、誤った考え、短絡的な考えを持つ人々、外国のスパイにそそのかされた学者、不敬な人々はいつの時代も、イスラームのよさ、価値、規定すなわち命令事項や禁止事項を攻撃し、それを汚し、変化させ、ムスリムを欺瞞へと導こうと努力してきました。

現在では世界各地で、イスラーム学者がイスラームの信条を広め、またそれを保護しようとしているのは、感謝すべきことです。イスラームをサハーバから聞いて学び、それらを書物にした、正しい道を行く学者たちを、スンナの道を行く学者「**アフル・アル＝スンナの学者**」と呼びます。このアフル・アル＝スンナの学者の著作を読むことなく、もしくは理解することなく模倣しただけの人が、クルアーンやハディースを誤った形で理解し、不適切な説話や書物を出しているとはいえ、このような説話や書物はムスリムたちの正しい信仰を前に溶け去っていきます。これらはそのような作品の知識不足を示す以外に、何の影響も及ぼさなくなっています。

ムスリムであることを告白し、あるいは集団と共に礼拝を行っている人は、ムスリムであると理解されます。その後でその人の話すこと、書くこと、または行動において、アフル・アル＝スンナの学者が教えている信仰上の知識と相いれないものが見受けられた場合、それがイスラームを否定すること、逸脱であることを本人に説明します。それをやめ、悔悟するよう勧められます。短絡的もしくは誤った考えによってそれを放棄しないのであれば、彼が逸脱した人、もしくは棄教した人であることが理解されます。礼拝し、

巡礼を行い、イバーダや善行を実行したとしても、この災いから救われることはできません。イスラームの否定の要因となることを放棄し、悔悟しない限りはムスリムとはなり得ないのです。ムスリムは、否定の要因となり得ることをよく学び、教えを否定する者となることから身を守るべきです。ムスリムと偽っている人についてもよく知り、その害を避けなければならないのです。

クルアーンやハディースから誤った逸脱した意味が導き出されること、これによって様々な誤った教義が生み出されることを、預言者ムハンマドは告げられていました。「**バーリカ**」及び「**ハーディカ**」といった書物はこのハディースを「**ブハーリー**」や「**ムスリム**」といった書物から引用し、説明しています。偉大なイスラーム学者や宗教学の学者の名のもとに示しているこれらの誤った派に属する人々の書物、講演によって欺かれてはいけません。こういった教えや信仰を盗むとする人々の罠に落ちないように、十分注意深くあることが必要です。こういった無知なムスリムの他、共産主義者やフリーメーソン、キリスト教の宣教師やユダヤ教のシオニストたちも常に新しい手段でムスリムの子弟を欺こうとしています。でっち上げの文章、映画、劇、メディアを通してイスラームや信仰を失われたものとしようとしているのです。この道の為は何十億リラものお金をかけているのです。イスラームの学者たちは、これらの全てに対する返事を前もって書いています。アッラーの教え、安らぎと救いへの道を教えているのです。

真の学者たちの中から、偉大なイスラーム学者であるメヴラーナ・ハーリディ・バーダディ・オスマーン師の「**信条の書/イーティカドナーメ**」という本を、私たちは選びました。この本は故ハジ・フェイズラー師によりトルコ語に翻訳され、**フェラーイデュル・フェワーイド**という題をつけ、イスラーム暦 1312 年にエジプトで出版されました。この翻訳本を私たちは平易な言葉にただし、「皆が必要とする信仰」という題をつけました。第一版は 1966 年に出されています。私たちの注記を本文と区別する為に、注釈という形で括弧に入れてあります。無事に出版に至ったことをアッラーに感謝します。この翻訳本の原本はイスタンブール大学の図書館の「イブニ・エミン・マフムード・ケマルベグ」コーナーにおいて「**イティカドナーメ**」

という名称で F.2639 号として存在します。トルコ語訳はハキーカトゥ出版から、「信仰とイスラーム」という名で出版されています。

「ドゥッル・ウル・ムフタル」という書物の著者であるアラウディン・ハスケフィーはカーフィルの結婚に関する項目で次のように語っています。

婚姻を行うムスリムの女性が成熟していながらイスラームを知らなければ、この婚姻は無効となります。つまりムルタド「棄教者」となります。アッラーのあり方を彼女に教えなければならぬのです。彼女もそれを繰り返し、それらを信じましたと述べる必要があります。イブニ・アービディーンはこのことを解説して次のように述べています。「女性は小さい頃には、母や父に従う形でムスリムです。成熟すると、両親の教えに従う、という状態は継続されなくなります。イスラームを知らないままで結婚すると、ムルタドとなってしまいます。信仰するべき六つのことを学び、信じない限り、イスラームで従うべきことを信じない限り、**タウヒードの言葉「信仰告白」**を口に出したとしても、つまり「**ラー イラーハ イッラッラー、ムハンマダン ラスールッラー**」といったとしても、ムスリムとなったことにならないのです。『**アーマントゥ・ビッラーヒ**』にある六つの事柄を学び、それらを信じ、アッラーの命令と禁止事項を受け入れますということが必要なのです」

イブニ・アービディーンのこの言葉から理解されることは、一人のカーフィルが信仰告白を行うとその瞬間にその人はムスリムとなります。しかし全てのムスリムのように、この人もできる限り、

「**アーマントゥ ビッラーヒ ワマラーイカティヒー ワクトゥビヒー ワルスリヒー ワルヤウミル アーヒリ ワルカダリ ハイリヒー ワシャッリヒ ミナッラーヒ タアーラー ワルバアスィ バアダル マウティ ハクン アシュハド アン ラー イラーハ イッラッラー ワ アシュハド アンナ ムハンマダン アブドゥフ ワラスール**」

という信仰の基本を暗誦し、その意味とイスラームの知識の中から自分に必要な事柄を十分に学ぶべきなのです。ムスリムの子供も、この六つの事柄とイスラームの知識を学ばず、信じていることを述べないのであれば、成熟した時にはムルタドとなります。信仰した後、「**イスラームの知識**」、すなわちファルド、ハラーム、ウドゥー、グスル、そして礼拝の行い方、隠すべき

箇所についてすぐに尋ね、学ぶことがファルドとなります。聞かれた人が教えること、あるいは正しい宗教書を教えることも、その人にとってのファルドです。聞く相手や本が見つからなければ探し求めることもファルドです。探し求めなければカーフィルとなるのです。見つけるまでは、知らないことには正当な理由が認められます。ファルドを行うべき時に行わず、ハラームを行う人は地獄で罰せられます。信仰の六つの基本について、この書物では広く知識が与えられています。全てのムスリムはこの本を十分に読み、子供たちや知人に教えるべく努力すべきなのです。この章句は475ページに書かれています。この本では、クルアーンの言葉を引用する際には、「メアーレン」、このような意味のことが記されているという表現を用いています。ここでの「メアーレン」とは、クルアーンの解釈を行う学者たちの教えるところによるなら、という意味です。なぜならクルアーンの言葉の意味は、預言者ムハンマドのみが理解され、それをサハーバたちに教えられたからです。解釈を行う学者たちは預言者ムハンマドご自身が語られたことと、偽信者や信仰心を持たない宗教学者たちがでっちあげたハディースとを区別し、ハディースを見つけることのできなかつたものについては解釈学の基礎に基づいて、その意味を読み取ってきました。アラビア語を知っていても、解釈学の基礎を知らない人が読み取ったことを「クルアーンの解釈」と見なすことはありません。これについてはハディースでは「クルアーンを自分で理解したままに読み取る人は不信心者となる」と言われているのです。

アッラーが私たち皆に、アフル・アル＝スンナの学者立ちが教える正しい道を歩ませてくださいますように。無知な人々、そして偉大なイスラーム学者であるかのように知られていても、実際は正しい信仰を持たない偽信者の欺瞞から守ってくださいますように。アーミーン。

ハキーカトゥ出版社の全ての本は、あらゆる言語でインターネットを通して全世界に公開されています。

西暦

2001年

ヒジュラ歴「太陽暦」

1380年

ヒジュラ歴「太陰暦」

1422年

**忠言：**宣教師はキリスト教を広めようと努力し、ユダヤ教徒は律法を広めようと、イスタンブールのハキークトゥ出版はイスラームを広めようと、フリーメーソンは宗教を消失させようと努めます。知性、理性と良心を備えた人は、これらの中の正しいものを認識し、理解します。それを広める為の助けとなり、全ての人々が現世と来世で幸福となる為の要因となるのです。

今日、この世界にいるムスリムは三つの派に分類されます。第一の派は、サハーバたちの道を行く、真のムスリムです。この人々を「アフル-スンナ」、「スンニ」「天国に行く人々」、地獄から救われる人々と呼びます。第二の派は、サハーバに敵対した人々です。彼らを「シーア」「逸脱した人々」といいます。第三の派は、スンニとシーア派とに敵対する人々です。この人々を「ワッハーブ」「ナジュディ」と呼びます。なぜならこれは最初にアラビアのナジュド地方に起こったからです。彼らは「追放された人々」とも呼ばれます。なぜなら彼らがムスリムに対して不信心者と主張したことが「永遠の幸福」「復活と来世」といった書物で書かれているからです。預言者ムハンマドはこのように主張する人を呪われました。ムスリムをこの三つの派に分裂させたのはユダヤ教と当時のイギリスでした。

全ての信者は、我欲を清める為、つまりその本分にある無知さと罪から清められる為、いつでも「ラー イラーハ イッラッラー」と唱え、心を清める為、つまり我欲やシャイターン、悪い友達、そして有害な誤った書物からもたらされる不信仰や罪から救われる為「アスタグフルッラー」と唱えるべきです。イスラームに従い、罪を悔悟する人々のドゥアーは受け入れられます。礼拝をしない人、体を隠さない女性、そして体を覆っていない人を見る人、禁じられたものを飲み食いする人は、イスラームに従っていないことになります。彼らのドゥアーは受け入れられないのです。

## - 1 -

## はじめに

メヴラーナ・ハーリディ・バーダディはこの本を書き始める前に、イマーム・ラッバーニ・アフマド・ファールキー・サルハンディ「アッラーが彼に慈悲を与えてくださいますように」の「メクトゥーバツト/書簡集」という本の第3巻、17本目の手紙を書き、自分自身の本に彩りと恵みを与えようとなりました。イマーム・ラッバーニ<sup>1</sup>はこの手紙で次のように記しています。

私の手紙を、バスマラと共に始めます。私たちに全ての恵みを与えられ、そして最大の恵みとしてムスリムになるという誉れを与えてくださった、そして預言者ムハンマドのウンマとして価値を与えてくださったアッラーに感謝いたします。

よく考え、理解すべきことは、全ての恵みを与えられたのはただアッラーであるということです。全てを存在させられたお方も、ただアッラーです。全ての被造物を全ての瞬間において存在させ続けられるのもアッラーです。しもべたちの優れたよい性質はアッラーの恵みです。私たちの生命、理性、知識、力、見えること、聞こえること、話せることは全てアッラーゆえです。数えきれない様々な恵み、価値あるものを与えられるのは常にアッラーです。糧を創造され、私たちに与えられるのもただアッラーです。その恵みは非常に深いものであり、罪を犯した者にさえ、糧を与えられ続けます。非常に多くの罪を負覆われ、命令に従わず、禁じられたことを避けることをしない人々を卑しめられることもなく、誉れという覆いを取り払われないのです。許しや慈悲を多く持たれるお方であり、懲罰を受けるだけのことを行った人にも、その実行を急がれません。その恵みを友にも味方にも与えられます。あらゆる恵みの中でも最も素晴らしく尊いものとして、正しい道、幸福と救いの道を示されました。道を逸れないよう、そして天国へと行けるよう励まされているのです。天国の無限の恵み、尽きることのない喜

---

<sup>1</sup>イマーム・ラッバーニは 1034 年（西暦 1624 年）に死去しました。

び、そしてアッラーのご満悦と愛情を得ることができるよう、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に従うことを命じられました。アッラーの恵みは太陽のように明らかです。他者からもたらされるように見えるものでも、そもそもはアッラーからもたらされたものです。人々を媒介にし、よいことを行おうという意欲を与え、また彼らによりよいが行えるだけの力、強さを与えられたのもアッラーです。だから、あらゆる場所から、あらゆる存在からもたらされる恵みを与えられるのはやはりアッラーなのです。アッラー以外の何かに恵みを求めることは、何かを預かっているだけの人からそれを求めること、貧者にサダカを期待することに似ています。この言葉が正しいものであることは、イスラームについて知識のない人も学者同様に知っていることです。なぜならこれらは明らかなことであり、考え直す必要すらない様な事実であるからです。

人が、これらの恵みを与えられたアッラーに力を尽くして感謝することは、人としての務めです。理性もそれを要求する、一つの務めであり、責務です。しかしアッラーに対してなされるべきこの感謝を実行することは、容易ではありません。人は無から創造され、無力で多くの助けを必要とし、不足や欠点の多い存在です。アッラーは常に存在され、永遠に存在し続けられるお方です。欠点や不足とはかけ離れたお方です。人はどの観点からもアッラーとは似ても似つかない存在です。このようなしもべが、崇高なアッラーの誉れにふさわしい感謝をすることができるのでしょうか。なぜなら、人がよいと思ってもアッラーがその害をご存じであり、望まれないということは多くあります。私たちが敬意、感謝のつもりで行うことでも、アッラーのお気に召さないものであるかもしれないのです。だから人はその不十分な知識や短絡的な思考によって、アッラーに対する敬意や感謝がどのようなものであるべきかを知ることはできないのです。感謝し、敬意を示す為に意義のある行為がアッラーから知らされない限り、称賛するつもりで卑しめることになる可能性もあるのです。

だからこそ人がアッラーに対しその心、言葉、体で果たさなければいけない、そして信じなければいけない感謝、そしてしもべとしての責務についてアッラーが教えてくださり、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお

与えてくださいますように」によって明らかにされているのです。アッラーが示され、命じられたしもべとしての責務を、「イスラーム」と呼びます。アッラーへの感謝は、その預言者が示された手段に従うことによって実現します。それに反する形での感謝もイバーダも、アッラーは喜ばれないのです。なぜなら人がいいものであると考えても、イスラームにおいては好ましくなく、醜いとされるものが多くあるからです。

従って理性を持つ人は、アッラーへの感謝の為には預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えてくださいますように」に従わなければならないのです。その道を、**イスラーム**と呼びます。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えてくださいますように」に従う人をイスラーム教徒「**ムスリム**」と呼びます。アッラーに感謝すること、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えてくださいますように」に従うことを「**イバーダ**」と呼びます。イスラームの知識は二種類に分けられます。宗教上の知識と、科学的な知識です。改革派は、宗教上の知識を「**学術的知識**」、科学的な知識を「**合理的知識**」と呼びます。宗教上の知識も二種類に分けられます。

1. 心から受け入れられ、信じられるべき事柄です。これらの知識を「**教えの要素**」もしくは「**イマーン**」「**信仰**」と呼びます。簡単に言うなら、「**イマーン**」とは預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えてくださいますように」が知らせておられる六つの事柄を信じ、イスラームを認め、不信仰を意味するような事柄を口にしないことです。ムスリムは皆、不信仰を意味する事柄を知り、それらを避ける必要があります。信仰を持つ人のことをイスラーム教徒「**ムスリム**」と呼びます。

2. 体や心で行うべき、もしくは避けるべきイバーダの知識です。行うことが命じられている事柄を「**ファルド**」と、避けることが命じられている事柄を「**ハラーム**」と呼びます。これらを「**宗教上の規則**」もしくは**イスラームの知識**と呼びます。

皆にとって最初に必要となるのは、「**タウヒードの言葉**」を唱えること、その意味を信じることです。タウヒードの言葉とは「**ラー イラーハ イッララー ムハンマドゥン ラスールッラー**」であり、その意味は「アッラーは存在し、唯一であられ、ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与え

「いただきますように」はその使徒である」というものです。これを信じることは、信仰する、もしくはイスラーム教徒になることです。信仰する人のことは「信者」、イスラーム教徒「ムスリム」と呼びます。信仰は継続的なものである必要があります。従って、不信仰の要因となるようなことを行い、不信仰を意味するようなものを用いることは避ける必要があります。

クルアーンは、アッラーの言葉です。アッラーはジブラーイールという名の天使を通し、クルアーンを預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に遣わされました。クルアーンの言語はアラビア語です。しかしそれらの言葉を並べられたのはアッラーです。アッラーが並べられたままの形で現在に至ります。これらの文字や言葉の意味は、神の言葉という意義を備えるものです。これらの文字、言葉を「クルアーン」と呼びます。神の言葉を示すそれらの意味もまた、クルアーンです。この神の言葉であるクルアーンは作りものではなく、アッラーのその他の特性と同様、始まりも終わりもない存在です。天使ジブラーイールは毎年一度訪れて、それまでに啓示されたクルアーンを「保護された銘板」に記された順序に従って詠み、預言者ムハンマドもそれを繰り返していました。来世へと移られることになる年には2回訪れ、全てを読みました。預言者ムハンマドとサハーバたちの多くは、クルアーンを全て暗誦していました。来世へと移られた年、カリフアブー・バクルは暗誦している人々を集め、それらを書き留め、ある一団の人々にクルアーンの全てを筆記させました。こうして「ムスハフ」と呼ばれる本がまとめられました。3万3千人のサハーバが、このムスハフの一文字一文字が全て正しいものであるという点で見解を一致させています。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の言葉を、「ハディース」と呼びます。このうち、その意味がアッラーによるものであり、その言葉が預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」によるものについては聖ハディース「ハディース・クドゥシー」と呼びます。多くのハディースの本があります。これらのうち、「ブハーリー」及び「ムスリム」の本が有名です。

アッラーが命じられ、信じるべき事柄を「イーマーン」、行われるべき事

柄を「ファルド」、避けるべき事柄を「ハラーム」と呼びます。ファルドとハラームを「イスラームの規定」と呼びます。それらを全く信じない人をカーフィル「不信心者」と呼びます。

次に人に必要なのは、心を清めることです。心というと、二つのものが思い浮かびます。胸に位置する臓器も、心「心臓」と呼ばれます。これは動物にも存在するものです。もう1つの心は、目には見えないものです。イスラームの書物での心とは、こちらを指します。イスラームの知識は、この心にあります。信じるのも、信じないのも心です。信仰する心は清らかです。信仰しない心は汚れを持ち、死者のようです。心を清める為に努力することが第一の務めです。イバーダを行うこと、特に礼拝を行うこと、悔悟の言葉を述べることは心を清めます。ハラームであることを実行することは心を破壊します。預言者ムハンマドは次のようにおっしゃられました。「十分に悔悟を行いなさい。悔悟のドゥアーを継続して行う者を、アッラーは病気から、あらゆる苦しみから救われる。予想もしなかったところから糧を与えられる」悔悟とは、アスタグフルッラーと唱えることです。ドゥアーが認められる為にはそれを行う人が信者であり、その罪を悔やみ、ドゥアーの意味を理解し信じ、それを唱えることが必要となります。暗くなってしまった心のままで行われたドゥアーは受け入れられないのです。三度ドゥアーを唱え、日に五回の礼拝を継続して行う人の心は清められ、心そのものがドゥアーを行うようになります。心がそれを行っていないのに、口先だけで行われたドゥアーは何の役にも立たないのです。

イスラームの教えが伝えた宗教上の知識は、預言者ムハンマドの言行に従う人々「アフル・アル・スナ」である学者たちの書物で記された事柄です。この学者たちが伝えている信仰やイスラームに関する知識のうち、その意味が明白であるもの「ナース」、すなわちクルアーンの言葉とハディースを信じない人をカーフィル「不信心者」と呼びます。信仰を持たないことを隠すのであれば、偽信者「ムナーフク」と呼ばれます。信仰を持たないことを隠し、かつ、ムスリムのように見せかけてムスリムをだまそうとするのであれば、「ズンドウク」と呼ばれます。意味が明白ではない事柄を誤って解釈し、誤ったまま信じた場合はカーフィルにはなりません。しかし預言者ム

ハンマドの言行に従う人々「アフル・アル・スンナ」の正しい道からは逸れており、地獄に行くこととなります。意味が明白な事柄を信じた場合、永遠に罰を受けることはなく、地獄から出されることとなります。この人々のことを「逸脱した人々」と呼びます。これには様々な種類があります。こういった人々、そしてカーフィルの人々のイバーダや善行は認められず、来世でも何の益ももたらしません。正しい信仰を持つ人々のことを「スンナに従う人々」、もしくは「スンニ」と呼びます。スンニである人々は、崇拜行為によって四つの派に分けられます。これらの四つの派に属する人々は互いがスンナに従う者であることを認識し、尊重し合います。これらのうちのどれにも属さない人は、スンナに従う人ではあり得ません。スンナに従わない人々は、カーフィルもしくはビドゥア「逸脱」した人となることが、イマーム・ラッバーニの書簡、特に第1巻286番の手紙、そして「ドゥッル・ムフタル」という書の「タフタウィー・ハーシエ」の「ゼバアーユフ」の部分、及び「アル・ベサーイル・リムンキールツタヴァッスル」という本に書かれています。この二冊の書物はアラビア語です。二冊目はインドで書かれ、印刷され、1395年（西暦1975年）、及びその後、イスタンブールでハキークトウ出版によってオフセット印刷で多数出版されています。

四つの派のうちいずれかに従って崇拜行為を行う人が罪を犯した場合、もしくは崇拜行為において不足があった場合、悔悟をすればその罪は許されます。悔悟をしなければ、アッラーはお望みにより彼らを許され、決して地獄に入れられることはありません。またお望みによりその罪に応じた罰を与えられ、しかし最後はその罰から救われるのです。宗教上、明らかに認められている事柄のどれ一つも信じない人は、地獄で永遠に罰を受けることとなります。この人々を「カーフィル」、もしくは「ムルタド」と呼びます。

カーフィルは、啓典を持つ者、持たない者の二種類に分けられます。ムスリムの子として生まれながらも棄教した人を「ムルタド」と呼びます。イブニ・アービディ「アッラーの慈悲がありますように」が、多神教であることから婚姻が禁じられる人々について指摘する際に「ムルタド、ムルヒド、ズンドゥク、拝火教徒、偶像崇拜者、古代ギリシア哲学を信じる人々、偽信者、

様々な派のうち教えを放棄してカーフィルとなった人々、ブラフマン教徒、仏教徒、パーティニ派、イバーヒ派、ドルーズ派と呼ばれる人々」としています。共産主義者やフリーメイソンの人々も同様です。キリスト教徒とユダヤ教徒は神からもたらされ、その後変化してしまったタウラート「**モーセ五書**」やインジール「**旧約聖書**」を信じる、啓典を持つカーフィルです。彼らが、何らかの物体が神性を持つと信じる場合は「**多神教徒**」となります。アッラーには**ザートの特性**と**スプートの特性**と呼ばれるものがあり、それらを**ウルーヒーヤ「神性」の特性**と呼びます。

啓典を持つ、もしくは持たないカーフィルがムスリムとなれば、地獄に行くことから救われます。罪のない、無垢なムスリムとなります。ただし、「スンニ」であることが必要となります。スンニであるとは、預言者の言動に従う学者たちの書物を読み、学び、それに従って話し、行動する人であることを意味します。現世において人がムスリムであるかどうかは、強制のない状態で明白に語った言葉や行動から明らかになります。人がムスリムとして来世に行くかどうかは、最期の瞬間に明らかになります。大きな罪を犯したムスリムは清らかな心で悔悟を行えば、罪は必ず許されます。清らかな状態となるのです。「**悔悟**」が何であるか、どのように行われるかについては、イルミハルの本、例えばトルコ語、アラビア語の「**信仰とイスラーム**」及び「**永遠の幸福**」という書物で詳しく説かれています。

- 2 -

イーマーンとイスラーム

この本「イーティカドナーメ」では、預言者ムハンマドが「イーマーンとイスラーム」について説かれているハディースを取り上げます。このハディースの恵みにより、ムスリムの教義が完成され、[強められ]、それによって平安と幸福に至ること、そしてこれによって罪深い私自身も救われることを私たちは望むのです。

決して何も必要とされず、気前の良さと恵みを豊かに持たれ、しもべたちを深く憐れまれるアッラーへの信条を思うなら、この貧弱で暗い心を持つ私の至らない言葉がどうか許されますように。この不十分な崇拜行為が受け入れてもらえますように。偽り、騙すシャイターンの悪から守り、お慶びいただけますように。慈悲深いものの中でも最も慈悲深く、恵みを与えられるものの中で最も気前のよいお方はアッラーなのです。

イスラーム学者たちによれば、「ムカッラフ」である人、すなわち知性を備え、思春期以降に達している男女全てのムスリムが、アッラーのザート及びスブートの特性を正しく知り、信じる必要があります。皆にとって第一の義務「ファルド」がこれです。知らないことは弁解にはなりません。知らないことは罪になるのです。アフマドの息子であるハーリディ・バーダティ<sup>2</sup>がこの本を書いたのは、他者に対する優位さや知識を誇示する為でも、誉れを得る為でもありません。一つの記憶、一つの奉仕を遺す為です。アッラーがこの無力なハーリディと全てのムスリムに、ご自身のお力と預言者ムハンマドの神聖な魂の助けを持って、援助を行ってくださいますように。アーミン。

アッラーの「ザートの特性」は六つあります。ヴジュード、クダム、バカー、ワフダーニヤ、ムハラファトゥン・リル・ハワーディス、クヤーム・ビナフシヒーです。ヴジュードとは、ご自身で存在していることを意味します。ク

---

<sup>2</sup>ハーリディ・バーダティは1242年（西暦1826年）にダマスカスで死去しました。

ダムはその存在に始まりやそれ以前の時間がないことを意味します。バカーとは、その存在に終わりがなくことです。決して無になることはないことを意味します。ワフダーニヤはどのような観点からも同類のもの、類似するものが存在しないことを意味します。ムハラファトゥン-リル-ハーディースとは、どのような存在にも、どのような被造物にも一切の観点から似ていないことを意味します。クヤーム-ビナフシヒーとは、存在し、その存在を続けていく為に他の存在を必要としないことを意味します。この六つの特性は、どのような被造物にも存在しないものです。またこれらの特性は、どの被造物とも結びつかないものです。一部の学者はワフダーニヤとムハラファトゥン-リル-ハーディースが同じものであるとし、「**ザートの特性**」は五つであると見なしています。

アッラー以外の存在を、マシワ「**アッラー以外の被造物**」もしくはアーレム「**世界**」と呼びます。今日ではタビアトゥ「**自然**」とも呼ばれます。アーレムは全て、無でした。全てをアッラーが創造されました。アーレムの全ては無から有にも、有から無にもなり得る存在「ムムキーン」であり、そして無であったのが存在するようになった「ハーディース」のです。「**アッラーは存在されていた。他に何もなかった**」というハーディースはこれを示すものです。

世界がハーディース「無から有に至ったもの」であることを示す二つ目の根拠は、この世界が常に壊され、変化することです。全てのものが変化しているのです。カディム「存在に始まりがないもの」は決して変化しません。アッラーご自身の特性はこういったものです。これらは決して変化しません。しかしこの世界では、物理的な事象においては物質の変化が生じます。物質が無となり、他の物質に変化するのを見ることができます。原子の変化、核反応においては物質も要素も消失し、エネルギーへと変化します。世界におけるこのような変化、別のものから別のものが生じることは、それが無限ではないことを示します。始まりがあり、無から創造された最初の物質、要素から生じたことを意味します。

この世界が無から有へと至ることができるもの「ムムキーン」であることのまた別の根拠は、この世界が無から有に至ったもの「ハーディース」である

ことです。存在とは、あることです。存在には三つの種類があります。一つめは必須「ワージブルヴジュード」である存在、すなわちあることが必須である存在です。それは常に存在し、過去にも以前にも無となったことがありません。ただアッラーのみがこの「必須である存在」にあてはまります。二つめは「不可能である存在」、すなわち存在し得ないことです。常に無であることが必須となるのです。アッラーと並ぶもの、アッラーのような第二の神は存在し得ません。三つめは、「存在し得るし」、無にもなり得るといふのです。全ての世界「アーレム」、被造物は皆、これに該当します。存在「ヴジュード」という語の対義語は、「無/アデム」です。無とは、存在しないということです。全てのものは、存在するようになるまでは無でした。つまり、存在しなかったのです。

存在するもの「マヴジュード」は、二つに区別できます。一つめは無から有へと至るもの「ムムキーン」であり、もう一つが常に存在することが必須であるもの「ワージブ」です。もし存在するものの全てがムムキーンであり、ワージブであるものが何もなかったとしたら、その時には一切、何も存在し得なかったでしょう。なぜなら、ないところから存在するようになるというのは、一つの変化だからです。物理の知識によれば、ある物質で何らかの事象が発生する為には、この物質への外部からの力が働きかけること、そしてその力の源がこの物質よりも以前から存在していることが必要となるからです。この為、ムムキーンであるものはそれ自体で存在し始めることはできず、また存在し続けることもできません。それに対して何らかの力が影響を及ぼさない限り、ずっと無のままであったでしょう。存在することはなかったでしょう。自力で存在することができないものは、当然他のムムキーンを創造することもできません。ムムキーンであるものを創造できるものは、ワージブ「常に存在することが必須であるもの」でしかあり得ないのです。この世界が存在することは、それを無から有へと至らせた創造主が存在することを示しているのです。それはハーディスではなく、ムムキーンでもなく、常に存在し、全ての被造物の唯一の創造主であり、その存在はワージブです。それはカディム、すなわち常に存在します。存在がワージブであるということは、その存在が他者に依ったものではなく、完全に自生するもので

あることを意味します。つまり、常に自らの力で存在しているのです。他者によって創造されたものではありません。他者によって創造されたのであれば、ムムキーンかつハーディスであることとなります。これはここまでの考えに相容れない結果なのです。

ペルシャ語で「フダー」とは、常に自らで存在すること、つまりカディムを意味します。「私たちの本の第一部第6節、74ページにより詳しい知識が書かれています。そちらも読んでください。」

この世界は、驚異的な秩序のうちに存在していることを私たちは目にします。科学は毎年これを新しく見出しています。この秩序を創造した存在はハイ「生命を持つお方」であり、アーリム「知を備えたお方」であり、カーディル「十分な力を備えたお方」であり、ムリード「望まれるお方」であり、サミィ「聞かれるお方」であり、パーシル「ご覧になるお方」であり、ムタカッリム「語られるお方」であり、ハールク「創造されるお方」であることが必須となります。なぜなら、死ぬこと、無知であること、力が不十分であること、無理に行くこと、聞こえないこと、見えないこと、語られないことはそれぞれが一つの不足です。万物を、この世界を、これだけの均衡のもとに創造され、無であることから守られる存在に、このような不足があることは考えられないのです。

原子から星に至るまで、全ての被造物はそれぞれの秩序に用いて創造されています。物理学、化学、天文学、生物学で見ることのできる法則における秩序は驚くべきものです。ダーウィンですら「目の構造での秩序の細かさを考えるごとに、驚嘆せずにはいられない」と語っています。空気は78パーセントが窒素、21パーセントが酸素、そして1パーセントが不活性ガスの混ざったものです。複合体ではなく、混ざったものです。酸素が21パーセントよりも多かった場合、私たちの内蔵が焼かれていたでしょう。21パーセントよりも少なければ、血液中の糧となる物質を燃焼させることができなかつたでしょう。この21パーセントという数値は、どこでも、そして雨が降ったとしても変化しません。これは大きな恵みです。アッラーの存在、力、そして慈しみを示すものではないでしょうか。この奇蹟に比べるなら、目の構造すら些細なものとなります。科学知識において定着している全

ての法則、細かな計算、定義を創造される存在に、不足などがあり得るでしょうか。

これ以外の完成された特性は、被造物にも見るができます。これらを被造物においても創造されたのです。これらの特性がご自身にもなかったとしたら、なぜそれを被造物において創造することができるでしょうか。それらがアッラー自身にもないのであれば、被造物の方がアッラーよりもより尊いということになってしまうのです。従って、この世界を創造されたお方には、全ての完成された、優れた特性があり、また不足を意味するような特性は一切ないということができます。不足や欠点を持つ存在は、フダーにも、創造主にもなることはないのです。

理性が示すこれらの根拠を脇によけたとしても、クルアーンの言葉や聖ハディースもまた、アッラーが完成された特性を持つことを明白に知らせるものです。これに疑念を持つことは正しいことではなく、不信仰につながるものです。上記の八つの完成された特性を、「**スプートの特性**」と呼びます。すなわち、アッラーのスプートの特性は八つです。アッラーには、全ての完成された特性があります。その特性にも、みわざにも、一切の不足、混同、変化はありません。「**ザートの特性**」と「**スプートの特性**」を、ウルーヒーヤ「**神性**」の特性と呼びます。何らかの被造物にウルーヒーヤの特性があることを信じるのであれば、その人は「**多神教徒**」となります。

## - 3 -

## イスラームの条件

万物を常に存在させ、常に存在され、全ての善と恵みを与えられるお方であるアッラーのご援助により、ここでは預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の祝福された言葉の解説を始めましょう。

ムスリムたちの勇敢なイマームであり、サハーバたちの中でも先に立つ存在であり、常に正しいことを語る人として知られる愛すべき先達ウマル・ビン・ハッターブは次のように言いました。

「あの素晴らしい日、私たちサハーバのうち一人が、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のそばでお仕えしていた。」

その日、その時はこの上なく誉れ高く、尊く、かけがえのないものでした。その日、預言者さまの説話に参加し、おそばにすることで、誉れを受け、魂の糧であり、生命に喜びを与えるその神聖な御姿を見ることができました。この日の誉れ、尊さを説明する為に素晴らしい日という表現を用いているのです。ジブラーイールを人間の姿で見ること、その声を聞くこと、しもべが必要としている知識を明白な形で預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の祝福された口からきくことができたこの日ほどに、誉れ高く尊い時が他にあるでしょうか。

「その時、月が昇るかのように、ある人が我々のそばに来た。その服は真っ白で、髪は大変黒かった。その人には、埃や砂、汗といった旅をしてきたような様子は見られなかった。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のサハーバである私たちは誰も、彼のことを知らなかった。つまり、私たちがあって、見知っている人ではなかった。彼はアッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の前に座った。その膝を、その祝福されたおひざに近づけた」

この時訪れたのは、天使ジブラーイールでした。彼は人間の姿をして現れました。天使ジブラーイールのこの座り方が礼儀作法に適っていないかの

ように見えたとしても、この状況は重要なことを伝えるものなのです。つまり、宗教上の知識を得る点で恥ずかしがることは正しいのではなく、また教える者にもうぬぼれや思い上がりは似つかわしくないことを示しているのです。皆、イスラームについて知りたいことをその師に自由に、委縮することなく聞くべきであることを、この振る舞いによって天使ジブラーイルはサハーバたちに教えられたのです。教えを学ぶことを恥ずかしがること、アッラーを正しく知り、学び、教えることを苦にすることは正しいことではないのです。

「その人は、手をアッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の神聖な膝の上に置き、アッラーの使徒に質問した。アッラーの使徒よ！私にイスラームと、信者について説明してほしい、と。」

「イスラーム」とは辞書では、服従すること、委ねることを意味します。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、イスラームという言葉、イスラームの五つの基本的な柱の名称であるとして、次のように説かれました。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は次のように言われました。

1. イスラームの条件の一つめは、信仰告白「カリマ・シャハーダ」の言葉を唱えることです。これは、「アシュハド アン ラー イラーハ イッラッラー ワ アシュハド アンナ ムハンマダン アブドゥッ ワラスール」と唱えることです。つまり理性を持ち、思春期以上に達して話すことのできる人が、「地にも天にも、アッラー以外に崇拜されるにふさわしく、崇められるべきである存在は何もない。真に、崇拜されるべきなのはただアッラーのみである。」アッラーの存在は必須である、あらゆる優れた特性がそのお方にあり、そのお方には一切の不足はない、そのお方の名が「アッラー」である」と口に出すことであり、それを心から、絶対的に信じることです。そしてまたこのバラのような肌の色を持ち、赤みがかった白く輝く愛しい顔と、黒い眉、黒い目を持ち、神聖な額が広く、素晴らしい性質を持ち、優しい言葉を話し、アラビアのマッカに生まれた為にアラブ人と生まれ、ハーシム家の「アブドゥラーの息子ムハンマドと呼ばれる尊いお方がアッラーのしもべであり、またその使徒、すなわち預言者である。」というこ

とです。

預言者ムハンマドは、ワッハーブの娘アーミナの息子です。西暦 571 年、4 月 20 日の月曜日の朝、暁の光が出す頃にマッカの町でお生まれになりました。40 歳の時、預言者であることがご自身に告げられました。この年を**ビセットの年「預言者さまが遣わされた年」**と呼びます。

この後、13 年間マッカで人々をイスラームへと招かれました。アッラーのご命令により、マディーナへヒジュラ「聖遷」をされました。ここで、イスラームが広く伝えられるようになりました。ヒジュラから 10 年たち、西暦 632 年 6 月、ラビーウル・アッワル月の 12 日目の月曜日にマディーナで亡くなられました。

歴史家によると、預言者ムハンマドはマッカからマディーナへのヒジュラにおいて、西暦 622 年、サファル月の 27 日、木曜日の夕方、サウル山の洞窟に入られました。月曜日の夜に洞窟を出て、西暦では 9 月の 20 日、そしてラビーウル・アッワル月の 8 日、月曜日にマディーナ近郊のクーバの村に到着しました。この幸福な日は、ムスリムの「**ヒジュラ歴**」の始まりの日となりました。シーア派でのヒジュラ太陽暦の始まりは、これより 6 か月前になります。すなわち、拝火教徒のノールーズの祝日である 3 月 20 日に始まっています。夜と昼が等しい価値を持つ木曜日にもクーバに滞在し、金曜日にその地を離れ、その日、マディーナに入られました。その年のムハラム月の第一日が、**ヒジュラ太陰暦**の初日とされました。この太陰暦の初日は、西暦では 7 月 16 日の金曜日でした。いずれかの西暦の年始が該当するヒジュラ太陽暦の年は、この西暦から 622 を引いたものです。またいずれかのヒジュラ太陽暦の年始が該当する西暦の年は、この太陽暦に 621 を足したものです。

2. イスラームの五つの条件のうち二つめは、その形式やファルド「義務」に適した形で、毎日 5 回の「**定められた時間に礼拝を行うこと**」です。全てのムスリムは毎日、定められた時間に礼拝を行うこと、それらを正しい時間に行っていると認識していることがファルド「義務」になります。無知な人々、派に属さない人々が作った誤った暦に従って時間より前に礼拝を行うことは罪になり、この礼拝は正当なものと見なされません。同時に、ズフ

ルの最初のスナと、マグリブのファルド「義務の礼拝」を、礼拝を行ってはいけない時間にしてしまう要因にもなります。礼拝の時間が来たことは、ムアズィンがアザーンを唱えることによってわかります。信仰を持たない人によって、もしくはスピーカーなどを用いて唱えられるアザーンは、「ムハンマドのアザーン」とは呼ばれません。礼拝はファルド、ワーズ、スナに注意を払い、心をアッラーに寄せ、時間が過ぎる前に行わなければなりません。クルアーンでは、礼拝のことを「サラート」と表現しています。イスラームにおける「サラート」とは、イルミハルの本で書かれている形で、一定の行動をし、一定の言葉を唱えることです。礼拝は「イフティタフ・タクビール」によって始めます。すなわち、男性は手を耳の高さまで上げた後でへその下に下ろし、女性は手を肩の高さまで上げた後で胸の前で組み、「アッラーフ・アクバル」と唱えることにより始まります。最後は、座った状態で頭を左右の方に向け、「アッサラーム アライクム ワ ラフマトゥ ャッラー」ということで終わります。

3. イスラームの五つの条件の三つめは、「財産に対してザカートを行うこと」です。ザカートの辞書的な意味は、清めること、ほめること、そしていい状態になることです。イスラームにおけるザカートは、必要最低限のもの以上、そして「ニサーブ」として定められている一定の基準以上のザカートをするべき財産を持つ人が、財産のうち一定の量を取り分け、クルアーンで定められているムスリムたちへ、相手を軽視したりすることなく与えることです。ザカートは七つの層に属する人に与えられます。四つの派ごとに、四つの種類のニサーブが定められています。金や銀のザカート、貿易用の品のザカート、一年の半分以上を平原で放牧されている四足の家畜、そして土から収穫されるもののザカートです。この四つめのザカートを「ウスル」と呼びます。収穫されるとすぐにこのウスルが支払われます。残りの三つのザカートは、ニサーブの量に達してから1年後に支払われます。

4. イスラームの五つの条件のうち四つめは、「ラマダーン月に毎日断食を行うこと」です。断食を行うことを「サウム」と呼びます。サウムは辞書的には、何かを何かから守ることを意味します。イスラームにおいては、その条件に留意しつつ、ラマダーン月にアッラーのご命令故に、毎日三つのも

のから自らを守ることを意味します。この三つのものとは、食べること、飲むこと、そして性的交渉です。ラマダーン月は空に新月が見られることで始まります。カレンダーに前もって計算を書き加えることで始まるではありません。 5. イスラームの五つの条件の五つめは、「**それができる状態にある人が生涯に一度ハッジを行うこと**」です。道中が安全で、体が健康であり、マッカの町に行き帰ってくるまでに家に残す家族が生計を立てられるだけの財産と、そこに行き戻ってくるのできる人が、生涯に一度崇高なるカーバを周回すること、アラファトに留まることはファルド「義務」です。

この時やってきていた人は、預言者ムハンマドのこの答えを聞いて、「**あなたは正しいことを言っている、アッラーの使徒よ**」といました。その場にいたサハーバたちはこの様子に驚いていたとウマルは伝えています。なぜなら彼は質問し、かつその答えが正しいと評価したからです。何かを尋ねることは、知らないことを学びたいと求めていることを意味します。あなたが言っていることは正しいと答えたのであれば、その人がそれらを知っていることを意味しているのです。

このイスラームの五つの条件のうち最も重要なものは、「**信仰告白の言葉を唱えること**」、そしてその意味を信じることです。その次に重要なことが、礼拝を行うことです。それから断食を行うこと、ハッジを行うことと続き、最後がザカートを支払うことです。信仰告白の言葉が最も重要であることについては意見が一致しています。残りの四つの順序についても、学者たちの多くは上記のように述べています。信仰告白の言葉は、イスラームの最初期に、最初にファルドとなったものです。5回の礼拝は、預言者であることが明らかになってから12年目、ヒジュラの一年と少し前にミラージュの夜に定められたものです。ラマダーン月の断食は、ヒジュラの2年目にシャーバン月に定められました。ザカートを支払うことは、断食がファルドとされた年のラマダーン月でファルドとなりました。ハッジは、ヒジュラから9年目にファルドとなりました。

誰かがイスラームの五つの条件のうち一つを否定した場合、すなわちそれを信じず、認めない場合、あるいはそれをからかったり敬意を払わなかつ

たりした場合は、その人は信仰を持たない人「カーフィル」となります。またハラールもしくはハラームであることが明白に、意見の一致によって宣言されているものうちどれかを認めない場合、すなわちハラールをハラームといたり、ハラームをハラールといたりする人もまた、カーフィルとなります。宗教上必ず認識されるべきもの、つまりイスラーム国家に暮らし、教えについて知識のない人々ですら耳にし、知っているような宗教上の知識のうちどれかを否定する人、気に入らない人もカーフィルとなります。

例えば、豚肉を食べること、アルコール飲料を飲むこと、賭博を行うこと、女性が頭や髪、腕や足を見せること、男性が膝とへその間が見える状態で他の人の前に現れることはハラームです。つまりアッラーが禁じられています。アッラーのご命令と禁止事項を教えている四つの派は、男性が隠すべき場所についてそれぞれ異なった見解を示しています。ムスリムは、自分が所属する派が示している見解に従って、隠すべき場所を覆うことが必要です。またそれらの場所が見えている人を他の人が見ることもハラームです。「幸福の錬金術」では、女性が頭や髪、腕、足が見える状態で外を歩くことがハラームであると同様に、薄く、飾りの多く、ぴったりとしていてよい香りのする服で外に出ることも禁じられています。このような姿で外に出ることを認め、許し、またそれを気に入る親や兄弟もその罪を共に行ったこととなります。もし悔悟を行えば、その罪は許されます。アッラーは悔悟を行う者を愛されるのです。

ムスリムであると話す人は、その行いがイスラームにおいて適したものであるかどうかを知る必要があります。もし知らないのであれば、預言者ムハンマドに従う学者に尋ねたり、そうした学者の本を読んだりするべきです。行っていることがイスラームに適したことでなければ、罪や教えへの嫌悪となります。毎日真の悔悟を行うことが必要です。悔悟を行えば、罪も教えへの嫌悪も必ず許されます。悔悟を行わなければ、現世と来世でその罰を受けることとなります。この罰についてはこの本の様々な箇所書かれています。大きな罪を犯したムスリムは、その罪に相当するだけ地獄で焼かれた後、そこから出されます。アッラーを信じず、イスラームを壊滅させようと努めた人は、永遠に地獄に留まることとなります。

男性・女性が礼拝中及び常に隠していなければいけない場所を、「**アウラの場所**」と呼びます。アウラの場所を見せること、他者のアウラの場所を見ることはハラームです。イスラームにはアウラなどといったものはない、と発言する人はカーフィルとなります。四つの派が一致してアウラと見なしている場所を見せ、また他者のその場所を見ることがハラールであるという人、重要視しない人、その罰を恐れない人はカーフィルとなります。女性がアウラの場所を見せること、男性のいる場所で歌を歌うこと、マウリードを唱えることも同様です。男性のひざと鼠蹊部の間は、ハンバリー派ではアウラとされていません。

私はムスリムだという人は、信仰と信仰の条件、そして四つの宗派が見解を一致させているファルドとハラームについて学び、それに重きを置くことが必要です。知らないことは弁解にはならないのです。知らないことは信じないことのようにです。女性の顔と手以外の場所は、四つの宗派においてハラームです。見解が一致していないもの、つまり残りの三つの宗派のうちどれかにおいてはアウラではない場所を、重きを置かず見せる人はカーフィルにはならないものの、それぞれの宗派においては大きな罪を犯したことになります。男性がひざと鼠蹊部の間を見せることはこれに該当します。知らないことについては学ぶことがファルドとなります。学んだ時にはすぐに悔悟を行い、そこを覆うべきです。

嘘をつくこと、陰口、噂話、中傷、窃盗、不正行為、裏切り、心を傷つけること、人々の間に不和を生じさせること、他者の財産を許可なく使うこと、労働者、運搬人の料金を支払わないこと、国家に反逆すること、すなわちその法律、憲法の命じていることに従わないこと、税を支払わないことも罪です。これらは、信仰を持たない人、信仰を持たない国家に対しても行うことはハラームとなります。教えについて無知である人の耳に入るほどよく知られていて、必須というわけではない事柄をその人たちが知らないことは、不信仰にはなりません。ただ、罪となります。

- 4 -

## イーマーンの条件

ウマルは語っています。「この人はさらに尋ねていった。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」よ、イーマーンが何であるかについても私に教えてください、と」

イスラームが何であるかを尋ね、答えを得てから、天使ジブラーイール「彼の上に祝福あれ」は預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」にイーマーンの真実とあり方を尋ねています。イーマーンは辞書的には、誰かを完全に正しいと認識すること、彼を信じることを意味します。イスラームにおけるイーマーンとは、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」がアッラーの使徒であること、アッラーによって選ばれた、使者であることが正しいと認識し、それを信じ、口にする、預言者ムハンマドがアッラーからお伝えられたことを信じる、できる限り信仰告白の言葉を唱えることです。強い信仰とは、火が焼くこと、ヘビが毒を持って人を死なせることを熟知してそれらを避けるように、心から完全にアッラーとその特性の偉大さを知り、信仰し、そのご満悦、美を求め、お怒りや罰から逃れること、そして大理石の上に書かれた文字のように、信仰を心に強く定着させることです。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」が教えられたイーマーンとイスラームは同一です。信仰告白の言葉を信じることはその双方に含まれます。いくつかの一般的な、もしくは個別の違いがあるとはいえ、辞書的な意味が異なっても、イスラームにおいてはその差はないのです。

イーマーンとは唯一のものでしょうか、それとも複数のものが一体化したのでしょうか。一体化したものであるなら、そこにはいくつのものがあるのでしょうか。行動や崇拝行為はイーマーンによるもののでしょうか、違うのでしょうか。私は信仰を持つ、というのであれば、インシャラーということとは適当でしょうか、違うのでしょうか。イーマーンには大小はあるのでし

ようか。イーマーンを持つことは、自らの力でできることでしょうか。信者は無理にイーマーンを持つのでしょうか。イーマーンに強制があるなら、皆がイーマーンを持つことがなぜ命じられたのでしょうか。これらを個別に説明することは非常に長い時間を要します。従ってここでは、これらの問いの一つ一つ応えていくことはしません。しかし、次のことは知っておくべきでしょう。アシュアリー派とマートゥリーディー派によるなら、可能ではないことをアッラーが命じることはあり得ません。ご自身にとって可能でも、人間の力がそれには及ばないことを命じられることは、マートゥリーディー派によればあり得ないことであり、アシュアリー派によればそれはあり得ることはあるけれども、命じられてはいないとされています。人が空を飛ぶことなどがその例です。イーマーン、イバーダ、宗教的实践においてアッラーはしもべの力が及ばないことは命じられてはおられないのです。だからムスリムでありつつも精神に異常をきたしている場合、もしくは不注意であったり、眠っていたり、あるいはすでに死亡していたりする場合は、その状態においてイスラームを認めていなかったとしても、ムスリムであるという状態は維持されます。

このハディースでは、イーマーンの辞書的な意味を考えるべきではありません。辞書的には認めること、信じることという意味であるということは、宗教の知識を持たないアラブ人であってさえ、知らない人は皆無であるからです。だからサハーバたちがそれを知らなかったとは考えられないのです。天使ジブラーイルはイーマーンの意味をサハーバたちに教えることを望み、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」にイスラームでは何をイーマーンとするかを尋ねたのでした。「イーマーン」とは、気づきにより見出し、あるいは良心によって見出し、もしくは何らかの根拠によって論理的に理解すること、あるいは選んだ、気に入った言葉を信頼し、それに従い、定められた六つの事柄を心から信じること、それを口に出すことです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」も、イーマーンとは定められた六つのことを信じることである、ということを示されました。

1. この六つの事柄の一つめは、「アッラーが「常に存在が必須」であるお方

であり、真に崇拜されるべき存在であり、全ての被造物の創造主であることを信じることです。」 現世と来世にある全てのものを何の材料も用いず、時間もかけず、かつ比類なきものとして無から創造されたのが、ただ崇高なるアッラーであると絶対的に信じることです。全ての物質、原子、量子、要素、混合物、組織体、細胞、生命、死、あらゆる出来事、あらゆる反射、全ての力、エネルギー、動き、法則、魂、天使、生命の有無に関わらず全てのものを無から創造され、全てをあらゆる瞬間に存在させられるのは、ただアッラーです。世界にある全てを、何もない、全てが無である状態から瞬時に創造されたように、あらゆる瞬間に新たに創造され、また最後の審判の時が来れば、全てを瞬時に無とされます。存在する全てのものの創造主、主、統治者はアッラーであり、アッラーを支配し、命令を下し、アッラーよりも優れた存在はない、と信じるが必要なのです。全ての崇高さ、完成された特質はアッラーのもので、アッラーには一切の欠点や不足はありません。望んだことを全て実践されます。そのみわざは、ご自身の為、あるいは誰かにとって効果があるゆえに行われるのではありません。また混同させる為に行われることもありません。あらゆるみわざに英知と効用、恵みがあります。

アッラーはしもべによいもの、価値のあるものを与えたり、人に善行を与えたり、罰を与えたりする義務を負うわけではありません。罪を行う人の全てを天国に入れられたとしても、それはその崇高さ、恵みにふさわしいものでしょう。また従い、イバーダを行う人の全てを地獄に入れられたとしても、その公正さに適したものとなっていたことでしょう。しかしアッラーはムスリムで、イバーダを行う人々を天国に入れられ、教えを否定する人々を地獄で永遠に罰されることを望まれ、それを告げられているのです。アッラーは約束をたがわれることはありません。生命を持つ全てのものが信仰を持ち、従ったとしても、アッラーに何かの効果があるわけではありません。また全世界が教えを否定し、激しく反抗したとしても、アッラーに何らかの害が及ぶわけではありません。しもべが何かをすることを望み、それをアッラーも望まれれば、それを創造されます。しもべの全ての行動を創造されるのはアッラーです。アッラーがそれを望まれず、創造されなければ、何も動

くことはありません。アッラーが望まなければ、誰もカーフィルとなることもありません。反抗することもできません。教えへの敵対や罪を望まれたとしても、それに満足されることはありません。アッラーのみわざには誰も干渉することはできません。なぜこうしたのか、こうしたらよかったのという権利、その理由を問う力や権利は誰にもありません。シルク「アッラーに何ものかを配すること」と不信仰以外、大きな罪を犯し、悔悟もせず死んだ人を、アッラーはお望みであれば許されます。小さな罪の為に罰せられることもあります。ただし信仰を否定する者として死んだ場合は、決して許されず永遠に罰せられることが告げられています。

ムスリムであり、キブラの方向に礼拝を行う人であり、イバーダを行い、しかしその信仰が「スンナ」に従う人々の信仰にはそぐわず、悔悟も行わずに死んだ人は、地獄で罰を受けたとしても、このような「道を逸れた」ムスリムは、永遠に地獄にいることはありません。

アッラーを、この世において目で見ることはジャイズ「許容されること」です。しかし、誰も目にした人はいません。最後の審判の日に人々が集められる場所で、教えを否定する人々や罪を犯したムスリムには威厳と尊厳を備えて、誠実なムスリムには恵みと美を備えて、お姿を示されるのです。ムスリムたちは天国で美しいお方という特性と共にアッラーのお姿を目にします。天使たち、女性たちも同様です。教えを否定する人々にはそれがかなわないでしょう。ジンにもそれはできないということが告げられています。

シャイフ・アブドゥルハック・ダフラヴィー師<sup>3</sup>はペルシア語のその「タクミー・ウルイマーン」という本で次のように記しています。ハディースでは次のように語られている。「最後の審判の日、あなた方の主を 14 番目の月に見たかのように見るだろう」アッラーは現世において人知を超越しているように、来世においても同様でしょう。アブル・ハサニ・アシュアリーやイマーム・スヌーティのような偉大な学者たちは天使たちも天国でアッラーを見ると語っています。アブー・ハニファやその他の学者たちは、ジンが

---

<sup>3</sup>アブドゥルハック・デフレヴィは 1052 年（西暦 1642 年）にデリーで死去しました。」

サワーブを得られず、天国に行くことができないこと、ただし信仰を持つジンは地獄から救われることを語っています。女性は現世でのイードのように年に数回、完全な信者は毎日朝晩、それ以外の信者は金曜日にアッラーのお姿を目にします。私の考えでは、信者である女性と天使、ジンもまた、この吉報に含まれているのです。聖ファーティマ、聖カディージャ、聖アーシヤやその他の預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のご家族、そしてマリヤムやアーシヤのような完成された忍耐強い女性たちは、それ以外の女性たちとは区別されるのが適切でしょう。イマーム・スューティもそのことを示唆しています。

私たちはアッラーをお目にかかるということを感じるべきであり、それがどのような形で行われるのかを考えるべきではありません。なぜならアッラーの行われることは、人知の及ばないものであるからです。この世界での出来事に類したものではなく、物理や化学の知識で対応できるものではないからです。アッラーには方向はありません。アッラーは物質ではなく、物体でもありません。要素でもなく、それらが合成されたものでもありません。数えられるものではなく、測定できるものでもありません。計算できるものでもありません。またアッラーに変化は生じません。時空を超えた存在であられ、ある場所に存在されるわけではありません。アッラーには過去も未来も、前も後ろも、上も下も右も左もありません。だから、人の考え、人の知識、人の理性はアッラーについて何も把握することはできないのです。アッラーがどのようにご覧になっているか、ということを理解することもできません。手、足、姿、場所といったアッラーについて許容されない表現がクルアーンやハディースで用いられているのは、私たちが理解し認識しており、今日用いているような意味ではありません。このようなクルアーンの言葉やハディースを「ムタシャービハートウ」「隠喩的なもの」と呼びます。これらは信じるべきであり、かつそれがどういう形で行われるのかを知ろうとするべきではありません。あるいはこれらについて短くもしくは長く詳細に「解釈」がなされます。つまりアッラーにふさわしい意味が与えられます。例えば手という語は、力、熱源という意味なのです。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」

は、アッラーをミラーージュの際に目にされました。これは、この世界でのような、目で見ることではありません。誰かがアッラーをこの世界で見たというのであれば、彼はズンドゥクとなります。アッラーの友である人たちの見方は、現世や来世を見るというようなものでもありません。つまり「視覚的」なものではないのです。彼らは「心の目で見ている状態」です。アッラーの友である人々の中にはアッラーを見たという人がいたとしても、それは心の目で見たものを視覚ととらえているか、解釈を通して理解すべき言葉として用いているかのどちらかなのです。

**質問：**アッラーを現世において目で見るとは許容されたものであると先にも述べられている。許容されている事柄が実際に起こったと述べる人がなぜズンドゥクとされるのか。それが起こったと語った場合にその人がカーフィルとされるのであれば、その事柄は許容されていると言えるだろうか。

**答え：**辞書的には、許容される「ジャイズ」とは、それが起こっても起こらなくてもどちらでも適切であるという意味です。しかしアシュアリー派では、見ることが許容されるということは、アッラーがこの世界に近くあられること、前におられること、またこの世界で創造された物理的な法則に基づいて見る以外を指すものであり、人において全く特別な見る力を創造されるだけの力があるということを意味します。例えば、中国にいる目の見えない人に、アンダルシアのハエを見せる、もしくは地球にいる人に月や星にあるものを見せるだけの力が十分にあり、それは許容されているのです。このような力は、アッラーのみに限られるものです。二つめとして、この世界で見たということは、クルアーンの言葉や学者たちの一致した意見にそぐわないものです。だから、このようなことを話す人は、「ムルヒド」もしくは「ズンドゥク」になるのです。三つめとして、この世界で見ることが許容されているということは、アッラーをこの世界で、物理的な法則に従ってみることが許容されているということの意味しないのです。しかしアッラーを見たと話す人は、他のものを見るのと同じようにアッラーを見た、といったこととなります。これは許容されていない見方なのです。これと同様に、不信仰をもたらすようなことを話す人をムルヒドもしくはズンドゥク

と呼びます。「メヴラーナ・ハーリド師はこの答えの後で、注意してくださいと述べ、これによって二つめの答えがより確実なものであることを示唆されています」「ムルヒド」及び「ズンドウク」と呼ばれる人々は、自分たちがムスリムであると言います。「ムルヒド」は、この言葉で嘘をついてはいません。自分がムスリムであり、正しい道にあると信じているのです。ズンドウクは、イスラームの敵です。イスラームを内部から崩壊させ、ムスリムを騙す目的でムスリムのようなふりをしている人々のことを指します。

アッラーにおいて朝と夜、もしくは時間の経過があることは考えられません。どの観点からも全く変容されることがなく、過去にこのようであられた、未来にはこのようになられるということはできません。アッラーは何ものとも一体化されず、何ものとも統合されません。「シーア派のうち、聖アリーがアッラーと一体化したと見なすヌサイリーという派は、カーフィルとなります」アッラーと対になる存在、似ている存在、共同で何かを行う存在、援助者、庇護者はいません。母、父、息子、娘、配偶者はいません。常に皆のそばにおられ、全てを包括され、全てをご存じです。それぞれの人にとって、自分の頸動脈よりもより近い存在です。しかしそばにおられること、包括されること、共におられること、近くおられることは、私たちの知っているような形ではありません。アッラーの近しさは学者たちの知識、科学者たちの知能、アッラーの友である人々の気づきや心の目による発見によって理解されるようなものではありません。これらの内面は、人の理性が把握できるものではないのです。アッラーはその特性において同一であられ、一切の変化、変容はありません。「Tefekkerû fî âlâillâhi ve lâ tetefekkerû fî zâtillâhi/テフェッキュル フィー アラーリッラーヒ ワ ラー テテフェッケル フィー ザーティッラーヒ、] 第一巻第 46 の手紙を読んでください。

アッラーの美名は、「**タウキーフィー**」とされます。すなわち、イスラームが教える美名を述べることは許容されており、それ以外を語ることは許容されていません。例えば、アッラーについてアーリム「全てを正しくご存じであるお方」ということはできます。しかし、ファーキフ「知識を持つ者」ということはできません。なぜならイスラームは、アッラーについてファーキフとはいわないからです。同様に、アッラーという名の代わりに、神とい

う表現を用いることも許容されていません。なぜならこれは例えば、ヒンズー教徒の神は牛である、という表現に用いられる言葉です。アッラーは唯一であられ、アッラーの他に神はない、という表現をすることはできません。外国語における Dieu, Gott, God といった言葉も、神という意味で使われる物であり、アッラーという言葉の代わりに用いることはできません。

アッラーの美名は限りなくあります。1001 個の名が、人には知られています。つまり多くの名のうち 1001 個を人間に教えられたのです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」はそのうちの 99 を教えられました。これをアッラーの美名「**エスマ-イ フスナ**」と呼びます。

前述したとおり、アッラーの「**ザートの特性**」は六つです。「**スプートの特性**」は、マートゥリーディーによれば八つ、アシャリによれば七つです。これらの特性も、アッラーご自身と同様に始まりも終わりもないものです。すなわち無限にあるものです。それらは神聖なものであり、被造物の特性のようなものではありません。知や推論によって、あるいは現世のものに似せることによって理解されることはありません。アッラーはこれらの特性からそれぞれの例を、人々に恵みとして与えられました。これらを見ることで、アッラーの特性を少しだけ理解することができるのです。人はアッラーを理解することができないのであり、だからアッラーについて考え、理解しようとすることは許容されていません。アッラーの八つのスプートの特性はアッラーご自身と同じでもなく、異なっているわけでもありません。すなわち、その特性はご自身ではなく、ご自身以外のものでもありません。この八つの特性はハヤート「**生命を持つ**」、イリム「**全てをご存じである**」、バサル「**全てをご覧になる**」、クドゥラ「**力が十分である**」、カラーム「**語られる**」、イラーダ「**望まれる**」、タクウィーンです。アシュアリー派ではクドゥラとタクウィーンが同じものとされています。

アッラーの八つの特性のどれもが、常にその状態であることを示します。どれにおいても一切の変化は生じません。しかし被造物への関わりにおいては、それぞれが多様なものです。これらの特性の被造物への結びつきがその影響の観点から多様であることは、これが常に変わらないものであるこ

とに害は与えません。同様にアッラーは、これほど多くの種類のことを創造され、全てをあらゆる瞬間に消失から守っておられます。しかしやはり、アッラーは唯一の存在なのです。アッラーに変化は生じないのです。全ての被造物はあらゆる観点からアッラーを必要としています。そしてアッラーは、何ものをも必要とはされていないのです。

2. 信仰され、信じられるべき六つの事柄の二つめが、「その天使たちを信じることです」。天使です。天使「マーリク」とは使者、使い、あるいは力を意味します。天使は物体であり、非常に軽やかで繊細な存在です。気体よりもさらに軽い存在です。光を運び、生命を持っています。知性を備えています。人間にあるような悪い事柄は、天使にはありません。あらゆる形に入ることができます。気体が液体や固体になり、固体になった時に形を持つように、天使たちも美しい形を持つことができます。天使は、偉大な人々の肉体から離れた魂ではありません。キリスト教徒は天使をこのような魂であると見なしています。熱源、力のように物体のない存在でもありません。過去の哲学者の一部は、このように考えていました。それぞれを「マラーイカ」と呼びます。天使たちは生命体よりも先に創造されました。その為、啓典への信仰よりも前に、天使を信じるように告げられています。啓典は、預言者たちよりも前です。クルアーンは、信仰すべきものの名前を、この順に示しているのです。

天使への信仰は、次のようなものである必要があります。天使たちは、アッラーのしもべです。共同で何かを行う存在ではありません。アッラーの娘でもありません。カーフィルである人々や多神教徒である人々にそのように考えられているようです。アッラーは天使たちの全てを愛されます。天使たちはアッラーのご命令に従います。罪を犯す事はありません。命令に反発することはありません。男性でも女性でもありません。結婚はせず、子供を生むことありません。生命を持ち、生きています。アブドゥラー・イブン・マスドによれば、天使たちの一部には子供ができ、イブリースやジンがそれであるとされてはいますが、このことへの答えは、書物で十分に説明されています。アッラーが人を創造しようと望まれた際に天使たちが「主よ、地上を台無しにするような、血を流すような存在を創造されるのですか」と天使

たちが「ゼツラ」と呼ばれる問いをしたことは、彼らが無垢で罪を犯さない存在であることと矛盾するものではありません。

数が最も多い被造物が天使です。その数はアッラー以外誰も知りません。天には、天使がイバーダを行っていない、空いた場所はありません。天のあらゆる場所は、ルクーやサジダを行う天使たちで満たされています。天で、地で、草の上で、星で、生命を持つもの、持たないもの、雨の粒、木の葉、全ての微粒子、原子、あらゆる反射、動き、全てにおいて天使たちの役割があります。あらゆる場所でアッラーの命令に従っているのです。アッラーと人間の媒介となります。一部の天使は、他の天使の長の立場にあります。一部は預言者たちに知らせをもたらします。また一部は人々の心によい考えをもたらします。これを「イルハム」といいます。一部の天使は、人間やその他の被造物のことを知りません。アッラーの美を前にして夢中になっているのです。それぞれの天使には定められた場所があります。そこから離れることはありません。一部のものには2枚、一部のものには4枚かそれ以上の翼があります。それぞれの動物の翼や飛行機の翼がそれぞれに固有であり、互いに似ていないように、天使たちの翼も彼らに固有のものであります。人は見たことのない、知らないものの名前を聞いた時には、それを知っているものと同じように思い、過ちを犯します。天使たちには翼があり、私たちはそれを信じます。しかしそれがどのようなものであるかを知ることはできません。

教会や雑誌、映画などで天使として現れる、羽の生えた女性像は架空のものであります。ムスリムではない人々のこうした絵を真実だと思込んではいけないのです。天国の天使は、天国にいます。そのうちの崇高な存在の名は「ルドゥバン」といいます。地獄での天使たちの名は「ザバーニ」です。彼らは地獄において命じられた役割を果たします。地獄の炎は彼らに害を与えることはありません。海が魚に害を与えないのと同様です。地獄のザバーニのうち著明なもの数は19であり、そのうち最も偉大な天使の名が「マーリク」です。

全ての人々の善悪全ての行いを記録し、夜に二人、昼に二人が役目を果たしている四人の天使の名を「キラーマン・カーティビーン」、もしくは「記

**録の天使**と呼びます。記録の天使は他にもいるとも言われています。右側にいる天使は左側にいる天使を管理しており、よい行いとイバーダを記録します。左側の天使が悪い行いを記録します。墓においてカーフィルや反抗的なムスリムに罰を与える天使と、墓で質問をする天使がいます。質問をする天使を「**ムンカル**」と「**ナキル**」と呼びます。ムスリムに質問をする天使を「**ムバッシル**」と「**バシル**」とも呼びます。

天使たちの間には優位性の違いがあります。最も崇高な天使を四大天使と呼びます。これらのうち一番目は「**ジブラーイー**ル」です。彼の役割は預言者たちに「**啓示**」をもたらすこと、命令と禁止事項を伝えることです。二番目は「**スール**」と呼ばれるラッパを吹く、「**イスラーフイー**ル」という天使です。スールは二度、吹かれます。一度めでは、アッラー以外の全ての生物が死に絶えます。二度めでは、全てが再び蘇ります。三番目の天使は、「**ミカーイー**ル」です。経済の秩序を司り、安らぎや心地よさをもち、あらゆる物質を動かすことが彼の役割です。四番目は「**アズラーイー**ル」です。人々の命を取るのがこの天使です。この四大天使について偉大である天使たちは四つの階級に分類されます。「**ハマラ・イ・アルシュ**」と呼ばれる天使は四人ですが、最後の審判の時には八人になります。アッラーの御前にいる天使を「**ムカッラビーン**」と呼びます。罰を与える天使たちのうち崇高なものを「**カルービヤーン**」と呼びます。慈悲を与える天使をルハーニヤーンと呼びます。これらの天使は全て、天使たちのなかでより崇高な存在です。彼らは預言者たちよりも、全ての人々よりもより崇高な存在です。ムスリムのうち、誠実な信者たちやアッラーの友と呼ばれる聖人たちは天使たちのうち地位の低い者たちよりもより崇高であるとされます。天使たちのうち下位に位置する者でも、ムスリムの中で下位に位置する人々、すなわち教えに対して反発していたり大罪を犯したりする人々よりは崇高です。

カーフィルたちはあらゆる被造物よりも下位に当たります。一度目のスールが吹かれると、四大天使とハマラ・イ・アルシュ以外の全ての天使もいなくなります。その後、ハマラ・イ・アルシュと四大天使もいなくなります。二度目のスールが吹かれると、まずすべての天使たちが復活します。ハマラ・イ・アルシュと四大天使は、二度目のスールが吹かれるよりも前に復活

します。砂割これらの天使たちは、全ての生命体よりも先に創造されたように、全ての生命体よりも後にいなくなるのです。

3. 信仰されるべき六つの事柄のうち三つめは、「**アッラーが下された書を信じること**」です。アッラーはこれらの書を、天使たちを通して一部の預言者たちの神聖な耳に語られ、また一部の預言者たちには銘板として書かれた状態のものを、また一部の預言者たちには天使を通さずに、下されました。これらの書の全てはアッラーのお言葉です。始まりも終わりもないものです。創造されたものではないのです。これらは天使や預言者たち自身の言葉ではありません。アッラーのお言葉は、私たちが書き、記憶し、話している言葉のようなものではありません。文字や言葉、頭にあるようなものではないのです。文字や音はありません。アッラーを、そしてその特性を人間は理解できません。しかしそのお言葉を人間は読むのです。頭に留めておき、書くのです。私たちと共にあればそれはハーディス「最初からあるものではなく、変容する存在」となります。アッラーのお言葉は、人間たちの元にある時は被造物であり、ハーディスとなるのです。アッラーのお言葉であるという点を考えるなら、それはカディーム「始まりも終わりもないもの」です。

アッラーの下された書の全ては正しく、真実です。つまり、過ちではありません。罰、処分を行うと語った後で許されることは許容されるものとはいえ、私たちの知ることのできない条件、もしくはアッラーのご意志によるものとなります。あるいは、そのしもべが受けるべき罰を許されるという意味です。罰や処分を告げる言葉は、それが許された時には嘘を述べたことにはならないのです。アッラーが約束された恵みを与えられないことは許容されることではなかったとしても、罰を許されることは許容されることです。理性も、またクルアーンの言葉もそれを示すのです。

何らかの支障がない限りは、クルアーンの言葉やハディースに明白に理解され得る意味をあてる必要があります。それらに似た、他の意味をあてることは許容されていません。クルアーンとハディースは、クライシュ族の言葉と方言で記されています。それらの言葉には、1400年前にヒジャーズ地方で用いられていた意味を充てる必要があります。時の経過と共に変化した、今日用いられている意味をあてて翻訳することは正しいことで

はありません。隠喩「ムタシャーピフ」と呼ばれるクルアーンの言葉には、理解されていない秘められた意味があります。これらの意味はただアッラーがご存じであり、**幽玄界**からの智が与えられた、ごくわずかな選ばれた偉大な人々のみが、自分たちに明らかにされた形でそれを理解することができるのです。それ以外の誰も、理解することはできません。だから隠喩的なクルアーンという言葉については、それがアッラーのお言葉であると信じ、その意味を探ろうとしてはいけないのです。アシュアリー派の学者たちはこのような言葉を長く、もしくは短く「**解釈すること**」は許容されるとしています。ここでの解釈とは、その言葉の様々な意味の中から、一般的でないものを選ぶという意味です。例えば、夜の旅章に置ける「**アッラーの御手は、彼らの手の上にある**」という意味になる言葉は、アッラーのお言葉です。アッラーがこれにより何を望まれているのであれ、それを信じた、というべきなのです。この意味を私は理解できない、アッラーのみがご存じだ、ということが最適の道なのです。アッラーの知識は私たちの知識のようなものではなく、アッラーのご意志も私たちの意志には似ても似つかないものです。アッラーの御手も、しもべたちの手のようなものではないのです。

アッラーの下された書において、いくつかの章はその読み方もしくは意味のみ、あるいはその両方が**取り消され**、アッラーによって変えられています。クルアーンは全ての啓典を取り消し、その規定を無効としました。クルアーンにおいては最後の審判の日まで、決して誤りや忘却、過度や不足はあり得ないのです。過去と未来の全ての知識が、クルアーンにはあります。従って全ての啓典よりも優れ、尊い存在です。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の最大の奇蹟は、クルアーンです。全ての人間とジンが集まり、クルアーンの中で最も短い章ほどの言葉を語る為に努力したとしても、それはできないのです。アラビアの全ての雄弁な人々、文学者、能弁な詩人立ちが一か所に集まって努力をしたものの、短い章程の言葉ですら語ることはできませんでした。クルアーンと対抗することができず、驚愕したのでした。アッラーはイスラームに敵対する人々が、クルアーンを前にして無力で弱い存在とされました。クルアーンの雄弁さは、人の力を超えたものです。人間はそのように語ることはできないので

す。クルアーンの言葉は、人の韻律、韻を踏まない散文、そして韻を踏んだ言葉には似てはいません。一方で、アラビアの文学者が用いる文字によって語られています。

啓典のうち私たちに教えられているものは、104 あります。これらのうち 10 ページは預言者「アードム」に、50 ページは預言者「シート」に、30 ページは預言者「イドゥリス」に、10 ページは預言者「イブラーヒーム」に下されたことがよく知られています。タウラート「律法」の書は預言者ムサーに、「ザブール」という書は預言者ダーウードに、インジール「新約聖書」という書は預言者イーサーに、そしてクルアーンは預言者ムハンマドに下されたのです。

人が、命令を下すこと、何かを禁じること、あるいは何かを尋ねること、何かを伝えることを望むと、まずそれを頭で考え、用意します。頭の中にあるこの概念を「カラム・ナフス」と呼びます。この概念に対しては、アラビア語、ペルシア語、トルコ語といわれることはありません。異なる言葉で語られることは、これらがそれぞれに異なる意味を持つ理由とはなりません。これらの意味を表現する言葉を、「カラム・ラフズ」と呼びます。ここからわかることは、カラム・ナフスは他の特性と同様、例えばイリム、イラーダ、バーシルのように、カラムという徳性の持ち主が備えた、変化しない固有の特性なのです。カラム・ラフズは、カラム・ナフスを表現し、人の耳に入り、話す人の口から出る文字の集合体です。アッラーのカラム「語られるお方」という特性は、決して沈黙しない、また被造物でもない、始まりも終わりもないものなのです。アッラーのザートの特性であるイリム、イラーダの特性と同様、スブートの特性とは異なってそれ自体が一つの特性なのです。

カラムという徳性は変化することのないものです。文字や音を持つものではありません。命令、禁止事項、通告のように、アラビア語、ペルシア語、ヘブライ語、トルコ語、アラム語といったように、変化したりばらばらになったりすることはありません。このような形を取ることもありません。文字として書かれることもありません。知能、耳、舌といった器官や媒介は必要としません。どの言葉で語ることが望まれるのであれ、その言葉で語ら

れます。このようにしてアラビア語で語られたものがクルアーンと呼ばれ、ヘブライ語で語られたものがタウラート「律法」です。アラム語で語られたものがインジール「新約聖書」です。「シェフルフル・メカーシド」という本<sup>4</sup>では、ギリシア語ではインジール、シリア語ではザブールであると書かれています。」

神の言葉は様々な種類の事柄を伝えます。出来事、起こったことを伝える場合、「知らせ」と呼ばれます。そうでないものは「構文」と呼ばれます。行われるべきことを告げる場合は「命令」となります。行ってはいけないものを告げる場合は「禁止」となります。しかし、神の言葉には変貌や複製はありません。下された啓典や頁の全てが、アッラーの「語るお方」という特性からもたらされたものです。語るお方という特性、すなわちカラーム・ナフスからのものなのです。アラビア語となったものがクルアーンです。文字を持ち、書かれ、あるいは語られ、聞かれ、頭で覚えられ、韻が調った形で下された啓示を、「カラーム・ラフズ」もしくは「クルアーン」と呼びます。このカラーム・ラフズは、カラーム・ナフスを示すものであり、これをも神の言葉、そして神の特性と呼ぶことができます。その全体をクルアーンと呼ぶように、その一部もクルアーンと呼びます。

カラーム・ナフスがマフルーク「創造されたもの」ではなく、始まりも終わりもないものであることについては、正しい道を行く学者たちが意見を一致させています。カラーム・ラフズが始まりも終わりもない存在であるかどうかについては、学者たちの意見は一致していません。カラーム・ラフズが始まりも終わりもないものとしている人の一部は、カラーム・ラフズが始まりも終わりもないものであると言ってはいけないと語っています。もしそれを、始まりも終わりもないものというのであれば、カラーム・ナフスが始まりも終わりもないものであることがわかるとしてあります。最も的確な言葉がこれでしょう。人の知性は、何かを示すものを聞いた時に、それを私たちの口から出した声、言葉がマフルーク「創造されたもの」であることを

<sup>4</sup>「シェフルフル・メカーシド」はサドゥーッディン・テフターザーニーによって書かれ、彼は792年（西暦1389年）にサマルカンドで死去しました。

指摘しているのです。預言者ムハンマドの道を行く学者たちは意見を一致させ、カラーム・ラフズもカラーム・ナフスも、アッラーの言葉であるとしています。この言葉に関しては、隠喩という手段に逸れた人々がいたとはいえ、カラーム・ナフスがアッラーの言葉であるということは、アッラーの「語る」という特性であるということを示します。カラーム・ラフズがアッラーの言葉であるということは、アッラーがその創造者であることを意味します。

**問い：**ここまでの文章から、アッラーの永遠であるお言葉は聞くことができないことがわかります。アッラーの言葉を聞いたということは、それを詠む声や言葉を聞いたということです。もしくは、それを詠む声と永遠であるカラーム・ナフスを理解したということです。全ての預言者、むしろすべての人は、この二つの形であれば、そのお言葉を聞くことができます。預言者ムーサー「彼の上に平安あれ」が「カリームッラー」「アッラーの言葉」として区別される理由は何でしょうか。

**答え：**預言者ムーサー「彼の上に平安あれ」は神の公正さの範疇外のこととして、文字や音を持たないアッラーの永遠の言葉を聞きました。天国で、私たちには理解できない、説明もできない形でアッラーのお姿が目に見えるように、説明できない形でそれを聞いたのです。他に誰もそのような形で聞いた人はいません。しかし、ただ耳で聞いたのではなく、体の全ての細胞で聞きました。あるいはただ、木によって聞かれました。しかし音によってではありません。空気の振動やその他の形で聞いたのではないのです。この三つの形で聞いたという理由から、「カリームッラー」という名を得たのです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」がミラージュの際にアッラーの言葉を聞かれたこと、天使ジブラーイルから啓示を得る際に聞かれたことも、このような形で実現したのです。

4. 信仰されるべき六つの事柄の四つめは、「アッラーの預言者たちを信じること」です。人々をアッラーの喜ばれる道に至らせ、正しい道を示す為遣わされました。ラスールという語は、ラスールの複数形です。ラスールとは、辞書的には遣わされた人、使者という意味です。イスラームにおける「ラスール」とは、その本質、性格、知識、理性の点で同時代に生まれた全

ての人々よりも優れており、尊く愛すべき人を意味します。一切の悪い性質、好ましくない態度はありません。預言者たちには「イスメット」と呼ばれる特性があります。つまり、預言者であることが明らかになる以前も、その後も、大小を問わずどのような罪も犯してはいないということです。預言者であることが明らかにされた後、預言者であることが人々にも告げられ、理解されるまでは目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりといった事態にもなりません。全ての預言者に七つの特性があることを信じる必要があります。これらは**信頼、誠実さ、伝道、公正さ、罪のなさ、預言者としての英知**、そしてアムヌル・アズル、すなわち預言者という任務を解かれることはない、というものです。ここで英知とは、非常に理性が高く、また思慮深いということです。

新たな教えをもたらす預言者を、「**ラスール**」と呼びます。新たな教えはもたらさず、人々をそれ以前の教えに導く預言者を「**ナビー**」と呼びます。命令を伝え、人々をアッラーの教えに招くという点でラスールとナビーとの間には何の違いもありません。預言者たちを信仰するとは、その間に何の差もつけず、その全員が誠実で正しいことを話す人であると信じることです。彼らのうちの誰かを信じない人は、預言者たち全員を信じないことになるのです。

預言者となることは、努力すること、空腹や苦しみに耐えること、イバードを多く行うことによって手にされるものではありません。ただアッラーの恵みと選択によるものです。人々の現世と来世での仕事が問題のない、効果のあるものとなる為、そして有害な行いから身を守り、安らぎや導き、安泰へ至ることができるよう、預言者を媒介として教えを下されたのです。多くの敵を持ち、彼らを嘲笑い、悲しませたにも関わらず、アッラーのご命令を人々に伝え、それを信じさせ、実行させる為敵を恐れず、また敵から目をそむけることもありませんでした。アッラーは預言者たちが誠実さを持ち、正しいことを語っていることを示す為、奇蹟によって彼らを強められました。誰も、この奇蹟に関しては反発することができなかつたのです。預言者を認めて信じた人を、その預言者の「**ウンマ**」と呼びます。最後の審判の日には、ウンマの中から多くの罪を犯した人々についてとりなしを行う

為の許しが与えられ、そのとりなしが認められます。ウンマの中で、学者、誠実な信者、ワリー「アッラーの友、聖人」である人々にも、とりなしの為にアッラーは許可を与えられ、彼らのとりなしも認められます。預言者たちはその墓において、私たちが知ることでできない形で、生きています。その祝福された肉体を、土は腐敗させることはありません。その為にハディースでは、「**預言者たちはその墓において礼拝をし、巡礼を行う**」と言われているのです。

サウジアラビアに存在する「**ワッハーブ**」派と呼ばれる人々は、このハディースを信じません。これらを信じる真のムスリムを不信心者と呼んでいます。意味が明白ではなく疑わしい伝承を誤って解釈しているため、彼ら自身は不信心者とはなりません、**ビドゥア「こしらえものに従う者**」となります。ムスリムたちに大きな害を及ぼしています。ワッハーブ派はムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブという名のナジュド出身の愚か者によって作られたものです。イギリスのスパイはイブニ・タイミヤー<sup>5</sup>の逸脱した考えを主張し、彼をだましたのでした。「アブドゥフ」<sup>6</sup>という名のエジプト人の書物により、トルコやあらゆる場所に広まりました。これらの全ては宗派ではなく逸脱であり、誤った道にある、ということをも「**スンナの道を行く学者たち**」が何百もの書物で語っています。「**永遠の幸福**」と「**最後の審判と来世**」という書物でもこれらが詳しく記されています。アッラーが若い宗教者を、イギリス人が作り出したワッハーブの道に滑り落ちてしまうことのないようお守りくださいますように。ハディースにおいて称賛されている「**スンナを守る学者たち**」の道から離れることがありませんように」

預言者たち「彼らの上に平安あれ」の祝福された目が眠っている時でも、心の目は眠りません。預言者としての役割を果たし、預言者としての優位性を備えているという点で、全ての預言者は同等です。先に述べた七つの特性

---

<sup>5</sup>アフメッド・イブニ・タイミヤーは728年（西暦1328年）にダマスカスで死去しました。

<sup>6</sup>ムハンマド・アブドゥフは1323年（西暦1905年）にエジプトで死去しました。

は全ての預言者にあるものです。預言者たちは預言者という立場を解かれることはありません。ワリー「聖人」の場合は、その立場を失うことがあります。預言者たち（アッラーの祝福あれ）は人間から選ばれます。ジンや天使が、人の預言者となることはありません。ジンや天使は預言者という位階に達することはないのです。預言者たちの間には、誉れやその有意差において違いがあります。例えば、ウンマの数が多いこと、遣わされた国が大きいこと、その知識やアッラーへの知が広い範囲に広まること、奇蹟がより多く、より継続的にあること、彼らの為の特別な恵みを与えられることといった優位性の点から、預言者「ムハンマド」「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は全ての預言者よりもより尊い存在です。特に崇高な六人の預言者たちはそれ以外の預言者よりも、そしてラスール「新しい教えを携えてくる預言者」は、ナビー「新しい教えを携えてこない預言者」よりもより尊い存在です。

預言者たち（アッラーの祝福あれ）の数は明らかではありません。12万4千よりも多いことが知られています。これらのうち、310人もしくは315人がラスールです。そのうちの六人が、より尊い存在とされます。彼らは「ウルル・アズム」である預言者と呼ばれます。

ウルル・アズムの預言者とは、アードム、ヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、イーサー、そしてムハンマド・ムスタファです。預言者たちのうち、33人はよく知られています。その名は、アードム、イドリース、シートもしくはシース、ヌーフ、フード、サーリフ、ルーツ、イスマーイール、イスハーク、ヤークーブ、ユースフ、アイユーブ、シュアイブ、ムーサー、ハールーン、ヒドウル、ユーシャ・ビン・ヌン、イリヤース、アルヤサ、ズルクフル、シャムウン、イシュモイル、ユーヌス・ビン・マター、ダーウード、スライマーン、ルクマーン、ザカリヤー、ヤフヤー、ウザイル、イーサー・ビン・マリヤム、ズルカルナイン、そしてムハンマド「アッラーの祝福と平安がありますように」です。

このうち、28人の名前がクルアーンで伝えられています。シート、ヒドウル、ユーシャ、シャムウン、イシュモイルについては言及されていません。この28人のうちズルカルナイン、ルクマーン、ウザイル、そしてヒド

ウルが預言者であるかどうかははっきりとはわかっていません。「マクトゥバート・マスーミヤ」という本の第2巻、第36の手紙では、ヒドゥルが預言者であるとする伝承が信頼できるものであるとしています。また、ヒドゥルが人間の姿で現れること、いくつかの事柄を行っていることは彼が今でも生きていることを意味するものではありません。アッラーは彼の、そして同様に他の多くの預言者やワリーたちの魂が、人間の形で姿を現すことを許されたのです。彼らを目にすることは、彼らが生きているということを示すものではないのです。預言者ズルフィカルの二つめの名前はハルクルです。また彼が預言者イルヤスもしくはイドリース、あるいはザカリヤであるという見解もあります。

預言者イブラーヒーム（アッラーの祝福あれ）は、ハリールッラー「アッラーの深い友」と呼ばれます。なぜなら彼の心には、アッラーへの愛情以外、どの被造物への愛着もありませんでした。預言者ムーサーはカリームッラー「アッラーがお話になった者」と呼ばれます。アッラーと話をした為です。預言者イーサーはカリマトゥッラーと呼ばれます。なぜなら彼には父がなく、ただ『在れ』というアッラーの言葉のみでその母から生まれたからです。それに加え、アッラーの英知に満ちたお言葉を、説教を行って人々に伝えたのでした。

人間のうち最も崇高で最も誉れ高く、最も尊く、そして全ての存在の創造の理由でもあられる預言者「ムハンマド」「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、ハビーブッラー「アッラーが最も愛される存在」と呼ばれます。彼がハビーブッラーであられること、そしてその偉大さ、崇高さを示すものは非常に多くあります。その為、彼に対して、敗北した、駄目になったというような言葉を用いることはできないのです。最後の審判の日、墓場から誰よりも先に出られ、マフシャルの場に最初に行かれ、天国にも誰よりも先に入られます。その奇蹟は数え切れず、人間にはそれを数える力はありません。ここでは、ミラージュと呼ばれる奇蹟について紹介しましょう。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は寢床におられる際に起こされ、その祝福された体で、マッカの町からエル

サレムにあるアル・アクサ・モスクへと、そしてそこから天へ、天の第7層からアッラーの望まれるいくつかの場所へと運ばれました。

ミラージュについて、このように信じる必要があります。イスマイル派の逸脱した宗派に属する人々、イスラーム学者の外観に身を包む宗教に敵対する人々は、ミラージュは一つの状態であり、魂によって実現した、肉体を伴って行ったのではない、と語り、書き、若者を欺こうとしています。このような誤った本を買い、彼らに騙されてはいけません。ミラージュがどのようなものであるかは、多くの尊い本、例えば「シファーイ・シェリーフ」<sup>7</sup>で詳細に書かれています。「永遠の幸福」の本でも詳しく説明がなされています。

ミラージュについては一部の人々が、預言者ムハンマドの魂だけが旅をしたと述べていますが、そのような見解は誤りです。

マッカの町から、「スイドラ・アル＝ムンタハー」と呼ばれる木の聳えるところまでは天使ジブラーイルと共に行かれました。「スイドラ・アル＝ムンタハー」とは、天の第6層と第7層に存在する木であり、どのような知識であれどのような上昇であれ、その木よりも先に進むことはないのです。預言者ムハンマドはスイドラ木のそばで、天使ジブラーイル（アッラーの祝福あれ）を600の翼を持つ彼本来の姿で目にします。天使ジブラーイル（アッラーの祝福あれ）はそのスイドラの木のそばで待ちます。マッカからエルサレムまで、あるいは天の第7層までは、「ブラク」に乗られていました。ブラクとは白色で、ラバより小さくロバより大きい、天国の動物です。現世にいる動物の一種ではありません。オスとメスの区別はなく、非常に高速で進みます。一步一步が目に見えない程の距離となります。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は、「アル・アクサ・モスク」で、預言者たちのイマームとなり、イシャーもしくはファジュルの礼拝をされました。預言者たちの魂が、彼ら自身の人間としての姿となってその場にいました。「エルサレム」から天まで、「ミラージュ」

---

<sup>7</sup>シファーイ・シェリーフを書いたイヤド・マーリキは544年（西暦1150年）にメッラーキュシュで死去しました。

という名の私たちが知ることもない梯子のようなもので一瞬にして上げられました。その途上では天使たちが左右に並び、預言者ムハンマドを賞賛していました。天の各層に至るたびに天使ジブラーイル（アッラーの祝福あれ）は預言者ムハンマドに誉れが与えられたことを吉報として伝えました。天の各層で、それぞれの預言者とあいさつを交わしました。「**スィドラ木のそばで**」は、驚くべき多くの事柄を目にされました。天国での恵みと地獄での罰を目にされました。スィドラ木の先へと、お一人で光の中を進んで行かれました。天使たちのペンの音を聞かれました。7万の覆いを超えられ、それらの覆いの間は、それぞれは500年かかる距離でした。その後、太陽よりも明るく輝く「**ラフラフ**」と呼ばれる敷物に乗って、天の層を超え、神の玉座へと至りました。天の第9層から、時間から、空間から、物質世界からその外でと出られたのです。アッラーのお言葉を聞くことのできる位階に至られたのです。

時空を超越した形で来世においてアッラーがお姿を示されるように、私たちに理解できず言葉にもならない形でアッラーとお会いになられました。文字や音を伴わない形でアッラーと語られました。アッラーを唱念し、感謝し、称賛されました。限りのない誉れを受けられました。ご自身とそのウンマに50回の礼拝がファルドとされたものの、預言者ムーサー（アッラーの祝福あれ）の示唆によって、少しずつ、5回にまで減らされました。これ以前にはファジュールとアスルもしくはイシャーの礼拝がなされていました。これほど長い旅の末に多くの恵みを受けられ、驚嘆するような物事を目にされて寝床に戻られた時には、寝床にはまだぬくもりが残っていたのでした。ここで記したことの一部はクルアーンで、一部はハディースで語られていることです。この全てを信じることはワージブではないとはいえ、預言者の道を行く学者たちが告げたことであることから、これらを信じない人は預言者の道を外れることとなります。クルアーンの言葉やハディースを信じない人は、カーフィルとなります。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」が「**サイード・ウル・アンビヤー**」、すなわち預言者たちの長であることを示す数えきれないほどの事柄のうち、いくつかをここで紹介しましょう。

最後の審判の日、全ての預言者たち「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は預言者ムハンマドの旗の陰に入ります。アッラーは全ての預言者に、「創造物のうちで私が選び、愛する存在であるムハンマド「彼の上に平安あれ」が預言者となる時に至った際には、彼を信じ、助けなさい」と命じられました。また預言者たちもそのウンマに、このような遺言と命令を遺しました。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は「ハタム・アル・アンピヤー」、すなわち最後の預言者であり、預言者ムハンマド以降にはもはや預言者は遣わされません。神聖なその魂は全ての預言者たちよりも先に創造され、預言者としての立場も誰よりもまず彼に授けられました。預言者の到来は、預言者ムハンマドがこの世界に誉れを与えられたことによって完了しました。預言者イサーは最後の審判が近づいた頃、マフディの時代において天からダマスカスに下るとされていますが、地上で預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の教えを広めます。彼のウンマとなります。

「ヒジュラ歴1296年、西暦1880年にインドでイギリス人が作り出した「カーディヤーニ」と呼ばれる逸脱者たちは、預言者イサー（アッラーの祝福あれ）についても醜い嘘をついています。自分たちのことをムスリムと呼んでいたとしても、イスラームの教えを内部から崩壊させようとしているのです。彼らがムスリムでないことが宗教的に宣言されています。彼らは「アフマディーヤ」とも呼ばれます。」

インドで生じた、ビドゥアを持ち、ズンドゥクである人々の一派が、「ジャマアト・タブリーグ」という派です。これは1345年（西暦1926年）にイリヤースという無知な人物によって創設されました。「ムスリムは逸脱している。彼らを救うため、私は夢で指示を受けた」と語っていました。逸脱した人々を師としており、ネジール・フセイン、ラシード・アフメッド・セハーレンブルーニの本から学んだとしています。ムスリムを欺くため、常に礼拝と信者集団の重要性について語りました。しかしビドゥアを持つ人々、つまりスンナ派の道に属さない人々の礼拝や崇拜行為は認められないのです。彼らがスンナ派の本を読み、まずビドゥアである信条から救われ、真の

ムスリムになることが必要です。クルアーンでは、秘めた形で伝えられた章句から誤った意味を読み取る人を「ビドゥアを持つ人々」もしくは「逸脱者」と呼びます。クルアーンの章句に、自らの背信的で逸脱した思想によって誤った意味を与えるイスラームの敵対者をズンドゥクと呼びます。ズンドゥクは、クルアーンとイスラームを変容させようとします。彼らを登場させ、育て、世界各地に広めるために何十億も費やす最大の敵はイギリス人です。イギリス人のカーフィルの罠に落ちた無知で不名誉な「ジャマアト・タブリーグ」の人々は、自らを「スンナ派」と呼び、礼拝を行いながら嘘をつき、ムスリムを欺いています。アブドゥッラー・ビン・メスードは次のように語っています。「信仰を持っているわけではないのに、礼拝を行う人々がいる。彼らは地獄の底で永遠に焼かれ続ける。その一部は、ミナーレのてっぺんのコウノトリの巣のように、大きなターバン、ひげ、長い上衣を身に着け、クルアーンの章句を読み、それらに誤った意味付けを行ない、ムスリムを欺く。しかし聖ハディースでは、アッラーは姿かたちや衣装ではなく、あなた方の心と意思をご覧になる、とされている」

## 詩

**Kadd-i büleñd dâred, destâr pâre pâre,**

**Çün âşiyân-ı lekkek, ber kelle-i minâre.**

この無知で愚かな、金メッキの目が嘘であることを示している人々は、「ハキーカトゥ出版」の本に返答することができないため、「ハキーカトゥ出版の本は間違っている、逸脱している。こういう本を読んではいけない」と言うのです。イスラームの敵である逸脱した人々、ズンドゥクたちの最大のしるしは、スンナ派の学者たちの文章や真の宗教書について、これらは逸脱している、読んではいけないということです。イスラームに対して彼らが及ぼす害や、スンナ派の学者たちのそれに対する返答は「有益な知識」という本で詳しく言及されています。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は預言者たちの中で最も崇高なお方であり、この世界への慈悲であられました。1万8千の諸世界が、彼の慈悲の海からそれぞれに益を受けたのです。全ての人とジンの為の預言者です。天使、植物、動物、そしてそれぞれの物質に、彼が預言者であると教える多くの存在があります。他の預言者は、一定の国、一定の民族の為に遣わされました。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は全世界、生命を持つ者持たない者、あらゆる被造物の預言者であられるのです。アッラーは他の預言者たちをその名で呼ばれました。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に対しては「わが使徒よ」「わが預言者よ」と呼ばれ、誉れを与えられていたのです。他の預言者たちに与えられた奇蹟それぞれに類似するものが、預言者ムハンマドにも授けられました。アッラーは愛されるお方預言者ムハンマドに非常に多くの恵みと奇蹟を授けられました、他のどの預言者にもそれらは与えられてはいなかったのです。その神聖な指を動かすことで月が二つに分かれ、その祝福された手に取られた石がタスビーフとなり、木々が「アッラーの使徒よ」と言って挨拶を行ったこと、預言者ムハンマドのそばから離された為に、「ハンナーナ」という名の乾いた薪が声を出して泣いたこと、神聖な指の間から澄み切った水が流れたこと、来世において彼に「マカーム・マフムード」「偉大なるとりなし者」「カウサルカウサルの泉」「ワシーラ」「ファディーラ」という名の位階が与えられること、天国に入る前にアッラーの美を目にするという誉れを授けられること、現世においても偉大な被造物、教えへの覚醒、知識、穏やかさ、忍耐、感謝、ズフド「禁欲」、純潔、公正さ、人間性、たしなみ、勇敢さ、謙虚さ、英知、徳、慈善、慈愛、そして無限の美德と誉れによって、全ての預言者たちよりも優れた存在とされたのです。預言者ムハンマドに与えられた奇蹟の数は、アッラー以外誰も知ることができません。預言者ムハンマドの教えは他の全ての教えを取り消し、無効としました。彼の教えは全ての教えの中で最良のものであり、最も崇高なものです。その教えに従うワリー「アッラーの友、聖人」は、他の教えに従う聖人たちよりもより誉れある存在です。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のウンマのワリーたちの中で、アッラーの使徒の後継者「カリフ」という地位を獲得し、カリフという地位に誰よりもふさわしい、イマームたちやワリーたちの誉れである「**アブー・バクル・スッドウーク**」は、預言者たちに次いで過去と未来の全ての人々の中で最も尊く、崇高な存在です。カリフという地位、誉れを最初に得たのは彼でした。イスラームが現れる以前から、アッラーにお恵みによって偶像崇拝は行っていませんでした。教えを否定したり、逸脱したりといった恥ずべき状態からは守られていたのです。「一部に預言者ムハンマドがイスラーム以前に偶像を崇拝していたと主張する人々がいますが、その考えがいかに無知で犯しものであるかがここからも理解されます。」

彼に次いで最も崇高な人は、アッラーがその愛するお方の友として選ばれた、第二代の後継者である「**ウマル・ビン・ハッターブ**」です（アッラーの祝福あれ）。

彼に次いで最も崇高な人は、預言者ムハンマドの三代目の後継者であり、善と恵みの宝庫であり、慎み深さ、信仰、そして知の源であった「**ウスマーン・ビン・アッファーン**」（アッラーの祝福あれ）です。

彼に次いで最も崇高な人は、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の四代目の後継者であり、驚くような優れた素質を持ち、「アッラーの獅子」と呼ばれた「**アリー・ビン・ターリブ**」（アッラーの祝福あれ）です。

彼の後には、「**ハサン**」がカリフとなりました。ハディースで言及されている 30 年の後継者時代はここで完了しました。<sup>8</sup>彼に次いで最も崇高な人は、預言者「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の目の光であった「**フサイン・ビン・アリー**」です。

ここでの崇高さとは、そのサワーブが多くあること、イスラームの教えの為に祖国や愛するものを放棄すること、他の人々よりも早くムスリムとな

---

<sup>8</sup>ハサン・ビン・アリーは 49 年（西暦 669 年）にマディーナで毒により死去しました。

ること、預言者ムハンマドに深く従うこと、そのスンナを守ること、教えを伝える為の努力をすること、不信仰や内部分裂、不和などを防ぐことを意味します。

アリー（アッラーの祝福あれ）は、アブー・バクルを除いて誰よりも先にムスリムになったとはいえ、当時はまだ子供であり、また資産がなく預言者ムハンマドの家で彼に奉仕する立場にあった為、彼が早期に入信したことは他者の入信の為のきっかけもしくはカーフィルたちの痛手とはなりませんでした。しかし彼を除く三人のカリフの入信は当時、イスラームを強化するものとなったのです。イマーム・アリーとその子供たちは、預言者ムハンマドの最も近い親戚であり、その血をひく者として、アブー・バクルやウマルよりも崇高であるということはできますが、しかしここでの崇高さは、あらゆる観点での崇高さではないのです。あらゆる観点からこの二人のカリフをしのぐ根拠とはならないのです。ヒドゥルが預言者ムーサーにいくつかのことを教えた例と似ていると言えるでしょう。血統の観点から預言者ムハンマドにより近い者がより崇高であるならば、アッバースがアリーよりもより崇高とされることになります。血筋という点では預言者ムハンマドに非常に近いアブー・ターリブとアブー・ラハブには、信者のうち最も卑小な者にすらある、誉れと崇高さすらないのです。

「ファーティマ」は血筋の面からは、預言者ムハンマドに近い為に「ハディース」と「アーイシャ」よりもより崇高とされます。しかし一つの面から崇高であることは、全ての面における崇高さを示すものではありません。この三人のうち誰が最も崇高かという点では、学者たちの意見は一致していません。ハディースが述べるところによるなら、この三人と「マリヤム」、そしてフィラウンの妻「アーシヤ」は、全ての女性の中で最も崇高とされています。またハディースでは「ファーティマは天国の妻たちの中で最も崇高であり、ハサンとフサインは天国の若者たちの中で最も崇高である」とされています。これも、一つの観点からの崇高さです。

彼らに次いで、サハーバたちの中の最も崇高な人々が、アシェレイ・ムベツシェレ「天国を伝えられた 10 人と呼ばれる人々」です。彼らに次いで、バドゥルの戦いに参加した 313 人です。彼らに次いでウフドの戦いに参

加した 700 人の獅子に含まれる人全て、彼らに次いで「ピアージュリドゥワーン」木陰で預言者たちに誓いの言葉を述べた 1400 人となります。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の道で生命や財産を捧げ、彼を助けたサハーバ全て（アッラーの祝福あれ）の名を、私たちは敬意と愛情を込めて呼ぶことは、私たちにとってワージブです。彼らの偉大さにそぐわない言葉を語ることは決して許されることではありません。彼らの名を失礼な形で口にすることは逸脱となります。

アッラーの使徒を愛する人は、その友「サハーバ」の全てをも愛するべきです。なぜなら聖ハディースで、「私の友を愛する者は、私を愛するがゆえに彼らを愛するのである。彼らを愛さない者は、私をも愛さないことになる。彼らを傷つける者は、私をも傷つける。私を傷つける者は、アッラーをも傷つけたことになる。アッラーを傷つけた者は、当然その罰を受ける」と言われているからです。別の聖ハディースでも、「アッラーは我がウンマの誰かによいことをなされようと思われた際には、彼の心にわが友への愛情を与えられる。彼ら全てを自分の命のように愛するようになる」と言われています。

従って、サハーバの間に生じた争いについては、悪い考えやカリフの地位争い、自らの欲望の追及などの為に行われたと見なすべきではありません。このように考えること、このような考えでこの偉大な人々についてものを述べることは偽信者の行いとなり、災いへと導くものとなります。なぜなら預言者ムハンマドのおそばにいること、その祝福された言葉を聞くことにより、頑迷さや嫉妬心、地位への固執、この世界への愛着などは彼らの心から取り除かれているからです。彼らは皆、欲望、憎悪といった悪い性質から救われ、清らかな状態となったのです。この偉大な預言者「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」のウンマの中の一人のワリーと数日一緒に過ごした人が、そのワリーのよい性質と崇高さから影響を受け、清められ、この世界への執着心から救われます。サハーバたちは何よりも預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」を愛し、財産や生命を捧げ、祖国を放棄し、魂の糧となる彼の説話を熱望していたにもかかわらず、彼らが悪い性質から救われず、我執が清められず、はかない

現世の為に争うことがどうして考えられるのでしょうか。この偉大な人々は当然、他の人々よりも清められた存在でした。彼らの争いごとについて、私たちのような悪いニーヤを持った人々と同等に考えること、現世のため、自らの我欲の為、悪い欲望の為に彼らが争ったということは、彼らにふさわしいことでしょうか。サハーバたちについてこのような醜いことを考えることは許されるものではないのです。このようなことを語る人は、サハーバを敵視することが、彼らを育成され、導かれた預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」を敵視することになるということと考えたことがないのでしょうか。彼らをののしることは、預言者ムハンマドをののしることです。だから、偉大な宗教者たちは「サハーバを偉大であると見なさず、彼らに敬意を示さない人は、アッラーの使徒を信じないことになる』と言っているのです。「ラクダの戦い」とスィッフイーーンの戦いは、彼らをあしざまに言う根拠にはなりません。この戦いでアリーと敵対した人々の全てに、悪い存在となることから救い、さらにはサワブを獲得させるだけの宗教上の理由があるのです。ハディースでは「**論議する者のうち、誤っている側に一つのサワブ、真実を見出した方に2もしくは10のサワブがある。二つのサワブのうち一つは論議したサワブ、もう一つは真実を見出したサワブである**」と語られています。

また偉大な宗教者たちの間の争いは、頑迷さや敵対心によるものではありません。イスラームの命じるところを果たしたいという願いから生じたものです。サハーバの全てはムジュタヒド「独立した解釈をすることによって合法的な決定を下す人」でした。「例えば、アムル・イブニ・アス「アッラーのお喜びがありますように」がムジュタヒドであることは、「ハーディカ」の298ページのハディースで告げられています。」

ムジュタヒドはそれぞれが、自らのイジュティハード「クルアーンやスンナといった法源の独立した解釈をすることによって合法的な決定をすること」によって見出し、得た知識に従って振る舞うことがファルドとなります。自分のイジュティハードが、自分よりも偉大なムジュタヒドのイジュティハードと一致しないものであったとしても、やはり自分のイジュティハードに従うことが必要となります。他者のイジュティハードに従うことは

適切とはされないのです。イマーム・アザーム アブー・ハニーファの<sup>9</sup>弟子であるアブー・ユースフとムハンマド・シャイバーニ、そしてイマーム・ムハンマド・シャーフィーの<sup>10</sup>弟子であるアブー・サウルとイスマーイール・ムザーニーは多くの場面で、その師に従いませんでした。その師がハラームであると言ったことに対しハラールであると言い、ハラームであると言ったいくつかのことについてもハラームであると言ったのです。これをもって彼らが罪を犯した、悪いことをしたということはできません。このように言う人もいません。なぜなら彼らもまた、その師と同じようにムジュタヒドだったからです。

アリーは、ムアーウィヤやアムル・ビン・アース（アッラーの祝福あれ）よりも優れた学者でした。彼を残りの二人と区別する多くの優れた点がありました。そのイジュティハードも、彼ら二人のイジュティハードよりもより強く、的確なものでした。しかしサハーバはその全員がムジュタヒドである為、彼ら二人が偉大なイマームのイジュティハードに従うことは適切とはされませんでした。自らのイジュティハードに従って振る舞うことが必要とされたのです。

**問い：**ラクダの戦いとスィッフイーの戦いで、ムハージルとアンサールの多くのサハーバがアリーの側に着き、彼に従っていました。彼らは皆ムジュタヒドなのに、イマーム・アリーに従うことを許されると見なしたのです。従って、イマーム・アリーに従うことはムジュタヒドにも許されるということです。イジュティハードが一致していなくても、彼と共にあることが必要だったということになります。

**答え：**アリー（アッラーの祝福あれ）に従った人々、アリーと共に戦った人々は、彼のイジュティハードに従った為に彼と共にいたのではありません。自分自身のイジュティハードとイマームのイジュティハードが合うも

<sup>9</sup>アブー・ハニーファ・ヌマン・ビン・サービトは 150 年（西暦 767 年）にバグダッドで死去しました。

<sup>10</sup>ムハンマド・ビン・イドリス・シャーフィーは 204 年（西暦 820 年）にエジプトで死去しました。

のであり、彼自身のイジュティハードがイマーム・アリーに従うことをワージブとした為なのです。同様に、サハーバの偉大な人々の多くは、そのイジュティハードがイマーム・アリーのイジュティハードとは一致していませんでした。そこでこの偉大なイマームと争うことがワージブとなったのです。当時のサハーバのイジュティハードは三種類となっていました。一部は、イマーム・アリーが正しいと見なしました。彼らには、イマーム・アリーに従うことがワージブとなったのです。また一部は、彼と争う人々のイジュティハードを正しいと見なしました。彼らには、アリー（アッラーの祝福あれ）と争う人々に従うこと、彼らとともに争うことがワージブとなりました。また一部は、どちらにも従わないこと、争わないことが必要であると見なしました。彼らのイジュティハードは、争いに関与しないことを要求するものとなったのです。そしてこの三通りの見解を持つ人々はそれぞれに正しく、サワーブを得たのです。

**問い：**上の文章は、イマーム・アリー（アッラーの祝福あれ）と争った人も正しいと見なしています。しかしスンナに従う学者たちは、イマーム・アリーが正しく、その相手が誤っていたこと、正当な理由があるとして許されたこと、あるいはサワーブを得たことを示しています。

**答え：**イマーム・シャーフィーやウマル・ビン・アブドゥルアジズのような偉大な宗教者たちが、サハーバの誰についても、「誤っていた」と述べることを適切であるとは見なしていませんでした。だから、「偉大な人々に対して間違いを犯したということは誤りである」と述べていました。卑小な者が、偉大な人々に対して「正しいことをした、誤ったことをした、我々は気に入った、気に入らない」といったことを語るのには許容されないことです。アッラーが私たちの手をこの偉大な人々の血統には触れさせないように、私たちも正しい、正しくないといった言葉を口にするから自らを守るべきです。深い考えを持つ学者たちは、論拠を把握し、出来事を細かく調べ、イマーム・アリーが正しかった、彼と対立した側が誤っていたと述べていますが、この言葉によって「アリー（アッラーの祝福あれ）が相手の側と話すことができれば、彼らも自分と同じイジュティハードを持つようになれたであろう」と言いたかったのです。実際ズバイル・ビン・アイワーンは「ラ

クダの戦いでアリーの側にいたにもかかわらず、出来事をより深く調べ、自らのイジュティハードを変え、争うことをやめています。従って、スンナに従う学者たちのうち、誤りを許容されるものと見なす人々の言葉については、このように理解すべきなのです。アリー及び彼の側にいた人々が正しく、彼らと対立していた側にいた信者たちの母アイシャ・スドゥウカや共にいたサハーバたちが誤ったことをしていたと言うことは、許されないのです。

サハーバのこれらの戦いは、シャリーアの判断に関する見解の相違から生じたものです。イスラームの根本、一定の事柄においては何の相違もありませんでした。現在、一部の人々がムアーウィヤやアムルのような偉大な人に言及し、彼らに対し敬意を欠いた態度を取っています。サハーバを傷つけることは預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」を傷つけること、軽視することになり得るということを理解していないのです。イマーム・マーリク・ビン・アナスは、「ムアーウィヤやアムル・ビン・アサー<sup>11</sup>をあしざまに言う人は、彼らが放った言葉にふさわしい存在となる。彼らに対し恥ずべき行為を取る人、話す人、語る人には重罪を与えるべきである」と「シファーイ・シェリーフ」で語っています。アッラーが私たちの心を、アッラーの愛するお方の友である人々への愛情で満たしてくださいますように。偉大なこの人々は、誠実で成熟した人によって愛され、偽信者や思慮の浅い人々には愛されないのです。

アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の友「サハーバ」の尊さと崇高さを理解し、彼ら全てを愛する人、全てに敬意を払う人、そして彼らの道を行く人を、「スンナに従う人々」と呼びます。一部のことは好きであるが他の人は好きではないと言い、その大多数について否定的なことを言う人、それにより誰の道も進んでいない人は「ラーフズィー派」「アブー・バクルとウマルのカリフ就任を認めていない人」、もし

---

<sup>11</sup>ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンは60年（西暦680年）にダマスカスで死去しました。アムル・イブニ・アスは43年（西暦663年）にエジプトで死去しました。

くは「シーア派」と呼ばれます。ラーフズイー派はイランやインド、イラクに多くいます。彼らの一部はトルコの「アレヴィ派」をだます為に自らを「アラヴィ」と呼びます。しかし「アラヴィ」とは、アリーを愛するムスリム、という意味を持ちます。誰かを愛するのであれば、その人の道を行き、その人が愛するものをも愛することが必要です。彼らがアリーを愛していたのであれば、その道を進んでいたでしょう。アリーは全てのサハーバを愛していました。第2代カリフであるウマルに対しても忠言を行う存在でした。ファーティマ(アッラーの祝福あれ)が産んだ娘ウンム・ギュルスムは、ウマル(アッラーの祝福あれ)と結婚しました。またそのフトバでも、ムアーウィヤについて「我々の兄弟が、我々から離れた。彼らはカーフィルや罪人ではない。彼らのイジュティハードがこうであったのだ」と語っていました。彼自身と戦ったタルハーが殉死した時には、その顔から土を払い、その礼拝を自ら導きました。アッラーはクルアーンで、「**信者たちが兄弟である**」と告げておられます。勝利章の最後の節では、「**サハーバがお互いの間では優しく親切である**」と語られています。サハーバの誰か一人でも愛さないこと、さらには敵対心を持つことは、クルアーンを信じないことになるのです。スンナに従う学者たちはサハーバたちの尊さをよく理解していました。彼ら皆を愛することを命じ、ムスリムを災いから救っているのです。

預言者の家族、すなわちアリー(アッラーの祝福あれ)や全ての子供たち、その血統を愛さない人、スンナに従う人々にとって大切な存在であるこの偉大な人々と敵対する人々を**ハワーリジュ派**「単数形でハーリジー」と呼びます。今日、ハーリジーは「**ヤズィディ**」と呼ばれます。ヤズィディの人々の宗教、信仰は非常に逸脱したものです。

サハーバの全てを愛すると言いつつも彼らの道を辿らず、彼ら自身の誤った考えをサハーバの道であると主張する人々を「**ワッハーブ派**」と呼びます。ワッハーブ派は、宗派に属さない宗教者であるアフマド・イブニ・タミーヤの書物にある逸脱した考えとイギリスのスパイ・ヘンファーの助力で成立したものです。ワッハーブ派は、スンナに従う学者たちや神秘主義者、シーア派を否定し、全てを非難しています。自らのみがムスリムであると見なしているのです。自分たちとは異なる者を偶像崇拜者と呼びます。そ

の人々の財産、生命は、ワッハーブ派にはハラールであるとしています。すべてを合法と見なす主義をとっているのです。クルアーンやハディースについて誤った解釈をし、イスラームをそのような形で理解しています。イスラーム法の論拠やハディースの多くを否定しています。四つの宗派の学者たちやスンナの道を外れた人々が逸脱していること、イスラームに多くの害を与えていることは多くの書物で証明されています。

さらに深い知識を得るためには、トルコ語の「最後の審判と来世」「永遠の幸福」といった本、そしてアラビア語の「ミンハトゥル・ワフビヤーン」「アッ・タワッスル・ビン・ネビー・ワ・ビサッリヒーン」「セビールンネジャト」そしてペルシア語の「サイフル・エブラル」といった本を読んでください。これらの本や、ビドゥアを持つ人々に対して明白に書かれた多くの貴重な本が、イスタンブールで「ハキーカトウ出版」によって出版されています。

「イブニ・アービディーン」<sup>12</sup>の第三巻で詳細に説かれ、さらにトルコ語の「イスラームの恵み」という本の婚姻に関する項でも、ワッハーブ派が逸脱であることが明白に書かれています。スルタン・アブドゥルハミド・ハン2世の提督の一人であったエユッブ・サブリ・パシャ<sup>13</sup>は「ミラトウル・ハレメイン」及び「ターリヒ・ワッハービヤーン」という本で、そしてアフメッド・ジェヴデット・パシャは「歴史」の第七巻で、ワッハーブ派についてトルコ語で長々と言及しています。ユスフ・ネブハーニのエジプトで印刷された「シャワーヒド・ウル・ハック」という本では、ワッハーブ派やイブニ・タイミヤーに長い返事を与えています。この本のうちの50ページは、1972年にイスタンブールでアラビア語として出版した「イスラーム学者とワッハーブ派」にも引用されています。

アイユーブ・サブリ・パシャは次のように書いています。「ワッハーブ派は、西暦1791年にアラビア半島の流血を伴う革命において生じた。」ワッハーブ派や無宗派を書物と共に世界に広めようとした人物の一人が、エジ

<sup>12</sup>ムハンマド・エミン・イブニ・アービディーンは1252年（西暦1836年）にダマスカスで死去しました。

<sup>13</sup>アイユーブ・サブリ・パシャは1308年（西暦1890年）に死去しました。

プト人のムハンマド・アブドゥフでした。フリーメーソンの一員であり、カイロのフリーメーソンロッジの代表で会ったジャマーレディン・アフガーニ<sup>14</sup>への驚嘆を堂々と書き記しているアブドゥフは、偉大なイスラーム学者、進歩的な思想家、貴重な社会改善者とされ、若者たちに模範と示されるようになりました。スンナに従う人々に打撃を与え、イスラームを陥れる為の機会をうかがっていたイスラームに敵対する人々は、宗教者のように装い、耳触りのいい言葉でイスラームを評価しつつ、密かに内紛をあおったのでした。アブドゥフは高く評価され、スンナに従う学者たちやそれぞれの宗派のイマームたちは無知であるとされ、その名が口にもされないようになっていきました。しかし、イスラームの為に血を流し、預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の為に命を捧げた父祖たち、幸運で誉れ高い殉教者たちの高潔で由緒正しい子孫たちはこれらのプロパガンダや大金を積んで仕掛けられた広告に騙されることはありませんでした。むしろこのねつ造された勇者たちを聞くことも、知ることもなかったのです。アッラーは殉教者の子供たちをこの動きから守られたのです。現在でも、今日でも、マウドゥーディ（3冊）やサイド・クトゥブ、ハミードゥッラー（4冊）、そして「ジャマアト・タブリーグ」といった正しい宗派に属していない人々の書物が翻訳され、紹介され続けています。派手な広告で次第に称賛されるようになったこれらの翻訳本には、イスラームの学者たちが伝えている事柄徒勝ちしない誤った思想が含まれていることを私たちは目にします。アッラーが、その愛されるお方預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」への愛によって、ムスリムを不注意さという眠りから目覚めさせてくださいますように。敵対する人々の欺瞞、中傷に惑わされることから守ってくださいますように。アーミーン。ただ、ドゥアーを行うことで私たち自身を欺いても行けないのです。アッラーの設けられた規律に従わず、その要因となるものに働きかけることもなく、何の努力もせずにドゥアーだけを行うことは、アッラーに奇蹟

---

<sup>14</sup>ジャマーレディン・アフガーニは1314年（西暦1897年）に死去しました。

を求めることを意味するのです。ムスリムは努力もし、そしてドゥアーをも行うのです。まずは要因に働きかけ、それからドゥアーをすることが必要なのです。イスラームへの憎悪から救われる為の第一の要因は、イスラームを学び、そして教えることです。そもそも、スンナに従った教義、ファルド、禁止事項などを学ぶことは男女問わず皆にとっての義務です。主たる義務なのです。今日、これらを学ぶことは非常に容易です。なぜなら正しい宗教書を書き、出版することは自由とされているからです。ムスリムにこれらの自由を確保する政府に、ムスリムそれぞれが助けとなるべきなのです。

スンナに従った教義、ファルド、禁止事項を学ばず、子供たちに教えない人は、イスラームから離脱し、イスラームへの憎悪という災いに陥る危険の中にいます。このような人のドゥアーはそもそも認められません。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は次のように言われています。「**知識がある場所に、イスラームがある。知識がない場所には、イスラームは残らない**」。生き続ける為に飲み食いすることが必要であるように、カーフィルに惑わされず、教えを逸脱せずにとどまる為には、イスラームとその信仰を学ぶことが必要なのです。私たちの父祖はいつでも集い、法学書を読み、イスラームを学んでいました。これによって彼らはムスリムであり続けたのです。私たちがムスリムであり続け、子供たちをも守る為に第一の、そして最も不可欠な方策が、何よりもまず、スンナに従う学者たちの記したイスラームに関する本を読み、学ぶことです。子供がムスリムとなることを望む両親は、その子供にクルアーンを教えるべきなのです。まだチャンスがあるうちに読み、学び、教え、子供たちに、周囲の人々に教えましょう。学校に行き始めてからでは困難となります。むしろ不可能といえるでしょう。困ったことが起こってから嘆いても、何の役にも立たないのです。イスラームに敵対する人々やムスリムであると偽る人々「ズンドゥク」の書物、テレビ、ラジオ、映画などに欺かれてはいけません。イブニ・アービディンは「どの宗教も持たないのに、ムスリムのように偽って、イスラームへの反感への要因となる事柄をイスラームであるかのように説明し、ムスリムを教えから離脱させようとする密かなカーフィルを「ズンドゥク」と呼ぶ」と説明しています。

**質問：**宗派に属さない人々の書物の翻訳本を読んでいたある人が次のように話していました。「クルアーンのタフシール「解釈」を読むべきだ。イスラームの教えやクルアーンを理解を、宗教学者に任せることは危険であり、恐ろしい考えだ。クルアーンでも、『学者たちよ』という呼びかけはなく、『信仰する者よ』『人々よ』といった呼びかけが用いられている。だからムスリムは皆、クルアーンを自ら理解するべきであり、他者に頼ってはいけない」

この人は、皆がタフシールやハディースを読むことを求めているのです。イスラーム学者たち、スンナに従う偉大な人々の言葉、法学、そしてイルミハルの本を読むことを勧めていません。トルコ宗務省の出しているエジプト人のラシド・ルザー<sup>15</sup>が書き、1974年に発行された「イスラームにおける統一と宗派」という本も読む者を完全に驚かせるものでした。この本では多くの箇所、例えば第6話で次のように語られています。

「彼らはムジュタヒドのイマームたちを預言者たち程に崇高な存在とした。さらには、預言者ムハンマドのハディースに従わないムジュタヒドの言葉を優先し、ハディースを無視した。このハディースが取り消されたものである可能性、もしくは彼らのイマームは別のハディースについて考えている可能性がある」と主張した。

こういった模倣者は、判断を誤ったり、知らなかったりする可能性のある人の言葉に従って行動し、過ちを犯す可能性のない預言者ムハンマドのハディースを放棄することにより、模倣することからも離れ、さらにはクルアーンからも離れてしまう。ムジュタヒドはイマーム以外の誰も、クルアーンを理解しないと主張する。法学者やその他の模倣者たちのそのような言葉は、ユダヤ教徒やキリスト教徒から伝わったものであると見なす。しかしクルアーンやハディースを理解することは、法学者の書いた書物を読むことよりもずっと容易である。アラビア語の言葉や形式を知っている人であればクルアーンやハディースを理解するのに苦労はしない。アッラーが、ご自身

---

<sup>15</sup>ラシド・ルザーはムハンマド・アブドゥフの弟子です。1354年（西暦1935年）に死去しました。

の教えを明白に教えるのに十分なお力を持っていることを誰か否定できるだろうか。預言者ムハンマドがアッラーの望まれることを誰よりもよく理解し、またそれを説明する上でも誰よりも優れた力をお持ちであることを、誰が否定できるだろうか。預言者ムハンマドの説明がウマナにとっては不十分であるということは、彼が教えを伝えるという義務を完全に果たせていないということに通じるものである。ほとんどの人がクルアーンやスナナを理解できないのであれば、アッラーはそれらの本やスナナにおける法規に従うことを全ての人々の責任とはされなかつただろう。人は自らの信じることについて、その根拠を含めて知るべきである。アッラーは模倣者を承認されない。父や祖父を模倣することで十分とは見なされないことは明白に語られている。クルアーンの言葉は、模倣することがアッラーの位階においては受け入れられないということをはっきりと示している。宗教上の事柄をその根拠の点から理解することは、信条的な部分から理解する事よりもより容易である。困難であるものを奨励するのであれば、困難でないものは当然行うべきこととされる。いくつかの例外的な出来事の意味を理解することは困難ではあるとはいえ、それらを知らないこと、実践しないことはオズル「認められる理由のあること」とされる。法学者たちは彼ら自身でいくつかの問題を作り出した。これらについてはその判断をも下している。これらについて、「見解」「類推」といったものを論拠としようとした。これらは論理によって知識を得ることが不可能な、イバーダに関する内容でも適用された。このようにしてイスラームを拡大し、2・3倍に膨張させた。私は類推を否定するわけではない。イバーダに関する事柄については、類推はされない、と言いたいのである。信仰とイバーダは、預言者ムハンマドの時代に完成された。誰もそれに何かを付け足すことはできないのだ。ムジュタヒドのイマームたちは人々に模倣をさせず、模倣を禁じられたものとした。」

無宗派のラシド・ルザーの「イスラームにおける統一と宗派」という本の上記で抜粋した内容は、宗派に属さない人々の全ての本と同様に、ムスリムが四宗派のイマームに従うことを妨げています。皆がタフシールとハディースを学ぶことを命じています。これについてはどのように考えますか。

**答え：**宗派に属さない人の文章を注意深く読めば、誤った考え、分離主義者的な見解、腐敗した論理という鎖と、耳触りのいい言葉で飾り、ムスリムたちを欺こうとしていることがわかります。無知な人々はこういった文章を、論理や理性に照らし合わせて正しい知識に基づいたものであると思ひ込み、信じ、彼らの後に続こうとするかもしれません。しかし知識やはっきりした見解を持っている人は決して彼らに惑わされることはありません。

ムスリムを限りのない災いへと引きずり込む無宗派の人々の危険性に対し若者たちに警告を与える為、イスラーム学者たちは14世紀前から何千もの貴重な本を記してきました。

上の問いへの返答として、ユスフ・ネッバーニー<sup>16</sup>の「フジヤトウッラーヒ・アララアラーミーーン」という本の771ページから始め、その一部を翻訳することが適切であると考えました。

「クルアーンを読んでそこから何かを読みとることは、皆にできることではありません。ムジュタヒドのイマームですら、クルアーンを完全に読み取ることにはできない為、預言者ムハンマドはクルアーンにおける意味をハディースで説明されているのです。クルアーンを預言者ムハンマドのみが説かれたように、ハディースもまたサハーバとムジュタヒドのイマームたちが理解し、解き明かすことができました。

これらを理解することができるよう、アッラーはムジュタヒドのイマームたちに理性、知識、理解力と優れた知能、知性といった多くの優れた性質を与えられました。これらの優れた性質の最たるものが、篤信「タクワー」です。次に、心の中の神の光です。ムジュタヒドのイマームたちは、こうした優れた性質の助けによってアッラーと預言者ムハンマドのお言葉から、そこで望まれていることを理解したのです。理解できなかった点については、「類推」によって見解を述べています。4つの宗派のイマームたちは皆、自分の考えに基づいて話しているのではないと語っています。そしてその

---

<sup>16</sup>ユスフ・ネッバーニーは1350年（西暦1932年）にペイルートで死去しました。

弟子たちには「正しいハディースに出会った時には、私の言葉は放棄しなさい。アッラーの使徒のハディースに従いなさい」と言っていたのです。それぞれの宗派のイマームたちはこの言葉を、自分たちと同様にムジュタヒドであり、深い知識を持つ学者たちに言っていたのです。この学者たちは、四つの宗派の論拠を知り、選択を行った人々です。ムジュタヒドであるこの学者たちは、宗派のイマームたちの判断の根拠により、新しく学んだ真正ハディースの詳細、伝承者、そしてどちらが後になって起こったことかというような事柄、そしてさらに多くの諸条件を検証し、どれを選ぶかを理解するのです。もしくはムジュタヒドのイマームは、何らかの問題に含まれるハディースが自分には伝わっていない場合には、類推によって判断を下していました。その弟子たちはその問題を証明するハディースを学び、また別の判断を下しました。しかし弟子たちはこのような見解を示す際にも、宗派のイマームたちの教義から離れることはありません。その後を訪れたムジュタヒドのムフティたちも、このようにファトゥワを出していました。ここから理解されることは、四つの宗派のイマームたち、そしてその宗派で育成されたムジュタヒドたちに従うムスリムたちは、アッラーと預言者ムハンマドの判断に従うことになるのです。このムジュタヒドたちは、クルアーンやハディースから、他の人々の理解できなかった意味を読み取りました。そしてそれを説いたのです。ムスリムたちも、彼らが書物やハディースから理解した事柄に従いました。なぜなら蜜蜂章第 43 節では、「あなた方がもし知らないのであれば、知っている人に尋ねなさい」と命じられているからです。

このクルアーンの言葉は、皆がクルアーンやハディースを理解できるわけではないこと、理解できない人もいるということを示しています。理解できない人へは、クルアーンやハディースについて理解しようと努めるのではなく、理解している人に尋ねて学ぶことが命じられているのです。クルアーンやハディースの意味を皆が正しく理解できるのであれば、何十もの誤った宗派が現れることもなかったでしょう。これらの宗派を起こした人々は皆、深い知識を持つ学者でした。しかし彼らのうち誰も、クルアーンやハディースの意味を正しく読み取ることはできなかったのです。誤って理解し、正しい道から離れてしまったのです。そして何百万ものムスリムを災い

へと導く要因となりました。クルアーンやハディースを誤って読み取るという点において一部の人は非常に自らの意見に固執し、正しい道を行くムスリムを不信心者、偽信者と呼ぶほどになっていました。トルコ語に翻訳され、ひそかにトルコに持ち込まれた「ケシュフシュ・シュブハット」という名のワッハーブ派の本では、スンナ派の信条にある、信者を殺すこと、財産を奪うことは認められるとされています。」

アッラーは各宗派のイマームたちがイジュティハードを行い、それぞれの宗派を設け、全ての信者がそれらの宗派に集うということ、愛される預言者ムハンマドのウンマにのみ恵まれました。アッラーは教義について説くイマームを創造されることによって、逸脱した人々や偽信者、人の姿をしたシャイターンたちが信仰、信仰に関する知識を蹂躪することを防がれると同時に、宗派を導くイマームたちをも創造され、その教えを蹂躪から守られているのです。キリスト教やユダヤ教ではこのような恵みはなく、宗教は変化させられ、玩具のような扱いを受けたのです。

アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」の死の 400 年後には、イジュティハードを行うことのできる知識の深い学者はすでにいないということがイスラーム学者たちの意見の一致のもと、発表されました。今では、イジュティハードしなければいけないと主張する人は理性に関わる病気もしくは宗教に関する無知を抱えた人であるとされます。偉大な学者である「ジェラーレディン・スューティ」<sup>17</sup>は、イジュティハードを行える段階に達していると語りました。当時の学者たちは彼に一つの質問を出し、それには二つの答えがあり、どちらが正しいと考えるかと尋ねました。彼は答えることができませんでした。仕事が多く、それに時間を費やすことができないと訴えたのでした。しかし彼に求められていたことは、ファトゥワについてイジュティハードを行うことでした。これはイジュティハードの中で最も低い段階の行為でした。イマーム・スューティのような深い知識を持つ学者がファトゥワについてイジュティハードを行う

---

<sup>17</sup>スューティ・アブドゥルラフマーンは 911 年（西暦 1505 年）にエジプトで死去しました」

ことを避けたのであれば、ムスリムたちが絶対的なイジュティハードを行うことを主張する人々については無知以外の何ものであると言えるでしょうか。イマーム・ガザリー<sup>18</sup>は彼の時代にムジュタヒドが存在しないことをその「**イフヤーウル・ウルーム**」という本で示しています。

ムジュタヒドではない一人のムスリムが真正なハディースについて学び、宗派のイマームのそれに従わない判断を下すことが彼にとって困難であれば、このムスリムは四つの宗派の内そのハディースに適切なイジュティハードを行ったムジュタヒドを探し求め、行動をそれに合わせるものがひつようとなります。偉大な学者であるイマーム・ナワウィー<sup>19</sup>「**ラウダートゥ ヌッタリピン**」はその書物でこの点を詳しく説いています。なぜなら、イジュティハードの段階に達していない人がクルアーンやスンナから意味を読み取ることは許容されないからです。一部の無知な人々は、自分がイジュティハードの段階に達していること、クルアーンやハディースの意味を読み取ることができること、四つの宗派のうちどれかに従う必要性がないことを主張しています。そして何年も従ってきた宗派を放棄しています。この誤った考えで、宗派を損なおうとしているのです。我々のような者は宗教学者の見解には従わない、といった無知な、無知さをひけらかすような発言をしているのです。このような発言により、その優秀さではなく、知ったかぶりをしているだけであること、卑小な存在であることを暴露していることに気が付いていないのです。こうした人々の中には、皆がそれぞれにクルアーンの解釈を読み、そこから意味を読み取らなければいけないと主張する無知な人々も含まれています。決してこのような人を学者であると見なし、そのような人の本を読むことを避けなければいけないのです。人は四つの宗派の中から、望むもの、気に入ったものを選ぶことができます。しかし、これらの宗派のそれぞれの容易さを探し求め、「**タルフィク**」を行うことは許さ

---

<sup>18</sup>イマーム・ムハンマド・ガザリーは 505 年（西暦 1111 年）にトゥーシユの町で死去しました。

<sup>19</sup>ヤフヤー・ナワウィーは 676 年（西暦 1277 年）にダマスカスで死去しました。

れていません。「タルフィク」とは、それぞれの宗派の容易なところだけを集め、何かを行う際にはその行為がどの宗派にも適っていないことを意味します。何かを行う際に四つの宗派のうちどれかに従った後で、すなわちその行為が四つの宗派のうちどれかに適っている場合に、他の三つの宗派においても適切で認められるものとなるよう、その為に必要な事柄をできる限り適応するのであれば、それはタクワー「篤信」と呼ばれる物であり、大きなサワーブがあります。

ハディースを読んでよく理解できるムスリムは、まず自らの宗派の論拠であるハディースを学び、そしてそのハディースが奨励していることを行い、禁じていることを避け、イスラームの教えの尊さ、そしてアッラーとその使徒の御名とその特質の完全さ、預言者ムハンマドの人生と徳、奇蹟、さらにこの世界、来世、天国と地獄のあり方、天使とジン、過去のウンマと預言者たち、啓典、そしてクルアーンと預言者ムハンマドの優位性、その家族と友人たちのあり方、そして世界の終焉の兆候、その他たくさんの現世と来世に関する事柄を学ぶ必要があります。預言者ムハンマドのハディースでは、現世と来世に関する全ての知識がまとめられています。

ここで書いてきたことが理解されるならば、ムジュタヒドがハディースから読み取った宗教上の規定について価値がないという人がどれほど無知であるか、明らかになるでしょう。ハディースが教えている無数の知識の中で、イバーダや行為について教えるハディースは少数です。一部の学者によると 500 程度とされています。繰り返されているものをも数えたとしても、3000 を超えることはありません。これだけの少ないハディースの中で、何らかの真正ハディースを、四つの宗派のイマームの誰も知らずにいた、ということは考えられないのです。真正ハディースは、四つの宗派のうち少なくともどれか一つのイマームが、論拠として取り上げているのです。自らの宗派におけるある行いが、真正である何らかのハディースに従わないと見なすムスリムは、そのハディースに基づいてイジュティハドを行った別の宗派に従ってその行いをなすべきです。自らの属する宗派のイマームもその同じハディースについては知っており、しかしそれよりもより確実であると理解された、もしくは新しいものが出て来た為に前のものが取り消され

た別のハディースに従って、あるいはムジュタヒドたちにしかわからない別の理由によってこのハディースを論拠としなかった可能性があるのです。あるハディースが真正なものであると理解したムスリムが、そのハディースに従わない自宗派の規定を放棄し、そのハディースに従うことはよいことではあれ、この人はこのハディースの意味を読み取っている別の宗派に従うことが必要となるのです。なぜならその宗派のイマームはその論拠から、そのムスリムが理解していない事柄をも読み取り、そのハディースに基づいて行動することに支障がない、と判断しているからです。同時にこれは、自らの宗派に従いつつ行うことも許されます。なぜなら各宗派のイマームたちのイジュティハドは、必ず確実な論拠に基づくものだからです。それらの論拠が知られていないことを、イスラームは支障と見なします。なぜなら、四つの宗派のイマームは誰も、イジュティハドを行う際にクルアーンやスンナから離脱していないからです。彼らの宗派とは、クルアーンやスンナの解説なのです。彼らはクルアーンやスンナの意味と規定をムスリムたちに説いたのです。人々が理解できるように形で説明し、本としたのです。四つの宗派のイマームたちのこれらの行いは、イスラームにおいて非常に大きな貢献であり、アッラーが彼らを助けられなければ、人力の及ぶところではなかったでしょう。これらの宗派は、預言者ムハンマドが正しい預言者であること、イスラームの教えが真正なものであることを示す最も強い根拠の一つなのです。

イマームたちのイジュティハドにおける相違点は、イスラーム法学に関する問題に限られています。つまり、信条、信仰に関しては一切の相違点はありません。宗教上確実に認識され、もしくは論拠を伴って確実に伝えられたハディースから得られたイスラーム法学上の知識においても、相違点はありません。イスラーム法学上のいくつかの点で、意見を異にしています。その論拠の確実さに関する見解の相違がその理由となっています。この小さな相違点は、このウンマにとって慈悲です。ムスリムは自分が望む、自分にとって容易となる宗派に属することができます。預言者ムハンマドはこの相違を吉報として伝えられ、そしてそれは実現したのです。

クルアーンやハディースで明白に語られている信仰に関する知識、もし

くは法学に関する知識についてイジュティハドを行うことは許されません。それは逸脱の要因となり、大きな罪となります。信仰に関する知識においては正しい道は唯一であり、それは「**スンナに従う人々の宗派**」です。ハディースで慈悲として言及されている相違点とは、法学的な見解における相違点なのです。

四つの宗派が、行動における法規において異なった見解を持つ事柄では、そのうちの一つのみが正しいものとなります。この正しい判断に従う人は二つのサワブを、正しくない判断に従っている人は一つのサワブを得ます。宗派が慈悲であることは、一つの宗派を離れて他の宗派の法規に従うことが許されることを示します。しかしこの四つの宗派以外の、スンナに従う人々の宗派、さらにはサハーバに従うことは許されていません。なぜなら彼らの宗派は本にされておらず、忘れられたものであるからです。今日知られる四つの宗派以外のものに従うことは不可能となったのです。サハーバに従うことは許容されていない、ということをイスラーム学者たちは意見を一致させて伝えている、とイマーム・アブー・バクル・ラージー<sup>20</sup>が語っています。

宗派とムジュタヒド、特に四つの宗派のイマームの優位性、そして見解の一致や類推といった手段を用いて示した判断が、自身の見解ではなくクルアーンやスンナをもとにしたものであることをさらに理解することを望む人には、イマーム・アブドゥルワッハブ・シャラーニの『偉大なる規律』「**ミーザーヌル・キューブラー**」及び「**ミーザーヌル・フウドリッイェ**」という書物をお勧めします。」

上記の本「**フツジェトゥッラーヒアーレルアーレミーン**」からの抜粋は以上です。ここで紹介した文章はアラビア語の原文から翻訳されたものです。他の出版物と同様、ここでも他の書物からの抜粋を括弧の中で示し、引用文と私たち自身の文章とを区別しています。この本「**フツジェトゥッラーヒアーレルアーレミーン**」のアラビア語原文は、1974年にイスタンブールで発

<sup>20</sup>アブー・バクル・アフメッド・ラージーは370年（西暦980年）に死去しました。

行されています。

「クルアーンでは、宗教学者とは言われていない」という表現は、正しいものではありません。多くの箇所、学者や知識が称賛されているのです。アブドゥルガーニ・ナブルシーは「ハディーカ」というその書物で以下のように記しています。

預言者章の第 7 節では「もしあなたがた、これが分らないなら訓戒を受けた民に聞け」と命じられています。この章句では、知らない人が学者たちに尋ね、学ぶことが命じられています。イムラーン家章の第 7 節では「それで知識の基礎が堅固な者は言う」と、第 18 節では「天使たちも正義を守る知識を授けた者もまた「それを証言する」と、また物語章の第 81 節では「それからわれは、かれとその屋敷を地の中に埋めてしまった。かれには、アッラーの外に助け手もなく、また自分を守ることも出来なかった。」と、またビザンチン章第 56 節では「だが知識と信仰を授かった者たちは、言うであろう。「あなたがたはアッラーの定めに基づいて、復活の日まで確かに滞在しました。これが復活の日です。だがあなたがたは気付かなかったのです」と語られています。また夜の旅章第 108 節では「そして「祈って」、『わたしたちの主の栄光を讃えます。本当に主の御約束は果たされました。』と言う。」と、巡礼章第 54 章では「また知識を与えられている者たちは、この「クルアーン」があなたの主からの真理であることを知り、心を謙虚にしてそれを信じる。」と、蜘蛛章第 9 節では「いやこれこそは、知識を与えられた者の胸の中にある明瞭な印」とされています。サバア章第 6 節では「知識を授かった者なら、主があなたに下されたものは真理であって、それが偉力ある方、讃美すべき方の道に導くものであることが分るのである。」と、抗弁する女章の第 11 節では「知識を授けられた者の位階を上げられる」と、また創造者章の第 28 節では「アッラーのしもべの中で知識のある者だけがかれを畏れる」と、部屋章第 13 節では「アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である」と語られています。

「ハディーカ」の 365 ページにあるハディースでは、「アッラーと天使たち、そして生命を持つ全ての存在は人々に善を教える人にドゥアーする」「最後の審判の日には、まず預言者たち、そして学者たち、次いで殉教者た

ちがとりなしを行う」「人々よ、知りなさい。知識は学者たちから聞くこと  
によって得られる」「学びなさい。学ぶことはイバーダである。教える者、  
学ぶ者には聖戦ほどのサワブが与えられる。教えることは、サダカをする  
ことのようにである。学者たちから学ぶことは、タハーजूドの礼拝を行うこ  
とのようにである」と命じられています。ファトゥワに関する書物を記してい  
るターヒル・ブハーリー<sup>21</sup>は次のように語っています。「法学書を学ぶこと  
は、夜に礼拝する事よりさらによい行いです。なぜなら、ファルドであるこ  
と、ハラームであることを学者たちから、もしくは彼らによって書かれた本  
から学ぶことがファルドであるからです。自ら実行し、他の人々に教える為  
に法学書を読むことは、タスビーフの礼拝を行うことよりもよいことです。  
ハディースでは「学ぶことは、全てのナーフィラの「義務でない」礼拝より  
もよりよい。なぜなら自分自身へも、それを教える人にも、益があるからで  
ある」「他者に教える為に学ぶ人へは、スッドウークとしてのサワブが与  
えられる」とされています。イスラームに関する知識は師や書物からのみ得  
られるのであり、イスラームに関する書物や教育など必要ではないという  
人は偽りを述べているのです。彼らはムスリムをだまし、災いへと導いてい  
るのです。宗教書における知識はクルアーンとハディースから得られたも  
のなのです」

「ハディーカ」<sup>22</sup>からの訳は以上です。

アッラーはその使徒を、クルアーンを伝え、教える為に遣わされました。  
サハーバたちはクルアーンにおける知識を預言者ムハンマドから学びまし  
た。学者たちは、サハーバたちから学びました。そして全てのムスリムも、  
学者たちや彼らの書物から学びました。ハディースでは「知識とは宝庫であ  
る。その鍵は、尋ねて学ぶことである」「学びなさい、そして教えなさい」  
「全ての物事にはその源がある。篤信の源は、豊富な知識を持つ人の心にあ  
る」「知識を教えることは罪の償いとなる」と言われています。

<sup>21</sup>ターヒル・ブハーリーは542年（西暦1147年）に死去しました。

<sup>22</sup>ハディーカの作者アブドゥルガーニ・ナブルシーは1143年（西暦1731年）に死去しました。

イマーム・ラッバーニ（アッラーの祝福あれ）は「メクトゥーパット/書簡集」という名の本の第一巻、第193の手紙で、次のように語っています。

「ムカッラフ」である人はまずその信仰、信条を正す必要があります。すなわちスンナに従う学者たちの書いた信仰に関する知識を学び、それらを正しい形で信じることです。アッラーがこの偉大な学者たちの努力に豊かなサワーブを与えてくださいますように。アーミーン。最後の審判の日に地獄の罰から救われるかどうかは、彼らが教えた事柄を信じるかどうかにかかっている。地獄から救われる人とは、ただこの人々の道を行く人々なのです。その道を行く人々を「スンナ派」といいます。アッラーの使徒「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」とサハーバたちの道をたどるのは、ただ彼らなのです。クルアーンとハディースから読み取られた知識のうち、価値があり正しいものはただこの偉大な学者たちがクルアーンやハディースから学び取り、人々に教えた知識なのです。なぜなら教えを変えようとする人々、宗派に従わない人々がそれぞれ、その誤った考えや短絡的な理論によってスンナやクルアーンから読みとったものを主張しているからです。スンナに従う学者たちを軽視し、矮小化しようとするのです。つまり、クルアーンやスンナから読み取られたとされるすべての言葉、全ての文章を事実であると思い込むべきではなく、耳触りのいい言葉によるプロパガンダに騙されないようにする必要があります。

スンナに従う学者たちが教える正しい信条の理解の為には、偉大な学者デアルトゥルプスティ師の書かれたペルシア語の「エルムーテメット/el-mutemed」という本が非常に役立ち、明白に書かれています。容易に理解することができるものです。1989年にハキーカトウ出版から発行されています。ファドゥルッラー・ビン・ハサン・トゥルプスティはハナフィー派の法学者です。1263年に死去しています。

信条、すなわち信仰すべき事柄についてただした後は「ハラール、ハラーム、ファルド、ワージブ、スンナ、マンドゥーブ、マクルーフ」であるものを、スンナに従う学者たちの書いた法学書から学び、それらに従うことが必要です。この学者たちの尊さを理解しない無知な人々が書いた誤った本を読むべきではありません。アッラーがお守りくださいますように。信仰すべ

き事柄において、スンナに従う宗派に適っていない信条を持つムスリムは、来世において地獄から救われることができません。正しい信条を持つ人のイバーダに気の緩みがあった場合は、悔悟をしなかったとしても、許される可能性があります。許されなかったとしても、罰を受けた後で地獄から救われます。大切なのは信条をただすことです。ハージャ・ウバイドゥッラーヒ・アフラル<sup>23</sup>は語っています。「全ての発見、全ての奇蹟が私に与えられたとしても、スンナの道に適する信条が与えられなければ、私は滅亡してしまう。発見や奇蹟が私にはなかったとしても、スンナに従う道に適う信条が与えられるなら、私は全く悲しまない」

今日、インドのムスリムは孤立しています。イスラームを敵視する人々が各方面から攻撃を行っています。今日イスラームへの奉仕の為に1リラを差し出すことは、他の時代に何千リラと与えることよりもより大きなサワーブとなります。イスラームに対してなされる最大の奉仕は、スンナに従う人々の書物、信仰やイスラームに関する書物を求め、それを村々や若者たちに分配することでしょう。その奉仕を与えられた幸福な、幸運な人は誰であれ、それに喜び、大いに感謝するべきです。イスラームの為に奉仕することはいつの時代であれサワーブです。しかし、イスラームが弱められ、嘘や中傷によってイスラームを損なおうという努力がなされている時代に、スンナに従う人々の信条を広く伝えようとするのは、何倍も大きなサワーブです。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」はサハーバに次のように言われています。「あなた方が生まれてきた時代には、アッラーの命令と禁止事項のうち9割に従い、1割に従わなかったならば、あなた方は滅亡するであろう。しかしあなた方以降には、命令と禁止事項のうち1割に従う人が救われるような時代が訪れる」(ミシュカートゥ・メサビフ)の第一巻、第179ページ及びティルムズィーの「キターブルフィテン」の79番にあります。」

このハディースで告げられている時代こそが、今の時代なのです。イスラ

---

<sup>23</sup>ウバイドゥッラーヒ・アフラルは895年(西暦1490年)にサマルカンドで死去しました。

ームを攻撃する存在を見極め、彼らを好まないことが必要となります。力を使って行う聖戦は、国家が行うものです。国家の軍が行うのです。ムスリムがこのような聖戦を行うのであれば、兵士として国家の与えた役割に従うことになります。「言葉と文章で行われる聖戦は、力を用いてなされる聖戦よりもより尊いということも別の箇所でも書かれています。スンナに従う学者たちの書物、言葉を広める為には、奇蹟を起こしたり、学者であったりすることは必須条件ではないのです。全てのムスリムがこれを行おうと努力することが必要です。機会を逃さないようにしなければなりません。最後の審判の日には全てのムスリムにこのことが尋ねられ、なぜイスラームの為に奉仕しなかったのかと尋ねられるでしょう。イスラーム法学の書物を広める努力をしなかった人、宗教的な知識を伝える努力をしなかった人、誰にも援助をしなかった人には大きな罰が与えられるでしょう。弁解や言い訳は受け入れられないでしょう。預言者たちは、人々のうち最も優れ、尊い存在である一方で、決して休むことはありませんでした。アッラーの教え、永遠の幸福のための道を伝える為に日夜努力を払いました。奇蹟を求める人々には、「**奇蹟はアッラーが創造される。私の役割は、アッラーの教えを伝えることである**」と答えていました。その道において努力奮闘する時には、アッラーも彼らを助けられ、奇蹟を創造されました。私たちも、スンナに従う学者たちの書物や言葉を伝えること、カーフィルや敵たち、イスラームに対する中傷や迫害を行う人々が嘘偽りを語っているのだということを若者たちに知らせることが必要です。これらを知らせることは陰口とはなりません。命じられていることを実践することとなるのです。この道においてその財産、力、技術をもって努力しない人々はその罰を逃れることはできません。この道における努力の際に苦勞や迫害に直面することは、大きな幸福、大きな利益と見なすべきです。預言者ムハンマドは、アッラーの命令を伝える際に、無明時代の人々の攻撃を受けていました。大変な苦勞をされたのです。偉大な人々の中でも最も偉大であり、選ばれ、アッラーの愛されるお方である預言者ムハンマドは「**私の味わった苦勞はどの預言者たちも味わっていない**」と言われていました。

「メクトゥーバット/書簡集」からの翻訳文はここまでです。

全てのムスリムは、スンナの道に従った信条を学び、それを教えられる相手に教えなければならないのです。スンナに従う学者たちの言葉を伝える本や新聞を見つけ、それを求め、若い人々、知っている人々にも送るべきです。そして彼らがそれを読むよう働きかけるべきです。イスラームに敵対する人々について説いている書物をも伝えるべきです。

地上の全てのムスリムに正しい道を示し、預言者ムハンマドの教えを、変化させず、損なわせずに学ぶ上での導きとなる「スンナに従う学者たち」とは、四つの宗派のイジュティハドを行う段階にまで達している学者たちのことです。彼らのうち最も偉大なのは四人の人々であり、その一人目が偉大なる「イマーム・アブー・ハニーフア・ヌマン・ビン・サービトゥ」です。彼はイスラーム学者の中で最も偉大な人々の一人です。スンナに従う人々の長です。翻訳文は、「サアーデティ・エベディツィエ/永遠の幸福」「有益な知識」といった本に記されています。ヒジュラ歴 80 年にクーファで生まれ、150 年にバグダッドで殉教しています。

二人目である「イマーム・マーリク・ビン・アナス」も、大変偉大な学者です。ヒジュラ歴 90 年にマディーナに生まれ、179 年にそこで亡くなりました。89 年生きたことがイブン・アービディーンで記されています。祖父はマーリク・ビン・アブー・アーミルでした。

三人目は、「イマーム・ムハンマド・ビン・イドリース・シャーフィー」でした。150 年にパレスチナのガザで生まれ、204 年にエジプトで亡くなりました。

四人目は、「イマーム・アフマド・ビン・ハンバル」でした。164 年にバグダッドで生まれ、241 年にそこで亡くなりました。彼はイスラームという建物の基盤となる柱でした。

今日、この四人のイマームのうち誰にも従わない人は、大きな危険性の中にいます。正しい道から逸れてしまっているのです。彼ら以外にも、スンナに従う学者たちはたくさんいました。彼らも、正しい宗派を持っていました。しかし時と共にこれらの宗派は忘れられ、書物として残されなかったのです。例えば「フカハーイ・セビア/七人の学者」と呼ばれるマディーナの

七人の偉大な学者たちや、ウマル・ビン・アブドゥルアジズ、スフヤーン・ビン・ウヤイナ<sup>24</sup>、イスハック・ビン・ラーハワイフ、ダーウーディ・ターイ、アーミル・ビン・シェラーヒリ・シャアビー、レイス・ビン・サアド、アマシュ・ムハンマド・ビン・ジャリル・タバリー、スフヤーン・サウリ<sup>25</sup>、アブドゥルラフマーン・アウザーイ「アッラーが彼らをお慶びくださいますように」がその例です。

サハーバの全てが、正しい道において、教えを伝える星でした。そのうちの誰であっても、全世界を正しい道へと導くのに十分な存在でした。彼らはムジュタヒドであり、それぞれの宗派を持っていました。多くの宗派は互いに類似するものでした。しかしそれらの宗派はまとめられず、本にされていない為、それらに従うことは不可能なのです。この四人のイマームの宗派、すなわち信じ、実行すべき事柄に関してイマームたちが伝えたことは、彼ら自身やその弟子たちがまとめ、本にしています。今日、全てのムスリムがこの四人のイマームのいずれかの宗派に属し、その宗派に従って生きること、イバーダを行うことが必要です。この四つの宗派のどれかに従うことを望まない人は、「スンナに従う人」ではないのです。

この四人のイマームの弟子のうち二人は、信仰に関する知識を広めるという点で非常に優れていました。これにより、信条、信仰における宗派は二つとなりました。クルアーンとハディースに適した正しい信仰とは、この二人が伝えた信仰なのです。スンナに従う人々の信仰に関する知識を地上に広めたのは、この二人なのです。一人目は「アブー・ハサン・アシュアリー」であり、ヒジュラ歴 266 年にバスラで生まれ、330 年にバグダッドで亡くなりました。二人目は「アブー・マンスール・マーチュリディー」であり、333 年にサマルカンドで亡くなりました。全てのムスリムの信条はこの偉大なイマームのどちらかに従うことが必要となります。

アウリヤー「聖人」の宗派もまた、正しいものです。イスラームからわず

---

<sup>24</sup>スフヤーン・ビン・ウヤイナは 198 年（西暦 813 年）にマッカで死去しました。

<sup>25</sup>スフヤーン・サウリは 161 年（西暦 778 年）にバスラで死去しました。

かでも離れたものではありません。イスラームを、世俗的な利益のための道具とし、財産や地位を得る為に聖人、伝道者、宗教者として現れる嘘に満ちた人はいつの時代にもいました。今日でも、あらゆる分野で、あらゆる働きで、あらゆる任務においてそのような人々がいます。自分の利益や快楽を他者に害を与えることによって確保するような人々を見て、そのような人々が混じりこんでいる任務、分野の全てを悪いものと見なすことは正しくない行いであり、無知な行為です。だから、逸脱した宗教者や無知で見せかけだけの宗派に属する人々を見て、イスラーム学者、神秘主義者、そして奉仕の歴史において誉れあるページを満たしてきた偉大な人々を非難してはいけません。そういった人々を非難する人が正しくないのだということを理解すべきです。アウリヤーには奇蹟があり、それらは正しく、真実です。イマーム・ヤフィー<sup>26</sup>は次のように語っています。「アブドゥルカディル・ゲイラーニ<sup>27</sup>の奇蹟は人々の口から口へと非常に広まっており、それを疑うこと、信じないことはできない。なぜならあらゆる場所でそれが広まっているということは、その「**テバーテュル**」保証書のようなものだからである」

礼拝を行う人については、イスラームを否定するような事柄を明白に、強制されずに語り、もしくは用い、カーフィルであることが理解されたのでない限り、他人に従い、彼はカーフィルだと述べることは許されていません。カーフィルのままで死んだことを確認していない限り、呪うこともできません。カーフィルに対してであれ、呪うことは許されていません。従って呪いを行わないことがよりよいとされます。

5. 信仰するべき六つの事柄のうち五つめは、「**来世を信じること**」です。この時の始まりは、その人の死んだ日です。キヤーマ「復活の日」の終わりまでです。「最後の日」といわれるのは、その後にはもう夜が来ないこと、

---

<sup>26</sup>アブドゥッラー・ヤフィーは 768 年（西暦 1367 年）にマッカで死去しました。

<sup>27</sup>アブドゥルカディル・ゲイラーニは 561 年（西暦 1161 年）にバグダッドで死去しました。

あるいは世界より後に来ることにちなみます。ハディースで伝えられているこの「日」は、私たちが知っている夜や昼といった意味ではありません。ある時、を意味するものです。キヤーマがいつ起こるかは教えられていません。その時については誰も理解できていません。しかし預言者ムハンマドは多くのその兆候、始まりについて教えられました。マフディが現れ、預言者イーサーは天からダマスカスに下ります。ヤジュジュと呼ばれる人々が各地を混乱に陥れます。太陽が西から登り、大きな地震が起こります。宗教的な知識は忘れ去られます。悪事がはびこります。教えを持たず、道徳的にいやしい人々が支配者となり、アッラーの命令に従うことを妨げます。あらゆる場所で禁じられている事柄が実行されます。イエメンから一つの炎が上がります。天と山が砕け散ります。太陽と月が光を失います。海が互いにまじりあい、沸き立ち、干上がります。

罪を行ったムスリムは「ファースク」と呼ばれます。ファースクとカーフィルには、墓で罰が与えられます。当然、このことを信じる必要があります。死者が墓に置かれると、私たちには知ることのできない形で復活させられ、安楽または罰が彼を待ち受けます。「ムンカルとナキル」という二人の天使が未知の恐ろしい人の姿で現れ、質問をすることがハディースで明白に説かれています。墓での問いは、一部の学者たちによれば信条の一部に関するものであり、また一部の学者によれば信条の全てに関するものとなります。だから子供たちに「あなたの神は？あなたの教えは？あなたは誰のウンマ？キブラはどの方向？どの宗派？」という問いの答えを教えるべきなのです。スンナの道を行かない人にはこの問いに答えることができないことが「タジキラーイ・クルトゥビー」<sup>28</sup>という書物で説かれています。正しく答えた人の墓は広くなり、その場に天国への窓が開かれます。朝晩、天国の様々な場所を見ることができ、また天使たちによってよい振る舞いを受け、

---

<sup>28</sup>タジキラーイ・クルトゥビーの著者ムハンマド・クルトゥビーは 671 年（西暦 1272 年）に死去しました。ムフタサール・タジキラーイ・クルトゥビー簡潔版はハキーカトゥ出版によって 1421 年（西暦 2000 年）に新たに出版されました。

吉報が伝えられます。正しい答えを出すことができなければ鉄の槌で打たれ、その声を人間やジン以外の全ての被造物が聴きます。墓は非常に狭められ、骨が互いに重なり合うほどに締め付けられます。地獄からの窓が開かれ、朝晩地獄の光景が見せられます。そして墓の中で最後の審判まで重い罰を受けます。

死後の復活を信じる必要があります。骨や肉が腐り、土やガスとなった後、人の肉体は再び創造されます。魂が肉体に入り、皆、墓から起き上がります。この時のことを「キヤーマ「復活」の日」と呼びます。

植物は空気から二酸化炭素を、土から水とミネラル、すなわち土壌の成分を吸収し、これらを一体化させます。これによって有機物や私たちの器官の基盤が生じます。何年もかかる化学反応「触媒作用」が、1秒未満の時間でなされていることが現在では知られています。ちょうどこのように、アッラーは墓の中で、水、二酸化炭素、土壌の成分を合成し、器官や獅子を一瞬で創造されます。このような形で復活させられることが信頼のできる知らせによって説かれています。科学の知識によっても、このことがこの世界に置いてそもそも行われていることが明らかになっています。

生命を持つあらゆる存在が「マフシャル」の場に集められます。それぞれの人の行いが記載された帳面が、その持ち主のところにもたらされます。地と天、細胞、星を創造され、無限の力の主であられるアッラーがこれらを行われます。これらが実現することは、アッラーの使者が伝えているのです。彼が語られたことは当然真実です。全てが実現するのです。

よいことを行ってきた人々の帳面は右側から、罪を犯した人、悪い人の帳面は背後もしくは左側から渡されます。よいこと悪いこと、重要なこと些細なこと、秘められたこと秘めずに行ったこと全てが帳面に記されています。記録の天使「キラーマン・カーティビーン」が知らないことですら、人の肢体が報告をすることもしくはアッラーが告げられることによってすべて明らかにされ、その全てについて勘定がなされます。マフシャルの場では、アッラーが求められる全ての秘密が明らかにされます。天使たちには「地と天であなた方は何を行ったのか」と、預言者たちには「アッラーの定められたことをそのしもべたちがいかに伝えたのか」と、皆には「預言者たちにどの

ように従ったのか。あなた方に伝えられた役割をどのように果たしたのか。互いの間にある権利をどのように行使したのか」と尋ねられます。マフシェルの場では、信仰を持ち、行動や道徳が立派であった人々には褒賞と恵みが、悪い性格を持ち誤った行動をとっていた人々には重い罰が与えられます。

アッラーは、アッラーに何ものかを配することと不信仰以外はお望みの信者の大小全ての罪をその恵みによって許されます。多神教徒やカーフィルとして死んだ人は決して許されることはないことが告げられています。啓典を持つ、あるいは持たないカーフィル、すなわち預言者ムハンマドが全ての人々の為の預言者であることを信じない人、彼が伝えた規定、すなわち命令や禁止事項のどれか一つであれ好まない人は、その状態で死んだ場合当然地獄に入れられ、無限の罰を受けます。

審判の日に、行為や行動を計る為、私たちには知ることのできない形の「秤」があります。地と天が一つの受け皿に収まる秤です。善行の側は輝かしく、地上の右側、天国の側にあります。罪の側は暗く、地上の左側、地獄の側にあります。現世での行い、言葉、考え、視点はそこで形を得て、よいことは輝かしく、悪いことは暗く醜く見え、この秤で地締められます。この秤は、現世にある秤とは全く似ていないものです。重い方が上になり、軽い方が下になると言われています。学者の一部によると、様々な種類の秤があるとも言われています。学者の多くは、秤が何個あってどのような形状であるかは明らかにされておらず、これらについて考えるべきではないとしています。

「スラート橋」というものがあります。スラート橋はアッラーの命令により地獄の上に設けられます。皆に、この橋を渡ることが命じられます。その日、全ての預言者たちが「主よ、平安をお与えください」と懇願します。天国に行く人々は、橋を簡単に渡り、天国に入ります。稲妻のように、風のように、もしくは疾走する馬のように、この人々は橋を渡ります。スラート橋は毛よりも細く、刃よりも鋭いのです。現世においてイスラームに従うこともまたこのようです。イスラームに完全に従おうとすることは、スラート橋を渡ることには似ています。現世で我欲との戦いの困難さに耐えた人々は、来

世でスラート橋を容易に渡ることができます。イスラームに従わず、我欲に固執した者は、スラート橋を渡ることが非常に困難になります。だからこそアッラーは、イスラームの示す正しい道に「スラートウ・ムスタキーム」という名を与えられたのです。この名称の類似性は、イスラームの道を行くことがスラート橋をわたることのようであることを示しています。地獄に行く人々はスラート橋を渡ることができず、地獄に落ちます。

預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」に特有の「カウサルカウサルの泉」があります。その大きさは歩いて一か月かかる程と言われます。水は乳よりもなお白く、その香りは麝香よりもすばらしいとされています。周囲には星よりも多くの杯があります。一度飲んだ人は、地獄にいたとしても二度とのどの渴きを覚えません。

「とりなし」は真実です。悔悟せず死んだムスリムの大小の罪の許しの為に預言者たち、聖人たち、誠実な人たち、そして天使たち、その他アッラーが許しを与えられた人がとりなしを行い、それが認められます。預言者ムハンマド「アッラーが祝福と平安をお与えくださいますように」は「わがウンマのうち、大罪を犯した者の為にとりなしを行おう」と言われています。マフシャルの場でのとりなしには五つの種類があります。

**一つ目：**審判の日、マフシャルの場の混雑と長い時間待たされることに嫌気を感じた罪びとたちが叫び声をあげ、少しでも早く裁きが行われることを求めます。この為にとりなしが行われます。

**二つ目：**尋問や裁きが容易に、迅速に行われるよう、とりなしが行われます。

**三つ目：**罪を犯した信者が、スラート橋から地獄に落ちないよう、地獄の罰から救われるようとりなしが行われます。

**四つ目：**罪が多くある信者が地獄から出られるよう、とりなしが行われま

**五つ目：**天国では無限の恵みがあり、永遠にそこにとどまることができます。しかしそこには 8 つの段階があります。皆の位階は、信仰や行動の程度によって決まります。天国に行く人々の位階が上がるよう、とりなしが行われます。

次の段階に、天国と地獄があります。天国は七層の点の上にあります。地

獄は全ての下にあります。8段階の天国と7段階の地獄があります。天国は地球や太陽、天よりもより大きいとされます。地獄は太陽よりも大きいとされます。

6. 信仰すべき6つの事柄の6つめは、「**運命と、よいことも悪いことも全てアッラーからであることを信じること**」です。人々に起こるよいことも災いも、益も害も、利益も損失も全てアッラーの定められたことなのです。

**運命「カダル」**とは辞書によるなら、多さを測定すること、判断し命じることという意味になります。多さと大きさ、という意味にもなります。アッラーが、何かの存在を望まれていたことをカダルといいます。カダル、すなわち存在することが願われた事柄が実際に存在することを「**カダー**」といいます。カダーとカダルという言葉は、互いに逆の意味で用いられることもあります。その場合、カダーは、全ての時間を通して創造される全てのものを、アッラーが前もって願っておられた、ということの意味します。全てのものを、カダーに従い、少なかったり多かったりすることなく創造されることをカダルといいます。アッラーは後に起こる全てのことを前もって、限りのない過去において既に、ご存じでした。この知識のことを「**カダーとカダル**」と呼びます。古代ギリシアの哲学者はこれを「永遠の恵み」と呼びました。全ての被造物はこのカダーから存在に至ったのです。限りのない過去における知識に適した形で物事が存在することを、カダーとカダルといいます。カダルを信仰する為にはよく理解し、信じる必要があります。アッラーは何かを創造することをすでに意志され、求められたのであれば、その量の多少が帰られることもなく、求められたままの形で存在することになるのです。存在することを望まれたことが存在しないこと、存在しないことを望まれたことが存在することはあり得ません。

あらゆる動物、植物、生命を持たない存在「固体、液体、気体、星、微粒子、原子、電子、電磁波、要するに全ての被造物の動き、物理的な事象、化学反応、核反応、エネルギーのやり取り、生命体における生理的な作用」の全てが存在するかしないか、しもべのよい行い、悪い行い、現世と来世でそれらの罰を受けること、そしてあらゆる事柄が限りのない過去においてアッラーの知識に存在していたのです。アッラーはこれら全てを前もってご

存じでした。過去から未来にかけて発生する全ての物事、特性、行動、事象を、あらかじめご存じであった形に応じて創造されるのです。人の善悪のあらゆる行い、ムスリムにならないこと、不信仰、意志的にもしくは望まずに行う全ての事柄を、アッラーが創造されたのです。創造され、次項されるのはただアッラーです。要因が生じさせた全てのものを、創造されたのはただアッラーです。「**全てを要因と共に創造されるのです**」

例えば、火はものを焼きます。しかし燃焼させられるのはアッラーなのです。火は、ものを焼くことに何の関係もありません。しかし次のような法則があります。ものは、火が触れることのない限り、そこに燃焼という現象は創造されないのです。火は、燃焼温度にまで温度を高めるということ以外は何も行っていない。有機物に存在する炭素、水素、酸素に結びつきを与え、電子のやりとりを生じさせるのは火ではありません。真実を見ることができない人は、これらを火が行っていると考えます。焼き、燃焼反応を生じさせるのは火ではないのです。酸素でも、熱でもありません。電子のやり取りでもありません。焼くのは、ただアッラーなのです。これらの全ては、燃焼の為の要因として創造されたのです。知識のない人は、火が焼いていると考えます。小学校を終えた人なら、「火が焼く」という言葉を気に入らないでしょう。空気が燃焼させていると言います。中学校を終えた人はこれを認めないでしょう。空気中の酸素が燃焼させてというでしょう。高校を終えた人は、燃焼させるのは酸素だけではなく、電子を惹きつける要素は皆、同じ性質を持つ、というでしょう。大学を終えた人は物質と共にエネルギーをも計算に入れます。このように知識が増えるにつれて、物事の内面に近づいていき、要因と見えるものの背後により多くの要因が存在することを理解していくのです。知識、科学の最高地点にある真実を直接ご覧になった預言者たちと、その偉大な人々の後に続き、知識の大海からのしづくに出会ったイスラーム学者たちは、今日燃焼させるもの、作用を生じさせるものと考えられていることがそれぞれ無力で力のない要因であり、被造物であること、真に作用を生じさせるものは要因ではなく、アッラーであることを教えています。

燃焼させるのは、アッラーなのです。アッラーは火がなくても燃焼させる

ことができます。しかし火によって焼くことは法則的なことに過ぎず、もし焼くことを望まれなければ火の中にあってもそれは燃えません。預言者イブラーヒームは火の中でも焼かれませんでした。アッラーは彼を愛されるがゆえに、その法則を破られたのです。実際、燃焼を妨げる物質をも創造されています。これらの物質を化学者が発見しているのです。

アッラーが望まれるなら、全てを要因なしで創造されたでしょう。火がなくても物は燃え、食べなくても満腹になることができたでしょう。また飛行機なしで空を飛ぶことができたでしょう。無線なしで、遠方の音を聞くことができたでしょう。しかし恵みとして、しもべに対するよい振る舞いとして、全ての創造を要因と結び付けられました。一定の物事を、一定の要因と共に創造することを望まれたのです。そのみわざを要因の下に隠されました。そのお力を、要因の下に隠されたのです。アッラーが何かを創造することを求める人は、その要因に働きかけ、それによってそれに達します。ランプを灯すことを望む人は、マッチを使います。オリーブオイルを絞り出すことを望む人は、搾り機を用います。頭が痛い人は、アスピリンを服用します。天国に入り、無限の恵みに到達したい人は、イスラームに従うのです。自らの頭を銃で撃てば、人は死にます。毒を飲む人も死にます。汗まみれのときに水を飲む人は病気になるます。罪を犯した人、信仰を失う人も、地獄に入ります。皆、どのような要因に働きかけるのであれ、それが要因となっているものに出会うのです。ムスリムの本を読む人は、イスラームを学び、気に入り、ムスリムとなります。教えを持たない人たちと共にいて、彼らの言葉を聞く人は、宗教的に無知な状態となります。宗教的に無知な人の多くは、カーフィルとなります。人は、何らかの場所に導く要因に乗った場合には、その場所に行くのです。

### 神が顕れる時、全てのことを容易になされる 要因を創造され、瞬時にそれを恵まれる

アッラーが物事を要因と共に創造されていないならば、誰も、誰かを必要とすることはなかったでしょう。皆、全てをアッラーから求め、何かに働きか

けることはなかったでしょう。その場合、人々の間で雇用者、被雇用者、労働者、職人、学生、教師、その他人間的な結びつきは生じ得ず、世界の均衡は壊されていたでしょう。美しいものと醜いもの、よいものと悪いもの、従順と反抗の間に違いがなかったでしょう。

アッラーが求められさえすれば、この法則を他の形で創造されたでしょう。全てをその法則に応じて創造されたでしょう。例えば、アッラーが望まれば、カーフィルたち、現世で自分の快楽に溺れていた人たち、人を傷つけだます人を天国に入れられていたでしょう。信仰を持つ人、イバダグを行う人、善行を行う人を地獄に入れることもできたでしょう。しかしクルアーンの言葉やハディースは、アッラーがこのようには望まれていないことを示しているのです。

人の全ての行い、望んで行ったこと、望まずに行ったこと、全ての行動を創造されるのはアッラーです。しもべの自発的な行動、仕事を創造される為、人に「意志」を与えられ、この選択や願望が、行いの創造への要因とされたのです。しもべが何かを行なうことを望んだ場合、アッラーもそれを望まれば、その行いを創造されます。しもべがそれを求めず、望まず、アッラーもそれを望まなければ、その行いは想像されません。

アッラーが望まれば、創造されます。しもべが望んだ行いを創造されることは、何かに炎が触れた際にそのものの燃焼を創造されることに似ています。ナイフが触れると、切れるという状態が創造されます。切るのは、ナイフではないのです。ナイフは、切れる為の要因となっているのです。つまり、しもべの自発的な行動、彼らの願い、行動の選択、そしてそれを望むことを、要因と共に創造されるのです。しかし自然界の動きは、しもべの求めることには結びついてはいません。これらはただアッラーが望まれることにより、別の要因と共に創造されるのです。太陽の、細胞の、しずくの、細胞の、細菌の、原子の物質や特性、動きを創造されるのはただアッラーです。アッラー以外に創造者はいないのです。しかし、生命を持たない物質の動きと、人間や動物の自発的な動きの間には次の違いがあります。しもべが何かを行うことを望み、選択し、アッラーもそれを望まれば、しもべを動かされるのです。しもべが行動することは、しもべが自らできることではないので

す。さらに人は、どのように行動しているかすら知りません。人の全ての動作は、無数の物理的、科学的な事象から生じているのです。生命を持たないものの動きには、「**選択**」はありません。火が触れた時に燃焼が創造されるのは、火が焼くことを選択し、望んだからではないのです。

アッラーが愛され慈しまれるしもべについて、彼の善良で役に立つ意志をアッラーも望まれ、創造されます。こういった人の悪く有害な意志はアッラーも望まれず、創造されないのです。こういったしもべからは常によい、効果的な行いが生じます。彼らは、多くのことができなかつたと言って悲しみます。しかしこれらが有害である為に創造されなかつたということを考え、理解していれば、決して悲しむことはなかつたでしょう。そのことを喜び、アッラーに感謝していたでしょう。アッラーは人の選択、自発的な行いを、彼らの心が選択し、意図した後に創造することを前もって意志され、それを求められていました。前もってこのように望まれていなかったとすれば、自発的な行動ですら私たちが求めることなく、アッラーが無理やり創造されていたことでしょう。自発的な行動を、私たちがそれを望んでから行われる理由は、前もってそのように望まれていた為です。つまり、アッラーの意志が司っているのです。

しもべの自発的な行為は、二つの事柄から生じます。一つめは、しもべの選択、意志、力によるものです。この為、しもべの行為を「**努力する**」と呼びます。努力は人の特性です。二つめは、アッラーの創造によるものです。アッラーの命令、禁止、善行、罰は人に努力という特性がある為です。**戦列者章第 96 節**では、「**本当にアッラーは、あなたがたを創り、またあなたがたが、造るものをも「創られる」。**」とされています。この章句では、人の行動においてその心による選択と、意志があることを示しています。強制ではないことを明白に示しているのです。だからこそ、「**人の行い**」といわれるのです。例えば、アリーが打った、折つたと言われます。一方で、全てがカダーとカダルによって創造されたことを明らかにしているのです。

しもべの仕事がなされること、創造されることにおいてまずこの仕事をしもべの心が選択し、意図することが必要です。しもべは、力が及ぶことを意図します。この望み、願いを「**ケスブ「努力、奮闘**」

アーメディ師はこのケスブが行いの創造の要因であること、影響を与えていることを述べています。このケスブの選択である行いの創造に影響は与えない、ということも誤りではないでしょう。なぜなら創造された行いとしもべの求めた行いは別ものではないからです。つまり、しもべは望むこと全てを行うことはできないのです。望んでいないことが創造されることもあります。しもべの望んだことを全て行うこと、望まないことは行わないことは、しもべとしてのあり方に適したものではありません。神の崇高さに反発することになります。アッラーが恵みを施され、憐れみを感じられ、しもべが必要としているカダルと命令、禁止事項にス違うことができるだけの力と強さ、つまりエネルギーを与えられたのです。例えば、健康でお金も持つ人は、生涯に一度ハッジに行くことができます。空にラマダーンの新月が見られると、毎年一か月断食をすることができます。24時間の中で5回、義務である礼拝を行うことができます。ニサーブの量に達している財産、お金を持つ人は、そこから1年が経過するとその40分の1の金と銀を取り分け、ムスリムたちにザカートを支払うことができます。つまり人は自らの自発的な行いを、望む場合は行い、望まない場合は行わないのです。アッラーの偉大さはここで理解されるのです。無知で愚かである人は、カダーとカダルの問題を理解できない為に、スンナの道を行く学者たちの言葉を信じないのです。しもべの力と選択について疑念を持ちます。人の自発的な行いにおいても、無力で強制されていると思ひ込むのです。一部の行いにおいてしもべの選択がなかったことを目にし、スンナの道を行く人々を非難します。この歪んだ言葉は、彼らに意志と選択があることを示しているのです。

何かを行うか行わないかに力が十分であることを「クドゥラ」といいます。行うか行わないかと選択し、選ぶことをイフティヤル「選択」といいます。選ばれたことを行おうと望むことをイラーダ「望むこと」といいます。何かを受け入れられ、反発されないことをルザー「受け入れること、甘受すること、満足すること」といいます。物事の実行に影響を与える条件と意志と力を一つにまとめることをハルク「創造」と呼びます。影響のない形で、一つにまとめることを「ケスブ」といいます。選択するもの全てが創造者である必要はないのです。同様に意志を持つものが皆、満足することは必

要ではありません。アッラーを、創造者かつ選択者と呼びます。しもべを、努力者かつ選択者と呼びます。

アッラーはしもべの従順さ、あるいは罪を意図され、創造されます。ただし、従順には満足され、罪には満足されず、それを好まれません。全てはアッラーの意志と創造によって存在するのです。家畜章第 102 節では「**それがアッラー、あなたがたの主である。かれの外に神はないのである。凡てのものの創造者である**」と命じられています。

「ムタツヅィラ派」である人々は、意志と満足の間の特徴を見ることができず、逸脱しました。人は自らが望んだ行いを自ら創造する、といったのです。「ジャブリエー派」の人々は、完全に逸脱してしまいました。創造なくして選択が存在しないことを理解できなかったのです。人には選択がないと思ひ込み、人を石や薪と同じようなものと見なしたのです。人々は「絶対に誤っていることですが」罪を犯したことにはならないとしていました。全ての悪事を行わせるのはアッラーであるといったのでした。ジャブリエー派の人々がいうように人に意志と選択がなければ、悪事や罪はアッラーが無理やり行わせるものなのであれば、手足を縛られ山から転がり落ちる人と、歩きながら、周囲を確認しながら山を下りる人との行動が互いに異なっていないはずです。しかし前者が転がることは強制されたことであり、後者が歩いて下りることは意志と選択によるものなのです。この間の違いを見ることができない人は、狭い視野を持っているのです。さらにクルアーンの言葉を信じていないことになるのです。アッラーのご命令、禁止事項を不要なものと思なしたことになるのです。ムタツヅィラ派もしくは運命論者と呼ばれる人々がいうように、人が望むことを自ら創造すると考えることは、「**凡てのものの創造者である**」というクルアーンの言葉を信じないことである上に、創造において人間をアッラーと同位に置くことになるのです。

シーア派の人々はムタツヅィラ派の人々のように、人は望んだことを創造すると言います。ロバが棒で打たれても水の上を歩いて行かないことをその証拠としています。彼らは、人が何かを行うことを望み、かつアッラーがそれを望まなかった場合には、アッラーの望んだとおりの結果になる、ということを考えないのです。ここからムタツヅィラ派の言葉誤っているこ

とが理解されます。つまり人は望むことを全て行うことはできず、また創造することもできません。彼らがいうように人の望むことが全て実現するのであれば、それはアッラーが無力であることを意味します。アッラーは無力さから遠くかけ離れた存在です。ただ、アッラーの意志によって物事がなるのです。全てを創造し、存在させられるのはただアッラーです。アッラーであることとは、こういうことなのです。人間について「彼はこれを創造した、我々はこれを創造した、彼らはこれを創造した」という形で話すこと、書くことは非常に醜い行為です。アッラーに対する不敬であり、不信仰の要因となるものです。

しもべの選択や行動は、自らの意志によってなるものではない、さらにはそれについて知るもしない、無数の物理的、化学的、生理的な事象によって生じています。この細やかさを理解した良心を備える科学者は、自らの選択による行為を「私が創造した」ということはいうに及ばず、「私が行った」ということにすら苦痛を感じます。アッラーに対し恥ずかしく感じるのです。知識、理解力、そして徳が不十分な人は、あらゆる場所であらゆることを語ることに苦痛を感じません。

アッラーはこの世界で全ての人々に憐みを掛けられます。彼らが必要としている全てのことを創造され、皆に与えられます。現世で快適に、安らいで暮らせるよう、来世でも永遠の幸せに到達することができるよう、何をすべきかを明白に教えておられます。自分の我欲、悪い友達、有害な書物やメディアに欺かれ、不信仰や逸脱の道にそれてしまった人々のうち、お望みの者を導かれます。彼らを正しい道に導かれるのです。残忍で粗暴な人々にはこの恵みを与えられることはありません。彼らを、彼らの気にいる、彼らの求める、そしてはまり込んでいる不信仰という沼で放っておかれます。

「イーティカドナーメ/信条の書」という書物の翻訳は以上です。この翻訳を行ったフェイズブッラー師は、エルジンジャンのケマフの町の出身です。長年、ショケで教授職に就いていました。1323年（西暦1905年）に亡くなっています。この本の作者はメヴラーナ・ハーリディ・バーダディ・オスマーンは、ヒジュラ歴1192年にバグダッドの北部にあるシェフラズルという町に生ま

れ、1242年（西暦1826年）にダマスカスで亡くなっています。オスマン・ズィンヌーラインの血を引く人であることからオスマーニと呼ばれています。弟のメブラーナ・マフムード・サーヒブ師に、イマーム・ナワーウィーの「ハディース・アルバイン」という書の二つめのハディースである、「ジブリールのハディース」として有名なハディースを読ませていた時に、メブラーナ・マフムード・サーヒブ師はこのハディースを解釈し、書くことをこの兄に求めます。メブラーナ・ハーリディは弟の輝かしい心を満足させる為この願いを受け入れ、このハディースの解釈をペルシア語で書いています。

理性よ、目覚め、目を開きなさい、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい  
その道から決して離れてはいけない、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい。

日に五回礼拝をし、ラマダーン月には齋戒を行いなさい  
財産があればザカートを支払いなさい、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

いつかあなたの目は見えなくなり、耳は聞こえなくなる  
この機会は今もはや与えられない、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

健康の豊かさを知りなさい、  
あらゆる時間が恵みであると気づきなさい  
命令に従いなさい、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

生涯を無駄に過ごしてはいけない、我欲に力を与えてはいけない  
目覚めなさい！不注意であってはならない、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

罪が多くあったとしてもアッラーから望みを絶ってはいけない  
アッラーの許しは豊かにあるのだから、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

夜明け前、慈悲があらゆる場所に降り注がれる  
あなたの心が清められる、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

アッラーの名を思い起こし、魂と心を清めなさい  
ナイチンゲールのように声をあげなさい、  
偉大なるアッラーに懇願しなさい

## - 5 -

**シェレフッディン・ムニーリーの書簡集**  
**「要因に働きかけることが必要である」**

インドで育った偉大なイスラーム学者の一人シェレフッディン・アフマド・ビン・ヤフヤ・ムニーリーの「メクトゥーバット/書簡集」という書物の 18 番目の書簡では次のように述べられています。

多くの人は、疑いや妄想によって行動し、過ちを犯します。このような誤った考えを持つ人々の一部は、「アッラーは我々のイバーダを全く必要としていない。我々のイバーダはアッラーには何の効果もない。イバーダを行う人と、反発してそれを行わない人は、アッラーの偉大さの前では同等である。イバーダを行う人は無駄に苦痛や苦勞を味わっている」といいます。このような考え方は誤りです。イスラームを知らない為にこのように語っているのです。イバーダがアッラーにとって効果のあることであり、その為にアッラーがそれを命じられていると考えているのです。この考え方は大きな誤りです。あり得ないことを事実だと思い込んでいるのです。人の行うイバーダの効果は、ただその本人にとってのものです。このことをアッラーは「創造者章第 18 節」で明白に示されています。「その身を清める者は、唯自分の魂のために清める」このような誤った考えを持つ人は、食事療養を行わない病人に似ています。この病人に医師が食事療養を勧めます。この病人は「自分が食事療法をしなくても医師には何の害もないだろう」といい、食事療法を行わないのです。医師には害がない、という点では事実です。しかし自らに害を及ぼしているのです。医師は自分にとって効果がある為ではなく、彼がその病気から救われるようにと食事療法を勧めたのです。医師の勧めに従えば、恢復することができます。従わなければ死んでしまうのです。医師には何の害もありません。

誤った考えを持つ人々の一部は、全くイバーダを行いません。ハラームであるものを避けることもありません。つまりイスラームに従いません。

「アッラーは気前のよいお方であり、慈悲深い。しもべを深く憐れまれる。その許しは無限にある。誰にも罰は与えられない」と考えます。そ

う、最初の二つの言葉は事実です。しかし最後の方の言葉は誤りです。ここでシャイターンが彼らを欺いているのです。反抗へと彼らを導いています。理性を持つ人はシャイターンに騙されないのです。アッラーは気前よく、慈悲深いお方であると同様、その罰は厳しいものです。非常に苦しいものです。この世界では多くの人々が貧困や苦痛の中で生きているのを目にします。多くのしもべに、軽減されることなく苦しみの中で生活させておられます。気前よく、糧を与えるお方である一方で、農業で農民が苦しむことなく一切れのパンを与えられることもありません。全てを生かされるお方である一方で、飲み食いしない人々を生かされることはありません。薬を用いない病人を癒されることもありません。生きること、病気にならないこと、財産を得ることといった現世での恵みの全てについて要因を創造され、その要因に働きかけない人には憐れみをかけられることはなく、現世での恵みを与えられないのです。薬は、非物質的・物質的な二つの部分からなります。全ての病気を癒す非物質的な薬は、サダカをすること、ドゥアーをすることです。「**病気になった時にはサダカをして、回復しなさい**」「**多くの悔悟を行うことは、全ての苦痛への薬である**」というハディースは有名です。物質的な薬はたくさんあります。経験によって理解されるのです。非物質的な薬を用いることは、物質的な薬を見出す助けにもなります。来世での恵みを得ることもまた、このようです。不信仰は、心と魂を殺す毒のようなものです。怠惰であることも、魂をやませます。これらに薬が与えられなければ、魂は病み、死んでしまいます。不信仰や無知であることの唯一の薬は、知識であり、英知です。怠惰さの薬は、礼拝すること、全てのイバーダを行うことです。誰かが毒を飲み、「アッラーは慈悲深いお方である。私を毒の害から守られる」といっていれば、彼は病気になって死んでしまうでしょう。下痢をしている人がひまし油を飲めば、糖尿病の人が甘いものや粉ものを食べれば、病状が悪化します。人の肉体は繊細で壊れやすいものであり、必要である物質「食べ物、衣服、住居」が多くあります。これらを見つけ、イスラームに適した形で利用する為に用意することは非常に困難です。この仕事を容易にするために、人には「**我欲**」というまた別の力が与えられているのです。動物

にはこの力が創造される為の理由がありません。我欲は、肉体に必要な事柄がなされることを求めます。それらを十分すぎるほど行うことは我欲にとって心地よいものです。我欲の求めるものを「欲望」といいます。欲望が理性と相談することなく、必要以上のことを行うことは、心と体、そして他者に害を及ぼし、罪となります。「永遠の幸福」の32ページを参照にしてください。誤った考えを持つ人の一部は、絶食をして修行を行います。これによってイスラームが好まない欲望、怒り、快樂への欲望を根本から絶つことを願っています。イスラームがこれらを消し去ることを命じていると考えているのです。長い時間空腹の苦しみを味わい、これらの悪い欲望が消え去れないことを目にし、イスラームが実現不可能なことを命じていると考えるのです。「イスラームのこの命令は実行不可能だ。人はその本質にある性格から救われることはできない。これらから救われる為に努力することは、黒い人を白くするようなものである。できもしないことを行おうと努力することは、人生を無駄に費やすことである」といっているのです。彼らは誤った考えを持ち、誤った行動をしているのです。特にイスラームがこのようなことを命じていると考えることは、まさに無知で愚かなことです。なぜならイスラームは、怒りや欲望といった人間らしいあり方を消し去ることを命じてはいないのです。このように語ることはイスラームへの中傷となります。イスラームがこのようなことを命じたとすれば、教えの主である預言者ムハンマドにそういった特質がなかったことでしょう。しかし預言者ムハンマドは「私は人間である。皆と同様、私も怒る」といわれていました。時に立腹されているのが見られていました。その怒りは常にアッラーの為でした。アッラーはクルアーンのイムラーン家章第134節で「怒りを押えて人びとを寛容する者」を賞賛されています。怒らない人を賞賛されてはいないのです。誤った考えを持つ人々が「人は欲望を消し去るべきだ」ということは、大きな間違いなのです。預言者ムハンマドが9人の妻を持ったことは、この言葉が過ちであることを明白に示しています。誰かが性欲を失ったのであれば、薬を飲んでそれを得なければいけないのです。怒りについても同様です。人は妻と子供を怒りという性質によって守ります。イスラームの敵に対し、この性質

の助けによって戦います。子供を持ち、死後に誉れと共に思い起こされることは、性欲によって可能となります。これらはイスラームが賞賛し、好む事柄なのです。

イスラームは欲望や怒りを消し去ることではなく、その二つをコントロールし、教えに適した形で用いることを命じています。騎士が馬を、獵師が犬を殺すことではなく、彼らをしつけ、彼らの役に立つようにすることが必要なと同様です。つまり、欲望と怒りは、獵師の犬、騎士の馬のようです。この二つがなければ、来世での恵みを獲得することもできません。しかしこれらを活用して益を得る為には、しつけをし、教えに適した形で用いることが必要なのです。しつけを受けず、熱情のままに教えの定めたラインを越えるのであれば、人を滅亡へと導きます。修行を行うことはこの二つの性質を消し去るためではなく、しつけをして教えに従うようにする為なのです。これを可能にすることは、誰にとっても可能なことです。文明とは、原子の力を利用すること、ジェット機を造ることではありません。文明とはこれらを人間への奉仕の為に用いることです。これはイスラームに従うことで可能となります。

誤った考えを持つ四番目のグループは、彼ら自身を欺いています。「全てが前もって定められていたことだ。子供や生まれてくる前に「**重鎮**」になるか「**罪人**」になるか決まっている。これは後から変わることはない。だからイバーダを行うことに価値はない」というのです。預言者ムハンマドはカダーとカダルが変わらないこと、全てが前もって定められていたことを説かれた時、教友たちは次のようにいいました。「その定めを信頼し、イバーダをやらなくてもいいのでは」預言者ムハンマドは彼らに対し、「**イバーダを行いなさい！前もって定められていたことを行うことは皆にとって容易である**」と答えられました。つまり、アッラーが前もって重鎮になると定められた人は、この世界で重鎮としての行動をとるので、ここから理解されることは、前もって重鎮と決められた人がイバーダを行うこと、罪人といわれた人が反発すること、健康に生きることが定められた人が現世で糧と薬を口にすること、病気になって死ぬと定められた人が糧や薬を口にしないことと似ています。空腹や病気で死ぬことが前

もって定められている人は、糧や食料を得ることがかなわないのです。豊かになることが定められた人には、利益を得る道が開かれます。東部に行くことが定められた人には、西部に行く道が閉ざされます。私たちが知る小話によれば、天使アズラーイールが預言者スライマーンのそばに来た時、そこにいた人の顔を注意深く見つめていました。この人は、天使のこの厳しい視線を恐れました。アズラーイールが去ると、スライマーンに懇願し、風に命令して自分を西の国のどこかに運び、アズラーイールから助けるよう求めました。アズラーイールが再び戻ってきた時、スライマーンはなぜその人の顔を厳しい視線で見つめたのかを尋ねました。アズラーイールは「一時間後、西の国の町の一つで彼の命を取ることを命じられていた。彼があなたのそばにいるのを見て驚いた為に注意深く見つめたのだ。命令に従って西部に行くと彼がそこにおり、私は彼の命を取った」と答えました。この小話はジェラーレディン・ルーミー<sup>29</sup>の「マズナヴィー」という本で長く説明されています。このように、前もって定められていたことは命令ではなく、知なのです。前もって定められていたカダルが実現する為、この人はアズラーイールを恐れました。アズラーイールはそのカダルに従ったのです。前もって定められていたことが、要因のつながりと共に実現したのです。同様に、前もって重鎮になると定められていた人は、信仰すること、修行して悪い性質を取り除くことが可能となります。家畜章第 125 節では「凡そアッラーが導こうと御望みになった者は、イスラームのためにその胸を開く」とされています。前もって罪人となることが知られていた人、すなわち地獄に行くことが定められていた人は、「イバーダを行う必要はない。皆、重鎮になるか罪人になるか前もって決められている」といいます。このように考え、イバーダを行わなくなるのです。このように考えてイバーダを行わなくなることは、彼が前もって罪人となることを定められたことを示すのです。このように無知であることが定められた人は「全ては前もって定められている。無知であることが定め

---

<sup>29</sup>ジェラーレディン・ルーミーは 672 年（西暦 1273 年）にコンヤで死去しました。

られている人が学ぶことには何の効果もない」と考えます。このようにして学ばず、努力せず、無知なままでいるのです。誰かが農業に従事して豊かな財産を得ることが定められていれば、畑を耕し、種を撒くことができます。重鎮と定められた人が信仰を持ち、イバーダを行うこと、罪人と定められた人がカーフィルとなること、反抗することもこれと同様です。愚かな人はこれを理解できないのです。「信仰やイバーダを行うことと前もって重鎮と定められていること、もしくは教えを否定し反抗することと罪人となることの間」にどのような関係があるのか」と考えます。浅い考えでこのことを理解しようとします。全てを自らの考えで読み取ろうとします。しかし人の知性には限界があります。知性の及ばないことを知性で理解しようとするのは、無知なことであり、愚かなことなのです。このように考える人が愚かであることがわかります。預言者イーサー（アッラーの祝福あれ）は次のように語っています。「生まれつき目が見えない人の目を見えるようにすること、さらに死んだ人を蘇らせることは私には困難ではない。しかし愚かな人に、正しいことを説くことはできなかった」アッラーは無限の智と英知で一部のしもべを天使の位階にまで高めます。さらには天使をしのぐほどにもなります。一部のしもべは犬や豚の位階にまで貶められるのです。

第 18 の手紙の翻訳はここまでです。

シェレフッディン・アフマド・ビン・ヤフヤ・ムニーリーの「メクトゥーバット/書簡集」という書物には、100 の手紙があります。741 年（西暦 1339 年）に書かれ、1329 年（西暦 1911 年）にインドで出版されています。イスタンブールではスレイマニエ図書館に手書きのものが 있습니다。76 番目の手紙では次のように語られています。

サーダ「幸福」とは、天国に行く人となるということです。シャカーワ「罪人」とは、地獄に行く人となるということです。サーダとシャカーワはアッラーの二つの宝庫のようです。一つめの宝庫の鍵は、従順とイバーダです。二つめの宝庫の鍵は、不服従と罪です。アッラーは全ての人につ

いて、重鎮「サイイド」かシャキー「罪人」かになることを前もってご存じです。この知識を「カダル」といいます。額に記された文字、ともいいます。重鎮となることが前もって知られていた人は、アッラーに服従します。罪人となることが前もって知られていた人は、常に罪を犯します。現世では、人が重鎮であるか罪人であるかはその行動から理解されます。来世を考える宗教学者たちは、人が重鎮であるか罪人であるかをこのように理解します。現世にふけている学者たちはこのことを知らずにいます。全ての誉れや恵みはアッラーにイフラスを持って従い、イバーダを行うことにあります。全ての悪や苦しみは、罪を犯す事から生じます。人の苦しみや災いは罪の道からもたらされます。安定ややすらぎも、アッラーへの服従という道からもたらされます。アッラーの法則はこの通りであり、これを誰も変えることはできません。我欲にとって容易で甘美であることを、幸福だと見なすべきではありません。我欲にとって困難であり、つらいことを災いであるから見なすべきではないのです。エルサレムのアル・アクサ・モスクで何年も祈念やイバーダを行って過ごしている人が、イバーダの条件とイフラスを学んでいなかった為にサジュダを放棄した時には非常に甚大な害をなし、彼は駄目になってしまいました。洞窟のサハーバたちの犬は、穢れたものであるのに、誠実な人々について数歩、歩いたというだけで非常に高められ、決して落ちることもなくなったのです。この状態は人々を驚かせます。何世紀にもわたって学者たちはこの神秘を読み解くことができませんでした。人の理性はこの英知を理解することができないのです。預言者アダムに、天国の果実を食べることが禁じられ、しかし彼がそれを食べることをアッラーは前もってご存じである為、それを望まれました。シャイターンに預言者アダムへのサジュダが命じられ、そしてサジュダしないことを望まれました。「私を探し求めなさい」と言われ、しかしイフラスを持たない人がアッラーを見出すことを望まれません。神の道を行く人は、「まったく理解できない」としかいえずに来たのです。我々はどのように捉えるべきでしょうか。アッラーは、人々が信仰すること、イバーダを行うことを必要としているわけではありません。カーフィルとなること、罪を犯すことも、アッラーには何の害も

及ぼしません。アッラーは被造物を一切の形で必要とはされないのです。知識は迫害を取り除く為の、無知は罪を犯す事の要因とされました。知識から信仰や服従が生じ、無知であることから是不信仰と罪が生じます。服従は、とても小さなものであったとしてもそれを逃すべきではありません。罪は、非常に小さなものに見えたとしても、それに近づいてはいけません。イスラーム学者たちは次のように語っています。三つのことは、三つの事柄の要因となります。服従は、アッラーのご満悦を得る為の要因です。罪を犯すことはアッラーのお怒りの要因となります。信仰することは、誉れ高く、尊い存在となることの要因です。だから、小さな罪を犯すことですら、十分に避けるべきなのです。アッラーのお怒りは、一つの罪から生じ得ます。全ての信者について、自分よりもよいと見なすべきです。その信者が、アッラーが深く愛されるしもべであるかも知れないからです。それぞれの人にとって、前もって定められていることは、決して変えることはできません。常に罪を犯し、全く服従したことの無いムスリムでも、アッラーが望まれる場合は許されます。雌牛章第 30 節で天使たちが「あなたは地上で悪を行い、血を流す者を置かれるのですか」といった時、アッラーは「彼らは悪を行わない」とは言われていません。「本当にわれはあなたがたが知らないことを知っている」と言われているのです。「適切ではない者を適切にしよう。遠くにいる者を近くに來させよう。卑小である者を高めよう」と言われているのです。「あなた方は彼らの行いを見て、私は彼らの心の中の信仰を見る。あなた方は自分たちが罪のない存在であると見なす。彼らは私の慈悲に庇護を求めている。あなた方が罪のない存在であることを好むように、罪を犯す人々を許すことも私は好む。私が知っていることをあなた方走らない。信仰する人は永遠の恵みに至る。無限の恵みと共に皆を撫でる」と言われたのです。76 番目の書簡の翻訳はここまでです。

シェレフッディン・アフマド・ビン・ヤフヤ・ムニール師は、782 年（西暦 1380 年）に亡くなっています。インドのビハールの町で暮らしていました。彼の墓もその地にあります。ムニールとは、ビハールの町に属する村の一つの名前です。シャー・アブドゥルハック・ダフラヴの「アフ

「パール・ウル・アフヤール」という本で、その翻訳が取り上げられています。この本はペルシア語であり、1332年（西暦1914年）にインドのデオベンダー市で、その後パキスタンのラホールで出版されています。「イルシャド・ウス・サーリキーン」、「マディーーン・ウル・マーニー」そして「メクトゥーバット/書簡集」といった書物は非常に価値のあるものです。

イマーム・ラッバーニは様々な書物で次のように語っています。「アッラーの命じられたことをファルド「義務」といい、アッラーの禁じられたことを「ハラーム」といいます。ファルドでもハラームでもなく、自由に任されているものを「ムバフ」といいます。ファルドと行い、ハラームを避け、ムバフであるものをアッラーのご満悦の為に行うことを「イバーダを行う」というのです。このイバーダの真正で承認されるものである為に、つまり正しいものとなり、アッラーのご満悦を得る為に、イリム「知識」すなわち正しく行う為の条件を学ぶこと、そしてアマル「行為」すなわちその条件に適した形で行うこと、かつ、「イフラス」を持って行うことが必要なのです。イフラスとは、お金や地位、名誉といった現世的な利益を考えず、アッラーが命じた為に、アッラーのご満悦、愛情を得る為に行うことです。イリム「知識」は、イスラーム法の本を師と共に読むことで、イフラスはワリー「アッラーの友、聖人」である人の言葉や態度、行い、そして神秘主義の本を読むことで得ることができます。イスラームのイリムは二つに分けられます。宗教上の知識と科学的な知識です。これらを必要なだけ学ぶことはファルドです。例えば、薬の飲み方、量、そして電灯を使う人は電気についてわずかでも学ぶことはファルドです。学ばなければ死がもたらされる可能性すらあります。

ファルドとハラームを信じつつも、怠惰であったり、悪い友達に従ったりすることでイバーダを行わない人が、悔悟を行わずに死ねば、罪がなくなるまで天国で焼かれます。ファルドを学ばない人、それを知ったとしてもそれに価値や重要性を置かない人、悲しまない人、アッラーを恐れることなく放棄する人はムスリムであることから逸脱し、カーフィルとなります。地獄で永遠に、無限に焼かれます。ハラームを行うことも同様です。

何らかのイバーダのイリムを学ばない人、条件を知らない人が行ったイバーダは、イフラスを持って行っていたとしても、真正なものとはなりません。全く行わなかったかのように地獄で焼かれるのです。条件を学び、注意して行う人のイバーダは、真正なものとなります。地獄の罰から救われます。しかしイフラスを持って行わなかったのであれば、このイバーダとその善行はどれも受け入れられず、サワブを得ることもありません。アッラーはこの種のイバーダや慈善、善行を好まれないことを告げておられます。イリムとイフラスを伴って行われないイバーダには効果はないのです。人を不信仰や罪、罰から救うことはありません。生涯を通してこのようなイバーダを行い、不信仰のうちに死んだ多くの偽信者が知られています。イリムとイフラスを伴って行われたイバーダが、人を現世で不信仰と罪から救い、高めるのです。来世でも、地獄の罰から救うことを、アッラーは食卓章第9節と時間章で誓われています。アッラーは約束に忠実なお方です。約束されたことは必ず行われるのです。

アッラーはしもべの手で報復をされる  
 知らない人はしもべが行ったと考える  
 物事は全て創造主アッラーのものであり、  
 しもべの手によって行われる

命令がなければ、ごみでさえ動けるとは思っはいけない

## - 6 -

**アッラーは存在し、唯一であられ、アッラー以外の  
全てのものはかつて無であり、再び無となる**

私たちは周囲の存在を、感覚器官を用いて認識します。感覚器官に影響をあたえるものを「**存在**」と呼びます。存在するものが私たちの五感に与える影響、効果を「**特質**」、「**性質**」といいます。存在はこの特質によって互いと区別されます。光、音、水、空気、ガラスはそれぞれが個別の存在であり、「**被造物**」です。重さと体積を持つもの、すなわち空間を埋めるものを「**物質**」、「**物体**」と呼びます。物質は互いに、性質と特質によって区別されます。空気、水、石、ガラスはそれぞれが異なる物質です。光や音は物質ではありません。なぜなら光や音は空間を埋めず、重さもないからです。全ての存在は、「**エネルギー**」、すなわち「**力**」を持ちます。つまり、何らかの作用を及ぼすことができます。全ての物質は固体、液体、気体の三つの状態をとります。固体には形があります。液体や気体の状態である物質には、それ自体に固有の一定の形はありません。それらは、それらが存在する入れ物の形を取ります。存在が形を持つ場合、それは「**物体**」と言われます。物質は常に物体の形で存在します。例えば、鍵、針、机、スコップ、ねじといった物体です。つまりその形状は様々です。しかしこれらは全て、鉄という物質からできています。物体は二種類に分類されます。単体と、複合体です。

「**世界は常に変化する**」、すなわちあらゆる物体に常に変化が生じています。例えば動くことによって場所を変えます。大きくなったり小さくなったりします。色が変わります。生命を持つ存在であれば、病気になり、死にます。これらの変化を「**事象**」もしくは「**出来事**」といいます。外部からの影響がない限り、物質には何の変化も起こりません。何らかの事象が生じた時に、物質の構造が壊されず、その本質は変化しない場合、それを「**物理的な現象**」と呼びます。紙が破れることは物理的な現象です。ある現象で物理的な現象が発生する為には、この物質に何らかの力が影響を及ぼすことが必要です。物質の構造を破壊し、本質を変化させる事象を、

「**化学的な現象**」といいます。紙が燃えて灰になることは化学的な現象です。ある物質で化学的な現象が生じる為には、この物質に別の物質が影響を及ぼすことが必要となります。二つもしくはそれ以上の物質が互いに影響を及ぼし、それぞれに化学的な現象が生じることを「**化学反応**」といいます。

物質に化学反応が起こること、つまり互いに影響を与えることは、最も小さな部分で生じます。物質のこの最小の部分をも、「**原子**」といいます。全ての物体は原子からできています。つまり、原子の集積です。原子の構造は互いに似ていますが、大きさと重さが異なっています。この為、現在では **105** 種類の原子が知られています。最も大きな原子ですら、最も強力な顕微鏡でも見えない程に小さいのです。互いに似ている原子が一か所にまとまることにより、「**単体**」もしくは「**要素**」が生じます。**105** 種類の原子がある為、**105** 種類の単体があります。鉄、硫黄、水銀、酸素、炭はそれぞれが要素です。別々の原子が一体化することから、「**複合体**」もしくは「**混合体**」が生じます。何十万もの複合体が存在します。水、アルコール、塩、石灰などが複合体です。複合体は二つもしくは二つ以上の単体が互いに結びつくことから生じます。単体の結合は、原子が互いに一体化することから生じます。

全ての物体、例えば山、海、各種の植物や動物は、この **105** 種類の要素からできています。生命を持つ、持たないに関わらず全ての物体の基盤は、常にこの **105** 種類の要素なのです。全ての物体はこの **105** 種類の要素のどれかもしくは複数の原子が集まったことから生じています。空気、土、水、熱、光、電気、そして細胞は、集まった物体を分裂させ、もしくは結合させる要因となります。「**要因なしで何らかの変化が生じることはありません。**」この変化において要素、すなわちこれらの存在の基盤は、物体から物体へと場所を変え、あるいは一つの物体から離れて自由に動くようになります。私たちは物体が無となるのを目にすることができます。見たことをもとに判断して、誤るのです。なぜなら無になる、存在するといっているこの様子は、物質の変化以外の何ものでもないのです。何らかの物体、例えば墓にある死体が無になることは、新たな物体、例えば水、

ガス、土壌の成分が存在するようになる、という形で生じているのです。ある変化で存在するようになった新たな物質が感覚器官に影響を与えなければ、これらが生じていることを理解できません。だから変化した最初の物質について、私たちは無となったというのです。

105 種類の要素の全てが形を変え、全ての要素で物理的、化学的な現象が生じていることをも見ることができます。一つの要素が、別の複合体に加わると、イオンという状態になります。つまり原子は電子を与えるか、受け取ります。これにより、この要素の様々な物理的、化学的な特性が変化します。全ての要素の原子は、一つの核と、「電子」と呼ばれる様々な量の、より小さなものでできています。核は原子の中心にあります。水素以外の全ての原子の核は陽子「プロトン」と「中性子」と呼ばれるものでできています。陽子は、プラスの電気を帯びています。中性子は電気を帯びていません。電子は、マイナスの電気であり、核の周囲を動いていません。電子は常にその軌道上を動き、かつその軌道を変えます。

原子の核においても変化や分裂が起こることが、「放射能」と呼ばれる要素から理解されています。核のこの分裂では、ある要素から他の要素に代わることで、物質が消え、エネルギー「力」となることも理解され、この変化はアインシュタイン<sup>30</sup>によって計算すらされています。つまり複合体と同様、要素においても常に変化があり、一つの状態から別の状態へと変わっていくのです。生命を持つもの、持たないもの、全ての物質は変化し、すなわち前のものが消え、新しいものが顕れます。今存在する全ての生命「全ての植物、動物」は、以前には無でした。他の生命体がいたのです。生命を持たないものについても同様です。生命を持つ・持たない全ての存在、例えば一つの要素である鉄、もしくは複合体である石、骨、そして全ての物質、全ての細胞が常に変化しています。つまり以前のものが消え、新しいものが生じます。新しく生じた物質となくなった物質が互いに似ていれば、人はこの変化を理解せず、この物質が常に存在していると考

---

<sup>30</sup>アインシュタインはユダヤ人の物理学者であり、1375年（西暦1955年）に死去しました。

えます。映画で、動き続けるフィルムの上で常に新しい画像が行き来しているのに、観客はこれを理解せず、同じ絵がスクリーンで動いていると考えることに似ています。紙が燃えて灰になると、この変化を理解する為に、紙がなくなって灰が生じたといえます。氷が溶けると、氷がなくなった、水が生じたといえます。近代的な物理の知識は、「永遠の幸福」の本の546、971、1041 ページでも詳しく書かれています。そちらをも読んでみてください。

「シェリフ・アカーイド」の本の冒頭では次のように記されています。全ての存在は、アッラーの存在のしるしであり、アッラーの存在を示すものである為、被造物の全てが「アーレム」と呼ばれます。被造物のうち、一つの種類であるものについてもそれぞれをアーレムといえます。例えば、人間のアーレム、天使のアーレム、動物のアーレム、生命を持たない物質のアーレムなどです。全ての種が、一つのアーレムなのです。

「シャルヒ・メワークフ」<sup>31</sup>という書物では次のように書かれています。

アーレム、つまり全てのものは、ハーディス、つまり創造されたものです。すなわち、無であった後で存在するようになったのです。常に互いからも生じているということは先にも述べています。物体の物質も特性も、ハーディスです。ここでは4つのことが考えられます。

1. ムスリム、ユダヤ教徒、ナザレ人、拝火教徒によれば、物体の物質も性質もハーディスです。
2. アリストテレスや彼に従う哲学者たちによれば、物体の物質や性質はカディーム、すなわち始まりのないものであり、常に存在しているとしています。この言葉が誤りであることを、近代の化学の知識が明白に示しています。このように信じ、考える人はイスラームから逸脱したことになり

---

<sup>31</sup>シャルヒ・メワークフの著者サイード・シェリフ・アリー・ジュールジャーニーは816年（西暦1413年）にシラズで死去しました。

ます。カーフィルとなるのです。イブニ・シナー<sup>32</sup>やファーラビー<sup>33</sup>、もカディームであるとしていました。

3. アリストテレス以前の哲学者によると、物質はカディームであり、性質はハーディスであるとしています。今日科学者の多くも、このような誤った考えを持っています。

4. 物質がハーディスであり、性質がカディームであると考えた人はいませんでした、カリノスはこの4つのうち、どれかに決めることができませんでした。

ムスリムは物質と性質がハーディスであることをいくつかの道で証明しています。一つめの道は物質と全ての細胞が常に変化することです。変化するのは、カディームではあり得ないのです。ハーディスであるべきなのです。なぜなら、それぞれの物質が、自分よりも前に存在していたものから生じているということは、無限にまで遡ることはできないからです。この変化に一つの始点があること、つまり最初の物質が無から創造されたということが必要なのです。無から創造された最初の物質がなければ、つまり後になって生じた物質が、それ以前に存在していた物質から生じていた、ということを経無限の過去にまで遡るのであれば、物質が前の物質から生じていた、ということの始点が存在しなくなります。そして今でも、どの物質も存在していないべきとなるのです。物質が存在していること、前の物質から生じていることは、無から創造された最初の物質からそれらが創造されたことを示しているのです。

さらに次のようにいことができます。天から降ってきた石を「無限から来た」ということはできません。なぜなら無限とは、始まりも終わりもないことを意味します。無限から来たということは、無から来たことを意味します。無限から来たと考えられているものは、来ていないべきなのです。現にきているものについて無限から来たということは、知性や科学に

---

<sup>32</sup>イブニ・シナー・フセインは 428 年（西暦 1037 年）に死去しました。

<sup>33</sup>ムハンマド・ファラービーは 339 年（西暦 950 年）にダマスカスで死去しました。

そぐわない、無知な言葉です。このように、人が別の人から生まれたという事は、始まりのない永遠から来たことにはならないのです。無から創造された最初の人から始めて、増殖することが必要となるのです。無から創造された最初の人がおらず、人が別の人から生まれ、無限の過去から来たのだと考えるのであれば、どの人間も存在しないべきなのです。全ての存在について同じことが言えます。物質や物体がその前の物質・物体から生じることについて、「こうやって増殖してきて、こうやって増殖していくのだ。無から創造された最初の物質などはない」と考えることは、知性や科学にそぐわない無知な言葉です。変化することは、無限であることではなく無から創造されたこと、つまり「常に変わらず存在するもの」、ではなく「存在することも無のままであること」もあり得るもの、であることを示すのです。

**質問：**この世界を創造されたお方ご自身とその特質はカディームであり、永遠です。この世界はカディームであることは必要ではないのでしょうか。

**答え：**カディームである創造主が、物質、細胞を様々な要因と共に変化させられていること、つまり無とされ、それらの代わりに他のものが創造されているのを私たちは常に目にします。カディームである創造主が意図され、望まれた時、すなわちいつでも、物質を互いの中から創造されません。あらゆる種類のもの、あらゆる物質、あらゆる細胞を要因と共に創造されたように、それを意図された時には要因や媒介なしに無から創造されるのです。

あらゆる種類の被造物がハーディスであることを信じる人は、それがはかないものであること、すなわち再び無となることをも信じます。無であり、その後創造されたものが再び無となることは明らかです。多くの存在が消えていくのを、今現在でも目にしているのです。

ムスリムとなる為には、物質や物体、つまり全ての存在が無から創造され、再び無となることを信じなければいけないのです。物体が無であった後で存在を始めていること、再び無となること、つまり形や特性が失われ

ることを私たちは目にします。物体が無になると、物質が残っていたとしても、この物質が永遠ではないこと、ずっと以前にアッラーによって創造されていたこと、審判の日には再び無となることは先に述べた通りです。現代の科学知識は、これを信じることの妨げにはなりません。信じないことは科学への中傷であり、イスラームと敵対することを意味します。イスラームは科学技術を拒みません。宗教的知識を学ばないこと、イバーダの務めを果たさないことを拒んでいるのです。科学技術もイスラームを否定してはいません。むしろそれを支え、評価しているのです。

様々な種類の被造物がハーディスであるのであれば、それを無から創造した存在があります。なぜなら、一切の事象は自ら発生することはできないからです。今日工場では、何千もの葉、家具、工業品、貿易品、電子機器、軍事機材が製造されています。これらの多くは細かな計算と何百もの経験の後で得られるものです。これらのうちどれか一つについてであれ、勝手に存在したと彼らはいっているでしょうか。これらを意識的に、自発的に造っていること、そして全てにそれを造った存在が必要となると彼らは主張しているのです。その一方で生命体や非生命体に見られ、各世紀に新たな発見、より詳細な発見がなされ、その多くをいまだに私たちが知ることのできない何百万もの物質と事象が、勝手に生じたと主張しているのです。この二面性は深い頑迷さか、明らかな愚かさ以外の何ものであり得るでしょうか。全ての物質、全ての動きを存在させられる唯一の創造主が存在するのです。この創造主は「常に存在しているお方」です。つまり、無であったのが後になって存在し始めたのではないのです。常に存在していることが必要なのです。存在する為に何かを必要とすることはありません。常に存在することが必要でなければ、存在することもしないことも可能であるものとなったでしょう。あらゆる種類の被造物と同様、ハーディス、すなわち被造物となっていたでしょう。被造物は他の被造物が変化すること、あるいは消失することから存在を始めます。それをも創造した存在が必要となります。こうして無数の創造者が必要となります。被造物の変化が永遠ではあり得ないことを、先に述べた通りに考えるなら、創造者たちも無限ではあり得ず、創造における第一の創造者から始まる、という

ことがわかります。なぜなら、創造者たちが互いを創造していくことが無限に続くと考えるなら、どの創造者も存在しないべきであるからです。ここで、創造されていない最初の創造者が、被造物の唯一の創造主なのです。その創造主の前にも後にも、他の創造者はいないのです。創造主は創造されることはなく、常に存在します。一瞬であれ無となれば、全てが無となります。常に存在するお方はあらゆる観点から、何かを必要とすることが全くありません。天と地、原子、生命体を秩序ある、計算された形で創造されるお方の力、強さが無限であること、英知の主であること、望んだことをすぐに行われること、唯一であること、決して何の変化も生じないことが必要となります。力が無限でなければ、そして英知を備えていなければ、このように秩序あり計算された形で創造されることはなかったでしょう。この創造主が複数であれば、何かの創造に関して皆の望みが一致しない場合には、その望みどおりに行うことができない存在は創造主とはならず、被造物は非常に混乱した状態になるでしょう。より深い知識を得る為には、アリ・ウシー<sup>34</sup>の書いた「アマリー・カシーダ」という本のアラビア語もしくはトルコ語版を読んでください。

創造主には一切の変化も生じません。世界を創造される以前も、今も、同じ状態であられました。全てを無から創造されたように、常に、全てを創造されているのです。なぜなら変化することは、被造物であること、無から創造されたことを示すからです。創造主が常に存在され、無とならないことは上記の通りです。だから、アッラーには一切の変化が生じないのです。被造物は最初の創造でアッラーを必要としたように、どの瞬間においてもやはり必要としているのです。全てを創造され、全ての変化を生じさせられたのはただアッラーです。秩序を設け、人々が生きやすくする為、そして文明的である為に全てをその要因と共に創造されたのです。要因をアッラーが創造されたように、その要因が影響を及ぼすこと、作用することもまた、アッラーが創造されました。人は、要因が物質に影響をあたえる際に媒介となります。

---

<sup>34</sup>アリ・ウシーは575年（西暦1180年）に死去しました。

空腹となると何かを食べること、病気になると薬を飲むこと、ろうそくを灯す為にはマッチをすること、水素を得る為には亜鉛に酸をかけること、セメントをつくる石灰岩と年度を混ぜること、牛乳を得る為には牛を買うこと、電気を得る為には水力発電所を造りこと、各種の工場を造ること、要因を用いることは、新しいことの創造への媒介となります。人間の意志と力も、アッラーが創造された要因です、人も、アッラーの創造における媒介となるのです。アッラーはこのように創造されることを望まれました。つまり、人が何かを創造したということは、理性にも教えにも合わない、無知な言葉なのです。

人は、自らを創造し、生かし、必要とするものをも創造し与えられる創造主を愛し、そのお方のしもべとなることが必要です。つまり、アッラーにイバーダを行い、崇拜し、従い、敬意を示すことが必要です。常に必ず存在し、唯一であるこの神の名が「アッラー」であることがアッラーご自身により明白に告げられています。しもべはアッラーが教えられた名称を変える権利を持ちません。正当な権利なしに行われたことは権利の侵害であり、非常に醜い行為となるのです。

キリスト教徒たち、神父たちは、創造主が三体であることを信じています。上記の文章はキリスト教の、神父たちの言葉が誤ったものであることを証明しているのです。

**知識がなければ、教えは流れ去ってしまう**

**そうであるならば、無知といわれる恥ずべき状態から**

**救われる為の努力をしなければいけない、民族を挙げて  
教訓となったこの災いは十分ではなかったというのか？**

**この災いという教訓が何を損なわせたか、あなたが考えるならば  
脳が溶け、涙のように目から流れるだろう**

**最後に起こったこの出来事が何を意味するか、**

あなたが知るならば  
あなたが我に帰らなければ、この民族は失われるだろう

なぜなら、新しい衝撃にはもはや耐えられないから  
なぜなら、今度は死の眠りから覚めることはないから

道徳をただし、科学の為に大いに努力することが必要である  
教えに従い原子と共に武器を携えた闘志とならなければならない

教えの知識、戦う力を優れたものにするべきである  
民族にやすらぎを与えるのは、ただこの二つなのだ

## 第Ⅱ部

## イスラームとキリスト教

- 7 -

## なぜ彼らはムスリムになったのか

この部分は、本編『イスラームとキリスト教』への追記としてまとめられたものです。

イスラームは、最後の、そして最も完成された教えです。有名なイギリスの文学者バーナード・ショウも、「この世界のために、どれか一つだけ教えを選ばなければならないのであれば、それは必ずやイスラームとなろう」と語っています。それは必然のことでしょう。なぜならイスラームは、これまでのあらゆる教えが陥ってしまった“変容”という罫から守られてきたからです。アッラーだけを信仰する教えの一つとしてユダヤ教がありますが、そこではメシア（救世主）の訪れが告げられています。そして、預言者イーサーがメシアとして現れたとされるのですが、その教えをまとめた聖書は失われ、後世にさまざまな編纂が加えられた多種多様な新約聖書が作られました。それでも、将来、真のメシアである最後の預言者が訪れることを示唆する印は、新約聖書でも複数見ることができます。『バルナバによる福音書』には、預言者ムハンマドの名前が明白に記されています。つまり、イスラームはすべての真実の教えが集約された、最後の、そして、最も正しく、最も完成された、アッラーのご満悦に完全になかった教えなのです。青年時代をヨーロッパのキリスト教徒とともに過ごした文化人、ヌーリ・レフェット・コルルは次のように語っています。「両親がムスリムだったため、私はムスリムとして生まれました。ただ、私は生涯をヨーロッパで過ごしてきました。だから、さまざまな教えを調べ、相互に比較する十分な機会があったのです。もし他の教えがイスラームよりも優れていると分かれば、イスラームを放棄してその教えを受け入れていたはずです。なぜなら、私にムスリムであることを強制するような人は誰もいなかったからです。しかし、私が行

ってきたすべての調査、比較、キリスト教徒との討論は、イスラームが世界のあらゆる教えに勝り、一切変容されていない真実の教えであることを明白に示したのです。そして、私は強くイスラームと結ばれるようになりました。」

非常に残念なことに、今日でも西側世界には、ムスリムに対して「常軌を逸している」「頭がおかしい」「悪魔を崇拝している」「無宗教」といった言葉をぶつけて迫害するキリスト教徒がいます。キリスト教徒の子どもは、神父たちから誤った知識を植え付けられ、考えを方向づけられてしまいます。また、イスラームには現代文明にそぐわないことが多く含まれているとも主張します。しかし、現代文明に最も適した教えはイスラームなのです。この点については『イスラームとキリスト教』で詳細に取り上げ、このような誤った考えに対する答えを示しました。さらに、この部分を英語、フランス語、ドイツ語に訳して世界各国で発行し、神父たちによって与えられた誤った知識を正そうと努めてきました。そして、この活動がいかに正しく、必要なものであったかはすぐに実感することができました。これらの書籍が世界中に広まると、その反響がすぐに見られたのです。インドからの手紙では、キリスト教徒のインド人が、「この本を読んで真の教えがイスラームであることが分かりました。私はムスリムとなることを決めました」と記しています。アフリカの若者たちからも同様の手紙が多く来ています。イスラームの純粹さ、高潔さ、また、文明的、人間的なあり方について、真摯に考えることのできる人は誰でも、この教えに魅了されるでしょう。イスラームでは一切のプロパガンダが行われることもなく、何らかの組織が設けられることもないまま世界に広まりました。しかし、キリスト教では教えを広めるため、宣教師たちが所属するいろいろな組織によって、多額の費用をかけて多様な社会支援事業が行われてきました。それにもかかわらず、望んだ通りの成功は収めることができていません。

イスラームを敵視させるため、誤りや偏見を含んだ書籍が数多く出版され、キリスト教の布教のために多大な努力が払われてきましたが、世界ではムスリムの数が次第に増加しています。これに関する詳細は後述していきます。確かに、増加した数の中には、ムスリムの両親のもとに生まれてきた

者も含まれていることでしょう。しかし同時に、両親は別の宗教で、子どものときには別の宗教に基づく教育を受けたにもかかわらず、イスラームを受け入れた人々もいるのです。の中には、世界的に知られた外交官、政府関係者、研究者、科学者、作家、さらには宗教家も含まれています。彼らはイスラームについて十分に調べ、その偉大さに感嘆し、自発的にムスリムになったのです。他にも、ムスリムであるかないか公言をしていなくても、多くの世界的な著名人がイスラームに対して高い評価や敬意を示し、イスラームが正しい教えであることを発信してきました。まず先に、世界中から尊敬を集める科学者や哲学者、政治家たちが、アッラーの存在と唯一性、すべてはアッラーが創造されたということを感じることになったのです。ここでは、このような人々の言葉や考えを紹介していきます。

イスラームを受け入れた人々の中には、やむを得ない理由のため、あるいは利益や宣伝を目的とした場合も存在します。例えば、ムスリムの男性と結婚することを望む他宗教の女性や、あるいはインドの被差別階級のように、迫害された人権を取り戻すため、事前に十分理解を深めないままムスリムとなっている人もいるでしょう。しかし、高名な研究者や科学者、作家といった人々が、イスラームを長い間調べた後に受け入れているということは、特別な意味を物語っています。このような文化人が、なぜこれまでの教えに代わってイスラームを受け入れたのかという説明の中から、最も重要と思われる点をさまざまな文献からまとめ、以下に紹介しています。これらを読むことで、なぜイスラームがその他の教えよりも崇高であるのか、彼らから聞くことができるでしょう。ムスリムとして生まれ、ムスリムの中で暮らしてきた人々はむしろ、その崇高さに気付かないかもしれません。けれども、他の宗教を持ちながらイスラームを調べた人は、両者の間にある差異を十分に認識し、理解し、評価することができるのです。そして、本書を読んだ皆さんも、イスラームという自らの宗教の崇高さについて改めて認識し、アッラーに感謝することと思います。近年では、ハキーカトゥ出版の多くの書籍が多言語に訳され、インターネットを通じて世界中で読まれるようになりました。アメリカ、アフリカ、アジアの各地から寄せられる便りでは、イスラームのことをインターネットで学び、ムスリムとなったことについて

の感謝の言葉が記されていました。これらについて、つまり、外国人の視点から見て、なぜイスラームが他の教えよりも崇高であるのかということに関しては、第7章で要約して紹介していきます。

本書『イスラームとキリスト教』の追記となる本項も、イスラームの新たな知識を皆さんに提供し、イスラームが真の教えであること、そしてその偉大さを改めて示すものとなることと信じています。

地と天を創造し、木を生い茂らせ  
花を開かせるのは唯一なるアッラー

アッラーはどこにでもおられ、何をしようとご覧になり  
何を語ろうと聞いておられる  
アッラーは存在し、唯一偉大なり

我らはアッラーを愛し、その命令に従う  
毎日5回の祈りを捧げ、アッラーに背くことはない

信じる者は性格もよく、誰もが彼に満足する  
誰にも害を与えることなく、自らも平安の中にある

(オスマン帝国時代に学校で読誦されていた詩より)

## はじめに

人間は、アッラーによって創造されました。すべての人がアッラーのしもべです。アッラーは、ある一つの民族や人種のための、あるいは、この世界だけの主や創造主ということではなく、すべての人々にとって、万物にとっての主なのです。アッラーの位階からすれば、すべての人は平等であり、人々の間に差などありません。アッラーは、人間に身体とともに魂を与えられました。そして、人間が魂の面でも身体の面でも最も完成された形となり、また、正しい道を示すために預言者たちを遣わされました。この預言者たちの中でも、特に偉大な預言者が、アダム、ヌーフ、イブラーヒーム、ムーサー、イーサー、そしてムハンマドです。彼らが教える信仰の基本はすべて同一です。しかし、この中で最後の、そして最も完成されたものが、預言者ムハンマドが伝えたイスラームなのです。預言者ムハンマド以降は、もはや預言者が遣わされることはありません。なぜなら、彼がもたらした教えは完全であり、後世に修正されるべき不足がなく、人々がその教えを変化させてしまうことができないとアッラーによって告げられているからです。著名なドイツの劇作家で詩人のゴットホルト・エフライム・レッシングは、その劇曲『賢者ナータン』で、三つの宗教を三つの同じ形のサファイアの指輪にたとえています。劇中では、「三つの指輪のうちどれか一つだけが本物で、残りの二つは偽物ではないか」という疑心暗鬼が起こります。しかし、本当は三つすべてが本物だったのです。しかし、利害、損得、悪意、誤解、嫉妬、迷信、曲解といったさまざまな人間の性質のせいで、真実が見えなくなってしまうのです。つまり、ユダヤ教やキリスト教には、多くの誤った教義や思想が混入して元来の教えを損ない、真実を歪めてしまってきました。ただ、イスラームだけは本来の形のままであり続けました。その結果、この三つの教えを信じる人々が互いに対立するようになってしまったのです。このような状況はアッラーの思いに反するものです。なぜなら、先に述べたように、アッラーはすべての人々を真実の教えに導いているからです。アッラーの位階においては、どの民族に属していようとすべての人は平等です。すべての人々は「ウンマトゥ・ダアワ」と呼ばれ、イスラームを受け

入れると「ウンマトゥ・イジャーバートゥ」となります。ユダヤ教とキリスト教にあった本質を今に引き継いで、唯一、真実の教えであるのがイスラームなのです。

さて、現代社会において、物質主義へと走ってしまった人々に宗教について考えてもらうため、あるアメリカの出版物からの抜粋を次に紹介しましょう。これはロビンソン教授が記したものです。

— 我々は、オーラル・ロバーツ大学の教授や学生たちとともにイスラエルへと旅立った。同行していたのはこの大学の創立者であり、著名なカトリックの宗教家でもあったオーラル・ロバーツ氏で、訪問先のイスラエルの元首相、ベン・グリオン氏に聖書を贈ることになった。この聖書の冒頭には『律法』が掲載されていた。ロバーツ氏は元首相に対して、聖書の中で最も好きな部分をその場で読んでもらうよう頼んだ。ベン・グリオン氏は微笑んでこの求めに応じた。私たちは、彼の家の前にある小さな庭で、木陰に座っていた。皆が静まり返り、彼が何を言うのかじっと耳を澄ませていた。彼は聖書を開き、ばらばらとページをめくってから、次の部分を読み始めた。

「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」（創世記 1 章 27 節）

私は「やっと見つけたと思ったのに、このような文章だったのか」と失望した。てっきり彼が『律法』の中でも特に高尚な意味のある部分、例えば「天地創造」や「十戒」を読むものと思っていたのだ。そして顔をしかめた。このシーンを撮影していたテレビ局のカメラマンにもサインを送った。「無駄な努力だ。こんな言葉をテレビで流して世間に広める必要はない」と。

しかし、ベン・グリオン氏は、なぜこの文章を選んだのかについて、次のように熱っぽく語り始めた。「私たちはアメリカ人、ロシア人、イスラエル人、エジプト人である以前に、あるいは、キリスト教徒、イスラーム教徒、ユダヤ教徒である以前に、皆、ただアッラーによって創造された一人の男性であり、女性であったのです。これはすべての偉大なる教えが、私たちに教えようとしている最も大きな真実です。私たちはなぜこれを理解できず、互いに憎しみ合っているのでしょうか？ 皆で手を取り合い、皆がこの事実

を理解できるよう、アッラーに祈りましょう。」

私たちは皆、頭を垂れた。ロバーツ氏が皆を代表して「アーミーン」と言った。ベン・グリオン氏は本当に、最も素晴らしい一文を見つけたのだ。

イスラエルから戻るときも、私の頭の中ではずっとこの言葉が残っていた。私たち人間はすべて同じなのだ。アッラーのしもべなのだ。アッラーへと至る道はたった一つしかない。これはイブラーヒーム、ムーサー、イーサー、そして最後にムハンマドが伝えた信仰の道である。この道を歩む人は平安へと至る。人々は預言者たちの道から離れるという最大の過ちを犯し、道に迷ってしまっている。徳を失い、アッラーを忘れている。世界が平和と安泰に至るためには、人々は過ちを理解し、正しい道へと戻るべきなのだ。－

ロビンソン教授によるこの文章は、まさに真実を語っています。今日、多くの人々は教えが示した道を外れ、ただ物質的なものを追い求めるようになりました。残念なことに、そのような人々は物質が“無”であることを知らないのです。物質はいつか崩れ、消え去ることを宿命づけられています。一方、人において永遠なもの、それは魂です。魂は物質によって生まれたものではありません。魂を育む糧は、自身を含め、万物を無から創造されたアッラーに対する正しい信仰であり、アッラーに祈り、アッラーのしもべとして行動することです。今日、研究者や科学者、国家のリーダーたちも神の存在は信じていても、その信仰や行動において、考え方や思想を誤り、正しい道から外れてしまっています。この部分に関しては、アメリカの脳外科医の権威であるホワイト教授が興味深いことを語っています。

ホワイト教授はさまざまな学位を取得する一方、新たな手術法の開発によって国際的に知られた脳外科医です。また、クリーブランド大学の教授のかたわら、同市のメトロポリタン病院の脳外科長も務めています。彼は次のように語りました。

－ 手術に来たのは6歳のかわいらしい少女だった。とても美しく、元気で賢く、楽しい子どもだった。しかし、診察の結果、脳に大きな腫瘍があることが判明した。この腫瘍には嚢胞が癒着しとても大きくなっていた。私は

内部に水がたまっていた部分から手術を始めることにした。しかし、恐ろしいことに、半円形の嚢胞が付いた腫瘍が突然縮み、その表面の大きな血管が破裂してしまったのだ。手術台の上には血が噴き出した。川のように流れる血を止めようと、私は仲間たちとともに最善を尽くしていた。それでも血は止められず、もはやこの戦いに負けるのではないかと思われた。少女は私たちの手の中で死にかけていた。私たちを大きな悲しみが包んでいた。私は破れた血管に綿を押し付けて止血を続けた。血は止まりそうだったが手をどけることはできないでいた。なぜなら、手をどければ再び出血が起こること、そして今度出血すれば、もう出来ることは何もないことを知っていたからである。子どもに輸血が開始された。私の指は依然として綿を抑えていた。この時ほど、どれほど自分が弱く、無力であるか感じたことはない。自分のような無力な人間が、なぜ少女の脳の腫瘍を切って取り出すといった大それたことをしようと思ったのだろうか。どうして、これほど重大なことに責任が持てると思ったのだろうか。「脳」というこの素晴らしい器官は、人に人格を与え、知性、記憶、興奮、欲求、歓喜、苦痛、思考、想像といったさまざまな力を与える。ただ神のみが創造できるこの素晴らしい作品に、私たちのような無力な人間がどうして手を出せると思ったのだろうか。我々はこの小さな器官を脳と呼ぶが、これは実際には目の前に横たわる少女そのものなのだ。

30分が過ぎた。手術室には完全な静寂があった。皆の血圧はこれ以上ないほどに上がっていた。私も皆も、手を放せばまた川のように血が流れること、それが子どもに死をもたらすことを知っていた。そう、この時に私は神に祈り始めた。助けを求めたのだ。「神よ、私の指に力を与えてください。もう出血しませんように」と願った。すると、私の心を大きなやすらぎが包んだ。なぜなら、もはや神を信頼し、神にすべてを委ねていたからである。落ち着いて、もう指を離しても大丈夫で、もはや血は流れないと信じることができた。神の存在を私の魂すべてで感じていた。私はゆっくりと指を離れた。出血は収まっていた。

その後の手術は順調だった。手術は4時間半かかり、一週間は目が離せなかったが、彼女が少しずつ回復していくのを目にして、どれほど嬉しかった

たことだろう。今、彼女は10歳になっているはずだ。健康で、明るく幸せに成長していることと思う。

また、1974年に脳出血を起こした子どもを診察したときのことも印象深い。ちょうど脳の中央に腫瘍があり、しかも出血を起こし始め、膿も出ていた。状態は非常に悪く、もはや絶望的とも言えた。私たちは開頭手術を行って脳の両側にチューブを付け、抗生物質で脳の洗浄を始めた。これは、私が新たに開発した手法だった。高熱を出している子どもに人工呼吸器を装着し、冷たい布団をかけた。そして同時に脳を洗浄し続けていたのである。このような絶望的な状況は何週間も続いた。私は絶えず祈り、神への救いを求めていた。そのときには、この子どもとその両親のためだけではなく、何週間も私とともに働き、重大な責任を負っている仲間たちにも力と強さが与えられるよう神に懇願していた。

ついに、神のご加護があった。完全に絶望的と思われていたこの手術は、成功という結果を出したのである。子どもは意識を取り戻した。仲間たちも「新しい手術法が最高の成果をもたらした」と喜んでいて。彼らは、これらのことを私が行った成果だと考えていたのだ。しかし、私にはそうは思えなかった。どれほど努力を重ねても、どれほど新たな方法を生み出しても、どれほど最新の手法を取り入れても、このような手術の成功はただ神のご加護によってのみ可能となる。これまで、無数に行ってきた手術により、私は常にそのことを心の底で感じていたのだ。いかに技術が進歩しようとも、脳の手術の結果は、その他のすべての事象と同様に、神のお力によるものであり、そのご加護によってのみ成功が得られる。

長年にわたって脳手術に携わってきたが、私は人間の脳というものを前にして感情の高まりを禁じ得ない。この途方もない作品の神秘を解き明かすことなど到底不可能であり、これを創造した力がどれほどまでに偉大なものかが分かるのだ。そして、脳を見るたびに、神の存在をひしひしと感じるのである。今日、人間が作り出す最高性能のコンピュータでさえ、この小さな脳の前には、ただの子どもだましのおもちゃのようなものだ。

私は脳というものが、人の魂を秘めた箱のようなものであると信じている。我々医師がこの箱の周りを手術するときは、宗教儀式を行っているとも

言える。私が思うには、脳の手術とは、礼拝行為のような宗教儀式であり、施術者は単に技術や知識といった専門性を持っているだけでは不十分であろう。神の存在を信じ、手術の成功のために神のご加護と慈悲を求めることが不可欠なのである。

人が死ぬと、脳という箱の中に秘められていた魂はどうなるのだろうか。それまでであった肉体との結び付きがなくなっても、当然魂が死んだ訳ではない。では、どこへ行ったのだろうか。魂がどこに向かうのか、どこに留まるのかということについては、一介の医師に何ら推測できることではない。というのも、物的知識だけでは答えを出すことができないからである。この部分で私たちに役立つ指標は宗教書である。私は脳や魂について考えるたびに、人々は物的事象を脇に置いて心を宗教と結び付け、宗教書の伝えるところを信じる必要があると強く思うのである。－

このように、世界的に著名な外科医であっても、アッラーの存在を信じ、アッラーのお力添えなしには何もできないということを誠実に語っています。

次に、ある科学者の話を紹介しましょう。

かの有名なアメリカの科学者、エジソンのことは誰もが知っていることでしょう。数多くの発明を行い、また、世界初の電球を世に送り、あらゆる場所を明るく照らしたこの有名な発明家について、彼の最も親しい同僚だったマーティン・アンドレ・ロソノフが、数年前に刊行した本で次のように語っています。

－ ある日、私が実験室に行くと、エジソンは我を忘れ、微動だにせず何かの容器をじっと見つめていた。その顔には、大変な驚嘆、畏怖、尊敬、賞賛といった表情が浮かんでいた。私がすぐそばに来るまで、来たことすら気付いていなかった。私がそばにいることに気が付くと、手にしていた容器を見せた。それは水銀で満たされていた。彼は「これを見ろ」と言った。「何と素晴らしい！ 水銀は奇跡だと思わないか？」 私は「確かに、水銀は驚く

べき物質だ」と答えた。すると、エジソンは声を震わせ、ささやくようにこうつぶやいた。「水銀を見ると、これを創った方の偉大さに畏れを感じるよ。なんとという繊細さが備わっているのだ。考えただけで気が遠くなる。」そして、再び私に向かって続けました。「世界中のあらゆる人が私に驚いているかもしれない。これまでのたくさんの発明や発見を、奇跡だとか成功だと思っているのだ。まるで私人間ではないかのように。しかし、それは大きな間違いだ。私など何の価値もない一人の人間だ。私が発見したことは、それまでもこの世界に存在していたものだ。ただ、それまで人々が目にしなかっただけの大きな奇跡のほんの一端を明らかにしたに過ぎない。それを“発明したのは私だ”などと言ったら、それこそ史上最大の嘘つきの愚か者だ。人間は何もすることなどできない、ただの無力な被造物だ。それでも、少しばかり会話ができて、いくらか考えることができる。だから、考えることができるなら、そういったうぬぼれや思い上がりを抱くことはない。逆にどれほど無力なのか気が付くというものだ。私が天才などとはあり得ない。真の英知、真の創造者は神だ。」彼は手を天に掲げてそう語ったのです。－

このように、科学者たちもアッラーの存在を信じ、その教えにしっかりと繋がっています。単に物質的な豊かさだけを追い求める人々は、しばしば悩みに答えを見出せず、失望感に苛まれます。これは彼らの魂の空虚感から生じるものです。人間の魂も肉体と同様、糧を必要とします。そして、それは信仰によってのみ得られるものです。アッラーの道を示しているのはイスラームのみです。アッラーを否定する人ですら、いつか必ずそれを必要とすることになるのです。

有名なロシアの作家、アレクサンドル・イサーエヴィチ・ソルジェニーツィンは、アメリカに移住したとき、これでやっと辛い苦しみからも、魂の苦悩からも、機械のように生きる生活からも救われると思っていたそうです。しかしある時、大学にアメリカ人の若者を集め、次のように述べました。「私はここに来れば、とても幸福になれると思っていました。けれども、ここでもやはり大きな虚しさを感じています。というのも、皆さんが物質的な豊かさへの虜になっているからです。そう、ここには確かに自由がありま

す。皆が自分のやりたいことをすることができます。それでも人々は物質的な豊かさを追い求め、精神はまったく空虚になってしまっています。しかし、人間を真の意味で人間とするのは、成熟した清らかな魂に他なりません。皆さんに次のことをお勧めしたいと思います。自らの魂を磨き、よりよいものとなるよう努めてほしいのです。その時にこそ、今、この国にあって、皆さんを悲しませるような醜悪なことが消え失せていくでしょう。宗教についてよく考えてほしい。宗教の教えとは、人間の魂の糧なのです。教えを守る人ならば、あらゆる面で皆さんにとって最良の助けとなってくれるでしょう。なぜなら、彼らは神に対する畏れ故に、正しい道を踏み外さないからです。この国の最強の警察であれ、国民一人ひとりを朝晩見張り続けることはできません。人を悪事から遠ざけるものは、警察ではなく、その人が感じる神への畏れなのです。」

先にも述べたように、人間の魂の糧は宗教です。現時点で存在する宗教のうち、最も正しく、最も新しく、世界中の条件に最も適っているのはイスラームです。そう、この本では、さまざまな宗教や宗教書を調べた上で、一切強制されることなく、完全に自らの意志でムスリムとなることを決めた文化人たちについて、なぜ宗教を変えたのか、なぜムスリムとなる決心をしたのかを彼ら自身の言葉で紹介していきます。

また、ムスリムとなった人以外にも、アッラーの存在を信じ、イスラームの崇高さを驚きをもって見る著名人も多くいます。そのような人々については第2章で言及していますが、そこで紹介できなかった、ナポレオン、カーライル教授、レナン教授、インドの英雄ガンジーについてもここで取り上げ、彼らがアッラーの存在についてどう考え、イスラームに対してどのような敬意を持っていたのか述べていきます。さらに、ラマルティーヌによる預言者ムハンマドへの言葉も紹介していきます。

これらはすべて、人間にとっての最大のニーズは宗教である、ということを示しています。自らの宗教を信じることができず、真実の教えたるイスラームについて学ぶ機会を見出せない人の魂はどこか空虚で、このような人々は欺瞞者たちが示す誤った未来にしがみつこうとしてしまいます。な

ぜなら、人は必然的に、自分よりも優れた力を持つ存在を信じ、その存在に自らを結び付けようとするからです。いかなる先進国の人ですら、このニーズを満たそうと、数多くの迷信や異常な教えに引き込まれてしまいました。1978年11月17日には、ジム・ジョーンズという神父がアメリカで設立した「真実の教え」というカルト教団の信徒900人が、南米ガイアナのジョーンズタウンと名付けられたキャンプに連行され、そこでこの神父によって集団自殺を命じられるという事件が起きました。イタリアでも、常軌を逸したある神父を信じてしまった両親が、「子どもたちを殺すのです。私が祈ればより良くなって蘇るだろう」という言葉に従って自らの手で子どもを殺害してしまい、復活しないとってパニックに陥るとい事件もありました。

このように正しい道から外れてしまった人々が、もし、この後で紹介するムスリムとなった人々のようにイスラームのことを学んでいたならば、彼らが求めていたものをそこに見出すことができたことでしょう。そして、その言葉そのものが「平安、平穩、アッラーへの帰依」を意味するイスラームは、彼らが求めた心のやすらぎを与えていたことでしょう。

しかし、残念ながら私たちムスリムは、ダイヤモンドのように清らかなこの教えについて、望まれるような形で世界に向けて説明できずにいます。これは、私たち自身が、まだ自らの教えに完全には結び付くことができず、その命ずるところに完全に従うことができていないという結果でもあるのです。イスラームは肉体と魂の清らかさを命じます。魂の清らかさは、まずアッラーを、そして最後の使徒であるムハンマドを通して賜わった命令や禁忌を信じ、できる限りこれらに従うことによって生まれます。魂が清められているかどうかは、絶対に嘘をつかないこと、誰かを騙したりしないこと、常に正直であること、誤った教えを信じないこと、他の人々を助けること、アッラーの命令に従うことなどから明らかになります。ムスリム一人ひとりが望まれるのは、そのような状態です。だから、イスラームを伝えようとする人は、まず自分自身が模範的なムスリムとなる必要があります。私たち自身がこのように正しく、誠実な行動をとることで、他の宗教の人々が私たちを見て、そのあり方に驚き、イスラームについて知ろうとするはずで

す。新たにムスリムになった人々に、「なぜあなたはムスリムになったのですか？」という質問をすると、彼らは真のムスリムやその生き方に触れてムスリムになる決意をしていることが分かります。彼らは、私たちがイスラームを伝え、広めるために努力しなければならないこと、そして、そのためにもイスラームの命ずることをしっかりと守り、皆の規範となるようなムスリムでなければならないことを思い起こさせてくれます。私たちにはありとあらゆる不足点があり、脆弱な力しかないにもかかわらず、それでもイスラームは世界中に広まっています。1954年には世界の人口は24億人でした。1978年には30億人になっています。この1954年から1978年の間に、キリスト教徒は1.5億人、ムスリムは2.2億人増加しています。国際的な統計（世界年鑑）によると、1978年時点では全世界で、仏教徒及びゾロアスター教徒が17億人、キリスト教徒（カトリック、プロテスタント、正教徒）が9.5億人、ユダヤ教徒が1千万人、ムスリムが5.38億人となっています。また、『タイム』誌でも1979年4月号でイスラームについて取り上げています。これによると、一般的な統計では不十分で、実際のムスリムは7.5億人いるとしています。キリスト教徒が統計を取っているため、意図的にムスリムの数を少なくしているというのです。

私たちが真のムスリムとしてふさわしい行動をとれば、ムスリムの数はさらに増えていくことでしょう。この後に紹介していく新たにムスリムになった人々が述べているように、ムスリムの数が増えれば増えるだけ、誤った信仰や教えは減り、人類が求める平和とやすらぎが実現されていくのです。

## - 8 -

## イスラームを賞賛しアッラーの存在を信じる ムスリム以外の著名人の言葉

ここでは、アッラーを信じ、イスラームに驚嘆の念を抱いたムスリム以外の多くの著名人の中から、何人かについて彼らがどのように考えていたのかを簡潔に紹介していきます。同様の考えを抱いた人の数は非常に多いため、ここでは特に有名な人々だけしか選ばざるを得ませんでした。その中には、誰もがよく知っている偉大な軍人、政治家、科学者が含まれています。さあ、彼らの言葉によく耳を傾けてみてください。

### ナポレオン

歴史的に名を馳せた、軍事的天才で政治家でもあった皇帝ナポレオン 1 世 (1796-1821) は、1798 年に遠征したエジプトでイスラームの偉大さや公正さに衝撃を受け、一時はムスリムになることを考えていたとされています。以下は、クリスティヤン・シェルフィ著『ボナパルトとイスラーム』からの引用です。

— ナポレオンは語っている。「モーゼは神の存在とその唯一性を民に示した。同様に、イエス・キリストはローマ世界に。しかし、ムハンマドは全世界にこれを示した。アラブ世界はかつて完全なる偶像崇拜の中にあった。はるか昔、アブラハム、イシュマエル、モーゼ、そしてイエスが伝えた神の存在を、ムハンマドはイエスの 6 世紀後にアラブ人に伝えた。一方、アリア人やその他の人々は、父と子と精霊という誰にも理解不能な教えを伝えようと東洋の平穏を乱していた。そう、ムハンマドは彼らに正しい道を示したのだ。神には父も子もおらず、このような複数の神を崇拝することは、偶像崇拜から残存した誤った習慣であることを説いていたのである。」—

また、ナポレオンはこうも述べています。「私は、全世界の賢人や学者を一堂に会し、統一された統治組織を構築できる日が来るだろうと考えてい

る。この組織は（クルアーンで記された事柄に基づいて）統治できるはずだ。クルアーンに書かれていることの正しさを私は信じている。これは人類を幸福へと導くだろう。」

## カーライル教授

スコットランドのトーマス・カーライル教授（1795～1881）は、最も優れた学者の一人として世界中に知られています。14歳で大学に入学して法学、文学、歴史を修め、ドイツ語や東洋の言語も学んでいます。また、ドイツの作家・ゲーテとも文通し、彼を訪ねたときにはイスラームについての考えも伝えています。また、プロシア皇帝からはプール・ル・メリット勲章を授与されたほか、エディンバラ大学では学長に選出されました。カーライルは『黒人問題に関する時論』、『フランス革命史』、『14 - 15世紀のドイツ文学』、『ゲーテとその死』、『近代労働者』、『英雄崇拜論』、『カーライル選集』等の著書を残しています。

次は彼の著作からの引用です。

「アラブ人—預言者ムハンマドとその世紀；ムハンマド以前、たとえアラブ人が住む土地で大きな炎が上がったとしても、ただ乾いた砂の上で消え去るのみで何の痕跡も残さなかったことだろう。しかし、預言者ムハンマドが現れ、乾いた砂で満ちたこの砂漠はあたかも火薬庫となった。デリーからグラナダに至るすべての場所が、突如、天まで届く炎となった。この偉大なる人物はまさに雷光のようで、彼を取り巻く卓越した人々もまた、炎を得た燃料となったのだ。」

また、別の著書では次のように記しています。

「クルアーンを読めば、それが単なる文学作品ではないと感じる。クルアーンは、心から心へと影響を与えるものである。他のいかなる作品でも、この雄大な作品と比べれば見劣りしてしまう。クルアーンで最も印象的な特徴は、それが正しく、完全で、誠実な指針であるということだ。私が思うに、クルアーンの最大の徳はそこにある。この徳は、その他のあらゆる徳へと道を拓く。」

さらに、ある旅行記では次のように記しています。

「ドイツでは、親友ゲーテにイスラームに関する知識や私個人の考えを伝えた。彼は注意深く私の話を聞いていた。そして話が終わると、もしイスラームというものがあるのなら、我々は皆、イスラーム教徒だ、と言った。」

## マハトマ・ガンジー

ガンジー（1869－1948）は、西インドの有力なキリスト教一族の出身でした。父はポールバンダルという町の高位な神父で、非常に裕福な家庭でした。ガンジーは、このポールバンダルで生まれ、高校での教育をイギリスで受けた後、インドへと戻りました。その後、1893年には南アフリカへと渡り、ガンジーはそこでインド人が苛酷な条件のもとで働かされていること、非道な扱いを受けていることを目にし、彼らがよりよい権利を得られるよう活動することを決心します。自らをインド人のために捧げ、南アフリカ政府に対してインド人の権利保護を訴えた際には、逮捕・投獄もされています。それでも活動を断念することなく1914年までアフリカに留まりましたが、ついに高給を得ていた職も辞し、活動の本格化に向けて再びインドへと戻ります。そして、1906年にムスリムによって設立されたインド・ムスリム同盟とともに、インドの独立のための活動を開始します。自らの財産も、父親の財産もすべてこの活動のために費やしました。

1858年の争乱に続いてイギリス人が再び迫害を進めようとしていることを耳にしたガンジーは、ムスリムと共同し、すべての仲間たちを国の事業でストライキさせるといふ、静かなる抵抗、非暴力・不服従運動を行うことに成功します。ただ白い布だけを巻いた姿で、一緒に連れたヤギの乳を口にしながら、非暴力の抵抗を続けました。イギリス人ははじめ嘲笑していました。しかし、自らの思想を心から信じ、自らの国のためにすべてを投げ出す覚悟をした、このガンジーによる非暴力の抵抗に全インド人が従っていくこととなり、やがて脅威に感じるようになっていきます。ガンジーを投獄しても何も変わることはありませんでした。ついに彼の尽力はインド独立という形で実を結ぶこととなります。そして、インドの人々は“祝福された”という意味の「マハトマ」という称号をガンジーに贈ります。

ガンジーもまた、イスラームとクルアーンを熱心に学び、イスラームに感銘を受けた人物の一人です。そのことを次のように語っています。

「イスラーム教徒は、最も尊大になりがちな勝利の日ですら、狂信的になることはない。イスラームは、世界を創造された方、そしてその作品を称えることを命じている。恐るべき西洋の闇の中、東方にあって輝きを放っている。眩いばかりのイスラームという星は、罪多き世界に光をもたらし、平穏とやすらぎをもたらす。イスラームは決して偽りの教えではない。もしインド人が敬意をもってこの教えを学ぶなら、私と同じくイスラームを愛することになるだろう。私は、イスラームの預言者やその近い人々がどのように生きたのかということを書いた本を読んだ。それは非常に興味深いものであった。読み終えたときには、このような本がもっと多く出ていないことを残念に思ったものだ。イスラームの急速な発展は、決して剣によるものではなかったということが私の結論である。逆に、何にもまして、慎み深く論理的であること、また、預言者の謙虚さや約束を忠実に守る姿勢、近親者や入信者に対する限りない誠実さにより、イスラームは多くの人々に喜びをもって受け入れられたのだ。

イスラームは聖職者という存在を否定する。つまり、イスラームでは神としもべとの間を取り持つ者は存在しないのだ。イスラームでは当初から、社会が公正であるべきことを教えている。創造者と被創造者との間に、何か別の存在などはない。クルアーンやその解釈書、イスラーム学者の書物を読む者は誰であれ、そこからアッラーの命令を学び、アッラーに従う。この意味で、アッラーとの間に何の障壁もないのだ。また、キリスト教では過去多くの問題があり、さまざまな変革が加えられる必要があったのに対し、イスラームでは最初期のあり方から一切手が増えられていない。キリスト教には民主的な精神がなくなってしまった。だから、その教えに民主的な形を当てはめようと、キリスト教徒は民族意識を高めながら、教えを変容させる必要が生じたのだ。」

## ジョゼフ・エルネスト・ルナン教授

次にフランスの思想家を紹介しましょう。ジョゼフ・エルネスト・ルナンは1823年に、フランス・トレギエで誕生しました。父親は船長でしたが、彼が5歳のときに亡くなってしまい、母と姉のもとで育てられました。母親は彼が聖職者になることを願って神学校に入学させ、そこで厳しい神学教育を受けることになります。彼は東方の言語に強い関心があり、アラビア語、ヘブライ語、シリア語も学びました。さらに、大学へと進んで哲学も修めることとなります。やがて、ドイツ哲学や東方文学を熱心に学ぶにつれ、キリスト教には多くの欠陥があることに気付くようになります。1848年に25歳で大学を終えると、キリスト教に対して異議を唱え、その考えを『科学の未来』という著作にまとめました。しかし、この著作はキリスト教に異を唱えていたため、どの出版社も発行を躊躇し、42年後の1890年になってようやく日の目を見ることとなりました。

ルナンは、何よりもまず、預言者イーサーが神の息子でないことを主張しました。ベルサイユ大学の哲学教授に就任して以降、この考えを公表し始めるようになっていきます。しかし、最も大きな波紋を呼んだのは、コレージュ・ド・フランスのヘブライ語教授に就任したときのことでした。勇敢にも最初の講義で、「イエスは尊敬すべき、比類なき人間である。しかし決して神の息子ではない」という発言をしたのです。この言葉は、まるで爆撃のような影響を与えました。ローマ法王をはじめとしたあらゆるカトリック教徒が抗議し、ローマ法王がルナンの破門を示唆したことから、フランス政府も彼の退職を余儀なくされました。しかし、ルナンのこの発言は全世界に影響を及ぼします。多くの賛同者が現れたのです。その後、『宗教史に関する考察』、『批判と道徳に関する研究』、『哲学対話』、『イエス伝』といった著作を発表し、大きな功績を残しました。これらにより、フランスの学会はルナンの復権を認め、フランス政府も彼を旧職に招聘して、コレージュ・ド・フランスの学長に就任することとなります。

ルナンはその著作『イエス伝』において、イエスを一人の人間として取り上げました。そして、その考えについて次のように述べています。「預言者

であるイエスもまた、我々と同じく人間である。母はマリアであり、父はヨセフという大工と婚約していた。イエスはまだほんの子どもの頃から、学者たちを驚かせるような発言をする比類なき人物だった。神は彼を預言者としてふさわしいとみなし、彼に任務を与えられたのである。イエス自身は、決して“私は神の子である”とは言わなかった。このような発言は冒瀆であり、神父たちによって作り上げられたものに過ぎない。」

カトリックの神父たちとルナンとの闘争は長く続きました。カトリック界はルナンを無宗教者として告発し、ルナンもまた彼らの偽善や欺瞞を訴えました。ルナンは、「神は唯一であり、イエスを人間たる預言者であることを認める教えこそが真のキリスト教である」と訴え続けたのです。彼は自分が死んだ時には、宗教的な儀式を執り行わないよう、また、葬儀には司祭を加わらせないよう遺言を遺していました。1892年に彼が亡くなると、遺言どおり、葬儀には彼を愛する友人たち、彼の思想に共鳴する人々だけが集いました。

## アルフォンス・ド・ラマルティエヌ

世界的に有名なフランスの文学者、そして政治家であるラマルティエヌ（1790～1869）は、アメリカやヨーロッパ各地を訪れています。また、スルタン・アブドゥルメジッド・ハンの時代のトルコも訪ね、皇帝から大いなる友好の印としてアイドゥン県にあった農園を贈られています。さて、彼の『トルコ史』という著書で、預言者ムハンマドについてどのように述べられているのか見てみましょう。

「ムハンマドは、果たして偽りの預言者だったのか？ 否、彼がもたらした結果やその歴史を学べば、そのようなことは考えられまい。偽りの預言者であるということは、偽善であるということである。偽りに正義の力が存在しないように、偽善に信仰させる力などないはずである。

物理学において、何らかの物体を投げた場合、それが到達する距離は投げられる力に基づく。同様に、精神における閃きの力も、それが生み出すものによって計ることができる。これほどに多くのものをもたらし、これほどに遠くまで広がり、これほどに長い期間同じ力を持ち続ける教えは、偽りでは不可

能である。預言者ムハンマドの生涯やその努力、あるいは、祖国にはびこる迷信や偶像崇拜に勇敢に立ち向かって打破したこと、偶像を崇拝する部族の怒りに勇敢に対峙したこと、13年間にわたるマッカでの同郷者からのさまざまな侮辱や迫害に耐えたこと、マディーナへと移住したこと、絶えず人々に説法や忠言を行ったこと、非常に強大な敵軍に聖戦を行って革新的な勝利を収めたこと、これ以上ないほどに困難な時期でも比類なき信頼感を保っていたこと、勝利の日においてすら忍耐や神への絶対的な恭順を示したこと、根気強く自らの言葉を認めてもらえるよう努めたこと、限りなく神への崇拝行為をしていたこと、アッラーと神聖な対話を行ったこと、彼の死後にも名誉や称賛や勝利が失われることがなかったこと…。これらを考えれば、決して彼が偽りの預言者ではなかったことが、それどころか、大いなる信仰を持っていたことが自ずと示されるのである。

この信仰、つまり彼の神に対する信頼は、次の二つの信条をもたらすこととなったと言ってよい。第一は、「唯一で永遠の存在であるアッラーの存在」、第二は「偶像は神ではない」ということである。まず、第一の信条により、それまでアラブ人たちが知らなかった、唯一であるアッラーという存在を伝えている。そして、第二の信条により、それまで人々が神であると思っていた偶像をその手から取り払ったのである。例えるなら、剣の一振りでも偽りの神、偶像を破壊し、代わりに唯一の存在であるアッラーへの信仰を彼らに教えたのだ。

哲学者であり、説法者であり、立法者であり、勇敢な人でもあった。あるいは、人々を魅了し、信仰の基盤を示し、20の大帝国と1つのイスラーム国家、そして文明をも作り出した人物。そう、それが預言者ムハンマドに他ならない。

もし人の偉大さについて測ることのできる秤があったとして、彼よりも偉大な人物が果たしているものだろうか。」

救いはあなたからもたらされる、アッラーよ  
理性が奪われる場所へと私はやって来た  
祈りを受け入れ、どうか拒まずに

心がちぎれる場所へと私はやって来た

愛は常に嘆きとともにあり

私の涙は血と混ざる

真珠や珊瑚となった土や石

鉱石がある場所へと私はやって来た

山頂には雲が生まれ

私の胸には稲妻が走る

崇高な天の第6層から一本の檜が

伸びて揺れる場所へと私はやって来た

ヒヤシンスの訴えは檜の枝と

ナイチンゲールの熱情は春のバラと

全てを司る神の言葉とともに愛を捧げる

心が痛む場所へと私はやって来た

あなたの眼差しを得られていたなら

あなたを崇拜する地の尊さを私は知らないでいた

魂の世界から、太陽と月の

光が照らす場所へと私はやって来た

-----

アスタグフルッラー、アスタグフルッラー、アスタグフルッラー

(アッラーが我々の罪を御赦しくだしますように)

兄弟たちよ、来るのです、そしてあなたも語りなさい、ここに救いの道がある

知性に従うのです、そしてシャイターンには従ってはならない、深く悔悟を

行うのです

ここに地獄の炎を消す薬がある

## - 9 -

## イスラームを選んだ人々

他の宗教からイスラームを受け入れた、さまざまな国籍、民族、職業で構成される42名の方に対し、友人・知人や雑誌社などが「なぜあなたはムスリムになったのか」、「イスラームで最も気に入った点は何か」といった質問をしています。そして、彼らはそのような問いに対して、非常に明白、誠実に答えを出しています。彼らは長い時間考え、イスラームについて慎重に学んだ上でムスリムとなる決断をしているのです。彼らの回答は一つ一つが貴重なレポートともいえるべきもので、いろいろな書籍や雑誌から引用し、トルコ語に訳すことにしました。彼らの答えからは数多くの教訓を得ることができ、皆さんも改めてイスラームがいかに崇高であるかを心から感じることができると思います。

これらの手記は、国ごとにアルファベット順で紹介しています。

出身国としては、ドイツ、アメリカ、オーストリア、フランス、オランダ、イギリス、アイルランド、スイス、日本、カナダ、ハンガリー、マレーシア、ポーランド、スリランカ、ザンジバルと多岐にわたっています。

それでは、一人ずつ紹介していきましょう。

### 1. ムハンマド・アミン・ホボフン（ドイツ）

**ムハンマド・アミン・ホボフンは外交官、説法師です。また、社会問題に関する研究者であり、宗教家でもあります。**

ヨーロッパの人々は、なぜ自分たちの教えを放棄し、ムスリムとなるのだろうか。これには多くの理由があるが、その筆頭たるものは「真実」である。イスラームの根源的な信条は非常に論理的であり、公正で正確である。だから、宗教に真実や真理を求め、知性と学識がある者であれば、これを受け入れないということが不可能となる。例えば、イスラームでは、唯一たるアッ

ラーの存在を伝えている。人間の常識に訴えかけ、人が陥るさまざまな迷信への傾倒を取り除く。イスラームは、世界のあらゆる人々が、どの民族であろうとアッラーのしもべとしてすべてが互いに平等であり、互いに似通ったものであることを伝えている。我々ドイツ人は本来、アッラーが我々に力と強さを与え、魂を育んだ偉大なる創造主であることを信じている。アッラーという概念は我々にやすらぎを与えるものだ。しかし、キリスト教はこのような安心感を与えることができずにいる。唯一、イスラームのみが我々にアッラーの偉大さを教え、同時に、死後、人間の魂がどこに行くのかということについても我々に道を示している。イスラームは、この世界のことだけではなく、来世のことについても指針となっているのだ。来世でよりよく生きるために現世で何を行うべきか、という観点を実に明白且つ論理的に教えている。来世では、人々の現世での行為をアッラーが公正に尋問すると知ることが、現世において人々が正しく誠実な振る舞いをするよう導くことになる。だから、真のムスリムは、十分に考えることをせず、あるいは、価値あることと信じられぬままに何らかの行動をとったりはしない。こうして、この偉大な教えは、どのような警察組織でも成しえなかった程に、人々が常に正しい道にいられるよう管理できたのである。

ヨーロッパの人々がイスラームを選ぶもう一つの理由としては、礼拝行為の形が考えられる。礼拝は人が行わなければならないことを常に適切なタイミングで行うことを教え、断食は意志を強く持つことを教える。適切なタイミングで行わなければならないことを実行し、意志をコントロールすること以上に、人生で成功するために重要なことはあるものだろうか。成功者はこの二つを実現させたが故に成功者となったのである。

ここで、イスラームの最も素晴らしい点について触れておきたい。イスラームは、道徳や人間性について非常に論理的に教える一方、決して人々が不可能なことを強制してはいない。それどころか、人々がより良く、快適に生きていけるよう多くの可能性を与えている。アッラーは、人間が快適に幸福に生きることを望むため、人々が罪を犯さないよう命じている。ムスリムは、常に自分たちがアッラーの御前にあると感じるからこそ、罪を犯さないよう努めることになる。他の宗教にしる、ヨーロッパで制定されている法律

にしる、これ程までに効果的な規律は存在しない。

私は、世界のさまざまな場所、地域で外交官として、あるいは宣教師として滞在してきた。そして、さまざまな宗教や各国の法律を綿密に調べてきた。その結果として、宗教にしる、法律にしる、イスラームほどに正しく、また、完成されたものはなかったのである。社会主義は一見すると正しい概念のように見えるし、世界で主流となっている西洋的な民主主義に正しい部分は実存する。しかし、いずれも完全ではなかった。すべてに多くの欠陥があり、完全無欠なのはただイスラームのみである。人を高め得るものは、ヨーロッパが見出した社会思想ではなく、唯一イスラームのみだったのだ。だから、常識ある成熟した人間であれば、迷いなくイスラームを受け入れるはずであり、私もそれに倣ったのである。イスラームは外見の教えではなく、行動の教えである。イスラームとは、慈悲深く、赦したもう御方たるアッラーに自らを委ねるという意味である。これ以上に素晴らしいものがあるだろうか。

## 2. ハーミド・マルクス教授（ドイツ）

**マルクス教授は思想家、作家であり、ベルリンで『イスラーム評論』という雑誌も発行しています。**

私はまだ子どもだった頃にイスラームに興味を持ち、情報を集めるようになりました。生まれた町の図書館には、1750年に発行されたという古いクルアーンの翻訳があり、伝わるころでは、ゲーテもイスラームについて調べたときに同じ翻訳本を読んだようで、感嘆の言葉を残しているそうです。私はクルアーンを読むにつれ、非常に論理的であるだけでなく、人の魂へと働きかけるその言葉に大いに魅了されました。というのも、イスラームで定められた原理原則がいかにも正しく、いかにも効果的であるか、また、イスラームによって誉れを与えられた民族が短期間で完全な文明化を遂げたことが明確に示されていたからです。

やがて私は故郷を離れ、ベルリンへと来た時にムスリムの友人ができま

した。そして、イスラームセンターで開催されていた興味深い勉強会に彼らと一緒に参加することになり、センターの人々との交流を通じて、イスラームをさらに近くから学ぶようになりました。しばらく時間が経ってから、私は自分が求め、考えていた真実の教えがこれだったことを確信し、イスラームを受け入れることにしたのです。

イスラームにおいて、アッラーは唯一であり、また、唯一である創造者を信じることは最も神聖な信条です。論理的に受け入れがたく、信じることが不可能な信条は、イスラームにはありません。アッラー以外、一切の創造者は存在しないのです。また、イスラームには、近代科学に矛盾するような点も一切ありません。イスラームが命じ、推奨するすべての事柄は完全に論理的、且つ効果的です。イスラームには、他の宗教に見られるような、信仰と論理の間の乖離も存在しません。だから、私のような生涯を通じて自然科学に携わってきた人間が、これまでの研究成果に合致しない点が多々見受けられるようなさまざまな宗教ではなく、完全な一致をみたイスラームを選択したことは、ごく自然なことであったのです。

続いて、次のことも理由として加えたいと思います。他の宗教は、ただ精神的な部分だけに焦点を当てた、奇妙で無用な思想を多く含んでいます。これらは、実際の生活には何の関わりもないものです。しかしイスラームは、人が生きる上で何をすべきかを示す、実務的な教えです。イスラームが命じることは、来世のためだけではなく、現世においても正しい道を示しています。それでも、決して人の自由を制限してはいないのです。

私は、何年間にもわたって、一人のムスリムとしてこの教えを学び続けています。しかし、学ぶほどに、イスラームが最も完成されていることを再認識し、精神的なやすらぎを得ています。イスラームは、個人的生活と社会生活の間にある素晴らしい道で、これら二つの異なる生活に正しいあり方をもたらします。イスラームは完全に公正で、ひとえに人々にとって善いことを求める教えです。世界にどのような社会が出現することになろうとも、その美点はすべてイスラームに内在しているのです。

### 3. アーミナ・モスラー

私はなぜムスリムになったのでしょうか。

私は、息子が投げかけてくるたくさんの質問に答えることができずいました。「お母さん、なぜ神は三ついるの？」と聞かれたときも、私自身がそれを信じることができずいたため、息子を納得させるような答えを出すことはできませんでした。ついに、1928年、もうすっかり成長した息子が目に涙を浮かべ、私に訴えたのです。「お母さん、僕はイスラームについて調べてみたよ。彼らは唯一の神を信じている。僕は彼らの教えが正しいと思う。僕はムスリムになることに決めた。お母さんも僕と一緒にムスリムになってほしい」と懇願してきました。そこで、私もイスラームのことを学び始めることにし、ベルリン・モスクへと向かいました。モスクのイマームは私を快く迎え入れてくれ、イスラームの基礎を説明してくれました。説明が進むにつれて、その言葉がいかに正しく、論理的であるのかが理解できていきました。やがて、私も息子同様、イスラームが最も正しい教えであることが信じられるようになりました。まず何よりも、若い頃からどうしても理解できず、納得できなかった三位一体という概念をイスラームでは否定していました。イスラームを十分に学んだ後では、自分の罪を告白したり、神父のことを罪のない無垢な存在だとみなしたり、バプテスマすなわち洗礼やさまざまな儀式を行なったりすることが、いかに無意味であったかを理解し、これらすべてを否定し、自らムスリムとなる選択をしました。

私の親族は皆、熱心なキリスト教徒でした。私自身もカトリックの修道院で育ち、完全にキリスト教徒としての教育を受けてきました。けれども、結果としてこの宗教教育は私をアッラーへと導く真実の教えを選ぶ上で助けともなりました。なぜなら、この教育の中で私が教わった重要な内容は、キリスト教だけでなくイスラームでも存在するからです。私がイスラームを受け入れたことは、ごく自然な成り行きでした。

今や私は祖母になりました。孫はムスリムとして生まれ、私も幸福です。私は、アッラーが正しい道に入った者を常に導いて下さることを知っているのですから。

#### 4. ムハンマド・アレクサンダー・ラッセル・ウェブ（アメリカ）

ムハンマド・アレクサンダー・ラッセル・ウェブは、1846年にアメリカのハドソンで生まれました。ニューヨーク大学で学んだ後、コメディ作家としてまたたく間に高い支持を集めるようになります。一方、『セント・ジョセフ・ガゼット』、『ミズーリ・リパブリカン』という雑誌も発刊し、1887年には在フィリピンのアメリカ大使となりました。ムスリムになってからは、1916年に亡くなるまでイスラームの啓蒙のために人生を費やし、アメリカの機関の代表も務めました。

多くの人が私に尋ねてきました。大多数がキリスト教徒のアメリカで生まれ、常にキリスト教の神父たちの説話—正確に言うなら彼らの常軌を逸した話—を聞きながら育った私のような人間が、なぜ改宗してイスラームを選んだのか、と。だから、私も彼らに対して、なぜイスラームを人生の指針として選んだのかということについて、次のように簡単に説明してきたのです。そう、私はムスリムになりました！なぜなら、私が行ってきた探求の結果、人間の魂の求めに応えられるのは、イスラームが定める確固たる原理だけであることが分かったからです。私は子どもの頃から、キリスト教に違和感を覚えていました。20歳になってある程度の知恵が身に着いた頃には、教会のすべてが罪であるように感じ、奇妙で窮屈な教育に完全に反抗するようになっていきます。少しずつ教会から離れ、二度と戻ることはありませんでした。元来、私は研究したり調べたりすることが好きな性格です。あらゆる要因や目的を調べ、それに対する論理的な答えを求めました。しかし、修道士やキリスト教の宗教家たちの回答は、私を納得させてはくれませんでした。彼らは私のいろいろな質問に答える代わりに、「我々はそれを理解することはできない。これこそが神秘である」とか、「人間の知性では計り得ないものだ」といったような屁理屈を返してきたものです。そこで、私は東方の宗教を学んだり、有名な哲学者の著書を読んだりするようになりました。ミル、ロック、カント、ヘーゲル、フィヒテ、ハクスレイン等々…。このような哲学書では、原形質、原子や素粒子、核について言及されている

ことが常でした。しかし、「人の魂とは何か。死後どこに行くのか。この世界で魂はどのように発達するのか」といった点に関する考察は示されていませんでした。ところが、イスラームでは人体だけでなく魂についても関連しながら、私たちに示唆を与えているのです。つまり、私は道に迷った訳ではなく、キリスト教徒に腹を立てた訳でもなく、あるいは一時の思い込みで決めた訳でもなく、詳しく調べた上で、イスラームの偉大さ、崇高さ、誠実さ、そして完全性を十分理解してムスリムになったのです。

イスラームの基盤は、アッラーの存在とその唯一性を信じること、アッラーに自らを委ねて礼拝を行い、その恵みに感謝することです。イスラームでは、すべての人々が兄弟愛や敬意を持って善行を行うことを命じ、人々が魂と肉体、言葉と行動を清めることを求めます。イスラームは、これまで人類が出会った中で、最も完全で優れた、そして最後の教えなのです。

## 5. アルバイドナルド・ロックウェル（アメリカ）

イスラームの明快性、人々を惹きつけるモスクの魅力、信仰に対する真摯で愛情深い絆、全世界のムスリムが日に5回の決まった時刻に深い敬意と誠意をもって身を伏せる礼拝…。かなり以前から、これらのことは私に強い印象を与えていた。しかし、私がムスリムになるには、それでも不足だった。だから私はイスラームを十分に学び、多くの美德を見出した上でムスリムとなったのである。預言者ムハンマドは、人生に真摯に、また愛着をもって向き合うこと（これは預言者ムハンマド自身の生き方でもある）、周囲と相談しながら仕事を進めること、常に人々に慈愛をもって接すること、貧しい者を助けること、さらに当時の条件下では大きな文化的革命ともいえる女性の財産所有権についても、その簡潔かつ意義深い言葉をもって見事に説いている。預言者ムハンマドはまた、「アッラーを信頼しなさい。しかしラクダをつなぎ留めることを忘れてはならない」という言葉を残しているが、これは、アッラーのしもべたちが、まず行っておくべきことを行い、その上でアッラーを信頼して任せることが命じられていると教えているのである。つまり、イスラームとは、決してヨーロッパの人々が言っているような、何

もせずただすべてをアッラーに求める怠惰な教えではない。イスラームでは、誰もがまずは出来る限りのことを行い、それから結果をアッラーに委ねよう命じているのだ。

また、他宗教の信者に対するイスラームの公正なあり方も、私に大きな影響を与えたことの一つである。預言者ムハンマドは、ムスリムたちがキリスト教徒やユダヤ教徒にも善良に接するよう命じている。クルアーンは、預言者アダムから始まり、ムーサーやイーサーも預言者であることを認めている。これは、他の宗教では全く見ることができない誠実な姿勢であり、偉大な権利の尊重を示している。他宗教の信者が、イスラームに対して想像を絶するような酷い言葉を投げかける一方で、ムスリムは彼らにも誠実に対応するのだ。

イスラームの最も素晴らしい特性の一つとして、偶像崇拝を完全に排していることが挙げられよう。キリスト教では、いまだに絵画や像、象徴的な物体への崇拝が行われている。しかし、イスラームでこのようなことは存在しない。この点でも、イスラームが純真、清純であることが示されていよう。

アッラーの使徒である預言者ムハンマドの言葉や彼が教えた内容は、全く手を加えられることなく今日まで伝わっている。そして、アッラーの言葉であるクルアーンも、啓示されたままの形で守られ、預言者ムハンマドの時代の姿が失われることはなかった。つまり、キリスト教徒がイーサーの教えに対して行ってきたように、誤った考えを混入させるということはイスラームでは起こらなかったのである。

私がムスリムになる決心をさせた理由として最後に挙げるのは、イスラームに見出される堅実性と意志の力である。イスラームでは、魂だけでなく同時に肉体も清めることが命じられている。食事のときには、満腹になるまで胃を満たさない、一年のうち1ヶ月間は断食を行う、すべての行動を正しい基準のもとで実施する、何かを使うときは過不足なく費やすといったこともその一例である。現在のことだけでなく、将来の人々にとっても役立つ指針を最高の形で教えていと言えよう。私はほとんどのイスラーム国家を訪れている。イスタンブール、ダマスカス、エルサレム、カイロ、アルジェリア、モロッコ、そしてその他の町や国で、真のムスリムたちがこれらの

信条を尊重し、その結果、やすらぎの中に生きていることをこの目で見てきた。彼らは、アッラーの道を進むにあたり、装飾品や絵画、偶像、蠟燭の明かり、音楽といったものは必要としていなかった。ただ、アッラーのしもべであることを感じ、自らをアッラーに委ねることこそが、彼らの精神に大きな安心と喜びを与えていたのである。

イスラームに見出せる自由と平等も、私をこの教えに惹きつける理由の一つとなっている。ムスリムであれば、最も高い地位にある者でも、最も貧しい者であっても、アッラーを前にすべての人間は平等で、互いに兄弟であるとみなされる。モスクでは、ムスリムは一列に並んで礼拝を行う。高い地位の人のための、特別な場所などは用意されないのである。

また、ムスリムは、アッラーとしもべとの間には誰も介在しないことを信じている。イスラームにおいて、礼拝はアッラーとしもべとの間で直接的に行われるものである。罪を赦してもらうために、宗教家に頼んだりすることはない。つまり、自分の行動について責任を負うのは、本人をおいて他にいないのである。

ムスリムの間にみられる兄弟愛は、私の生涯において何度も助けとなってきた。この宗教的な兄弟愛も、私をイスラームへと導く要因の一つとなった。私がどこへ行こうとも、ムスリムの兄弟たちが私を助け、悲しみを分かち合ってくれるのだ。この世界で、たとえ民族や肌の色、政治的指向が違っていても、すべてのムスリムは互いに兄弟であり、互いを助けることが自らの務めであると理解している。

私がムスリムになったのは、このような理由からである。これ以上に素晴らしい、崇高な理由を他に見つけることはできない。

## 6. サラハッディン・ポート（アメリカ）

1920年、私はある医師を訪ねて診療所に行った際、ロンドンで発行された『オリエンタル・レビュー』、『アフリカン・タイムズ』という雑誌を待合室で見かけました。これらをばらばらとめくっていると、「ただ唯一なるアッラーが存在する」という言葉があり、私は衝撃を受けました。というのも、

キリスト教では三位一体の思想があり、私の理性ではこれを受け入れられなくても、信じていなければならないというジレンマがあったからです。ただ唯一なるアッラーが存在する、というこの言葉は、その時以来、私の脳裏から消えることがありませんでした。この神聖で崇高な信条は、ムスリムが心に刻んでいる極めて価値ある宝なのです。

私はこの時以降、イスラームへの関心が高まり、やがてムスリムになることを決断します。ムスリムになってから、サラハッディンという名前ももらいました。

イスラームが最も正しい教えであることを私は信じています。なぜなら、イスラームでは、アッラーには一切並ぶ者がなく、罪を赦すことができるのもアッラーのみであることを信条の基礎としているからです。この信条は自然界の法則にも合致しています。田畑、農場、村、町、学校、政府、国家など、あらゆる場面で責任者となる人は一人しかいません。二人の長がいることは、常に分裂の要因となるのです。

最も正しい教えがイスラームであると私が考えた第二の理由は、イスラーム以前にはまさに野蛮ともいうべき状況にあったアラブ人が、イスラームによってごく短時間で世界有数の文明的で強力な国家を築き、アラビアの砂漠からスペインに至るまで人類愛をもたらしたことです。ムスリムのアラブ人は、スペインをあっという間に不毛の地からバラの楽園へと変えたのです。実直な歴史家であるジョン・W・ドレイパー（1811～1882）は、『ヨーロッパの精神発展』という著書で、イスラームが文明形成に与えた多大な影響を説明しています。そこでは、「キリスト教徒の歴史家たちはイスラームに対する敵意から、この真実を隠そうとしている。ヨーロッパがイスラーム教徒にどれ程多くの借りを抱えているのか、どうしても認めることができずにいるのだ」と述べているのです。

ムスリムがスペインに進出した頃のスペインの状況について、ドレイパーの文章を紹介しましょう。

「当時のヨーロッパの人々は完全に野蛮人だった。キリスト教は彼らを救い出すことができず、ただ野蛮人とみなすことしかできなかった。彼らは不潔な環境で暮らし、頭は迷信に満ちていた。正常に考えるだけの感

覺を持ち合わせることもなかった。粗末な小屋で暮らし、もし小屋の床なり壁なりが藁で覆われていたならば、その家はかなり豊かであるということの表れだった。食べるものといえば、野生の豆やニンジンなどの野菜、いくらかの野草、そして木の皮だった。着ているのは、長持ちするからということで、毛もそのまま付いた動物の皮だったため、ひどい悪臭を放っていた。

ムスリムは彼らに、まず何よりも清潔であることを教えた。ムスリムは日に5回身体を清めていて、彼らも少なくとも一日に一度は身体を清めるようになった。次にムスリムたちは、悪臭を放ってシラミだらけになっているボロボロの動物の皮の服に代わって、美しい布と鮮やかな糸で織り上げられた自分たちの衣服を与えた。そして、料理の仕方、食事の仕方も教えた。さらには、スペインに家や宮殿、学校や病院に、大学まで作った。この大学は世界を照らす光の源となっていく。やがて各地に庭園が造られ、国中がバラの楽園に変貌した。野蛮だったヨーロッパの人々は驚嘆のうちにこの様子を目の当たりにしながら、少しずつ文明化していったのである。」

このように、ムスリムのアラブ人は野蛮だった人々に教育を行い、文明の精神を植えつけて、彼らを闇から、無知であることから、迷信から救うという偉業を成し遂げました。しかし、それはひとえにイスラームのおかげで可能となったことでした。なぜなら、イスラームは最も正しい教えであるがゆえに、アッラーは彼らが成功するよう手助けをしたからです。

アッラーのご命令にしたがって、預言者ムハンマドが伝え広めたイスラームと、アッラーの言葉であるクルアーンは、世界の歴史を変え、闇から救いました。もしイスラームが存在していなければ、人類は現在のような高度な文明には至っておらず、学問や科学も今日のレベルに到底届きませんでした。ムスリムにとって、学問は非常に重要です。預言者ムハンマドは、「中国に赴いてでも知を求めよ」という言葉を残しています。そう、私が喜びをもって受け入れたイスラームとは、このようなものなのです。

## 7. トーマス・ムハンマド・クライトン（アメリカ）

ちょうど昼になろうとしていた。暑さにげんやりしながら砂だらけの道

を歩いていると、突然、独特の調子の美しい声が耳に飛び込んできた。この声は、あたかも私の周りの空間を埋め尽くすかのようなようだった。生い茂った木々を抜けると、驚くような光景が目の前に現れて思わず目を疑った。そこでは、木製の小さな塔の上で、小ぎれいな服を着て白い帽子を頭に載せている年老いたアラブ人がアザーンを詠んでいた。我を忘れたようにアザーンを詠む姿は、まるでこの世界から完全に離れて、創造者である主の御前に至ったかのような様子だった。このように崇高な光景を前に、私たちはまるで催眠術をかけられたように立ち止まり、ゆっくりと地面に腰を下ろした。耳に入ってくる言葉の意味は分からなかったが、魂に受ける心地よさでもいふべき何か特別な感覚があった。後に、心地よく感じたその言葉の意味を知ることになる。「アッラーは偉大なり、アッラーの他に神はない。」突然、周囲にたくさんの人が現れた。それまで周りには誰もいなかったのにどこからともなく集まってきた。この人々の顔は敬意と愛情に満ち、ありとあらゆる年代や階層が見られた。衣服も、歩き方も、外見もそれぞれ異なっていた。しかし、皆の顔は一樣に真剣で、尊厳があり、そして慈しみが浮かんでいた。人の数は増え続け、その流れはもう途絶えることはないのではないかと思われた。やっと人々は集まり、靴やサンダルを脱いで列を作り始めた。その列には一切の区別が作られないことに私は驚いた。白人、黒人、黄色人種、金持ち、貧しい者、商人、役人、労働者…。民族や職位の差など無く隣同士に並び、一緒に礼拝を行っていた。

私は、これほど違いのある人々が、まるで兄弟のように並んでいることに驚いていた。初めてこの光景を目にしてから、今では3年が経っている。その間、人々を互いにこれほどまでに近しくさせる崇高な教えがどのようなものなのか、私は知識を求めようになった。イスラームについての知識を得て、私にはこの教えがすっかり身近なものとなった。ムスリムは唯一であるアッラーを信じ、キリスト教徒が説くように人は罪を背負って生まれてきた訳ではないと述べている。人間は、ただアッラーのしもべであり、アッラーは大いなる慈悲を示し、正しい道にいる限り、人々が快く、やすらぎの中で幸福に生きていくよう導く。キリスト教では、心に思い浮かんだ悪い考えさえも罪とみなす一方、ムスリムが罪とみなすのは、ただアッラーへの

反抗と、そのしもべに対して行われた悪行だけである。つまり、考えることについては、完全に人間を自由に行っているということになる。イスラームでは、「人はただ、行ったことについて責任を負う」とされている。

こうしたことを経て、私は自らムスリムになることを決めた。あの時から3年が経っているにもかかわらず、時々夢の中で、あの印象的なアラブ人のアザーンの声を聞き、さまざまな格好の人が四方から走り集まって列を作る様子を見る。アッラーへの礼拝を行うため、何の差も付けることなく共に跪いているあの人々が、誠実な心でアッラーを崇拝しているのは確かなことである。

## 8. デーヴィス・ウォーリントン（オーストリア）

恐ろしい冬の後には、春の甘く暖かい手が冷たい土壌を和らげていくように、イスラームも私に同じような影響を与えた。私の心を温め、新しく美しい学問という衣服を与えたのである。イスラームは極めて素晴らしく、正しく、論理的だった。「アッラーは唯一であり、ムハンマドはその使徒である」という言葉は、何と明白で、美しく、真実であることか。キリスト教の「父と子と聖霊」という信じ難く、理解し難い概念とは全く異なっている。キリスト教の教義が、人々を恐れさせ、怯えさせ、それでも満足させるものでないのに比べ、このシンプルで論理的な信仰は人を惹きつけるものである。イスラームは、全く手が加えられることなく伝わった神の教えである。何世紀もの時間が経っても、現在、そして未来においても、人間のあらゆる物質的、精神的な求めに答えている。例えば、人が平等であることについて考えてみると、アッラーの偉大さからすれば人間の階級や立場など何ら違いはないことをイスラームでは明白に説き、現世での生き方にも適用している。しかし、キリスト教の教会では同様の主張をしているものの、司教、大司教、司祭、主教、その他多数の宗教家といったさまざまな階級が存在しているのが実情である。彼らは神としもべとの間に入り、彼ら自身の利益のために、神であるアッラーの名を利用しているのだ。一方、イスラームでは、アッラーとしもべの間には、誰であれ入ることはできない。アッラーはク

ルアーンを介して、その命令を示している。一例を紹介しよう。アッラーの命じていることが、いかに簡潔明瞭で、美しいものであるかが理解できることだろう。

雌牛章第 267 章では、次のように記されている。「信仰する者よ。あなたがたの働いて得たよいものと、われが、大地からあなたがたのために生産したものを惜しまず施せ。悪いものを凶って、施してはならない。目をつむらずには、あなた（自身）さえ取れないようなものを。アッラーは満ち足りておられる方、讚美されるべき方であられることを知りなさい」。このようなクルアーンの深く美しい命令を知るたびに、私の魂はやすらぎを見出し、進んでイスラームを受け入れるに至ったのである。

## 9. セシッラ・キャノリー（レシーダ）（オーストリア）

なぜ私はムスリムになったのでしょうか。心から正直に言うならば、私は自分でも気付かないうちに既にムスリムになっていたのです。私はまだ若いうちに、所属していた教会への信頼感を失っていて、キリスト教からは心が離れ始めていました。私はもっと宗教について多くのことを知りたがり、学びたいと思っていました。教えられた教義を無条件に信じるような人間ではなかったのです。なぜ三位一体なのか？ なぜ私たちはこの世界に罪を負って生まれてきたのか？ なぜ罪の償いをしなければならないのか？ なぜ司祭を通さないと神に願うことができないのか？ 私たちに示されるさまざまな印や奇蹟にはどのような意味があるのか？ このようなことを、授業を受け持つ司祭に聞くと彼らは決まって怒り出し、「あなたには教会が教える真髄を尋ねることはできません。これらは神秘的なものです。あなたはただ信じることの責任を全うすればよいのです」などと返ってきました。そのようなことに納得はできません。理解ができず、本質を知ることのできないことを、人はどうやって信じられるのでしょうか。それでも、当時の私は自分の考えをはっきりと示す勇氣は持ち合わせていませんでした。自分のことをキリスト教徒だと思っている多くの人も、実は私と同じように考えているのだと思います。教わってきた多くの宗教上の知識は信じておら

ず、ただ、そのことを明らかにするのを恐れているだけだと確信していません。

その結果、だいぶ年月を経てからにはなりますが、私は三つの神への崇拝を求めるキリスト教会から距離を置き、「唯一の神への信仰を教える他の宗教はないのだろうか」と調べ始めました。なぜなら、私の良心が、そして魂も、唯一の神のみが存在すると告げていたからです。そして、いろいろなことを知るにつれ、司祭たちが教えていた理解し難い奇蹟だの、体験したという奇妙な出来事だのというのは、無意味であることが分かるようになってきました。この世界のあらゆるもの、人間、動物、森、山、海、木、花…。これらは偉大な創造主の存在を示してはいないでしょうか。新しく生まれてきた子どもは、一つの奇蹟ではないでしょうか。それなのに、教会は生まれたばかりの子どもを、罪を負った哀れな存在であると教えようとしていたのです。あり得ないことです。これは一つの偽りといえましょう。生まれてくる子どもは皆、アッラーの罪のないしもべであり、被造物であり、奇蹟なのです。私はただ、唯一であるアッラーと、アッラーが創り出す奇蹟を信じているだけなのです。

世界はもはや罪に覆い尽くされ、汚れて醜い教えしか残されていないのではないか…。私がこんなことを考えていた頃、娘がイスラームについて書かれた本を偶然持って帰ってきました。親子一緒にこの本をよく読んでみました。そこには、まさに私が考えていた通りのことが書かれていたのです。イスラームは、ただ唯一なるアッラーだけが存在することを告げていました。私はそれまでイスラームについてまったく何も知りませんでした。学校では、イスラームとは侮辱の対象であり、創作されたくだらな宗教で信者は地獄に行くと言われていたのです。しかし、この本を読んだ後、もう少しイスラームについて知ってみようという思いが浮かびました。まずは住んでいた町のムスリムを探してみました。すると、出会ったムスリムたちは、私の質問にととも論理的に答えてくれ、私の目を開かせてくれたのです。この教えは、教会の神父たちが言っていたような創作の宗教ではなく、真のアッラーの教えでした。その後も娘とともにイスラームについての本を何冊も読み、その崇高さと正しさを確信し、私たち二人はムスリムとなり

ました。私はレシーダ、娘はマフムダという名前ももらいました。

次に、「イスラームにおいて最も気に入った部分は何か」という二つ目の質問に答えたいと思います。

イスラームで私が最も気に入っているのはドゥアーです。キリスト教における祈りは、アッラーに対し、イーサーを媒介として富や地位、名誉といった現世的なものを求めるために行われていました。しかし、ムスリムは願いをかける際に、アッラーへの感謝を表します。ムスリムは、アッラーの命じられたこととその教えを尊重する限り、アッラーは必要とするすべてのことを、彼らが求める前に与えて下さるということを知っているのです。

## 10. ムハンマド・アサド・レオポルド・ワイス（オーストリア）

ムハンマド・アサド・レオポルド・ワイスは、当時オーストリア領だったルオウ、現在のポーランドにある町で1900年に誕生しました。22歳のときに新聞記者としてアラブ諸国を訪問し、イスラームに感銘を受けてムスリムになりました。その後もイスラーム諸国を訪問し、インドやアフガニスタンにも足を運んでいます。そのときの様子は、当時の世界最大級の新聞「フランクフルト新聞」に掲載されています。ワイスはこの新聞の編集長にも就任しますが、独立後のパキスタン政府による宗教教育制度の整備に尽力し、後にはパキスタン代表として国連総会に派遣されるまでになります。『イスラームの十字路で』、『マッカへの道』という二つの著書のほか、クルアーンの新英訳本も手掛けています。しかし、正確なイスラームの知識を有しないままにクルアーンの解釈を行っていることから、スンナ（預言者ムハンマドの言行、範例）に従ったものではないとの批判が多く、ワッハーブ派等の一部を除いてその解釈や著書についての正当性は疑問視されています。

私は新聞記者として働いていたが、1922年に特派員としてアジアやアフリカに行くこととなった。当初、私とムスリムとの出会いは、単に外国人が他の外国人に会ったに過ぎないものだった。しかし、イスラーム諸国に長期間滞在してムスリムと親しくなっていくにつれ、彼らがヨーロッパの人々とは全く異なる視点で世界や世の中の出来事を見ていることが分かってき

た。彼らはさまざまな出来事を真摯かつ冷静に捉えており、我々よりもずっと人間的に考えているということが、イスラームに関心を抱くきっかけとなったのである。私は熱心なカトリックの家庭に育ち、イスラームについては、あれは宗教ではなく悪魔崇拝だと幼少期を通じて教わってきた。だが、実際にムスリムと触れ合うことで、教わってきたことが真実ではないと知り、イスラームについて詳しく学ぶことにしたのである。たくさんの本を揃え、これらをじっくりと読んでいくことで、この教えがいかに清らかで尊いものであるのか、驚きとともに理解するようになっていった。ところが、知り合ったムスリムの中には、本とは異なるような人々もいたのである。イスラームでは、何よりもまず清潔さ、開かれた心、兄弟愛、慈悲、誠実さ、平穏ややすらぎといったことを説く一方、キリスト教徒が信じる人の原罪という教義を否定し、「誰にも害を与えず、罪を犯さないことを前提に人生を楽しむ」ことを命じていた。しかし、実際には不潔で嘘つきのムスリムもいたのである。そこで、この現象を理解するため、まずは経験を積む意味で自分をムスリムと仮定し、ムスリムの立場から本で読んだ内容に従ってイスラーム世界を学び始めることにした。そのとき気付いたことがある。現在イスラーム世界が次第に破壊され、衰退し、崩壊の危機に瀕している最大の要因は、ムスリムがイスラームに根付いた生き方をしなくなっていることにある、ということだった。ムスリムは、完全にムスリムである間は常に上昇を続けていた。だが、イスラームを放棄するようになってから転落を始めたのである。本来、一つの国、民族、あるいは集団が、よりよい状態になって発展していくために必要なことはすべてイスラームに内包されている。あらゆる文明の基盤もそこに存在する。イスラームは知的であるとともに、実務的でもある。イスラームが定める規律は完全に論理的であるとともに、誰にでも理解されるものであり、学術的で難解な要素あるいは、科学や人間の本質に合致しない要素は一切含まれていない。さらに、そこには不必要な要素も一切存在していない。つまり、他の宗教書にあるような常軌を逸した事柄や、欺瞞、非論理的な迷信などは、イスラームには存在していないのである。この点について、私は幾度となくムスリムたちと議論してきた。「なぜあなた方は、これほどの素晴らしい教えをもっと尊重しようとしな

いのか。どうして大切な拠りどころとしないのか」と批判したのである。そして、1926年、アフガニスタンのある知事と、このことについて話すことになった。すると彼は私にこう言った。「あなたはとっくにムスリムになっているのに、そのことに気が付いていない。なぜなら、真のムスリムは、あなたのようにイスラームを守るからだ。」知事のこの言葉は、私の心に稲妻のように轟いた。家に戻って心の奥底を探っていくと、「そうだった、私はもうムスリムになっていたのだ…」と言葉が口をついた。すぐに信仰告白の言葉を唱えた。私はあの日以来、ムスリムなのである。

さて、もう一つ「イスラームで最も気に入った部分は何か」という質問があったが、私はこれに答えることができない。なぜなら、イスラームは私の心すべてを覆い、満たしているからだ。つまり、私に影響を及ぼした何か特別な部分というのはないのである。キリスト教で見出すことのできなかつたものは、すべてイスラームで見出すことができた。だから、イスラームの基礎のうち、どの部分がより私にとって近いものと感じられたのか、ということも説明することができない。それは、私がイスラームのすべての信条、すべての要素に驚異の念を抱いているからである。イスラームは崇高な記念碑であり、その一部であれ取り除くことはできない。イスラームにおけるすべての要素は秩序ある形で互いに結び付いており、その間には完全な均衡が存在する。何の不足も見られず、すべてがふさわしい場所に位置している。もしかすると、この特筆すべき秩序が私をイスラームに結び付けたのかもしれない。いや、私をイスラームに結び付けたのは、イスラームに対する愛情であろう。周知のとおり、愛情とは多くの要素で形成される。情熱、孤独、野望、向上心、進歩への熱意、強い力に対する自身の弱さ、援助や保護…。こういった私の愛情のすべてがイスラームに結び付き、イスラームもまた私の心に離れることなく根付くことになったのである。

## 11. オメル・ロルフ・フリーヘル・フォン・エーレンフェルス教授（オーストリア）

ロルフ・フリーヘル・フォン・エーレンフェルスは、ゲシュタルト心理学の創始者として世界的に知られるバロン・クリスチャン・エーレンフェルス

の息子で、いわゆる名家の出身です。子どもの頃からオリエント文明に関心を持ち、イスラームについても調べるようになりました。妹のインマ・フォン・ボドゥメスルホフは、1953年にラホールで著書を発表し、その中で兄が持っていた関心の高さを長文で紹介しています。ロルフは青年時代にトルコ、アルバニア、ギリシア、ユーゴスラビアを訪れ、ムスリムとも交流を持ちました。キリスト教徒だった当時もモスクで礼拝を行うなどイスラームに親近感を持ち、ついに1927年にムスリムになることを決意するに至り、オメルというムスリム名を付けています。1932年にはインドを訪問し、『イスラームにおける女性の地位』という著作を発表しました。第二次世界大戦により、ドイツがオーストリアを併合するとロルフはインドに避難し、アクバル・ハイダルの援助を受けてアッサムで人類学の研究に携わります。後の1949年には、マドラス大学で人類学教授となり、ベンガルにある王立アズロティック協会から金賞を授与されるなど活躍し、その著書はウルドゥー語でも出版されています。

なぜムスリムになったのかという質問に対し、私がムスリムになるよう導き、これが真実の教えであると示してくれた事柄を以下に列挙していきたい。

- 1) イスラームは、世界のあらゆる宗教の美点を備えている。すべての宗教は本来、人々がやすらぎと平穏の中で生きることを求めるものである。しかしながら、どの教えもイスラームほど明快にこの点について示してはいない。どの宗教であっても、創造主や信仰する兄弟たちへの愛情について、イスラームほどには根付かせることができなかった。
- 2) イスラームは、やすらぎと平穏の中で、完全にアッラーに従うことを命じている。
- 3) 歴史を紐解くと、実際にイスラームが神による正しい最後の教えであり、それ以降は正しい教えが下されていないことは自ずと明白である。
- 4) イスラームを伝えた預言者ムハンマドは、確かに最後の預言者である。
- 5) イスラームを受け入れた者は誰でも、以前の信仰からは離れていく。しかしながら、その隔たりは人々が思うほど大きくはない。神による教えとし

ての信仰の基本は同一である。つまり、クルアーンでは、イスラーム以前の神による教えも認めているが、これらの教えに手が加えられてしまった誤った部分を正しているのである。預言者イーサーも、正しい教えを人々に伝えると同時に、ムハンマドが最後の預言者となり、その後は他の預言者が現れることはないと告げていた。要するに、イスラームはそれ以前の教えを正し、完成した形にしたということである。人々はそれぞれの利益や野望のために敵同士となってしまう、そこに利益を見出そうとした人々が、諸宗教を互いに敵対させようとしてきた。彼らは、アッラーを知ることを意図する宗教を世俗的な道具として利用したのである。それでも、よく見ると分かるように、イスラームは他の教えを認めながらも、時間の流れによる変容や、人の手による過ちを正してきた。イスラームを受け入れることは、男女問わずあらゆる人が必要とする精神的かつ肉体的な助力を意味するのである。

6) 人々の間の兄弟愛という認識について、イスラーム以上に示されている宗教は他にない。ムスリムは皆、どの民族、人種であろうと、どのような肌の色であっても、どのような言葉を話したとしても、互いに宗教上の兄弟である。たとえ政治的思想が異なっていようと、互いに兄弟なのである。これほど強固な認識は他の宗教には見られないものである。

7) イスラームは、世界的に見ても女性に対する多くの権利を認めている教えである。イスラームは女性に最良の場所を与えている。それは、預言者ムハンマドの「天国は母たちの足の下にある」という言葉からも明らかである。

イスラームは、他の教えを信じる人々の作品も尊重し、むやみに破壊してしまうことはなかった。イスタンブールでファーティヒ・モスクやスルタン・アフメット・モスクが建設される際には、アヤソフィアがその見本となっていた。ムスリムは歴史的に、他の宗教を信じる人々にも最大限公正に、誠意をもって接してきたのである。このようなすべてのことが理由となり、私はイスラームを自らの教えとして選ぶことになったのである。

## 12. ベノア・アリー・セルマーン博士（フランス）

私は医師で、厳格なカトリック教徒の家に生まれました。しかし、医師と

いう職業に就いたこと、つまり、現実的で経験に基づく自然科学に携わっていることは、キリスト教に対して大きな反感を抱かせることになりました。宗教の部分では、家族と私の考えは同じではありませんでした。私は、偉大なる創造主すなわちアッラーの存在を信じていました。しかし、キリスト教、特にカトリックでは、この偉大な創造主の周りに息子や精霊がいて、預言者イーサーが神の息子であることを証明しようと、たくさんの非論理的な作り話や迷信、宗教儀礼があつて、私がアッラーへと近づこうとすることを妨げ、遠ざけようとしていました。

私は神の唯一性を信じていたため、どうしても三位一体という説を信じることができませんでした。預言者イーサーも、神の実の息子であるとは思えませんでした。つまり、私はまだイスラームを受け入れる前から、イスラームの信仰告白の半分である「ラー イラーハ イツラッラー」（アッラーの他に神はない）の部分の既に受け入れていたのです。イスラームについて学ぶようになったとき、「言え、『かれはアッラー、唯一なる御方であられる。アッラーは、自存され、御産みなさらないし、御産れになられたのではない、かれに比べ得る、何ものもない』』というイフラス章を見出したときには、私は「ああ、アッラーよ、私は完全に信じています」とつぶやき、心には大きなやすらぎを感じました。イスラームでは、宗教家でも、さらには預言者であっても私たちと同じ人間であるとされており、彼らに神性は与えられていません。神父であれば、人の罪を赦すことができるなどということは全く認められていないのです。イスラームには、迷信や非論理的な決まり事、理解しがたい内容はありません。イスラームは私が求めてきた通りの論理的な教えでした。カトリックのように、人は原罪を負って生まれてきたということもありません。人には魂と肉体を清めることを命じています。医学の基本となる衛生観念は、イスラームにおいてはアッラーの命令になっているのです。礼拝を行うにあたっては、清潔な状態にすることを命じており、これは他の宗教では見出すことができませんでした。

キリスト教では入信時や儀式のときに、（決してあり得ないことですが）イーサーと神と一体化するというので、神父がイーサーの肉と称して与えるパンを食べ、血と称して与えるブドウ酒を飲むということをします。私

には、このようなことは、土偶か何かを拝む原始人の風習のように感じられ、居心地の悪い思いをしていました。現実的な知識をもって知性が育まれたおかげで、このような子どもじみた儀式は真の教えにはふさわしくないと強く感じていたのです。一方、イスラームにはこのようなものはありませんでした。イスラームには、ただ真実と愛情、そして清らかさがあったのです。

ついに私は決心し、ムスリムの親友のもとを訪ねました。そして、ムスリムになるためには何をすべきかと聞きました。彼らは、信仰告白を唱える必要があること、そしてその意味について教えてくれました。上で述べたように、私は既に信仰告白の半分、つまり「アッラーの他に神はない」という部分はムスリムになる前から受け入れていました。残りの部分、すなわち「ムハンマドはその使徒である」という部分について信じることは、まったく難しいことはありませんでした。その後、イスラームに関する書籍をよく読むようになりました。中でも、マラク・ベンナービーの『Le Phene Coranique』を読んだときには、クルアーンがいかに素晴らしいものか、感嘆のうちに知ることとなりました。14世紀も前に下されたアッラーの書に記されていることは、今日の学問や科学における研究結果と完全に合致しています。学術的、科学的、社会的観点から、クルアーンは単に現在だけではなく、未来にも有効な書物であると言えます。

1953年2月20日、私はパリ・モスクに行き、そこで宗務担当者と証人の前で、公式にイスラームを受け入れました。そして、アリー・セルマーンというムスリム名ももらいました。

私はこの新たな教えをととても愛しています。そして、とても幸福です。何度も信仰告白の言葉を唱え、その意味を想い、イスラームへの信仰の強さを新たにしています。

### 13. R. L. メッレマ (オランダ)

メッレマ博士はアムステルダム・トロピカル博物館のイスラーム部門の代表を務めています。また、『ワヤングの赤ん坊』、『パキスタン情報』、『イスラーム紹介』といった著書でも知られています。

私は、1919年にライデン大学で東方言語を学び始めました。そのときの先生は世界的にも有名で、アラビア語に堪能なヒュルフローニエ教授でした。先生は、私にアラビア語の読み書き、そして翻訳を教えるにあたり、教科書としてクルアーンとガザーリーの著書を渡しました。私の専門が「イスラーム法」だったからです。それまでにも、イスラーム史やイスラームに関する知識については、ヨーロッパ諸言語で書かれた書物を数多く読んでいました。また、1921年にはエジプトを訪れ、アル・アズハル神学校で1ヶ月間滞在しました。さらに、アラビア語の他にサンスクリット語やマレー語も学び、1927年には当時オランダ領だったインドネシアに渡って、ジャカルタの高等学校でジャワ語を学ぶことになりました。そして、15年間、ジャワ語だけでなく、古代から近代までのジャワ文明史についても研究しました。これらの時期を通じて私はムスリムたちと交流し、また、アラビア語の書籍も手に入れては読んでいました。しかし、第二次世界大戦で日本がインドネシアの島々を占領すると私は捕虜となり、苦勞の多い捕虜生活を経て、戦争終結後は再びオランダへと戻ることになりました。そこで、アムステルダムのトロピカル博物館の職に就くことが決まり、改めてイスラームに携わることとなりました。一方では、ジャワのムスリムに関する書籍を出版する機会にも恵まれました。

また、1954年から1955年までは、パキスタンのムスリムについて調査するため、同国に派遣されることになりました。先ほど述べたように、それまで読んでいたイスラーム関連の書籍は、主にヨーロッパ諸言語で出版されたものでした。しかし、パキスタンに到着し、パキスタンのムスリムと交流を深めるにつれ、イスラームをそれまでとは全く異なる形で捉えるようになっていきました。ラホールでは、ムスリムの親友たちにモスクに連れていってもらえないかと頼みました。彼らは快く応じ、金曜礼拝に連れて行ってくれました。私は礼拝の様子をじっと眺めていました。本当に衝撃的で、私はほとんど我を失っていました。まるで、自分がムスリムになったかのように感じ、兄弟として親友たちの手を握りしめました。このときのモスクでの気持ちは、1955年に出版された『季刊・パキスタン』誌に次のように記

しています。

「次はもう少し小さなモスクに行った。このモスクでは、英語が堪能なパンジャブ大学の教授が説話を行うことになっていた。彼は集まった人々に、『今日は、遠くオランダからやって来たムスリムの兄弟が私たちと共にいます。そこで、彼にも理解できるよう、ウルドゥー語と英語で話をします』と言ってから、素晴らしい説話を行った。私も話に耳を傾けていた。やがて、説話が終わってモスクを去ろうとすると、ここに連れてきてくれた親友アッラマ・サヒーブが、集まっている人々が私に何か話すよう注目している、話は自分がウルドゥー語に訳して伝えるから、と言ってきた。そこで、私は次のような話をした。『私はとても遠くから、オランダからやって来ました。私が住んでいるところでは、ムスリムはごく僅かしかいません。それでも、その数少ないムスリムたちが、皆さんに挨拶を届けてほしいと私に頼んできました。あなた方が独立を果たし、そのことによって、世界にもう一つムスリムの国を作り上げたことを心から喜んでいます。7年前に建国されたパキスタンは、今や完全に国家としての形を整えました。当初、皆さん方が味わった大きな苦勞の末、現在のこの国の安定を得ることができたのです。そして、今後は飛躍的に発展していくことと思っています。私は祖国に戻ったときには、あなた方がいかに親切で礼儀正しく、ホスピタリティにあふれていたのか詳しく伝えます。私に示していただいた大きな愛情を決して忘れることはありません』。私の言葉をアッラマ・サヒーブがウルドゥー語に訳すと、モスクにいた人々は私のところに押し寄せ、手を握り、祝福の言葉をかけてくれ、私はすっかり感激してしまった。彼らの心からの兄弟愛が私の心を揺さぶったのだ。私は、自分が完全にムスリムの兄弟たちの仲間であることを感じ、そして、そのことがこの上なく幸福だった。」

パキスタンのムスリムの兄弟たちは、イスラームが単に外見上のものではないことを私に示してくれました。そして、何よりもまずイスラームは素晴らしい徳であり、人が善良なムスリムになるためには、清らかな徳を持っていなければならないことを証明してくれました。

次に、第2の質問「イスラームの中で最もあなたを惹きつけるものは何か」に移りたいと思います。

私がイスラームを受け入れるように導き、心からイスラームに結び付けたものを下に挙げていきます。

1) 第一には、唯一のアッラーの存在です。イスラームでは、唯一で偉大な創造主の存在を認めています。この偉大な創造主は生まれもしなければ、生みもしません。唯一の創造主を信じることは、これ以上ないほど論理的で、容易に受け入れられるはずのものです。どれほどの単純な考えの持ち主であっても、その正しさを理解し、信じることができるでしょう。アッラーという、偉大で唯一の創造主は、最高の英知、力、美の根源です。そしてその慈悲と慈愛も無限です。

2) アッラーとしもべとの間には誰も存在しないことが挙げられます。イスラームでは、信者は創造主と直接向き合い、礼拝を行います。アッラーとしもべとの間を誰かが仲介する必要はありません。人間は、現世や来世で行うべきことについて、アッラーの書物であるクルアーンや、ハディースあるいはイスラーム学者による書籍から学びます。そして、それぞれの行いがアッラーによって問われることとなります。人に報奨を与えたり、罰したりするのはただアッラーしかいません。アッラーは、どのしもべに対しても、決してその人自身が行わなかったことに対する責任を問うことはなく、また、その人が不可能なことを命じることもありません。

3) 次に挙げるのは、イスラームにおける大いなる慈悲です。そのことを最も端的に表しているのは、クルアーンの中にある「強制によってイスラーム教徒とすることはしない」という章句でしょう。また、預言者ムハンマドは、ムスリムが何かを学ぶために必要とあらば、どんなに遠い外国にでも行くことを伝えています。さらに、イスラーム以前にもたらされた教えの中で、手が増えられることのなかった部分には敬意を払うことも命じています。

4) どのような人種、民族、肌の色であっても、すべてのムスリムは兄弟であるとされています。世界でも、イスラームだけがこの崇高な考えを実践しています。巡礼の時期になれば、世界各地から何十万ものムスリムたちが集まり、同じイフラームの姿に身を包んで礼拝を行います。その様子は、まさにムスリムが兄弟であることを象徴しています。

5) イスラームでは、精神だけでなく物質についても価値が認められていま

す。他の宗教は、魂や精神、あるいは理解に苦しむ奇妙な価値観だけで成り立ちます。しかし、イスラームでは、肉体も魂も同じように尊重され、ただ魂の清らかさだけでなく、身体を清潔に保つために必要な事柄も命じています。人間の魂の成長を肉体の発達とも結び付け、物質面も包括しながらいかに生きていくべきかを明白に示しているのです。

6) イスラームでは、酒や麻薬、豚肉を禁じています。私が思うに、人類に最大の災難をもたらすものは酒であり麻薬です。これらを禁じていることは、イスラームがいかに崇高な教えであるか、いかに先進的であるかを十分に表しています。

#### 14. ファズレドディン・アフマド・オーヴァリング（オランダ）

東方文明と私との出会いが、いつのことだったのかは明確には特定できない。だが、この出会いは、まずは学問のためのものだった。私は東方の言語を学びたいと思い、今から30年も前、つまり、まだ12、3歳の頃にアラビア語を学び始めた。しかし、私に教えてくれる人はいなかったため、なかなか上達しなかった。アラビア語を学ぶにあたっては、ヨーロッパの著者が書いたアラブ人やイスラームについての本を読んでいたが、その多くはイスラームについての知識は薄く、また中立的でもなかった。それにもかかわらず、預言者ムハンマドについての記述は、私の心に敬意を芽生えさせるのには十分だった。ただ、これらの本から学んだイスラームの知識は正確ではなく、また不十分なものであった。私を正しく導いてくれる人はいなかったのである。

やがて、T.G.ブラウンによる『イラン近代文学史』という素晴らしい書籍に巡り合った。この中では、特に二編の美しい詩が印象に残っている。一つはハートッフ・イスファハーンの詩、もう一つはモフタシム・カーシャーンの詩である。

ハートッフの詩を読んだ時の衝撃を言葉にすることはできない。この詩は、不安や苦しみの中で、平穩の道を示してくれる師を求める自らの魂について描き上げた作品だ。これを読んだ時、偉大な詩人がまるで私のことを言及しているのではないか、私が真実を探そうとしてきた努力を表現してい

るのではないかと感じざるを得なかった。もちろん、詩のすべての想いが完全に一致していたわけではない。それでも、次の一節は、完全に私に答えを与えるものだった。

ただアッラーのみがおられ、その御方以外誰もいない

アッラーのほかに崇める神などいはしない

私は母の希望もあり、また自分の関心から、宗教教育を行う高等学校に進学した。この学校は宗教教育を行ってはいしたが、排他的ではなかった。生徒たちが自分の考えを自由に述べることを重視し、宗教教育はあくまでも人として知っておくべき基本的な事柄であるという立場をとっていた。それでも、「宗教に対する考えを述べよ」という最終試験での問いに対して、私が「イスラームを強く敬愛している」と答えると、校長はひどく驚いた様子だった。その頃、私はイスラームに強い愛情を感じる一方、完全に信仰するまでには至っていなかった。まだ決心ができていなかったのである。それまでの間、教会から叩き込まれていたイスラームへの敵意から、完全に逃れることができずにいたのだ。

その後、私はヨーロッパの人々の手による書籍の影響を受けない形で、自分自身の論理や思考のもと、真剣にイスラームを学ぶようになっていった。そして、そこで素晴らしい真実に出会うこととなった。多くの人々が、子どもの頃の宗教から離れ、イスラームを受け入れるようになる理由が分かったのだ。それは、イスラームの第一の意味が、人間や世界はアッラーへの純粋な信仰と平和の中にあること、第二の意味が、自らを完全にアッラーに委ねてその命令に従うことだったという事実である。クルアーンの中で、このことについて語られている部分を紹介したい。翻訳ではアラビア語原文の美しい調和が損なわれてしまうが、それでもその言葉はやはり人を強く惹きつける。暁章第 27 節とそれに続く箇所である。

「(善行を積んだ魂に言われるであろう。) おお、安心、大悟している魂よ、あなたの主に返れ、歓喜し御満悦にあずかって。あなたは、わがしもべの中に入れ。あなたは、わが楽園に入れ」

そう、この表現だけでも、イスラームがキリスト教やその他の宗教とは異

なり、迷信を持たず、清らかで誠実な真のアッラーの教えであることを示すのには十分であろう。

キリスト教では、人が原罪を負って生まれてきている、つまり生まれたばかりの子どもですら、自分より前に生きた人々の罪を背負っているという教義がある。これに対し、クルアーンでは、家畜章 164 節で「人はその行いに対する以外に、報酬はないのである。重荷を負う者は、外の者の重荷を負わない」と語られており、また、高壁章第 40 節では「われは誰にも、能力以上のものを負わせない」と伝えている。これらを読めば、人々は心の底でこれがアッラーの言葉であることを感じ、進んでイスラームを受け入れることだろう。アッラーによる最も正しい教であるイスラームを選び、進んでムスリムとなるのである。私自身がそうだったように。

#### 15. ハジュ・ロード(卿)・アル・ファールーク・ヘッドリー (イギリス)

ヘッドリーは貴族階級の出身です。彼は 1855 年にイギリスで最も格式ある家庭に生まれ、さまざまな政治的要職につくとともに、作家としても活躍しました。ケンブリッジ大学卒業後、1877 年には卿の称号を与えられています。イギリス軍では中佐として軍務につき、専門の技術分野以外でも豊かな文才を発揮し、特に『ムスリムに目覚めたヨーロッパ人』という著作でも知られています。ヘッドリー卿は 1913 年にムスリムとなり、巡礼を行ってシャイフ・ラフメトゥッラー・ファールークと名乗るようになりました。1928 年にはインドも訪問しています。

なぜ私がムスリムになったのか？ もしかしたら私の知人たちは、私がムスリムの友人の影響を受けてムスリムになったと考えているかもしれない。しかし、実際には全く違っている。私がムスリムとなったのは、長年の研究と熟考の末の結論だ。私は十分にイスラームについて調べ、そのことについて自分なりの考察ができるようになってからムスリムたちとの交流を図ったのである。そして、彼らが私と同じように自らの教えを信仰していることを理解し、正しい宗教であることを確信して喜びを覚えたものだ。

クルアーンでは、人々が心から信じた上でイスラームを受け入れること

を命じている。そして、強制的にムスリムにすることのないよう説いている。預言者イーサーも弟子に対し「どこかの地に行った時、そこの人々があなたを認めず、話を聞かないのであれば、すぐにそこを離れなさい。強制してはいけない」（マルコによる福音書 6-11）と命じている。

私はこれまで何人もの厳格なプロテスタントのキリスト教徒を見てきた。彼らは、カトリックの学生寮に外向き、生徒たちを強引にプロテスタントにしようとしていた。そのような不必要な闘争と強制は、多くの衝突や不和、敵意を生み出し、人々を互いに敵対させるだけである。同様に、キリスト教の宣教師たちはムスリムに教えを説き、キリスト教徒にしようとしたすらに無駄な努力と犠牲を払い、場合によっては騙そうとさえしていた。

宣教師たちは、金銭や仕事、地位を与えることを約束することもあった。しかし彼らは、預言者イーサーの命令を最も正しく実行し、またその教えを本当に認めているのがイスラームであることを知る由もない。キリスト教は大きく歪曲されてしまったために、預言者イーサーが伝えた真のキリスト教の姿は残されておらず、また、預言者イーサーの伝えた人間的な側面も忘れ去られてしまっている。これらは、現在イスラームのみで存続している。そういった意味では、私はムスリムになることで、真のキリスト教に出会ったとも言えよう。なぜなら、預言者イーサーが命じていた兄弟愛や人々との絆、慈愛、寛大さ、ポジティブな考え方は、キリスト教徒ではなくムスリムに見られるものだからである。キリスト教のアタナシウス派の思想では、キリスト教の本髄は三位一体を信じることであり、これに僅かたりとも疑いを抱けば誰であれ即座に破滅するということになっている。そして、もし現世と来世での平穩を求めるとであれば「神と子と聖霊」という三つの神を信じなければならないと繰り返し主張している。

別の例を挙げよう。私がムスリムになったとき、ある人が手紙を寄こした。そこには、「あなたはイスラーム教徒となつてしまい、もはや破滅してしまった。誰もあなたを救うことはできない。なぜなら神が神であることを信じていないからだ」と書いてあった。私が神を信じていないと思ったのであろう。このような人々の考えでは、神が神であるためには、絶対に三つである必要があるからだ。しかし、預言者イーサーのことを考えてほしい。彼

がキリスト教の布教を始めたときには、神は唯一の存在であると説き、決して自分が神の息子だという主張はしてはいなかった。イスラームは「唯一無比のアッラーのみが存在する」と説いており、本来のキリスト教のあるべき姿をも示しているのだ。知性を持つ者であれば、唯一の神の存在を信じることは、これ以上ないほどに論理的なことである。私は、ムスリムになることで、真実で唯一なるアッラーを信じると同時に、預言者イーサーが伝えた清い教えに後世付け加えられた虚偽を否定しているのだ。私に手紙を送った人や、彼のように考える人は哀れむべき存在だ。現在、キリスト教は教育を受けた一般の人々を満足させることはできていない。もはや、人々は何も考えずに神話を信じたりはしないのだ。キリスト教は、将来に大きな不安を抱えている。一方、私はこれまで生きてきて、真のムスリムたちが自らの教えに疑問を抱くことを見聞きしたことがない。なぜならイスラームは、人間の魂と身体の要求に対して、最も完全で論理的に答えているからであろう。

今や、何千人ものキリスト教徒がイスラームについて学び、これを完全に受け入れていることを私は確信している。ただ、ムスリムであることを公言することで仕事や立場を失ったり、友人が離れていったりすることに恐れを抱き、正式な手続きを踏む勇気が出せないのである。この国の学校では、いまだにイスラームのことについて、神を信じない人々の宗教であると教えている。私は、すべての友人が自分のことを「魂が破滅した者」と呪うかもしれないと覚悟してムスリムになった。しかし、20年もの間、深くイスラームと結ばれてきている。

私がなぜイスラームを受け入れたのかということについて簡単に説明してきたが、次のことを改めて述べておきたい。それは、私はムスリムになったことで、同時に、より正しく清らかなキリスト教徒にもなったということである。他のキリスト教徒にとっての先例にもなるだろうと考えている。ムスリムになることは、キリスト教徒の敵になることではない。それどころか、真のキリスト教が何かということを教え、キリスト教徒を高めることになるのである。

## 16. アブドゥッラー・アーチボルド・ハミルトン（イギリス）

アーチボルド・ハミルトンはイギリスの有名な外交官で、第一次世界大戦では海軍将校の任務につきました。伝統ある家系の生まれで準男爵の称号を持ち、1923年にムスリムとなっています。

物事が判断できる年頃になってからというもの、イスラームのシンプルで、結晶のような透明感は、常に私を惹きつけていました。キリスト教徒として生まれ、キリスト教の教育を受けたにもかかわらず、あの奇妙な教義を信じることはどうしてもできませんでした。私はただやみくもに信じるのではなく、正義や真実、論理性を常に大切にしてきました。私は唯一の神に対して、やすらぎと純粋な心をもって礼拝したいと思ってきました。しかし、カトリックの教会もプロテスタントの教会も、これを実現させてはくれませんでした。そして、これを完全な形で実現させてくれたイスラームを、自分の心が命ずるままに受け入れることになったのです。それ以来、ようやく自分のことを真の神のしもべとして、また、よりよい人間として感じるようになるようになりました。

残念ながらイスラームは多くのキリスト教徒や無知な人々のせいで、誤った偽りの教えだと流布されてきました。しかし、アッラーによる真の教えとはイスラームに他なりません。イスラームは、強い者と弱い者が、豊かな者と貧しい者が一体となって支え合う完全な教えです。人々を経済的な観点から考えたとき、私は次の三つに分類できると考えます。第一は、アッラーからの多くの恵みによって豊かである人々。第二は、糧を稼ぐためにその生涯を費やさなければならない人々。さらにもう一つがあります。それは、自らの落ち度がないのに十分に稼ぐことができない人々。つまり、失業者など働くことができずに貧困に陥っている人々です。イスラームでは、この三つの階層を互いに融和させています。豊かな者は、貧しい者に対して援助することが命じられ、彼らが受ける屈辱や苦難が取り除かれるよう求められます。

同時に、イスラームでは個人の労力や努力、能力も尊重しています。イスラーム法では、もし貧しい農民が持ち主のいない土地を一定期間、自らの努

力で耕作に用いたならば、その土地はこの農民のものとなります。このように、イスラームは破壊的なのではなく、建設的な教えなのです。

一方、イスラームでは、賭博やこれに類する多くの有害な娯楽を否定しています。また、人を酔わせるあらゆる飲み物も禁じています。現実として、人々を襲う災いの原因の大半は、賭博や飲酒なのです。

我々ムスリムは、すべてのことが運命づけられていると信じている訳ではありません。イスラームの信条の一つでもある運命とは、何もせずただぼんやりと口を開けたまま、すべてをアッラーに求めることではありません。逆に、クルアーンにおいてアッラーは常に勤勉であることを命じています。人は精一杯の努力をし、行うべきことをすべて行った上で、はじめて結果をアッラーに委ねるのです。努力する前に願うのではなく、努力をした後に、成功のためにアッラーに願い、結果を求めるのです。イスラームには、「良いことも悪いこともすべてアッラーの意志によってもたらされる」という考えがありますが、これは、すべてはアッラーによって創造されているという意味に他なりません。イスラームでは、人々が「何もせずにいる」という選択肢はないのです。つまり、運命とは、アッラーがすべての出来事を知っているということ、そして、このアッラーが知っていることは然るべき時に創造されるということの意味します。

一方で、イスラームでは人々が原罪を負った罪人であるといった考えや、生涯を通じてその償いをしなければならないという考えを完全に否定しています。イスラームにおいては、男女はともにアッラーのしもべであり、男女の間で知性や理性、思考力といった点で大きな違いはないことを明示しています。ただ、男性はより力が強いように創造されており、疲労度の高い仕事や生活の糧を得るための役割が求められ、女性との相違があるに過ぎません。

さて、イスラームではすべてのムスリムを兄弟としています。この点については多くを語る必要はないでしょう。なぜなら、全世界のムスリムが互いに愛し、互いに平等で、互いに助け合っていることは既に知られているからです。イスラームでは、金持ちであろうと貧乏であろうと、名家であろうと村人であろうと、役人も商人も作業員もすべてアッラーから見れば同等

であり、互いに兄弟であるのです。私がイスラーム圏を訪れたときには、どの国であってもまるで我が家にいるかのように、兄弟とともにいるかのように感じることができました。

それでは、次のことを述べて締めくくりたいと思います。イスラームは、人々が毎日誠実に働き、アッラーに対する服従と礼拝の務めを果たすよう伝えていきます。他方、今日のキリスト教では、人々が日曜日だけ祈り、他の日は完全にアッラーの存在を忘れ去り、世俗的な物事に従事するよう導いているのです。だからこそ、私はムスリムとなりました。そして、ムスリムであることに誇りを持っています。

## 17. ジェラーレディン・ローダー・ブラントン (イギリス)

**ブラントンは有名な一族の出身で準男爵の爵位を持ち、オックスフォード大学を卒業した後、出版業に携わりました。**

はじめに、なぜ私がムスリムになったのかについて話す機会を与えてくださったことに感謝したいと思います。私はキリスト教徒の両親の影響のもとに育ちました。若い頃には神学も学んでいました。やがて宣教師たちと知り合い、彼らが行っていた海外での活動に強い関心を持つようになりました。彼らを手伝いたいという思いに駆られたのです。公式な任務を受けた訳でもないまま、宣教師たちと一緒に旅に出ました。ただ、正直に言うと、私はキリスト教の教育を受けてはいたものの、「人は原罪を負ってこの世に来たのであり、この世で必ず苦しまなければならない」といった考え方を奇妙に感じていました。一方で、そのためにイスラームを徐々に嫌悪するようになっていたのです。というのは、アッラーはすべてを創造するだけの力を持っているとしながらも、ただ罪深いものばかりを創り続けているのだから、説明されているような力や慈悲という概念と矛盾しているのではないかと感じていたからです。だから、神についてこのように説いている宗教は、真実ではないと考えていました。そこで私は、他の宗教ではこの部分についてどのように説いているのだろうかや疑問に思い、調べてみることにしました。何よりもまず自分自身が、公正で慈悲深く、憐れみ深い神を必要

と感じ、求めていたのです。預言者イーサーによってもたらされた、真のキリスト教というのは、このようなものだったのだろうか？あるいは、預言者イーサーの説いた教えは時を経て変わってしまったのだろうか？このようなことを考えるたびに、私の心の疑念は増していきました。そんな時には聖書を手にして読み返してみるものの、毎回、説明不足や分からない点が多くあることが気になってしまいました。最終的に私は、現在の聖書は、預言者イーサーが伝えた真の啓典ではないという結論に達しました。新約聖書には、多くの間違った教義が加えられ、アッラーによる正しい教えを変えてしまっていたのです。

この結論に至って以降も、私は宣教師たちと一緒に外国に出向きましたが、そこで出会った人々には新約聖書を読み聞かせるのではなく、別の形で教えを説くようになりました。つまり、父と子と聖霊という三位一体について説明するのではなく、肉体が死んでも死なない魂があること、唯一で偉大な真の創造主が人間を創造したこと、この偉大な創造主は人をその人の罪ゆえに現世と来世で罰すること、しかし非常に慈悲深いこの創造主は、もし自分の行ったことを悔やんでいるならば、その人の罪を赦される、といった内容のことを伝えるようになっていったのです。

時が経つにつれ、私はただ唯一の神を信じるようになりました。そして、真実を求め、もっと深く掘り下げたいと望むようになりました。この時に、私はイスラームと向き合うようになりました。そして、この教えは私を惹きつけ、すべての時間をそのために費やしました。当時、私が住んでいたのは、誰も名前を聞いたこともないようなインドの辺境にある、イチュラという村でした。この村の人々は非常に貧しく、低い階級とみなされていました。私はただ神のご満悦を得るためだけに、唯一で慈悲深い神が存在することを村人たちに説明し、この世で進むべき正しい道を教えようと努めていました。奇妙なことに、私が教えようとしていたことはすべて、キリスト教ではなくイスラームにだけ存在するものでした。もはや私はキリスト教の伝道師ではなく、イスラームの宗教者のように教えを説いて回っていたのです。

あのような人の少ない寂しい場所で、教育もままならない村人たちの中で、どれだけの苦労をしたか、どれだけの犠牲を払ったか、どれだけの困難

に見舞われたかについて、長々と説明しようとは思いません。私が考えていたのは、ただこの村人たちを精神的にも肉体的にも清らかにし、偉大な創造主の存在を伝えることだけでした。

一人の時間には、預言者ムハンマドの生涯を読みました。彼の真の生き方について英語で書かれた本は非常に少なく、この偉大な預言者を非難し、汚し、欺瞞であると言って侮辱するため、キリスト教徒が手を尽くしていました。しかし、私はこのような敵意に満ちた本の影響を受けることはなく、完全な良心をもってイスラームを学ぶことができました。このようなことを続ける中で、イスラームこそが、唯一なるアッラーと真実を最も正しい形で示す真の教えであるという事実を受け入れるべきだと理解するようになったのです。

預言者ムハンマドのような偉大な預言者が、人類のために行った奉仕について学ぶにつれ、私は彼が預言者であることを否定することはできなくなりました。彼は確かにアッラーの使徒であったのです。当時、アラブ人は裸に近い身なりをして、ほとんど動物のように野蛮で無知な暮らしを送っており、また、多くの偶像や迷信を信じていましたが、預言者ムハンマドはただアッラーの恵みによって、彼らをわずかな期間のうちに、アッラーを信じる文明的な人々、そして、女性の権利を認め、誠実で善良な心穏やかな人々へと変貌させたのです。このようなことは、アッラーの恵み、助力なしに成し得ることではありません。私は、たった数百人しか住んでいない村で、言葉では言い表せないほどに奮闘したのです。それでも、哀れな村人たちを正しい道に導くことは叶いませんでした。このことを考えるたびに、預言者ムハンマドの成し遂げたことが、いかに偉大であったのかを実感として理解できるのです。あのようなことは、アッラーの使徒だけしか成し遂げられないことです。私にとっては、彼が預言者であることを心から信じるようになることは必然でした。

もはや、その他のイスラームの美点について、個別に説明していく必要はないことでしょう。なぜなら、アッラーと預言者ムハンマドを受け入れたのであれば、その人は既にムスリムになっているからです。かつて、あるインド人のムスリムが、私のところにやって来ました。ミアン・アミルッディン

という名前の上品な人物で、私は彼とイスラームについて長い時間語り合いました。このときの対話が私に最後の勇気を与え、正式にイスラームを受け入れることになりました。

私は、イスラームが真のアッラーの教えであること、そして、純粋、寛容、慈悲深さ、誠実といったその特性、あるいは、ムスリムが互いに兄弟であることをもって、いつかイスラームが世界中の人々を互いに結び付けてくれるであろうことを信じています。

私は今、自分の生涯における最終章となる日々を過ごしています。これから死ぬまでの間、イスラームのために奉仕することに自らを捧げたいと思っています。

## 18. ハールーン・ムスタファ・レオン男爵/博士（イギリス）

レオン博士は、イギリスの有名な一族の出身の男爵です。学術分野では哲学博士でもあり、1882年にムスリムとなりました。ヨーロッパやアメリカの多くの学会に参加して言語学や文学でも深い造詣を示し、特に『Isle』という雑誌に掲載された「人間の言葉の語源」という論文は全世界の注目を集めました。この論文により、アメリカのポトマック大学が修士号を授与しています。また、レオン博士は地質学の専門家でもあり、多くの機関からの招聘を受けて講演を行っています。1875年に設立された国際言語学・科学・芸術協会では書記に選出され、自身でも『The Philomeths』という雑誌を刊行しています。また、オスマン帝国のスルタン、アブドゥルハミド2世をはじめ、イランのシャー（王）やオーストリア皇帝からも称号を授与されました。

イスラームでは、論理的に理解しがたいことを信者たちに求めていない。これはイスラームにおける最も強固な基盤の一つとなっている。イスラームは、完全に知性や理性に適った形で伝えられる教えである。一方、他の宗教では、人々がたとえ理解できず、論理的に受容できず、信じ難い教義であろうと、無理をしてでも認めることが求められる。キリスト教では教会という権威が裁定を下す力を持っている。しかし、ムスリムはまず知性をもって学び、その上で信仰することが命じられている。預言者ムハンマドは次のよ

うに伝えている。「アッラーは知性や論理にそぐわないことは一切創造されなかった」。

また、別のハディースでは次のように伝えている。「人が礼拝し、断食をし、ザカートを支払い、巡礼を行い、そして教えの求めるすべての事柄を行ったとしても、ただアッラーが人に与えられた知性と論理を使った度合によって報償を与えられる」。

預言者イーサーが伝えた本来の教えでも、これと似たような信条が見られる。例えば、「すべてをまず経験し、よいものだけを受け入れなさい」というものである。しかし、時とともにこれらは忘れ去られてきた。クルアーンの合同礼拝章第5章では「律法（守護）の責任を負わされて、その後それを果たさない者を譬えれば、書物を運ぶロバのようなものである」と伝えている。

また、アリーは次のように語っている。「世界は闇である。知識は光である。しかし正しくない光はただ影である」。

ムスリムは、“イスラームが真実そのものである”ことを信じ、その光が知識や論理によって輝くこと、知識は事実から生じていること、そして、事実はただアッラーが人に与えた理性によって得られることを語っている。

アッラーが人類への大いなる恵みとして遣わした預言者ムハンマドは、死の間際まで人々が進むべき正しい道を説いていた。彼の最期の日々では、次のような出来事が起きている。

預言者ムハンマドは死の数日前、頭を妻のアーイシャの膝に載せて休んでいた。マディーナの人々は皆、預言者の病気を悲しみ、日々弱っていく姿を目にして大きな絶望感に包まれていた。男も女も子どもたちも泣いていた。その中には、白髪になり、肌もくすんで年老いた兵士たちもいた。この兵士たちにとって預言者ムハンマドは、ともに戦った司令官であり、指導者であり、リーダーであり、また親友でもある大切な仲間だった。それにもまして、彼らを闇から光へと導いた偉大な預言者であった。イスラームとともに、彼らにやすらぎと平穏を与えたこの祝福された預言者が、今や彼らに別離を告げようとしていた。年老いた兵士たちは、「我々の預言者様が亡くなってしまう」と思っただけで心は締め付けられ、目から涙があふれ、大きな

絶望に打ちひしがれていた。

ついに彼らは覚悟を決めた。この絶望感の中で預言者ムハンマドの前へと進み出て、涙を流しながらこう言った。「アッラーの使徒よ、あなたは重い病の中にいます。もしかしたら、あなたのことをアッラーがその身許へと呼ばれるのかもしれませんが。そして、私たちから離れていってしまうのかもしれませんが。その時、我々はあなたなくして一体どうすればよいのでしょうか。」

すると、預言者ムハンマドは「あなた方には、拠り所とすべきクルアーンがある」と答えた。彼らはさらに尋ねた。「アッラーの使徒よ、クルアーンが我々に多くの道を示してくれることは確かです。しかし、もし我々が求めたものを見つけられなかった場合、しかもあなたが我々の元を去ってしまったなら、誰が導いてくれるのでしょうか」。すると、預言者ムハンマドは「私があなた方に教えてきたとおりに振る舞いなさい」と答えた。しかし、彼らはさらに続けた。「アッラーの使徒よ、あなたが我々の元を去ってしまった後、まったく新たな問題が起こるかもしれません。これまでのあなたの言行から何も見つけられないときは、どうすればよいのでしょうか。」

預言者ムハンマドは、その神聖な頭をゆっくりと枕から上げ、次のように言った。「アッラーは、そのしもべ一人ひとりに、それぞれの道しるべを与えられた。それは、理性と良心を持った心である。もし、この道しるべを正しく用いれば、決して正しい道からそれることはない。そして、アッラーの慈悲に至ることができるだろう。」

このように、私が幸いにも信じることになったイスラームは、完全に知性と論理をもとにした、真のアッラーの教えなのである。

- 財産や地位を誇るべからず 自身に自惚れるべからず
- 向かい風が吹き すべてを麦穂のように吹き飛ばす

## 19. ウィリアム・ピックハード（イギリス）

あるハディースによれば、「すべての子どもはイスラームにふさわしい、適した状態で生まれる。その後、両親がその子をユダヤ教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒とする」とされています。その意味では、私も本来はムス

リムとして生まれたといえます。しかし、このことを理解するために、何年もの歳月が流れました。私はまだ子どものころから、過去のことにとっても興味があり、大学を卒業した後には記者になりました。当時はまだ駆け出しで、これからどうなるのかも分かっていませんでした。また、私はキリスト教徒として、神や礼拝のことをいくらか学んでいました。しかし、ただ教わったことだけではなく、歴史上の高貴で勇敢な人物に対しても崇拜に近い強い愛着を抱いていました。やがて、私は当時イギリスの植民地だったウガンダに赴任することとなりました。アフリカに着くと、そこでの生活はこれまでとまったく異なることに衝撃を受けました。アフリカの人々の生き方、対人関係、さまざまな出来事に対する反応など、イギリスで考えたり想像したりしていたこととはまるで違っていたのです。

アフリカの人々は、まだ原始的で非常に困難な生活を送っていて、さまざまな災難に直面していました。しかし、心から神を信頼し、最も絶望的な時ですら陽気さを失うことはありませんでした。どれほど貧しくても、ためらうことなく助け合っていました。彼らは、私たちのような人間には分かり得ないような愛情と慈悲で互いに結び付いていたようでした。もともと、私は学生だった頃から、オリエントに対する関心がありました。ケンブリッジ時代には『千夜一夜物語』を好んで読んでいましたが、アフリカ赴任中もよくこの本を手にしていました。ウガンダで過ごした苦しく厳しい生活が、私をオリエントへと近づけることとなったのです。『千夜一夜物語』を読むときには、自然とウガンダの人々と物語の人物とを比べることになり、私もまた彼らとともに生きていたのです。

私がウガンダでの暮らしに慣れてきた頃、第一次世界大戦が勃発しました。軍隊に志願しようと手続きをしていたところ健康を害してしまい、一旦は入隊を見送りました。その後、回復してから改めて志願し、フランスのドイツ戦線へと向かうことになりました。私はあの恐ろしい1916年のソンムの戦いに加わったのです。私はこの戦争で負傷し、ドイツ側の捕虜としてドイツに送られ、病院に入りました。この病院では本当に恐ろしい様子を目の当たりにしました。人々は戦争のせいで異常だったのです。病院には多くのロシア人捕虜がいて、赤痢のために痛ましい状態になっていました。ドイツ

の食糧事情は劣悪で、捕虜や病人には十分な食事は与えられません。私も飢えに苦しんでいました。右腕と左脚の傷は一向に良くなり、歩行困難になってしまいました。そこで、ドイツ側に申請し、この状態では二度と兵士にはなれないため、スイスの捕虜交換委員会を通じて本国に送還してもらえよう求めることにしました。やがてこれが了承されてスイスに移送され、そこで再び病院へ入ることになりました。ただ、もう腕と脚は使うことができなくなっていました。私は一体どうなるのだろうか？ これからどうやって生きていったらよいのだろうか？ 考えれば考えるほど私は失望していききました。そう、このときのことでした。あのような精神状態に陥っているときに、ウガンダで買ったある本で読んだ、印象的なクルアーンの章句が思い浮かんだのです。ウガンダにいたとき、私はその本を大変気に入って何度も読み、ほとんど暗記していたのでした。毎日何度もそれらの言葉を繰り返し思い浮かべていました。すると、やすらぐような気持ちが芽生えてきました。希望の扉が開くように感じ始めたのです。実際、その通りになりました。スイスの医師が私をもう一度手術してくれ、脚が治り始めたのです。私はこれをクルアーンのおかげだと感じています。歩けるようになって、まず私が最初にしたことは、本屋に行きクルアーンの翻訳本を買ってくることでした。この本は今でも私の最も尊い友です。この時に、クルアーンの翻訳をはじめから終わりまで読みました。読んでいくにつれて心が楽になり、魂が高められ、あたかも光の塊が心に現れたかのような感じでした。脚も完全に治りました。ただ、右腕は動かすことはできませんでした。それでも、クルアーンが命じていたとおりにタワックル、つまり、自らすべきことをしたら後はすべてを神に任せ、左手で書くことを覚えました。このタワックルの考えのおかげで多くのことが楽になったのです。左手を使えるようになって私が最初にしたことは、左手でクルアーンの章句を書くことでした。イスラーム関連の本を読んでいた頃、その中の一冊で出会った物語は、私に大きな影響を与えることになりました。その物語では、墓地にいる若者が、周りに全く気付くこともないまま、どこにいるのかも忘れるほどにクルアーンを読んでいるという描写がありました。私も自分自身をこの若者のように考えて、ただアッラーの恵みに自らを委ね、クルアーンを読みました。もはや、私はムス

リムとなっていたのです。

私は1918年にロンドンに戻りました。そして、1921年には、ロンドン大学でアラビア語の講座を受けるようになりました。このときのアラビア語講師で、イラク人のベルシャフ氏が、授業でクルアーンについて触れたことがありました。そして、「信じるかどうかはあなた次第です。しかし、それは非常に興味深く、研究する価値のある書物であることは分かるはずです」と紹介しました。そこで私はこう言いました。「私はクルアーンを知っています。読みました。しかも何度も。そしてそれを信じています」。彼は非常に驚いていました。数日後には、私をノッティング・ヒル・ゲートにあるロンドンモスクに連れて行ってくれ、1年ほどそこでの礼拝に参加した後、1922年に正式にムスリムへの改宗手続きを行いました。

今や、1950年代になっています。私はこれまで、イスラームの命ずることすべてにしっかりと結びつき、そのことに大きな喜びを感じてきました。アッラーの力、慈悲、援助に限りはありません。人生という旅路で、私たちが運ぶことのできる、また、来世へも持って行くことのできる唯一の富は、アッラーへの感謝と、その崇高な力の主に愛情を持ってつながること、そして、アッラーに対して礼拝を行うことなのです。

## 20. メスーデ・スタインマン（イギリス）

イスラームほど理解するのが容易で、人に勇気を与える宗教は他にない。魂をやすらぎへと導き、満足して今を生きることを可能にし、死後には永遠の幸福へと至らせる唯一の教えがイスラームである。

人間は、アッラーが創造した数々の被造物の一つである。従って、他の被造物とのつながりを持ってはいるが、最も完成された被造物でもある。人間にこうした特性が与えられたのは、その魂に拠っている。人間は常に、その魂をさらなる高みへ導こうと努めるものである。そして、魂を清め、育むのは宗教に他ならない。

人間とそれを創造した偉大なる力の主との間には、どのような関係があるのだろうか。このことについて教えるのもまた、宗教であることは疑いが

ない。そこで私は、宗教に関してさまざまな学者たちが何を語っているのかについて調べることにした。次に一例を紹介していきたい。

カーライル『英雄崇拜論』より：

「一人の人間の宗教、彼の心が信仰していることは、その人の最も明白な特性である。宗教とは直接人の心に入るものである。彼の活動をそれが支配する。彼にその役割を教える。彼が行く道を教え、その結末をも告げる。」

チェスタトン『正統とは何か』より：

「宗教とは人が、自分もしくは他者の存在に何があるのかという点で得ることのできる、最も崇高な真実を示す。」

アンブローズ・ピアス『悪魔の辞典』より：

「宗教は人々に、彼らが知らなかった多くのことを教え、恐れと希望を接種する源である。」

エドマンド・バーグ『フランス革命の省察』より：

「すべての正しい教えが命じていることは、神の命令に従い、その教えに敬意を抱き信頼して、それによって可能な限り神のご満悦へと近づくことである。」

スウェーデンボルグ『人生教義』より：

「宗教とは、善いことを行うという意味である。宗教の存在は、善である。」

ジェームズ・ハリントン『オシアナ共和国』より：

「それを恐れていると、あるいはそれに慰められていると、この世界では誰もが皆、多少は宗教とつながりを持っている。」

この世においては、知らないことや分からないこと、説明できないことに誰もが何度も直面する。そのことについて人々に説き、完全な信仰、信条を与えるものが宗教なのである。

それでは、なぜ私はイスラームこそが、世界の宗教の中で最も完全で、正しい教えであると信じているのだろうか？ これに関しては次に述べていきたいと思う。

第一に、イスラームでは、唯一なるアッラー以外に神は存在しないこと、アッラーは生みも生まれもしないこと、アッラーに類する他の創造主は存在しないことを伝えていることである。これほどに、アッラーの存在、唯一

性、尊厳について、アッラーにふさわしい威厳をもって説く教えは他に見当たらない。クルアーンのフード章第 4 節では「あなたがたはアッラーの許に帰るのである。かれは凡てのことに全能であられる」と記されている。また、夜の旅章第 55 節では、「あなたの主は、天と地にある凡てのことを最もよく知っておられる」と伝えている。さらに、クルアーンの他の章句でも、常にアッラーのことを「唯一の創造主である」「永遠である」「無限である」「すべてをご存知である」「最も正しい判断を下す」「最大の援助者である」「最も慈悲深い創造主である」「最も赦されるお方である」という言葉で語っている。このようなことを読むにつれ、人はどれほどまでにアッラーに惹かれ、その御許へといかにして至り、いかにその恩恵と庇護を求めるものなのか、私が言い表すことは到底できない。クルアーンの鉄章第 17 節では、アッラーが「あなたがたは、一度死んだ大地をアッラーが甦らされることを知れ。われは種々の印をあなたがたのために明示した。恐らくあなたがたは悟るであろう」と伝えていることが記されている。また、人々章でも「言え、『ご加護を乞い願う、人間の主、人間の王、人間の神に。こっそりと忍び込み、囁く者の悪から。それが人間の胸に囁きかける、ジン（幽精）であろうと、人間であろうと』」と述べられている。

このような崇高な言葉を読んでも、偉大なる創造主を信じずにいられるものだろうか。創造主の庇護を求めずにいられるものだろうか。これらの言葉は、人々を守り続ける慈悲深い創造主について、その存在を信じ、やすらぎを感じつつ正しい道を選ぶのに十分なものではないだろうか。

イスラームでは、それが最も正しい教えであること、また、イスラーム以前にもたらされた教えのうちの正しい部分も包括していることを明白に示している。イスラーム最高の書、クルアーンでは、そこに記されているすべての項目が単純明快で、誰もが理解可能な論理的なものである。これは、全くもって事実なのだ。もし、アッラーとしもべとの間で調和ある絆を結んで、物質的にも精神的にもつながることで現世と来世をやすらぎのうちに暮らすことを望むのであれば、実際にイスラームを受け入れてみるべきである。イスラームによってのみ、我々は精神的、肉体的に成長することができる。

キリスト教では、ただ魂や心に着目しているため、あらゆるキリスト教徒に耐えうるものではない。精神的な負担をかけているのである。また、キリスト教では人を罪人とみなし、非論理的で本人すら理解できない中で贖罪を求めている。これに対して、イスラームは、ただ愛情のみをもとに築かれている。また、キリスト教では、多くの人々のさまざまな精神状態を学者たちが研究した結果、人々に負わされた重荷の中から、ほんのひとかけらの神への愛情をようやく見出すことができるかもしれない。しかし、このようにして見つかった愛情のかけらですら、現在のキリスト教では多くの迷信の影響を受けてほとんど消滅してしまっていることを目にし、学者たちを悲しませることになるだろう。コールリッジの著書では、「キリスト教を深く愛する人が、少しずつキリスト教から遠ざかり、教会を嫌悪するようになっている。もはや、自己愛こそが最大の愛となっていることは一つの真実である」と記されている。だが、イスラームでは、アッラーを敬い、愛し、その命じるところに従うこと、そして、理性や論理を用いることが命じられている。確かに、キリスト教でも一部の真実は残っていよう。しかし、イスラームではすべてが真実である。クルアーンでは、ユースス章の第 108 節において、民族や肌の色にかかわらずすべての人々に対し、アッラーは次のように伝えている。「言ってやるがいい。『人びとよ、主から、あなたがたに真理が齎されたのである。導かれる者は、只自分を益するために導かれ、迷う者は、只自分を害するために迷う。わたしは、あなたがたの後見人ではない』」

私は、これらのことを読み、また、クルアーンの意味を十分把握できるようになったとき、私の疑問に対してイスラームが最も正しい答えを出していることを理解し、喜びのうちに自らムスリムとなった。イスラームは私に真の道を示し、勇気を与えた。現世でやすらぎを得て、来世で救いに至るためには、ムスリムになる以外に道はないのである。

## 21. マーヴィス・B・ジョリー（イギリス）

私はキリスト教徒としてイギリスで生まれました。洗礼も受け、聖書に書かれたことを学びながら育ちました。教会に差し込む色とりどりの光、説教

台で揺らめくろうそく、音楽、焚かれた香、司祭たちの立派な服…。子どもの頃にはそのようなことに強い印象を受けました。意味などまったく分からなくとも、祈りの言葉が読まれるときには、その韻律で私の心は震えたものです。子どもの頃の私は、恐らく熱心なキリスト教徒だったのでしょう。しかし、成長を重ねて私の理解力が上がってくるにつれ、疑問が生じるようになりました。それまで完全に信じ込んでいたキリスト教に、いくつか足りない部分が見られるようになったのです。時間がたてばたつほど、この私の中の疑念が強まっていくことに自分でも気が付いていました。そして、少しずつ、キリスト教から離れ始めました。当時の私は、もはやどの宗教も信じてはいませんでした。子どもの頃に私を夢中にさせた、教会のあの雄大な光景は幻のように目の前から消えていきました。学校を卒業する頃には、完全に無宗教者となっていたのです。しかし、しばらくして私は次のことを感じるようになりました。何も信じないことは、人の魂にぼっかりと深い穴のような欠乏感、空虚感を残すのです。人間は絶対的に何かの支えや庇護を必要としています。そこで、私はいろいろな教えを調べ始めました。

最初に調べたのは仏教でした。仏教の基礎とされる「八正道」というものについてよく調べてみました。この八つの実践徳目には、深い哲学や素晴らしい忠告も見られました。しかし、正しい道を示し、正しい道を選ぶために必要な知識としては、十分ではないように感じました。

次に、拝火教について調べてみました。私は三位一体ですら違和感があったのに、この教えでは多くの神々が存在するとしていました。また、この教えには不可思議な教義や迷信にあふれていました。私がこの教えを受け入れることは到底不可能でした。

続いて、ユダヤ教について調べました。ユダヤ教は私にとってまったく新しい教えではありませんでした。というのも、聖書の「旧約聖書」の部分は、ユダヤ教の「律法」から引用されているものだからです。しかし、私はユダヤ教にも満足できませんでした。確かに、ユダヤ教では唯一の神を信じます。この部分は正しいと思います。けれども、それ以外の部分にはまったく納得できませんでした。ユダヤ教は本来、人々が生きる上での道しるべとなるべきであるのに、数々の宗教儀式や形式に縛られてしまっていました。

友人の一人は、私に降霊術を勧めてきました。「魂と会話することは宗教と同じだ」と言うのです。これはまったく馬鹿げていました。降霊術というものは、単に自分に催眠術をかけることで、人々の魂を導くことなど決してあり得ないということがすぐに分かりました。

やがて、第二次世界大戦も終わり、私はある職場で働くようになりました。それでも、私の魂はやはり宗教を求めています。そんなある日、新聞広告が目につきました。そこには、預言者イーサーの神性に関する講演会が開催されること、その講演会にはどの宗教の人でも参加できることが書かれていました。私はこの講演会に興味を持ちました。なぜなら、果たしてイーサー（イエス）が神の息子であるのかどうか、討論されることになっていたからです。私はこの講演会に参加し、そこで一人のムスリムと知り合いました。このムスリムは、私の質問に対して、とても論理的で素晴らしい答えを与えてくれたのです。それまでは思いもしなかったのですが、イスラームについて調べてみようと思いました。そして、ムスリムが啓典とするクルアーンを読み始めました。驚くことに、この書物で語られていることは、20世紀のどの政治家の話よりも崇高であることは一目瞭然でした。あのような言葉を人間が語ることは不可能です。だから、かつて私たちが教えられたこと―「イスラームは偽りで、クルアーンは創作に過ぎない」ということは、もはや信じることができなくなりました。クルアーンが創作された書物であるはずがなかったのです。あれほどまでに完璧な言葉で語れるのは、人智を超越した存在のみが可能なことなのです。

それでも、私は不安でした。そこで、ムスリムになったイギリス人女性たちに会い、アドバイスを求めました。彼女たちはいくつかの本を勧めてくれました。その中には、預言者ムハンマドと預言者イーサーを比較する『ムハンマドとキリスト』という本や、イスラームについて説明した『イスラーム』という本がありました。また、『キリスト教の源』という本では、キリスト教の多くの礼拝行為は原始時代の儀式を基に作られたものであり、結果として現在のキリスト教は偶像崇拝に陥っていることが書かれていました。

実は、初めてクルアーンを読んだときには、退屈してしまったことを白状します。というのは、繰り返される部分が多かったからです。クルアーンは、

少しずつ人に影響を与えていくものだということを認識すべきでした。クルアーンをしっかりと理解するためには、何度も読むことが必要です。今は、毎晩クルアーンを読まずに寝ることはありません。私が最も影響を受けたのは、クルアーンが人のための完全な道しるべであるという点です。クルアーンには、人々が理解できないことは記されていません。ムスリムは、預言者たちもまた、自分たちと同様に人間であると理解しています。同時に、預言者たちは特に高い理性や道徳を持ち、罪や欠点がないという点で、他の人間との間に違いがあったことも分かっています。しかし、預言者たちであっても、神性は持っていないのです。また、イスラームでは、預言者ムハンマド以降にはもはや預言者が遣わされることはないとしています。私はこのことについて疑問を持ち、「なぜ今後は他の預言者が遣わされないのでしょうか？」と尋ねたことがあります。そのとき、あるムスリムの女性が次のように説明してくれました。「ムスリムの啓典であるクルアーンは、人が必要とするすべての道徳や規則、アッラーのご満悦へと至る道、そして、現世と来世でのやすらぎや救いのために必要なことをすべて伝えていきます。だから、もはや人類はこれ以上、別の指針となるものや預言者を必要としないのです。」

この言葉が実際に正しいことは、次の事実からも明らかです。すなわち、現在、クルアーンが下されてから14世紀もの時間が経っていますが、クルアーンに記された内容は現代の生き方や科学レベルからみても、変わらずに合致したものとなっています。ただ、当時の私はまだ納得していませんでした。なぜなら、14世紀も過ぎてからです。571年に生まれた預言者ムハンマドが伝えたイスラームの中には、さすがに今日の条件に合わないことがあるのではないかと私はイスラームの欠点がないか、注意深く探し始めました。私の魂は、イスラームを完全に信じていること、これが真実の教えであることが明らかに分かっていたのですが、私はそれでも欠点を見つけようとしていたのです。それは恐らく、子どもの頃にキリスト教の司祭から、イスラームとは欠点の多い、低俗で迷信的な教えであると教え込まれていたからだだと思います。

まず、一夫多妻制について、これは大きな誤りなのではないかと思いまし

た。なぜ、一人の男性が四人の女性と結婚することが許されるのでしょうか。先に述べたムスリムの女性は、この点について尋ねると、次のように教えてくれました。「イスラームが最初に啓示された頃、アラブ地方の男性は好きなだけ何人もの女性と暮らすことができ、また、これらの女性たちに対して何の責任も負ってはいませんでした。イスラームでは、一人の男性が結婚できる女性の数を大きく減らし、妻の生計に責任を負うこと、妻たちの間で公正を保つこと、離婚するときには補償金を支払うことを命じ、女性の社会的地位を改善することとなりました。また、身寄りのない女性たちは、この制度によって一つの家族の一員として加わることが可能になり、奴隷のような扱いを受けずに済むようにもなったのです。さらに言えば、男性が四人の女性と結婚することは命令ではありません。条件を満たした人への許可に過ぎないのです。条件を満たすことができなければ、複数の女性と結婚することは禁じられています。そのため、多くの男性は一人の女性だけと結婚しています。四人の女性との結婚は単に許されているだけなのです。一方で、アメリカのモルモン教では、男性は複数の女性と結婚するという教義があると聞いています。」そして、彼女はこう尋ねました。「イギリスの男性は全員、本当に一人の女性とのみ暮らしていますか？」私は赤面する思いで答えるしかありませんでした。「今日の西洋世界においても、多くの男性が婚前にしる、結婚後にしる、複数の女性と関係を持っています。」また、このムスリムの女性が語った言葉は、職場での事故や戦争で夫を失った、身寄りのない女性たちのことを私に思い起こさせました。男性の庇護を受ける必要がある場合も、確かに存在するのです。第二次世界大戦が終わった頃、イギリスの“Dear Sir”というラジオ番組で、気の毒なイギリス人女性が、こう懇願していました。「私はまだ若い女性です。夫は戦争で失いました。今、私には身寄りがいけません。どなたかに守ってもらうことはできませんでしょうか。優しい男性の第二夫人になることも、第一夫人に従うことだって喜んで受け入れます。ただ、この孤独から救われたい。」

イスラームの結婚制度は、こういった見落とされがちな声にも応えられるものであることが分かってきました。複数の妻は命令ではなく、許可なのです。現在では、そもそも失業や貧困も多く、ほとんど見られなくなった結

婚形態ではありますが、これをもってイスラームの欠点だとは言い切れなくなりました。

さて、いまだイスラームに反抗しようとしていたキリスト教徒のイギリス人女性、つまり私は、別の欠点を見つけたと思いました。ムスリムの女性に、「毎日、五回も礼拝を行うことは現在の生活様式に合いますか？ これだけの礼拝は多すぎるのではありませんか」と尋ねました。彼女は微笑んで、私にこう尋ねました。「あなたはピアノを弾くと聞いています。音楽に興味がありますか？」私は、答えました。「ええ、とても。」

「では、毎日練習するのですか？」「もちろんです。仕事から帰ったら、短い時間でも毎日ピアノを弾いています。」

すると、ムスリムの女性はこう言いました。「5回分を合わせても、30分か45分かでできる礼拝はあなたにとっては多すぎると感じるのでしょうか。あなたがピアノの練習をしなければ、その技術が落ちるように、アッラーを想って伏し、その恵みに感謝することが減れば、アッラーへと至る道は遠ざかってしまいます。毎日の礼拝は、アッラーの正しい道を一步一步進むことを意味するのです。」彼女の言っていることは正しいものでした。どのムスリムも、アッラーのことを十分に想い、アッラーへの愛情を心にしっかりと刻まなければならないのです。心はアッラーの家です。家にその持ち主をいれさせようとしなければ、家に対しても、持ち主に対しても反抗したことになります。日に五回の礼拝は、人を破滅から救います。現世での世俗的ではかない楽しみにふけり、アッラーを忘れた人々に、礼拝はその主を思い出させるのです。

もはや、私がイスラームを受け入れることを妨げるものは何もありませんでした。私は、魂のすべて、精神のすべてをもってイスラームを受け入れました。これまで見てきたように、私はイスラームと出会ってすぐに、何も考えずに選んだわけではありません。十分に調べた上で、欠点がないかを探し、それに対する答えを見出し、この教えがどの面からみても完全に完成されていることを理解し、ムスリムとなったのです。

## 22. ザイナブ・エヴェリン・コンボード（イギリス）

なぜ私がムスリムになったのかは、常に尋ねられることです。私は有名な家の娘として生まれ、夫もまたよく知られた人物です。なぜムスリムになったのか、と聞かれたときには、イスラームの光がいつ私の魂に芽生えたのか、はっきりとは分からないと答えています。私はずっとムスリムだったように感じているからです。それは、決して奇妙なことではありません。なぜなら、イスラームはごく自然で、正しい教えだからです。子どもは皆、ムスリムとして生まれます。もしひとりでに育っていくならば、イスラーム以外の教えを選ぶことはないでしょう。あるヨーロッパの作家が言っているように、「イスラームは理性ある人々の教え」なのです。

あらゆる宗教を比較してみれば、最も完全かつ自然で、最も論理的なのがイスラームであることは、すぐに理解できることでしょう。イスラームのおかげで、世界中の多くの難しい問題が簡単に解決され、人々はやすらぎを得ています。イスラームでは、人が原罪を負って生まれてきたということや、この世でその罪の償いをしなければならぬということとは決して認めません。ムスリムは唯一であるアッラーを信じます。また、ムーサー、イーサー、そしてムハンマドも私たちと同じ人間です。アッラーは人々に正しい道を示すために、預言者として彼らを選んだのです。懺悔したり、祈ったり、赦しを願ったりするために、アッラーとしもべとの間で介在するものは何もありません。私たちは、いつでも自分からアッラーに近づくことができ、自分の行いについてのみその責任を問われるのです。

「イスラーム」という言葉は、アッラーに服従すること、そして預言者ムハンマドを信じることを意味します。そして、ムスリムとは、この世界を創造したアッラーの命に従い、すべての被造物とともにやすらぎの中で生きる人々のことです。私は、イスラームは次の二つの基本的な信条のもとに成り立っていると考えています。

- 1) アッラーは唯一であり、ムハンマドはアッラーが遣わした最後の預言者であること。
- 2) 人々があらゆる迷信や、根拠のない教義から完全に救われるようになること。

また、イスラームの基本的な義務の一つであるハッジは、非常に大きな影響を人々に与えているのではないかと感じています。世界各地から集まった何十万ものムスリムが、貧富の差や、民族、国、肌の色などの区別なく、ただ簡素な布に身を包み、アッラーのために共に平伏するというこの上なく崇高な祈りの様式は、果たして他の宗教にあるものでしょうか。偉大な預言者がイスラームを伝え、イスラームの敵と戦い、強い忍耐力を示したあの神聖な土地で、ともに礼拝を行ったムスリムは一層互いに深く結ばれ、互いの苦しみのための解決策を見つけようと努めるようになり、アッラーの示した道とともに歩いていくことを改めて心に誓うことは間違いありません。また、ハッジは世界のあらゆるムスリムが互いに知り合い、互いの苦しみを知り、互いに自分たちの経験を教え合う機会にもなります。自分の国で礼拝を行うときに向かっていたその中心地で、世界中のムスリムがともにアッラーの前に立ち、ただ一つの集団として自らを委ねているのです。

ハッジを一度でも目にしたならば、イスラームの偉大さを証明するのに十分なことでしょう。それは、まさにイスラームそのものです。私はこの偉大な教えを信じる者の一人となったことに、喜びと嬉しさにあふれています。

### 23. ムハンマド・ジョン・ウェブスター（イギリス）

私は、完全なプロテスタント教育のもとロンドンで育った。1930年、まだ若い学生の頃、他の若者たちもそうであったように、私もまたさまざまな出来事に直面し、それを理解しようと努めていた。その一つが、宗教とこの世界との関係、つまりやすらぎをもって生きるためにどのように宗教と対峙すべきかを考えることだった。そのときに、自分が属しているキリスト教は、この点において非常に弱く無力だったことに初めて気が付いたのである。なぜなら、そもそもキリスト教では、この世界を悪事に満ちた苦難の場であるとし、人間は原罪を負って生まれてきた存在であると考えていたからである。したがって、人々に対して、容易に生きる道を示すどころか、行うことすべては罪であり、その罪から救われるためには何の手段もなく、代わりに、ただ神父だけがアッラーに願いを届けられると教えているのだ。まるで、キリスト教は完全に人々を放置しているようで、ただ日曜日には、あ

の憂鬱な雰囲気の中で祈りを捧げるよう勧めてくるのである。当時のイギリスは酷い経済状況にあり、貧困にあえいでいた。人々は生活にも政府にもまったく満足していなかった。そのような困難な日々においても、キリスト教は人々の救いとはならず、この状況に耐え得る力を与えることもできなかった。このことは、私に大きな影響を与えた。理性よりも感情が先立ち、宗教は不要だと確信していたのである。キリスト教を拒絶し、多くの若者たちと同様、無宗教や共産主義へと傾いていくこととなった。

共産主義は、遠くから聞いている分には、若者に希望を与えるものだった。というのも、経済破綻の中で苦しみ、生きる力を見つけれない者たちにとっては、偏った富や階級を取り払うと主張する共産主義は救世主のように映ったからである。しかし、私はすぐに、共産主義者の主張が、ただのプロパガンダで空虚な言葉の羅列に過ぎないことに気が付いた。彼らにもやはり、階級や富の差が存在していたのだ。どの国もすべて同じだった。だから私は共産主義に見切りをつけ、哲学にのめり込むようになっていった。そして、自らを汎神論者と称して、すべてに神の存在を認めるという考えに惹かれていった。

当時、西洋諸国でイスラームに触れることはごく稀なことだった。なぜなら、キリスト教世界では、十字軍以来続くイスラームに対する敵対心があったからである。ヨーロッパの人々は何も知らずに、ただイスラームに対して憎悪をもって拒絶する。子どもたちをイスラームの敵になるよう育てていく。イスラームについては口にするだけで、忌まわしいと見なされる。誰かがイスラームについて話したならば、皆が顔をしかめて黙り込むのである。ちょうどこの頃、私は仕事でオーストラリアへ行くことになった。私もイスラームを憎悪するよう教育されていたのだが、なぜかこの地でイスラームに関心を抱き、クルアーンの翻訳を手にとった。しかし、この本の翻訳者による前書きを読んだだけで、その本を閉じてしまった。というのは、この翻訳者が前書きで、クルアーンについての非常に厳しい言葉を並べていたからである。クルアーンを侮辱していたので、そんな本を読むことは無意味なように思われた。しかし、私はその後考え直した。キリスト教徒がイスラームを敵視している以上、この翻訳者もまたその影響を受け、誤った理解や翻

訳をしている可能性があるのではないか。私は改めてクルアーンに関心を持つようになり、今度は真剣に向き合ってみることにした。その数週間後、オーストラリア西部にあるパースに行く機会があり、その街の大きな図書館を探して、ムスリムによる解釈が付いたクルアーンがあるかどうか調べてみた。望むものは見つかった。その本を開き、最初の章、開端章を読んだとき、私がどれほど感動したか言葉にすることはできない。開端章は「万物の主への感謝」に始まり、「私たちに正しい道を示し給え」と願っていた。何と素晴らしいことだろう。私は開端章を何度も読み返した。ここに述べられている偉大な創造主は、「ラフマーン、ラヒーム」すなわち非常に慈悲深い神である。キリスト教が教えているような、罪を負った存在として人々を創った主では決してないのだ。私はクルアーンを読み始め、読むにつれて我を忘れて没頭した。私のすべての願いや考えの答えを、この聖なる本に見出すことができた。何時間も過ぎ、私は自分がどこにいるのか、何時になっているのかも忘れていた。図書館では、クルアーンと一緒に、預言者ムハンマドの生涯に関する本も見つけてくれていた。私は我を忘れてこれらを読み続けた。ついには図書館の人がやって来て、「閉館時間です。もう図書館を閉めます」と言われるまで気が付かなかった。図書館から帰りながら、「ついに目的を達した、私はムスリムだ」と何度もつぶやいた。私はついに、アッラーからの助けをもって、その導きに至ったのである。

家に戻る途中、どこかで温かいコーヒーを飲もうと適当な場所を探していた。通りを下りていく途中、私の頭の中はただクルアーンとイスラーム、アッラーのことだけが存在していた。どこに向かっているのかすら分かっていなかった。突然、私の足がひとりでに止まった。顔を上げると、赤レンガの建物の前にいた。足が勝手にここに連れてきたのだ。建物の上にある碑を読んだ。そこはオーストラリアのモスクだった。

私は思わず、自分に言い聞かせた。「アッラーはお前に正しい道を与え、何をすべきか教えた。お前はイスラームを知った。それからアッラーは、お前をモスクの扉の前まで連れて来た。さあ、すぐに中に入り、この教えを受け入れるのだ。」そして、私は中に入り、ムスリムになったのである。

ムスリムになったこの時まで、私には一人のムスリムの知り合いもいな

かった。自らイスラームを見出し、そして受け入れたのである。私を導いてくれた人は誰もいなかった。私を導いてくれたのは、私の理性に他ならなかった。

## 24. アブドゥッラー・バターズビー（イギリス）

おそらく 25 年前のことだったと思います。私がミャンマーに滞在していた頃、気分転換にと、毎日川に行って中国式の小舟に乗っていました。小舟を漕いでくれていたのは、東パキスタン出身のシャイフ・アリという名前のムスリムでした。彼はいつも、ムスリムとしての宗教上の務めを果たそうとしていました。時間に遅れることなく、熱心に礼拝を行う姿勢に感心し、私はやがてイスラームとは何かということに興味を持つようになりました。彼のような素朴な人に、これほどまでに強い信仰心を持たせて行動させるイスラームの本質とは、一体何なのか理解しようと思ったのです。彼らはイスラームの教えと強く結びついていました。私は当初、ミャンマー人という民族が、世界で最も信心深い人々なのではないかと考えました。しかし、同じ民族でも仏教徒の礼拝には多くの問題があることは明らかでした。彼らはパゴダという塔を崇拜し、常に次のような言葉を唱えていました。「ブッダ カラナ ガチュカミ ダマ カラナ ガチュカミ サンガ カラナ ガチュカミ」。

その意味は、私に説明してくれたところによれば、「ブッダよ、どうか私たちに道を示してください。私たちの法となってください。私たちの魂を高めてください」というものでした。この祈りはとても単純なもので、人々はそれで満足するはずもなく、魂に何の影響も与えられない言葉でした。偉大な創造主についてまったく触れられることがなかったからです。

一方、私の船の漕ぎ手だったムスリムの礼拝は、とても素晴らしいものでした。彼とはイスラームについて語り合うようになり、一緒に過ごす間に、イスラームについてたくさんの質問をしました。それに対して、あの素朴な人物が、非常に論理的で目の覚めるような答えを私に与えてくれたのです。私はイスラームに関する本を読むようになりました。これらの本から、預言者ムハンマドが、アラブで短期間のうちにどれほどのことを成し遂げたかということについて、驚きをもって学んでいきました。やがてムスリムの友

人ができ、彼らともイスラームについて話し合うようになりました。しかし、ちょうどその頃、第一次世界大戦が勃発し、私は即刻アラビア戦線に加わるよう命令を受けました。私が到着した場所には仏教徒はおらず、ムスリムに囲まれていました。歴史上、アラブ人は初めてムスリムになった人々です。また、アッラーの書であるクルアーンは、アラビア語で授けられています。アラブ人と接点を持ったことで、私のイスラームへの興味は一層高まってきました。戦争が終わると、アラビア語を学び始めました。また、イスラームに関する本も読み続けていました。私にとって最も魅力的だったのは、ムスリムが唯一なるアッラーを信じていることでした。一方、キリスト教では三位一体という概念を信じなければならないのですが、これは非論理的なことだと感じていました。そのようなことを考えていくうちに、イスラームが最も正しい教えであることを少しずつ理解していきました。真に唯一の創造主を信仰する教えが、正しい宗教であると受け入れるようになったのです。そして私は 1932 年から 42 年までの間、パレスチナに 10 年ほど赴任し、そこでムスリムになることを決め、1942 年に正式な手続きを行いました。その時以来、私は完全に自分がムスリムであると言えます。

私は、アラブ人が「聖なる町」と呼ぶエルサレムで正式にムスリムとなりました。しかし、ムスリムであることを明らかにすると、いくつか残念な出来事も起こりました。我が国の政府は私がムスリムになったことを好ましくは思わなかったのです。私は軍を追われることになりました。そのため、まずエジプトへ、その後はパキスタンへ行き、ムスリムの兄弟たちと一緒に暮らすことになり、そこで、イスラームについて書くようになりました。現在、世界には 5 億人以上のムスリムがいて、それが互いに皆兄弟なのです。ムスリムになるということは、真の崇拝対象であるアッラーを信じ、アッラーとの絆を結ぶということを意味します。アッラーとの絆を結ぶためにも、偉大な預言者ムハンマドが伝えたように行動する必要があります。そして、私は今、敬意を込めて思い出しています。かつてイスラームの輝かしい道を教え、純粋な礼拝のあり方を示し、私をアッラーへと導いてくれた、しかし、当時は単に素朴な人物と思っていた、あの謙虚な漕ぎ手との思い出を。私も

彼のような純粋なムスリムになろうと努めています。また、そう努めることで、害を与えるものから自分を守ることになっていることも分かっています。

アッラーのご加護のもと、私は今もムスリムたちに囲まれ、ムスリムとして生きています。そして、礼拝を行う度に、今は亡き私の師、かつて私の舟の漕ぎ手だったシャイフ・アリのためにも願いをかけ、彼の神聖な魂のために開端章を詠むことを決して忘れることはありません。

## 25. フセイン・ロフ（イギリス）

一人の人間が子どもの頃に教えられた宗教を離れ、別の宗教を選ぶことになった場合、そこには、その人の想いや哲学、あるいは社会的な理由があるものです。私は、このうちの少なくとも二つに答えてくれる宗教を信じようとしていました。そこで、学業を終えると、世界のどの宗教を信じるべきか見極めるため、ひとつずつ調べ始めました。

私の母はカトリック、父はユダヤ教徒でした。しかし、両親ともにそれぞれの宗教からプロテスタントに改宗し、英国教会に通っていました。私も学生の頃には、定期的に英国教会に通い、神父の話を聞いていました。しかし、彼らが説いているキリスト教の教義には、不可解で理解に苦しむ内容も多くありました。何よりも、三位一体、つまり父と子と聖霊という神の在り方がいかにも非論理的で、到底信じることができませんでした。私の魂が強く否定していたのです。それから、アッラー、つまり神の前へと至るためには償いをしなければならないという教会の教義も私には奇異に感じられました。私が思うに、偉大な創造主は、しもべに対して強制的に償いを求めたりはしないはずだったのです。

そこで、私はユダヤ教について学んでみました。ユダヤ教は神の唯一性や偉大さについて、より論理的な形で認めていて、並ぶものは他にないとしていることを知りました。恐らく、ユダヤ教は現在のキリスト教ほどに寛容していなかったのでしょうか。しかし、この教えにも理解できないこと、受け入れられないことが数多くありました。ユダヤ教には、あまりにも多くの強制的な儀式や祈りがあり、その宗教に正面から向き合っただけではすべて行

ったとしたら、日常生活のための時間など残らないはずでした。また、そのような儀式の多くは、後の時代の人々によって加えられた不必要なもので、論理的なものではありませんでした。そのためにユダヤ教は、社会生活から完全にかけ離れた少数派の教えとなってしまったのです。こうして、私はユダヤ教に違和感を覚え、別の教えを探し始めました。当時、私は教会にもシナゴグにも通っていましたが、それは単に無宗教にならないようにするための理由で、実際にはキリスト教徒でもユダヤ教徒でもなかったのです。また、英国教会のほかに、ローマ教会、つまりカトリックについても少し調べました。ただ、そこで分かったことは、カトリックの教義が英国教会のプロテスタントにも増して、迷信に満ちているということでした。特に、カトリックでは法王を信奉して彼を罪のない存在とみなし、まるで神でもあるかのように考えていることは、私に嫌悪感を抱かせることになりました。

そこで、私は向きを東に変え、東方の教えを調べ始めました。ゾロアスター教はまったく受け付けませんでした。というのは、司祭の立場があまりにも強すぎたのです。一方で、社会の底辺にいる人々に対しては、まるで動物のように接していて、貧者に慈悲の手を差し伸べることなど思いつきもしないといった様子でした。彼らの考えによれば、貧しいということはその人自身の罪によるものなのです。もし、何の文句も言わず、声もあげずに苦しみに耐えれば、司祭の祈りによって状況が少しは良くなるかもしれないと考えているようでした。そのような考えのせいで住民は司祭を恐れ、結果として司祭の言うなりになることにも結び付いていました。私はゾロアスター教に憎悪の念さえ抱きました。彼らが動物を拝んでいることでも嫌悪感が増し、この教えは絶対に正しい宗教ではないと確信しました。

仏教に関しては、どちらかというと哲学の考えや信条に近いものでした。仏教の僧たちからは、もし私が限らない努力をして自己犠牲を払うなら、大いなる力を得ることができ、この世はまるで実験の場所であるかのようにになると教えられました。ただ、私は仏教には何らかの社会道徳的な信条を見出すことができませんでした。また、仏教でも僧が一般の人々とは異なる高い地位にある存在とされていました。確かに彼らは、人々を魅了するような

知識を教えてはくれます。しかし、その教えは神とは何の関係もないものでした。

このような知識は、スポーツや曲芸を行うのと同じように時間をかけ、それができない人々を驚かせるためには役立ちます。しかし、人の魂を清め、アッラーのご満悦や愛情に近づけることは異なるものです。アッラーやアッラーの創造したものは何の関係もありません。唯一の効果は、人を規律正しくさせるということでしょう。

確かにブッダは、よく学び、賢明な人物でした。彼は人々に対し、あらゆることに自己犠牲を払うよう説いていました。「悪事に対して仕返しをしてはいけない」、「すべての欲望や望みを放棄しなさい」、「明日の心配をするのはやめなさい」といった教えを残しています。預言者イーサーも同じことを説いていましたが、人々はキリスト教のごく初期、その教えがまだ変容していない頃だけ従っていて、その後は離れていきました。仏教徒でも同じことが起こっていることを目にしました。もし、人々が預言者イーサーやブッダのように清いままであれば、恐らくは彼らが示した道を進み、アッラーのご満悦へと至ることができたことでしょう。しかし、現在のこの世界に、あのような清らかな魂と崇高な徳を持ち、悪事からは手を引き、常に献身的でいられるような人が一体どれほどいるものでしょうか。つまり、彼らが定めた道徳的基準は、今日の人間にはそぐわないものとなっているのです。

さて、私はイスラームが身近な環境にいましたが、他の宗教について学んでおきながら、当時イスラームについて考えなかったことは実に奇妙なことです。イスラームは初めから頭にありませんでした。その理由は明白です。イスラームに関して与えられる知識、特にヨーロッパで書かれた書籍などは、その教えがいかに誤っていて、意味のない、創作された、偽りの教えであるということを主張していることが常でした。特に、ロッドウェルによるクルアーンの翻訳書を読んだときには、その思いを強くしました。彼のクルアーンの翻訳は、大部分を故意に難しくしたり、曲解したり、あるいは完全に間違っていたりしました。真実は後に、ロンドンのイスラーム協会に行くことになって、そこで正しいクルアーンを読んだときによりやく判明しました。残念ながら、ムスリムは自分たちの素晴らしい教えについて、世界

に紹介するための労力をあまり払っていないのです。もし、真のイスラームについて、しっかりと意識的に広めるように努めたならば、素晴らしい結果が出ると確信しています。中近東諸国では、外国人に対してはまだ距離感があります。外国人と交流し、光を与えるのではなく、なるべく遠ざかろうとしています。これは間違った行動です。最大の例が私です。私はなかなかイスラームに関心を持つとうともしませんでした。しかし、ある時、大変に素晴らしい、洗練されたムスリムと知り合いになり、友達になりました。彼は私の話を丁寧に聞き、ムスリムによって英訳されたクルアーンをプレゼントしてくれました。私のあらゆる質問には論理的で明確な答えを与え、1945年にはモスクに連れて行ってくれました。私はそこで、生まれて初めて礼拝をするムスリムを目の当たりにし、敬意を込めて眺めることになりました。アッラーよ、これは何と壮大で崇高な光景だったことでしょうか。さまざまな民族、国、階級の人々が一緒に礼拝をしていました。しかも、アッラーの前では皆が何の区別もなく隣同士に並び、自らを完全にアッラーに捧げていました。金持ちのトルコ人の隣には、貧しい姿のインド人がいました。その隣には商人と思われるアラブ人がいて、その横には黒人が並んでいました。そして、彼らは皆、深い集中の中で礼拝をしていました。彼らの間には何の違いもありませんでした。彼らは、自分がトルコ人なのか、インド人なのか、アラブ人なのか、あるいは、金持ちなのか貧しいのか、地位や階級も完全に忘れ、自分のことよりもアッラーのことを想っていました。自分の方が他人よりも勝っているかどうかということなど、誰一人考えてもいませんでした。金持ちであっても貧しい者を馬鹿にしたりせず、高い地位の人でも他の人に偉ぶる様子は見られませんでした。

私はこの様子を見て、求めていた真の宗教がイスラームであったことを理解しました。今まで多くの宗教について調べてきていましたが、どの宗教でもこのような感覚を覚えたことはなかったのです。ムスリムとしての姿を近くから見て、イスラームの教えを学び、そして、何の不安もなくこの真実の教えを受け入れることとなりました。

今、私はムスリムであることを誇りに思っています。イギリスの大学では「イスラーム文化」についても学びました。中世ヨーロッパが恐るべき闇に

ある時、イスラームの光によってその闇が照らされたことを知りました。また、数多くの偉大な発明がムスリムによるものであること、イスラームの教育機関がヨーロッパの人々にさまざまな文化、科学、医学の知識を伝えたことを知りました。そして、何人もの征服者たちがイスラームを受け入れ、偉大な国家を築き上げてきたことも分かりました。さらに、ただ偉大な文明を築いただけでなく、キリスト教徒によって破壊された古い文明も復活させました。私がムスリムになったことを知った友人は、「これで未開人になってしまったな」と言うのですが、私は「いや、全く逆だ。イスラームは遅れているどころか進んだ文明だ」と笑って答え、彼らにイスラームについて説明したものでした。ただ、残念ながら、現在のムスリムはとても遅れてしまっています。それは、ムスリムは自分たちの教えが、いかに崇高であるのかを次第に忘れてしまっているからです。そして、イスラームが命じることを実行せず、怠っているのです。その原因の一端は、真の意味での宗教者や科学者、つまり世界のことをよく理解しているムスリムが非常に少ない点にあると考えています。

それでも、イスラーム諸国では今なお、素晴らしいホスピタリティを見ることが出来ます。ムスリムの家に行けば、その人があなたのことを知っているのが知らなかりょうが、扉を開け、すぐにあなたが必要としていることをしてくれるでしょう。なぜなら、イスラームは他者を助けることを命じているからです。豊かな人が貧しい人に援助すること、財産の一部を困窮者に与えることはイスラームの五つの柱の一つです。だからこそ、イスラーム諸国では共産主義が根付くことはありません。それは、イスラームがこの問題を遙か昔に、根本的に解決してしまっているからです。

たとえ暴圧を受けしとも、人には誠実がふさわしい

アッラーは正しき者を助け給う

## 26. H.F. フェロー（イギリス）

私は、その生涯の多くを海で過ごした。1914年の第一次世界大戦と1939年の第二次世界大戦では、イギリス海軍将校として戦った海軍士官である。

20世紀の最先端の機械や技術であっても、自然の恐るべき力に対抗する

ことはできないものである。簡単な例を挙げてみよう。例えば、霧や嵐が起これば、我々は何もすることができない。戦いの最中であれば、これらの危険にさらに多くの危険が加わることになる。海兵は常に注意を払っていないなければならない。イギリスの海兵は、女王の勅令と提督が定めた規律が記された一冊の手帳を持っている。そこでは、海兵に課された任務や、非常時の対応方が書かれており、賞賛すべき者に対する評価や報奨について、あるいは給与や将校の定年についても記載されている。さらに、叱責を受けるべき者に対する罰則、命令違反者への対応についても一つひとつ書かれている。もし、この手帳にしっかりと従えば、海上での生活はより快適に、規律正しいものとなる。リスクも低く抑えられ、海兵たちは落ち着いて、幸せな毎日を送ることができるだろう。

アッラーが私の過ちと罪を赦してくださることを願いつつ、また、これから比較する二つの事柄の間には大きな違いがあることを十分理解し、クルアーンに対する敬意を損ねることはないことを伝えた上で、私はクルアーンとこの海軍手帳が似ているように感じている。クルアーンでは、その規律を定めたのはアッラーである。アッラーは、この世界に存在するすべての男女、子どもがどのように行動すべきか、危険はどこから生じるのか、またその危険にどのように対処すべきか、善い行いをした者にどのような報奨があり、悪い行いをした者にどのような罰があるのかについて、非常に詳しく、誰もが理解できるように伝えている。

また、私は退官してから、もう 11 年ほど庭で花を育てているが、そこで改めてアッラーの偉大さについて実感することとなった。草木や花は、ただアッラーの命令のみによって育っていく。その命令がなければ育つことはない。たとえ、我々がどれほど努力しようとも、何か手を加えたとしても、アッラーのご加護があったときだけ報われるのである。もし、ご加護がなければ、すべての努力は無駄になってしまう。そもそも、植物の生育のためには、気候条件が整っていなければならないが、これを調整することは人間にはできない。アッラーの意図によって天候が崩れれば、人が植えたものはすべて無に帰してしまう。もちろん、天気予報のためにさまざまな取り組みが行われてきてはいるが、それでも、せいぜい 1% でも当たればよいといった

代物だ。ここにアッラーによる定めが現れる。アッラーの命令に反していれば、結果としてその庭に美しい花は育たないのである。

私は、クルアーンがアッラーの言葉であること、そして、アッラーがこの神聖な書を世界へ伝えるために預言者ムハンマドを選んだことを信じている。クルアーンは、この世界における人々の生き方に完全に適合している。そして、過激なことや迷信を完全に排除し、知性ある者であればその正しさを信じることのできる信条が論理的に記されている。クルアーンによれば、礼拝は恐れによって行われるのではなく、愛情と敬意の念によって行われるとされるのだ。

もし、これまでの教えからキリスト教徒に改宗させようとした場合、最初に長い時間をかけて誰かが説得する必要があることだろう。しかし、私がイスラームについて学んだときには、他者から説得される必要は感じなかった。それは、この教えが真実であるということを見ずと信じていたからである。誰も私をムスリムにしようと強制することはなく、誰の影響も受けることはなかった。イスラームは、私がキリスト教で見つけられなかった多くの疑問に即答し、私を納得させたのである。その結果、私は自発的にムスリムになることとなった。

そもそも、イスラームと預言者イーサーがもたらした本来の教えとは、元来同じものであった。しかし、本来のキリスト教は、数多くの迷信や偶像崇拜的な教義が混入したことで、完全に損なわれてしまっていた。マルティン・ルターは、そのような迷信を取り除こうとしてプロテスタントを創設したが、かえって本来の形を完全に破壊する結果となってしまった。エリザベス 1 世が、英国の脅威となっていたスペインのカトリック勢力と戦っていた頃、オスマン帝国のトルコ人もまたヨーロッパでカトリックと戦っていた。プロテスタントとムスリムという違いはあれ、どちらの国も偶像崇拜者のカトリックと戦っていたのである。しかし、ルターが気付いていないことがあった。それは、彼より 900 年も前に、既に預言者ムハンマドがキリスト教をはじめとした諸々の宗教を完全に清め、整理していたという事実である。

今日のキリスト教でも、偶像や迷信は満ち溢れたままである。キリスト教は長きにわたって、不正や迫害、暴力が許されてきた教えであり、現在でも

その恐るべき特質は保たれたままである。スペインのキリスト教が異端尋問によってどれほどの不正な裁きを下してきたか、また、どれほどの恐ろしいことをしてきたかを思えば分かることだろう。このような迫害から逃れたユダヤ教徒をムスリムのトルコ人が受け入れ、やっと人道的な扱いを受けられるようになったのである。

預言者イーサーは、かつてアッラーがシナイ山で預言者ムーサーに下した十戒について触れ、これに従うよう命じていた。そして、その第一は「わたしのほかに、他の神々があってはならない」というものだった。しかし、キリスト教徒は後に三位一体を唱え、アッラーによるこの最初の命令に逆らうこととなったのである。私はムスリムになる以前から、この三位一体説を信じることはできなかった。私にとって神は常に、唯一無二で慈悲深く寛大で、導きのための道を示す偉大な存在であると思っていたのである。私がイスラームへと至ることになった最大の理由もここにある。なぜなら、ムスリムは私が考えていた通りにアッラーを信じていたからである。

現世でどう生きるかは、個人の自由である。しかし、例えば、もし会計士が資本家の口座から横領すれば、必然的に逮捕されて監獄行きとなる。滑りやすい道を通るときには、注意して歩かなければ転んで怪我を負うことになる。車のスピードを出し過ぎれば、事故を起こしてその責任を問われることになる。そして、このような行いを他人の責任に転嫁しようとすることは非道なことと言えよう。私は人間が生まれながらに悪い性質を備えているとは思わない。必ず善良な性質をもって生まれてくるものだ。性悪説を主張する人々もいるだろうが、私はそれを信じることができない。私が思うに、人間を悪くしてしまうのは、その両親であり、周辺環境であり、有害な情報や悪い仲間たちである。そして、有害な教育者も加えるべきかもしれない。子どもたちは両親や教師、メディアからの考えや行動に影響を受け、自分をそれらに近づけようと真似していく。子どもはしばしば、よく分からない理由で反抗したり、場所をわきまえずに周囲に迷惑をかけたりすることがある。そのような時には、子どもたちに優しく、しかし真剣に注意をして、正しい道へと導くことが必要である。しかし、もし大人が子どもたちの悪い見本となっていて、大人が悪い行いをしているのであれば、子どもたちにそれ

が悪い行為だと言って納得させることはできないのである。悪い行動をしている者が、一体どうやって教えるというのだ。つまり、子どもたちにとっての模範となる必要があるのである。必要な場合には、子どもたちに罰を与えることも出てくるだろう。周知のとおり、イギリス人にとってスポーツは神聖とさえいえるほどの人気を誇るが、スポーツの場における行為がルールに違反し、特に悪意をもって行った者に対しては、即座に罰が与えられるだけでなく、名誉まで大きく失われることになる。イスラームでは、ちょうどこのスポーツにおけるルールのように、人々が正しく生きるための論理的で素晴らしい行動ルールを定めていて、私はイスラームを学んでいく上で随分と驚かされたものである。このような論理や秩序が、私を真実の教えであるイスラームに導いていくこととなった。

さて、十戒において、アッラーによる第二の命令とは「いかなる偶像、絵画、象徴を拜んではならない」というものだった。しかし、今日のキリスト教では、教会内に絵画や像がところ狭しと飾られ、信者はこれらを前にひれ伏している。

預言者イーサーによる奇跡、あるいは、キリスト教が教えるような十字架での磔や死後の復活といった壮大な出来事が今に伝わっているにもかかわらず、当時のパレスチナで暮らしていたユダヤ人やローマ人、あるいはその他の民衆には、現実問題として、さほどの影響はみられなかった。また、歴史的にもその後の生活に大きな変革をもたらさなかったことは、かねてより私は不思議に思っていた。つまり、ユダヤ教徒は預言者イーサーとは接点がないまま過ごし、キリスト教は数百年後になってようやく広まり始めたことになる。しかし、預言者ムハンマドが伝えたイスラームは、非常に短期間で各地に広まり、そこでの生活様式を即座に変えていったのである。まさに、野蛮ともいうべき人々をあつという間に文明化したのであった。その理由は、イーサーの教えがすぐに変容してしまい、半ば偶像崇拜のような理解しにくいキリスト教になってしまったことに対し、イスラームでは誰もが理解できる論理的な教えを保つことができたことにあると考えている。

私は、1919年から23年にかけてトルコでの任務に就いていた。そこでムスリムたちに接することになり、毎日ミナレットから聞こえる「アッラー

の他に神はなく、ムハンマドはその使徒である」という声が、いかに心地よかったことだろう。イスラームについて読んだ英語の本は、多くは侮辱するような内容だった。特に、この 300 年にわたってカリフとなっていたスルタンについては多くの悪政を行ったと主張し、また、イスラームによる教育のせいでトルコ人が嘘つきで、秩序がなく、地位に固執し、少数派を弾圧するようになったと中傷して、ムスリムは決してキリスト教徒のように誠実な生き方はできないと強調していた。しかし、本当にイスラームが悪いのだろうか？ 私にはそのようなことは到底信じられなかった。そこで、これらのことについて正しく知りたいと思い、イスラームの宗教家に話を聞いてみることにした。さらに、ムスリムが書いたイスラームについての書籍も探し求め、イギリス在住のムスリムの宗教家がそういった本を送ってくれた。その結果、イスラームがどれほど清廉であったか、中世においていかに輝きを放って暗黒のヨーロッパを照らしていたかということが分かった。一方で、イスラームでも時間の経過とともに、その教えが十分に尊重されなくなり、イスラーム世界が衰弱していったこと、そして、再び以前の状態を取り戻すべく努力されていることを知ることができた。現代の技術発展は、キリスト教世界でさまざまな矛盾を生み出している。しかし、イスラームではそのような矛盾を生み出すことはない。つまり、イスラーム世界の後退の要因は、イスラームそのものにあるのではなく、その素晴らしい教えを実行できていないムスリムにあったのだ。私として、もはやイスラームに対して何ら疑いは残らなかった。自発的に信じ、ムスリムとなったのである。

現代のヨーロッパの哲学者や作家の中には、宗教はもはや不必要なものであると主張する者もいる。このような考えが生まれた背景には、キリスト教による非論理的な教義や迷信が、20 世紀になってもはや受け入れられなくなってきたことにあるのは確かであろう。しかし、イスラームではこのようなことは起こらないのである。

キリスト教徒たちは、私がイスラームを受け入れた理由をどうしても理解することができず、過激思想だと言う人さえいる。これは完全に間違っている。

最後に次のことを述べておきたい。私がイスラームを選んだ理由は、イス

ラームが論理的かつ実践的であり、あらゆる観点からみて完全な宗教であること、そして人類のための素晴らしい指針であるからだ。イスラームは、人をアッラーのご満悦に適うようにし、また、最後の審判が来る日まで、現世と来世での幸福へと導く最も正しい道なのである。

## 27. J.W.ラヴグローヴ（イギリス）

なぜ私がムスリムになったのかという問いに、次のように簡単に答えていきたいと思います。私は宗教や信仰について、長い話をするつもりはありません。宗教と信仰は人の魂で生じるもので、他のこととは完全に異なっています。まるで、砂漠で迷った人が渴きを覚えるようなものです。人は絶対に信頼し、道を示してくれる信仰を持つことを必要としているものです。そこで私は、宗教史を学びました。人々を教えに導いた人物の生涯と、彼らが何を教えていたかを詳細に読み解いていきました。そこで分かったことは、当初、預言者たちが教えた基本的な教義が時とともに変容し、まったく異なるものになってしまっていることでした。正しい部分というのは、今日ではほんのわずかしか残されていないのです。

人々は、選ばれた偉大な人物の生涯に数多くの物語を挿入し、彼らが行った業績を別の形にして伝承しています。しかし、イスラームだけは、それが下されたときから今日に至るまで、当初と変わらない純粋で清らかな形を保ち、迷信や物語を何ら加えることなく受け継がれてきています。クルアーンは、預言者ムハンマドの時代と現在とで全く同じままで、たったの一言ですら手を加えられていないのです。そして、預言者ムハンマドの神聖な言葉もまた、それが発せられたまま、一切変えられることなく今日へと伝えられています。

アッラーは、人々が必要とするときに預言者たちを遣わしてきました。預言者たちは互いに補完します。他の預言者たちが教えてきたことは形を変えてしまい、もはや別ものとなってしまったことを考えると、最も純粋で正しい姿に保たれているイスラームを信じることは、この上なく論理的なことではないでしょうか。私は、シンプルかつ有益で、非科学的な迷信を持たない正しい宗教を求めていました。イスラームは、まさにそのような、神に

よる本当の教えでした。イスラームでは、アッラーに対して、また隣人や人々に対する義務について具体的に示されています。宗教の目的とは、本来このようなものであるべきだと考えていますが、他の宗教ではこの点について不可思議な教義が定められています。一方、イスラームでは、誰もが理解できる明快さで、論理的で有益な教義をみることができます。現世と来世でやすらぎを得るために何をしなければならないかということについて、私はイスラームからのみ知ることができました。そして、ムスリムとなる榮譽を手に入れることとなったのです。

## 28. デイヴィス（イギリス）

私は1931年に生まれ、6歳から小学校に通い始めました。そして、7年後に小学校を終えて、中等学校へと進みました。その間には、家族の意向により、当初受けていたカトリックの教育から、イングランド国教会、さらにはアングロ・カトリックへと所属を変えることになりました。しかし、このような宗教の変更は、私にとってはいつも同じことでした。結局、キリスト教は日常生活とは完全に乖離したもので、ただ日曜日にだけ着ていくダンスの奥にしまった服のようになっていたのです。人々はキリスト教に自分が求めるものを見つけることはできていませんでした。キリスト教はただ、人々を教会に呼び込もうと、美しい照明や絵画、心地よい香りや音楽、また、聖人たちのために行うと称する各種の荘厳な儀式や祈りに力を入れているのです。しかし、人々を集めることに成功はしていません。なぜなら、キリスト教はただ伝説上のことだけを説き、教会の外で起きることには一切つながりを持っていないからです。こうして、私はキリスト教から離れていき、キラキラした宣伝が行われていた共産主義やファシズムに関心を寄せるようになりました。

はじめに共産主義に興味を持ったとき、そこには階級の差がないということが大変気に入りました。しかし、次第に実態が分かってきました。共産主義には階級がないどころか、ごく一部の人間が他の人々に迫害や弾圧を行い、ほとんどの人が奴隷のような暮らしを強いられていたのです。そして、人々は何かを訴える権利すら持たず、正当でほんの些細な反論をしただ

けで、時には死につながるほどの罰を受けなければならないことを目にするようになりました。分かりやすい例を挙げるとしたら、共産主義の本当の顔はスターリンなのです。私は共産主義から離れ、ファシズムに近づいていきました。

ファシズムにあった規律や秩序は、私が気に入った点でした。しかし、彼らは自分たちだけのことを考えていました。排他的で、他民族や自分たち以外の人々を見下していたのです。ここにもやはり、迫害、弾圧、不正、そして力の支配がありました。私は数ヶ月もすれば、完全にファシズムを憎悪するようになりました。イギリスのモズレー、ドイツのヒトラー、イタリアのムッソリーニは、恐るべき非道で残酷な迫害者の典型です。それでも、私はなかなかファシズムから離れることができずにいました。なぜなら、他に行くあてがなかったからです。

精神的な苦痛に満ちた毎日を過ごす中で、私は偶然、ある本屋で『イスラミック・レビュー』という雑誌を手に取り、少し読んでみました。2シリング6ペンスもして、当時の私としては非常に高価だったのに、なぜこの雑誌を買ったのか今でもよく分かりません。自分でも、「ああ、またお金を無駄にしてしまった。どうせここに書いてあることも、キリスト教徒や共産主義者やファシストたちと大して変わらないのに」と思っていたのです。しかし、この雑誌を読んで、私はすっかり驚いてしまっていました。読み終わると、もう一度、さらにもう一度と何度も詳しく読み返しました。そして、イスラームが、キリスト教や何とかイズムといったあらゆるイデオロギーの長所だけを集めたような、完全な教えであることをその時理解したのです。私は貧乏でしたが、この雑誌を定期購読しました。その数ヶ月後にはムスリムになることを決め、その日以来、この教えにしっかりと結びついています。

大学に入ったら、すぐにアラビア語を学び始めたいと思っています。今はまだラテン語、フランス語、スペイン語を学んでいて、そして、『イスラミック・レビュー』を読んでいます。

## 29. T.H.マックパークリー（アイルランド）

私はアイルランド人です。アイルランドでは多くの人がカトリックですが、私はプロテスタントとして育ちました。ただ、子どもの頃から、キリスト教について教えられることがどうにも気に入らず、本当なのかと疑っていました。そして、大学で多くのことを学ぶようになると、その疑いは確信へと変わりました。キリスト教は私に何も与えてはくれなかったのです。私はキリスト教を嫌悪して信じることもなく、そして、心の中には「真の教えに出会う何か」を探そうとする強い願望がありました。ある一時期には、自分が考え出した方法で祈ってみるなど、落ち着かない状況がしばらく続きました。そのような時に、『イスラームと文明』という本を目にしました。これを読んだときには、驚きと喜びで一杯になりました。これまで考え続けてきたあらゆる疑問と答え、そして希望がこの本に載っていたからです。キリスト教がそれぞれの宗派で弾圧や迫害を繰り返していたことに比べ、イスラームではやすらぎにあふれた生き生きとした信条が、人々に正しい道を示していました。現代の科学や文明の源泉はイスラーム諸国に端を発し、闇と恐怖の中にあったヨーロッパに光を投げかけたのです。そして、キリスト教に比べ、イスラームは非常に論理的で有益な教えでもありました。

イスラームに関する説明の中で最初に私が惹きつけられたのは、キリスト教における原罪、つまり「人は罪を負って生まれ、現世でその償いをしなければならぬ」という教義が否定されていることでした。その後、イスラームの人的かつ文明的なさまざまな美徳を知るようになるにつれ、この教えの偉大さに驚きを禁じえませんでした。イスラームでは、金持ちでも貧しい人でも差はありません。そして、いかなる民族、いかなる肌の色、いかなる言語の人々であっても兄弟であると考えます。イスラームは、人々の間における財産や地位、民族、国、肌の色といった違いをほんの一撃で崩し去ってしまいました。そして、私はこれらのことをもって、ムスリムになったのです。

## 30. マフムード・ガンナー・エリクソン（スウェーデン）

まずは、アッラーへの感謝と称賛をした上で、私の話を始めたいと思いま

す。アッラー以外に崇拜される存在はなく、ムハンマドはそのしもべであり、また、使徒であることを証言します。

今から5年前、私は初めてムスリムに出会いました。私の親友の一人がクルアーンに関心を持っていて、読み始めたということでした。私はそれまでクルアーンについてまったく何も知りませんでしたが、その話を聞いて、ただ負けたくないという気持ちで読んでみることにしたのです。早速、スウェーデン語のクルアーンの翻訳書を探しに町の図書館に行き、読み始めてみました。その結果、クルアーンは私に大きな影響を及ぼすことになったのです。15日では読み終わりませんでした。一旦読み終えて図書館に返しても、数日後再び借りて何度も読み直しました。クルアーンを読むたびに驚異の念を抱き、イスラームが真実の教えであることを信じるようになっていきました。そして、1950年11月にはムスリムになる決心を固めます。しかし、イスラームの神髄を知り、さらに深みへと達するために、もう少し時間をかけてこの教えを学びたいとも考えていました。そこで、ストックホルムの大きな図書館に行き、イスラームに関する他の書籍を探しました。その中には、ムハンマド・アリーによるクルアーンの翻訳書もありました。後になって、ムハンマド・アリーがカドゥヤーニ、あるいはアハマディアと呼ばれる異端の宗派に属することを知りましたが、そのようなものでさえ、私にとっては非常に有益でした。もはやムスリムになるにあたって、何の疑念もありませんでした。この頃からムスリムの友人と会うようになりました。1952年からは友人たちと一緒に礼拝にも参加しています。また、幸運なことに、ストックホルムではムスリムが設立した協会を見つけることができ、その人々と知り合って多くのことを学ぶようにもなりました。そして、ヒジュラ暦1372年のラマダーン月にイギリスに行き、ラマダーン明けの祭りであるイードの初日に、ウォーキング・モスクにて公式にムスリムとなりました。

私がイスラームに惹かれた最大の理由は、イスラームがこれ以上ない程に論理的な教えだったことです。イスラームでは、理性が受け入れられない事柄は一つもありません。イスラームは、アッラーが唯一であることを信じるよう命じています。アッラーは赦されるお方であり、慈悲深いお方です。

人々がやすらぎの中で暮らせるよう、あらゆる瞬間に限りない恵みを与えてくださっています。

また、私がイスラームで最も気に入っている点は、それが単にアラブ人のための教えではなく、全世界の人々のための教えであるということです。アッラーは万物の主です。しかし、例えばユダヤ教徒は、彼らの聖典の中でいつも「イスラエルの神」と言っています。つまり、アッラーを自分たちだけの存在としてしまったのです。

他に、私がイスラームで好きな点は、今までに現れたすべての預言者たちを認めていることです。すべての預言者に敬意を表し、他の教えを信じる人々に対しても寛大に接しています。そして、ムスリムは清潔な場所であれば、田畑であろうとどこであろうと、極端な話であれば教会内ですら礼拝を行うことができます。しかし、キリスト教はモスクに近づこうともしないのです。

クルアーンでは、イスラームが最も正しく、また最後の教えであること、そしてムハンマドが最後の預言者であることをいかに素晴らしい形で説いていることでしょうか。

食卓章第3節では次のように述べられています。「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとして、イスラームを選んだのである」。また、イムラーン家章第19節でもこのように記されています。「本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である」。

### 31. アブドゥッラー・ウエムラ（日本）

なぜ私がムスリムとなったのか？ それは、アッラーが唯一であること、死後に別の生があること、そして、最後の審判の日に人は現世での行いについて裁きを受けることを教えているからである。また、愛情、正義、誠実さ、そして、清純な道徳を身に付けることも命じている。これらはすべて、一人の人間が正しい道で、やすらぎの中を生きていくために最も必要な要素である。しかし、これらのことは、他のどの宗教でもここまで明白、且つ簡潔

な言葉で教えてはいない。イスラームにおいて誠実であることは非常に重要である。アッラーとしもべに対して誠実であることは、イスラームの基盤を成すものである。私は真実を探し求める過程でイスラームを見出し、そしてムスリムになった。

私はあらゆる宗教を調べていたが、そこから得られた結論を次に記していきたい。

現代キリスト教は、預言者イーサーが伝えたままの形ではなくなっている。預言者イーサーがアッラーから預かり、人々へと教えたその命令は完全に変わってしまった。今日、聖書とされているものには、彼の言葉として別のことが書かれている。一方、イスラームは、啓示されてから現在に至るまで純真性を保ち、本来の姿のままに伝わっている。クルアーンは一言も手を加えられることなく、現在へと届けられているのである。

現在の新約聖書は神の言葉ではなく、形を変えてしまった預言者イーサーの言葉と行いが混在して書かれている。しかし、イスラームにおいては、アッラーによる啓示と預言者ムハンマドの言動は明確に区別されている。アッラーによる命令はクルアーンに記され、預言者ムハンマドの言動はハディースにまとめられて分けられている。

また、イスラームでは、アッラーは直接しもべに呼びかけるが、キリスト教ではそのようなことはないとしている。

そして、理性を持つ者にとって、キリスト教最大の問題点は三位一体という教義である。これは唯一の神を信じるのではなく、三位を信じるよう求めるものである。これまでのキリスト教の宗教家たちでさえ、この教義について論理的に解明することはできていない。もっとも、それは不可能なことなのだ。つまり、この教義は根拠のないものであり、正しいものでないということである。この世界は、唯一の創造主のみが創り上げることができる。三つの神を信じるということは偶像崇拜を意味し、理性ある者であれば唯一の神を信仰するようになるのである。

さらに、キリスト教では、人が原罪を負って生まれてくること、原罪を清めるために償いをする必要があること、三位一体を信じなければ復活することもなく無限の死を宣告されることも説いている。もしそのようなこと

を信じるなら、そもそも罪をもって生まれてきているのだから、この世での時間を無駄にして礼拝を行うのではなく、生きている間を楽しもうと快樂や娯楽に溺れた人生を過ごしたり、互いに騙し合って悪事を働いたりするようになるのはごく自然の成り行きである。そのため、今日のキリスト教徒はその教義や道徳に従うことなく、完全な無宗教への道を歩むことになっている。彼らはもはや機械のようで、その精神は空洞である。

次に、日本の宗教についても触れておきたい。日本には大きく二つの宗教がある。その一つは、大乘仏教や小乗仏教、原始仏教が混合したもので、いくらかバラモン教にも似たものである。その内容を知れば、それが宗教とはかけ離れたものであることが分かるだろう。なぜなら、ブッダは神について言及しておらず、肉体が死しても魂は死なないということも信じてはいなかったからである。バラモン教における魂についての考え方は、これほどまでに物質的ではない。しかし、バラモン教の言説は非常に混乱したもので、何を伝えたいのか理解困難な状態になっている。そもそも、バラモンとは何か、つまりバラモン教徒にとっての神なのかしもべなのか、あるいは預言者なのか、といった教義でさえ明らかになっていない。バラモン教徒は宗教ではなく哲学にこだわっているように感じる。バラモンを常に念じて、例えば花のような、バラモンに似ていると思われる物や、バラモンにふさわしいと思われる物を神聖視し、自分では神を崇拝していると思いながら実は創造物や動物を拜むようになってしまったのである。

このような混とんとした教義に対し、イスラームではアッラーを最も正しく人々に伝えている。アッラーは唯一であり、諸世界の主である。産みも産まれもしない。現世と来世に何があろうと、すべてはアッラーが創造したものである。アッラー以外の何者にも崇拝してはならない。アッラー以外誰も、しもべに命令を下すことはできない。

さて、日本におけるもう一つの宗教は神道である。この宗教は仏教よりもさらに問題を多く抱えている。なぜなら、これは道徳的な教えではないからである。また、神道は原始的な部族でみられるような多くの神を信じ、これらをつつひとつ拝んでいる。すなわち、偶像崇拝を行う宗教となっている。

このように、世界のいくつかの宗教について、ごく簡単に紹介してきた

が、その実情を知った上で、どうしてイスラームを選ばず、これらの宗教のいずれかを選ぶことができようか。果たしてそのようなことが可能だろうか。これまで見てきたように、人間の理性が受け付けられない、混乱した教えがひしめく中、イスラームは輝きを放っている。まさに、論理的で人間的な信条による、唯一の正しい教えであることが一目瞭然である。

私は、自らの魂のやすらぎを求めて、涙を流しながら真実の道を模索していた。そしてついに、これに最も適った理論的な教えとしてイスラームと出会い、「求めていたものはこれだ」と確信して自らの意志でムスリムとなったのである。

### 32. ムハンマド・スライマン・タケウチ（日本）

アッラーのご加護のもと、私はムスリムとなりました。その理由は次のようなものでした。

- 1) イスラームには非常に強固な兄弟愛の精神があること。
- 2) イスラームは、人間の生涯に訪れ得るあらゆる困難への対処法を示していること。これは、宗教と現実世界とを分断していないことを意味します。イスラームは精神的な部分のみを説くものではなく、例えばどの民族や階級であっても人々を一堂に集めて一緒に一列で礼拝したり、貧者を助けて互いの苦労を分かち合い、ともに解決策を探ったりといったような、今日の秩序にも完全に適った社会のあり方についても言及しています。
- 3) イスラームは、精神的にも肉体的にも人間を成長させること。言い換えれば、イスラームは精神的・肉体的な要素を集約しているということになります。

イスラームの兄弟愛においては、民族や階級の差を認めません。全世界のムスリムは互いに兄弟となります。イスラームは理性ある人々の宗教で、世界には多くのムスリムが存在します。インド人、パキスタン人、アラブ人、アフガニスタン人、トルコ人、日本人、中国人…。世界のすべてのムスリムが兄弟になるのです。このことは、イスラームが普遍的な教えであることを意味します。今日、破壊されて混迷の中にある人間社会を正しく導き、過ちを正す唯一の手段こそイスラームです。アッラーによって恵まれた教えで

あることから、どの民族、どの国であっても、すべての人に適う教義となっているのです。

イスラームは、歴史上、非常に重要な役割を果たし、ほぼ原始生活を送っていた人々を短期間で文明社会へと導きました。イスラームは、人々が平和とやすらぎの中で暮らすことを求めます。そして、人々が幸福になるために必要な知識を与えました。この点で、例えばキリスト教や仏教といった他の宗教が命じる内容とは完全に異なっています。キリスト教や仏教では、人々をまとめるどころか、現世に対して距離を置き、互いから遠ざかることを命じています。多くの仏教の修行の場が、行くだけでも困難な山の上に設けられているのはよい例でしょう。その理由は、なるべくそこに来る人を減らすためなのです。日本の宗教の内容を知れば、日本人が出来るだけ互いに干渉しないで暮らすことを基本にしていることが分かります。キリスト教でも、修道院は人里離れた場所に建てられ、内部は暗い造りになっています。教会が都市に多く作られるようになったのは、それほど昔のことではありません。キリスト教では、人は罪を負って生まれてきたこと、そして、そのためにこの世では常に罰を受けなければならないと主張しています。このような教えは、宗教と人間生活を分断させ、この世はただ苦しみでしかないと言ってしまうことになります。

しかし、イスラームでは人間のことを、アッラーに愛されるしもべとみなしています。モスクは町や村の中心に、つまり人々の間に建てられます。内部は快適で明るく保たれ、人々はここに喜んで集い、一緒に礼拝を行います。礼拝が終われば互いのために願いを捧げ、互いの様子を尋ねて必要があれば助け合います。イスラームでは、助けを必要とする人に援助を行うこと、もし援助する力がなければ笑顔や優しい言葉をかけて喜んでもらうことは大きな善行とされているのです。

一人の人間には魂と肉体があります。アッラーは私たちにその両方を与えました。私たちは生きている限り、魂と肉体をそれぞれ鍛え、これらを分裂させないようにしなければなりません。イスラームは、人間の精神面からの必要性に応えるだけでなく、身体面も視野に入れた上で、神による魂と肉体のための究極的に明快な規律を示しているのです。

私は 2 年前にムスリムになったばかりです。しかし、精神的、肉体的に私が必要としていることを、イスラームが応えてくれたことを確信しています。現代の日本は科学技術が非常に発達し、その分野では世界の最先端を他国と競っています。しかし、科学の進歩と物質的な利益を追求するうちに完全に変わってしまいました。日本は天然資源の乏しい国で、原料の大半は外国から輸入しています。それでも、他国よりも優れた安価な製品を作ることができるのは、たゆまぬ努力によるものです。こうして、常に努力を続けなければならなくなった日本人は、魂や精神について関与する時間を持つことなく、いつの間にか機械のようになってしまいました。現在の日本人は、西欧的な物質主義に迎合しています。宗教や信仰心は失われ、精神世界とのつながりも断たれました。今日、日本人の胃袋は満たされ、金持ちも大勢います。一方で精神は一層貧しく、空虚になっていきました。精神的な貧困を前に、物質的な豊かさ一体どれほどの価値があるのでしょうか。体を美しい服で着飾っても、魂が入っていない人間が、この世界でどれほど役立つものなのでしょうか。

私が思うには、日本にイスラームを伝えるのは、まさに今がふさわしい時期なのです。なぜなら、物質的には十分な域に達した日本人は、精神的な空虚感を感じており、自らを導く何かを求めているからです。このような日本人の精神的破綻を回復できるのは、ただイスラームしかありません。その理由はイスラームだけが、この世界で生きることを含め、人々を導いているからです。もし、日本で継続的にイスラームを真摯に紹介する場ができ、出版も進んでくれば、数世代後にはすべての日本人がムスリムになるのではないかと期待しています。そうすれば、イスラームは単に極東を輝かせるだけでなく、全世界にとっても一層役立つものとなることでしょう。

### 33. アリ・ムハンマド・モリ（日本）

今から 18 年前、つまり 1929 年に私は満州にいました。当時の日本は、極東での列強国でした。

満州を移動しているとき、ピーチン付近の砂漠でムスリムたちと親しくなりました。彼らは非常に質素で、信心深い暮らしを送っていました。彼ら

と接する中で、神への絶対的な服従の様子や互いへの思いやりを目にし、また、外国人に対する誠実なもてなしに私は驚かされることになりました。満州を旅するごとに多くのムスリムと知り合うようになりましたが、どの人にも同じような純粋さと美德を見出すことができました。そして、彼らに対して親近感を抱くようになっていきました。

その後、私は 1946 年によく日本に戻ることができました。この間、日本は第二次世界大戦に加わり、敗戦を喫していました。当時の強大な日本帝国は跡形もなく消え失せ、日本人が心の拠りどころとしていた仏教も完全に壊れてしまいました。日本はその基盤を失って混乱に陥り、社会に悪影響が広まっていました。

このような状況の中、一部の日本人はキリスト教を受け入れるようになりました。キリスト教は、開国後の 90 年以上にわたって禁止されてはいませんが、それでも日本人のキリスト教徒はごく少数にとどまっていました。しかし、その数が増加していることに私は気付きました。恐らく、ブッダが自分たちを救ってはくれないということ、日本人は理解したからでしょう。ブッダに対する信仰や尊敬が失われ、人々は新しい宗教を求めていました。特に若者たちは、キリスト教がその代わりになると考え、次々に入信していきました。しかし、しばらくすると、彼らにキリスト教徒になるよう勧めた宣教師たちが米英帝国主義者の道具であったことや、キリスト教徒になったことで仏教だけでなく元来の純粋で誠実な日本人の気質からも遠ざかってしまうことが知られるようになってきました。宣教師たちは、キリスト教に改宗させるときには、常にアメリカやイギリスの商品の素晴らしさを語り、同時に日本の製品を見下すように仕向けていました。そして、常に商品を海外から日本へと輸入させるように図っていました。つまり、帝国主義者はキリスト教を利用しながら、私たちを踏み台にして豊かになっていったのです。

日本はロシアとアメリカの間に位置しています。この二つの大国は、日本を自国の影響下に入れようと望んでいました。戦後、彼らが日本に対して行った啓蒙活動は、日本人の魂を救うためではなく、ただ自分たちの利益確保のためでした。しかし、日本人が必要としていたのは、魂を導いてくれる誠実な存在でした。

このような日本人の必要性に応えることができ、魂をやすらぎに導いて、その人の生涯での正しい道を示すことができるのは、イスラームにおいて他はありません。私は、何よりもまず、イスラームではムスリムを互いに兄弟とみなしていることに深い感銘を覚えています。イスラームでは、肌の色や民族を区別することなく、すべてのムスリムが兄弟となるのです。そして、アッラーは、人々が平和に過ごし、悪事を行うことなく、兄弟として生きていくことを命じています。現在の世界の困窮した様子を見るにつけ、この命令以上に善良なものはないと思うのです。そのような命令を下した偉大な存在こそが、真の神であることは疑いの余地がありません。昨年、3人のムスリムが徳島を訪れました。彼らはパキスタン人でした。私はすぐに彼らのもとに行き、イスラームについての素晴らしい、また深い知識を得ることができました。その後、日本人のムスリムとも交流を持つようになり、東京在住のモリワラ、ミタの両氏に学ぶようになりました。彼らにムスリムとなることを勧められ、ついに私もイスラームを受け入れることとなりました。

私は、最も理論的で最も清らかな真実の宗教であるイスラームが、全世界に広がり、人々を破滅から救うことを心から願っています。もし、世界のすべての人々がムスリムであるならば、きっとこの混乱した世の中は天国のようになることと思います。アッラーの恵みと威光が人々の魂に光を与え、正しい道へと導かれていくことで、ようやくやすらぎへと至ることができるのです。そして、イスラームによって、精神的にも物質的にも幸福を感じ、アッラーのご満悦を得たしもべとしての幸運に巡り合うことができるのです。

### 34. オマル・ミタ（日本）

オマル・ミタは経済学を修めた後、働きながら仏教の僧侶として説法を行っていた時期もありました。ムスリムになってからは、イスラームの布教のために出版を行うなど活躍した日本の思想家です。

アッラーに感謝することに、私は3年前にムスリムとなりました。私は幸運な人生を送っています。誠実で真の生き方とは何かということ、パキスタン人のムスリムの兄弟たちが私に教えてくれたのです。私は彼らが来

日したときに知り合いになりました。彼らはイスラームのことを説明し、私をムスリムになるよう導きました。彼らには大きな恩があります。

日本人の多くは仏教徒です。しかし、真の仏教とはもはや何のつながりも持っていません。仏教の儀式には、もはやほとんど参加する人はいませんし、宗教的な知識にいたっては、ほぼ完全に忘れ去られてしまっています。これは、仏教が非常に漠然とした複雑な哲学であることと同時に、日々向き合わなければならない課題や次々に起こる災難に対して、どう立ち向かっていくべきなのか知る由もないごく一般の人々にとっては、仏教が何の助けにもならなかったという理由によるものです。つまり、一般に仏教は理解されず、その結果、この教えからの益を受け取ることもできません。しかし、イスラームは違っています。イスラームは、誰もが理解できるシンプルで人道的な、神から与えられた教えです。この教えは人々の生涯のあらゆる局面で影響を与えます。そして、あらゆる出来事に対して、ムスリムがどのように行動したらよいのかを教えています。イスラームの基本は清浄にあります。イスラームは魂を清らかにする最高の指針です。イスラームは非常に論理的で、たとえ学のない人であってもその教えるところを理解できます。そして、イスラームには、他の宗教で見られるような、特権的な階級制度や僧侶による独占はありません。

私の考えでは、日本にイスラームを広めることはさほど難しくはありません。当初はさまざまな摩擦が生まれるかもしれませんが、このような障害はいずれ取り払われ、日本人はムスリムになり始めます。そのためには、まずは日本人に正しくイスラームを紹介する必要があります。日本人は物質的には益々豊かになっています。しかし、どこか満足感は得られず、精神的な虚しさを感じています。日本人には、イスラームが単に精神面での知識を与えるものではなく、現世で行うべきあらゆる事柄についても示された、生涯における完全な導きであるということを伝える必要があるのです。

また、このようなことを実行できる十分な実力と知識を備えた真のムスリムに来日してもらう必要もあります。残念ながら、さまざまなイスラーム諸国から日本に来ている学生では、このような重要な役割を果たすだけの力は備えていません。彼らと接すると、悲しいことに自らの宗教について知

識を持っておらず、さらには自らの宗教に従っていないことに気付かされるのです。だから、このような人々では、日本人のための導きにはならないのです。彼らは西洋世界に驚嘆し、西洋式の教育を受け、西洋人の学校や神学校で学んできているので、イスラームについて何も知ってはいないので。

イスラームを日本に普及することは、あらゆるムスリムが真剣に考えるべきだと思います。そして、先に述べたように、真の学者たちを派遣すべきだと考えています。日本に来るムスリムは、日本人にただ素晴らしい言葉を並べるだけではなく、態度や行動でもイスラームの規範となるべきなのです。元来、日本人は平和、真実、正義、誠実、道徳といった特質を備えていました。しかし、時とともにこれらの素晴らしい特質を失ってきており、それを救うことができるのはイスラーム以外にはないのです。

ムスリムは、唯一なる偉大な創造主、アッラーを信じます。日本人もこのような信仰を必要としているのです。

イスラームとは平和を意味します。日本人ほど平和を求める民族はいないでしょう。平和とやすらぎを得るためには、その意味自体が平和を表すイスラームを受け入れることが必要です。また、イスラームとは平和とやすらぎの中で人々とともにあり、アッラーへ服従することも意味します。すべてのムスリムは兄弟です。人類はイスラームによって、災いや苦難から救われることができるのです。

### 35. ファトゥマ・カズエ（日本）

第二次世界大戦以降、宗教に対する必要性を次第に感じにくくなっているように思います。日本人は少しずつ、アメリカ流の生活様式に慣れてきましたが、これが人々と宗教とのつながりを弱め、人間を機械のようにしていくことになりました。こうして単なる物質と化した人間は、大きな欠乏を感じるものです。私もこの欠乏感を持っていました。あのような生き方に満足してはいなかったのです。しかし、何が足りないのかを理解することはできずにいました。

ある時、しばらく滞在するということで東京にやってきたムスリムを訪

ねることになりました。その人の宗教についての言葉や礼拝の様子は非常に興味深く、私はたくさんの質問をしました。そして、返ってくる答えは納得させられるものばかりで、私の魂の空白を埋めていくようでした。このムスリムは、唯一の創造主が存在すること、その創造主はどうすれば幸福とやすらぎのうちに生きることができるかを教えてくれていること、自身もその命令に従って生きていることを説明してくれました。これらの言葉は強い印象を残しました。やがて、私もその教えに従いたいと思うようになり、そのことを伝えてムスリムになったのです。

ムスリムになった後、創造主と近く生きることが、いかに幸福であるかを心から感じるようになりました。私の生き方は変わり、やすらぎを得たのです。

イスラームが真実の教えであるということを理解するには、ムスリムが「アッサラームアライクム」と挨拶を交わすということに着目するだけで十分だと思います。私たちは普通「おはよう」「こんばんは」と挨拶をします。このような乾いた物質的な言葉の代わりに、ムスリムは「アッサラームアライクム　ワ　ラフマトゥッラーヒ　ワ　バラカトッフ」と言うのです。その意味は「あなたの上にやすらぎと平安、そしてアッラーの慈悲と恵みがありますように」というものです。これ以上に素晴らしい言葉、素晴らしい挨拶の仕方があるでしょうか。私は、ムスリムの友人たちから、何を信仰するのか、イスラームがどのような根拠をもとに成り立っているのか、どのような礼拝を行うのか等、数多くの貴重な知識を得ることができました。これらは非常に単純明快で、人間的でもありました。イスラームとは、清純で、シンプルで、論理的で、そして平和のうちに生きることができる教えであることを、私は目で見ても信じることになったのです。個人的にも社会的にも、人々が平和とやすらぎの中で生きていくためには、この教えに従うべきなのです。だから、私自身が平和とやすらぎを得た後は、家族や友人たちもムスリムになってもらえるよう努めているところです。

### 36. トーマス・アーヴィング（カナダ）

私がなぜムスリムになったかを語るにあたっては、ムスリムになる前と後でそれぞれ何を感じたか、また、どのようにしてイスラームと出会い、ど

のような影響を受けたのかについて説明する必要があると思います。ただ、その前に話しておきたいことがあります。それは、何千人ものカナダ人、あるいはアメリカ人が、ムスリムになる前に私が考えていたのと同じように考え、同じような欠乏感を感じているということです。彼らに正しいイスラームを伝えることのできる、預言者ムハンマドの言行に則った学者たちが待ち望まれているのです。

私は子どもの頃、キリスト教と強いつながりを持っていました。私にとって宗教とは、魂が求めるものだったのです。しかし、成長するにつれてキリスト教に多くの不満を抱くようになっていきました。預言者イーサーの生活や、彼が神の子であるという主張に関して聞かされた話は、迷信や空想上の物語ではないかと感じ始めたのです。私の理性がこれらを受け入れなくなっていきました。そして、「もしキリスト教が真実の教えであるならば、なぜこの世にはキリスト教以外の人が大勢いるのだろうか、もともとユダヤ教とキリスト教の啓典は同じなのになぜ違いがあるのだろうか、キリスト教徒以外の人は理由もなくなぜ破滅するとされるのだろうか、それが本当ならなぜ人々はすぐにキリスト教徒にならないのだろうか」といった疑問を自問自答していました。

その頃、インドでキリスト教の布教活動をしていたという、ある宣教師と出会いました。彼は「ムスリムはとても頑固な人たちだ。彼らをキリスト教徒にすることはできない。彼らは正しい教えはキリスト教ではなくてイスラームだと主張を曲げないから、私が改宗させようといくら努力してもまったく報われない」と愚痴をこぼしていました。しかし、私にとっては、この言葉がイスラームに興味を持つ最初のきっかけとなりました。私の心にはイスラームへの関心とともに、自らの宗教に誠実なムスリムたちに対する感嘆の念が芽生えました。そして、「イスラームについてもっと調べてみよう」と思ったのです。

大学では東方文学の授業に出席することにしました。そこでは、東方の人々が三位一体の教義を否定し、より人間の理性に合った唯一神信仰を持っていることを学びました。預言者イーサーは、その教えを伝えたとき、絶対的な唯一の神が存在すること、自分が神のしもべであり、また預言者であ

ることを語っていました。彼が伝えた神とは、慈悲深い唯一なるアッラーだったのです。しかし、そのような正しく素晴らしい信仰は、無意味な伝説や後で付け加えられた迷信、あるいは偶像崇拜者がキリスト教に持ち込んだ教義によって消え失せていきました。慈悲深い唯一のアッラーに代わって、神父を介さなければその存在に届くことができないという、また、生まれながらの罪を負った存在として人間を創造したという三つの神を作り上げてしまったのです。だからこそ、純粋な唯一神への信仰を再び人々に教えるため、新たな宗教、新たな預言者が必要になりました。その当時、ヨーロッパはまさに野蛮ともいえる状態でした。一方では無慈悲な人々が略奪を繰り返し、他方では宗教という傘の下、少数派の人々に対してあらゆる悪事が行われていました。預言者イーサーから 6 世紀後、人々がこのような悲惨な状況で偶像崇拜や無宗教に陥っていたとき、アッラーの最後の預言者であるムハンマドが東方に現れ、人々に真のアッラーの教えを伝え始めました。この宗教の基本は、唯一の創造主を信仰することでした。

私はこれらのことを読んだり学んだりしていくうちに、預言者ムハンマドこそが、真の預言者であることを信じるようになりました。その理由は次のようなものです。

- 1) 先に述べたように、人類は新しい預言者を必要とする状況にあった。
- 2) この偉大な預言者が伝えていたことと、私の神についての概念が完全に一致していた。
- 3) クルアーンを読んだとき、それがアッラーの言葉であることを直感した。

クルアーンが伝える内容や預言者ムハンマドのハディースは、すべての面で私を納得させるもので、私の魂をやすらぎへと導いてくれました。そして、私はムスリムになったのです。

先述のとおり、何千人、何万人というアメリカ人、カナダ人が、私と同じようにキリスト教に不足や欠陥を感じています。しかし、残念ながら彼らは私のように、イスラームに近しく接する機会がなく、導きを必要としている状態にあります。

イスラームを信じるようになってからも、私はさまざまな本を読んでい

ます。その中で私が勧めたい本を紹介しようと思います。ある慈善家のインド人は、Q. A. Jairazby と H. W. Lovgroveun による『イスラームとは何か』という本を送ってくれました。この本はとてもシンプル且つ論理的に正しい知識をまとめていて、イスラームを説明する最良の本だと考えています。このような本を全世界に広めることは、イスラームを紹介する上で大変有益なことでしょう。また、ムハンマド・アリーの英訳によるクルアーンも気に入りました。その他にも多くの本を読み、イスラームについて特集された雑誌にも目を通しました。モントリオールでは、フランス語で出版されたイスラームの書籍を見つけましたが、一部は批判的な立場から書かれたものでした。しかし、そのような書籍でさえ、イスラームが偉大であることを覆い隠すことはできておらず、かえってイスラームが真の宗教であることを改めて証明する結果となったのです。

(註)『誰もが必要とする信仰』を発行する当ハキーカトゥ出版では、イスラームを正しく学びたいと望む方々のために、英語、フランス語、ドイツ語、その他各種言語で書籍を用意しています。これらは、高名なイスラーム学者らがまとめた知識をもとに編纂されたものです。各出版タイトルは巻末に記載されており、巻頭住所のハキーカトゥ出版宛に申し込みをいただければ書籍を発送しています。これらの本を読んだ善良な皆さまが、イスラームを心から信じ、喜びとともにムスリムになることと信じています。なぜなら、イスラームは良心を備えた人々であれば、受け入れることのできる信条や知識から成り立っているからです。良心を失ったり、魂が病んで我欲に溺れ、自らの利益のみを考えたりするような人であれば、イスラームを正しく理解し、評価することはできないものと考えます。

### 37. アブドゥルケリム・ゲルマヌス教授（ハンガリー）

ゲルマヌス教授はブダペスト大学の「東方文学」教授として世界的に知られています。第一次世界大戦、第二次世界大戦の頃にはインドを訪れ、ノーベル文学賞作家のタゴールが設立したタゴール国際大学で教鞭をとっていたこともあります。終戦後はデリーに移り、そこでムスリムとなりました。ゲルマヌス教授は、特にトルコ語、トルコ文学の権威とされています。

それは、まだ私が青年期にさしかかったばかりの頃だった。半分子どもといってもよい年頃である。私はとある雨の日に、古い写真が載っている雑誌を見つけた。それは遠い国々の風景だった。平屋作りの小さな家が並び、その周りにはバラの庭があった。家々の屋根の上には見たこともない美しい衣装を着た人たちが座り、半月が照らし出す薄明かりの中で誰かの話を耳を傾けているようだった。人も服も家も庭も、すべてがヨーロッパとはまったく違っていた。写真の下に書かれた説明からすれば、これはアラブの小さな町で、語り部の話を聴いているアラブ人を撮影したものだった。当時、私は16歳だった。ハンガリーにいて、ハンガリー人学生としてこの写真を見ていたが、まるで自分もその場において、アラブ人たちと並んでこの語り部の甘美に響き渡る声を聴き、一緒に楽しんでいるように感じていた。私の中にオリентへの関心が芽生え、すぐにトルコ語を学ぶことに決めた。トルコ語を学んでいくと、その詩にはペルシア語、散文にはアラビア語を起源とする言葉が多く含まれていることが分かってきた。そこで、オリентをより深く理解するには、この二つの言葉も学ぶ必要があると考え、大学の初めての休暇を使って、まずはハンガリーから最も近いボスニアに行くことにしたのである。いそいそと出発してボスニアに着くと、まずはホテルで「この辺りにムスリムはいますか？」と尋ねてみた。ホテルの従業員はある場所を教えてくれた。私はそこへ行ってみた。トルコ語はまだ片言で、きちんと通じるか不安で一杯だった。ムスリムたちは、彼らが住んでいる地区のコーヒー店に集まって談笑していた。彼らはゆったりとしたズボンと履いて腰には帯を巻き、その帯にはきらきらと光る柄の付いた短剣が差し込まれていて、強面で大柄な人たちだった。頭に巻いたターバン、ゆったりしたズボン、そしてあの短剣が、私に奇妙な印象を与えていた。私は少し気後れし、少し恐怖を感じながら店へと入り、彼らの隣の席に着いた。すると、彼らはひそひそと話し、目で私を指していることに気が付いた。私のことを話しているに違いなかった。私はハンガリーで聞いていたこと、つまり、ムスリムがキリスト教徒をどのようにして殺害するのかということを思い出していた。「今に立ち上がって、あの短剣で私の首を刎ねるのだから

うか」と考え、こんなところに来たことを猛烈に後悔していた。どうやって逃げたらよいかを考えながら、恐怖のあまり動くことさえできずにいた。数分後、店員が良い香りのする一杯のコーヒーを私に持ってきた。身振り手振りで、このコーヒーは私があればほど怖がっていたムスリムたちからの奢りであると教えてくれた。恐る恐る彼らを見ると、そのうちの一人が心からの素晴らしい微笑みを浮かべて私に挨拶をしてくれた。私は、怖くて震えていた唇で何とか笑顔を作り、その挨拶に応えようとした。私が敵だと思っていたこの男たちは、立ち上がって私のそばにやって来た。

心臓はまだ激しく打っていた。「今、襲ってくるのかもしれない」ととっさに考えた。しかし、彼らは親しげな雰囲気の中で私の周りに座り、再び挨拶をしてから、そのうちの一人はタバコを差し出してきた。タバコに火をつけたとき、遠くからは野蛮に見えた彼らの顔がマッチで灯されると、意外にも神聖な表情があることに私は驚かされていた。私の恐怖心は少しずつ消えていった。かなりつたないトルコ語だったが、彼らと話そうと努めてみた。私がトルコ語を口にした瞬間、彼らの表情はすっかり打ち解けたものになっていった。もはや私たちは親友のようだった。短剣で襲ってくると思っていた人々が、私を家に招き食事を振る舞ってくれたのである。彼らは私をこの上なくもてなしてくれ、どうしたら私が快くなるかだけを考えてくれていた。そう、私とムスリムとの最初の出会いは、このようなものだったのである。

その後も、さまざまな出来事があった。それぞれの出来事の結果、私の目から一枚、また一枚と覆いを取り除かれていった。私はイスラーム諸国を訪ね歩き、イスタンブール大学にも留学した。アナトリアやシリアの美しい場所にも立ち寄った。その間、私はトルコ語のほか、アラビア語とペルシア語も学んでおり、やがてブダペスト大学からイスラーム文献研究所の教授として任命されることになった。大学では何世紀もかけて収集された、数多くの古い文献があり、これらを研究することになっていた。文献からは、たくさんの素晴らしい内容を知ることができたが、あわせてイスラームに関する内容についても知識を蓄えていった。イスラームについて知るたびに、私の心は感銘を受け、特にクルアーンとハディースは大きなインパクトを

与えていた。ついに、私は再び東方に行き、今度はイスラームについて詳しく学んでくることを決意した。

このときの旅は、インドへと向かうものだった。私の魂は虚ろで、渇きを覚えていた。そして、デリーに着いた夜、夢で預言者ムハンマドが現れたのである。質素な、しかし、とても尊い服を着ていた。その服からは何とも素晴らしい香りが漂ってきていた。上品で美しく、きらめくような目の輝かしいその顔を前に、私は言葉を失った。そして、とても心地よい、しかし真剣な声のアラビア語で私にこう言った。「なぜ悲しんでいるのか。あなたの前にある道をあなたは既に知っている。正しい道がどれなのか、選べる段階に達したのだ。ためらうことなく、その道に進みなさい！」私は全身が震えていた。私はアラビア語で尋ねた。「アッラーの使徒よ！ あなたはアッラーの預言者です。私はそれを信じています。けれども、私はムスリムになったらやすらぎを得ることができるのでしょうか。あなたは遥かに偉大な存在です。あなたはあらゆる敵を倒し、常に正しい道を示しました。でも私は弱く無力な人間です。あなたが示した道を進んでいくことができるのでしょうか？」預言者ムハンマドはじっと私を見つめ、ゆっくりとクルアーン第78章消息章の第7節から第10節を詠んだ。「われは大地を、広々としなかつたか。また山々を、杭としたではないか。われはあなたがたを両性に創り、また休息のため、あなたがたの睡眠を定め、夜を覆いとし」

これらが語られるとき、その言葉は銀の鐘のように心地よく響いていた。私は汗をかきながら、「アッラーよ、私はもう眠ることができません。私の周りにある分厚い覆いに隠されたものを理解することができないのです。アッラーの使徒よ、預言者よ、私を助けて下さい！ 私を照らして下さい！」と叫んでいた。一方で、この偉大な預言者の重荷になることも恐れていた。そのため、喉から異様な声を出して呻いていた。ついに、私は穴に落ちるような感じがして、汗まみれの状態で目を覚ました。心臓は早く脈打ち、耳鳴りがしていた。

次の金曜日、デリーのシャー・ジャハン・モスクでは、ある出来事があった。金髪で白い顔をした外国人の若者が、年配のムスリムたちと一緒にモスクへと入っていった。これが私である。私はインド風の服を身に着け、胸に

はイスタンブールでもらった金のメダルを付けていた。モスクにいたムスリムたちは、何事だろうと眺めていた。私たちは説法台の近くまで進んでいった。その少し後、アザーンの声が響き渡った。モスクにいた四千人ほどの人々は、まるで軍隊のように素早く列を成し、礼拝が始まった。私も彼らとともに礼拝を行った。これは私にとって忘れられない瞬間である。礼拝が終わり、説法が読まれた後、私はアブドゥルハーイ師に手を取られ、説法台へと連れていかれた。説法台に行くときには、床に座っている人たちにぶつからないよう、気を付けて進まなければならなかった。説法台のところへとやって来て、階段を上っていった。最初の一段に足をかけたとき、白いターバンの下のたくさんの顔が、デイジー畑の花のように私を取り囲んでいるのが目に入った。説法台の近くにいた宗教家たちが、私を励ますような眼差しを送ってくれていた。かれらの後押しが、私に必要な力を与えてくれた。私は説法台に上がり、周囲を見渡した。私の前には大きな人の海が広がっていた。全員が頭を上げて、私が何を話すのか見守っていた。私は、ゆっくりとアラビア語で話し始めた。「ここにお集まりの親愛なる皆さま。私は遠い国から、そこでは学ぶことのできないことを学ぼうと、ここにやって来ました。そして、私はここでその目的を果たし、私の魂はやすらぎで満たされました。」

続いて私は、歴史を通じてイスラームが得てきた地位や、アッラーが偉大な預言者ムハンマドのためにさまざまな奇跡を起こしたこと、今日のイスラーム諸国の凋落の理由はムスリムが自らの宗教を十分尊重できていないためであることについて話していった。そして、一部のムスリムは、自分では何もできないからといって努力の必要もないと考えてしまっていること、また、すべてはアッラーによるもので人はそれを変えられないと言う人もいるが、クルアーンでは「人が自らを正そうとしない限り何も正されない」「努力する人には援助がある」と語られていることも話した。人は常に努力すべきであり、無気力であってはいけないと伝えるクルアーンの章句についても引用しながら話を進めていった。最後にアッラーへの願いを行い、説法台から降りていった。説法台を後ろにしながら、「アッラーフ・アクバル」という声が、雷のようにモスクに響き渡るのが聞こえていた。私は緊張

のあまり、周りが見えていなかった。そばにいた友人のアスランが私の腕をつかみ、急いでモスクから連れ出してくれた。「なぜそんなに急いで出るのかい？」と尋ねると、「後ろを見ろよ！」と答えが返ってきた。振り返ると、人々が私を追って集まってきていた。彼らは私のところに来て、首に抱き付いたり手にキスしたりしようとしていた。また、自分たちのためにも願いをかけてほしいと言ってくる人たちもいた。「アッラーよ、私のような無力な人間を、彼らが立派な人のように思い込んでしまいませんように」。私はそう願い、自分のことを恥ずかしく感じていた。まるで、あの清らかな心を持ったムスリムたちの財産を盗んだか、裏切ったかのように思ってしまったのだ。ただ、この日、私は一つのことを理解した。それは、人々から人気の高い政治家には、大きな力が与えられるということである。もし、その政治家が人々から与えられた力を悪用すれば、その国は滅びてしまうことになるだろう。

その日、私はムスリムの兄弟たちに、自分がただの無力なしもべの一人に過ぎないことを説明しながら帰路についた。しかし、彼らが示してくれた友情や愛情、敬意は何週間も続いていた。そう、彼らはこの私に非常に大きな愛情を示してくれたのである。そして、それは私の人生の最後の日まで、十分なものとなっている。

### 38. イヴラーヒーム・ヴァー（マレーシア）

私はムスリムになる前はカトリックの信者でした。宣教師に勧められてカトリックになりました。けれども、私はどうしてもこの教えに馴染むことができませんでした。神父たちは三つの神を信じるよう求め、「聖餐」（パンがイエスの肉であり、ワインが血であることを象徴する儀式）や聖なるパンを崇めるよう強制してきたからです。神父は無垢な存在だから、彼が言うことにはすべて従わなければならないとか、そういった多くの理性的でないことを教えられました。また、キリスト教徒はイスラームの敵であるべきだとも言われました。そしてこれらを信じなければ、その人は破滅することになると言うのです。私は神父たちにこれらの話の内容について質問し、納得できる論理的な返答を期待しました。しかし、誰一人、これらについて説明

してくれることはありませんでした。「これらは聖なる秘密なのです。誰も理解することなどできはしません」などと答えるにとどまりました。人は頭で理解できないことを、一体どうやって受け入れられるのでしょうか。私は、少しずつ、どうやらここには何か間違いがある、キリスト教は正しい教えではないのではないかと疑問を持ち始め、嫌悪感を覚えるようになっていきました。時には、神父たちの前で他の宗教、例えばイスラームについて言及しようものなら、すぐに吐き捨てるように「ムハンマドは嘘つきでイスラームなどというものは偽物の宗教だ」と怒鳴られるのでした。そして「そうですか。でもなぜ嘘の教えなのでしょう？」と尋ね返しても、何の答えもないのです。彼らのこのような態度が、かえってイスラームについてもっと詳しく調べてみようという気を起こさせました。私はマレーシア在住のムスリムのところに行き、彼らの宗教について知識を求めました。彼らは神父たちとはまったく異なっていました。イスラームについて非常に丁寧に説明してくれました。正直に言うと、最初は彼らと徹底的に討論をしたのです。しかし、彼らは私の質問に対して、いつも納得できる答えを返してきました。常に落ち着いていて、忍耐強く私に対応してくれました。やがて、私の目の前にあった覆いが少しずつ開かれていき、心には大きな安心感が満ちてくるのが分かりました。たくさんの迷信にあふれたキリスト教と違い、イスラームではすべてが理性的で、論理的で、知的でした。ムスリムは唯一の創造主を信じています。この偉大な創造主は、人が原罪を負っているなどとは言わず、豊かな恵みを与えてくれるのです。創造主が命じることで、私が理解できないことはありませんでした。礼拝はアッラーに感謝するためのものでした。ムスリムは絵画や象徴を崇めたりはしません。神聖な書であるクルアーンのすべての言葉の趣を魂で感じていました。礼拝は絶対にモスクで行わなければいけないということもありません。それぞれが、自分の家で、あるいは、どこにしようとも礼拝を行うことが可能です。これらのすべてが、とても正しく素晴らしいことであるとともに、実に人間的なものでもあり、私は真の教えがイスラームであることを受け入れ、ムスリムとなったのです。

### 39. イスマイル・ヴィエスレヴ・ゼジレルスキー（ポーランド）

私は1900年にポーランドのクロコフという町で生まれました。家族はポーランドの歴史上、その名が出てくるような有名な一族でした。父はまったく宗教を持っていませんでしたが、子どもたちがカトリックの教育を受けることに反対はしませんでした。ポーランドには多くのカトリック信者がいます。母も熱心なカトリック信者だったため、子どもたちをカトリックとして育てることを望んでいたのです。私も宗教については大いに敬意を抱いていました。個人においても社会生活上も、宗教が最も重要な指針であると信じていました。

私の家族は、よく外国人と会う機会がありました。父は若い頃にさまざまな国を旅行しており、たくさんの外国人の友人がいたのです。だから、私たちも自分とは違う民族や文化、宗教に対しても尊重するように育っていました。誰かを差別するようなことはせず、いかなる国や民族、つまりあらゆる人を大切にできたのです。私は自分のことをポーランド人というよりも、一人の地球の住民であるように思っていました。

私の家族において、この世での仕事に対する姿勢は完全に「中庸」の考え方に基づいていました。父はまったく働くという習慣のない貴族階級の出身でしたが、怠惰であったり、仕事を持たなかったりすることを良しとせず、誰もが皆、必ず何らかの仕事をするようにしていました。独裁主義には真っ向から反対する一方、世界の秩序や規律を破壊する社会主義革命も絶対に認めることはありませんでした。反対に、過去から続く伝統には敬意を払っていました。要するに父は、中世のそして中庸の道を行く騎士でした。父が与えてくれた自由な教育のおかげで、私は研究者として社会問題を研究するようになりました。この世界には解決されるべき多くの社会的、政治的、経済的問題があります。これらを解決し、正しい道を見つけるためには一体何をすべきでしょうか。これに関しては、現在、人々は互いにかけて離れた二つの道に分裂しているように思います。一方は、抑圧と恐怖政治、もう一方は完全なる放置です。しかし、人々が安心して平和に暮らしていくためには、この二つが和解し、中庸の道を見つけなければならないのです。人間社会は、自由でありながら秩序を保ち、現代の生活条件に合致しながら過

去の伝統も尊重できるような、何らかの基盤を必要としているのだと考えています。「中庸」という原則に従って育ってきた私のような人間が、このように考えることになったのはごく自然な流れでした。そして、私たちは「進歩的伝統主義者」という呼称で呼ばれるようになりました。

16歳になったばかりの頃には、「カトリックの教えが社会基盤となり得ないだろうか」と考え始めました。そこで、カトリックについてより詳細に学んでいくことにしました。ただ、そのときに教会で教わった教義のうちのいくつかは、どうしても納得できないものであることが分かりました。その最たるものが三位一体の教義であり、聖餐の儀式でした。また、神に祈るときには絶対に神父を介さなければならないこと、私たちと同じ人間のはずの神父だけが純真無垢な存在、つまり神格化されてしまっていること、まるで原始人のように絵画や銅像や象徴を拝まなければならないこと、時には奇妙な動きを求められることなども、次第にキリスト教に対する嫌悪感を抱かせることになりました。どうやら、この教えは人間を破滅から救うどころか、根幹が腐ってしまって価値がないのではないかと思うようになっていったのです。そして、私は宗教から完全に距離を置くようになっていきました。

第二次世界大戦後になって、私は再び宗教の必要性について考えるようになりました。やはり、人は宗教なしに生きていけないと気付いたのです。人の魂は指針を必要とします。宗教は最大の道しるべであり、最も深い部分での慰めの源となります。宗教を持たない人はいつか行き詰ってしまうものです。人類最大の災いは、宗教を否定するところから派生します。人々が適切な社会生活を送り、互いを尊重しながら正しい道を歩んでいくためには、宗教が不可欠だと思うのです。しかし、発展を遂げた現代の人々は、今の生活水準や科学知識に見合わないような奇妙な考えや、論理的に納得できない教えであれば、宗教といえどもそれを受け入れることはないでしょう。キリスト教は、まさにこのような状態に陥っているのです。そこで、私は他の宗教をみてみようと考え、世界のさまざまな宗教について調べることにしました。アメリカのクエーカー、ユニテリアン主義、さらにはパーイー教まで調べてみました。しかし、そのどれも、私を満足させてはくれませんでした。

そして、ついに私はイスラームと出会いました。スペイン語で書かれたイ

イスラームに関する本が手に入ったのです。この本は、イギリス人ムスリムのイスマイル・コリン・エヴァンスという人によるもので、これが1949年に私をイスラームへと導ききっかけとなりました。私はこの本を読み、カイロにあったイスラーム布教センターというところに連絡を取り、イスラームに関する知識を求めました。このセンターが別のスペイン語の本を送ってくれたことで私の信仰は完成し、ムスリムになったのでした。

イスラームは、私が幼少期から持っていた考えや希望に、完全に応えてくれるものでした。イスラームには自由も規律も存在します。また、イスラームでは、アッラーに対する義務を示す一方で、この世界で安心して生きていくために必要なことも教えています。イスラームは、すべての人々、さらにはすべての生命のための権利を認めています。社会問題に対しても、イスラームは最も重要な課題を最も正しい形で解決してきました。私は社会学者として、イスラームにおけるザカート（困窮者を助けるための義務の喜捨）やハッジ（巡礼）の完全性に驚きを禁じえません。この世で多くの財産を与えられた人が、その中の一定の部分を貧しい人々に分配すること、あるいは、貧富の差や身分の高低、年齢や職業を超えたすべての人々が同じ場所に並び、神に祈りを捧げて互いに知り合うことは、いかなる社会学的知識をもってしても、到達しようにもできなかった高貴な目標であり、これにイスラームが遙か昔に到達していたこと示しています。こうして、イスラームは、帝国主義と社会主義の間の最も完全な中庸の道を進み、全世界の人が求めていたことを可能にしたのです。イスラームは、どの民族や国であろうと、また、どのような社会的立場であろうと、肌の色や言葉が何であろうと、あらゆる人を一つにすることができます。そして、すべての人に平等な権利を与え、豊かさの差異を社会的な相互援助で補正しながら、アッラーに対する敬意の念によって物質的、精神的な秩序をもたらすという素晴らしい教えです。しばしば、イスラームにおける一夫多妻制が非難されていますが、これは単に人間の生物学的な仕組みに応じているだけのことで、一夫一婦制を決して守ってなどいない偽善的なカトリックより誠実な規律であるとも考えられます。

終わりに、私に正しい道を示し、アッラーのご満悦へと続く真実の道へと導いてくださった偉大なるアッラーに、心から感謝を捧げたいと思います。

#### 40. ムウミン・アブドウルラザーク・セルリッター（スリランカ）

かつての私はイスラームをひどく敵視していた。なぜなら、家族や友人、知人とといった周囲の人々が、イスラームは取るに足らない偽の宗教で、人を直接に地獄へ連れていくものだと言っていたからである。だから、私はムスリムと話さないようにさえていた。私はムスリムを見ればすぐに逃げ、後ろで彼らを呪っていたのである。もし、当時、自分が将来イスラームを学んでムスリムとなっているということを夢で見たならば、悪夢だと思っようなされたことだろう。

それでは、なぜ私はムスリムになったのだろうか？ その答えはとても短いものである。私にとってイスラーム最大の魅力は、その教えがシンプルで清らかであるだけでなく、誰もが理解できる論理性を持ちながら、非常に深い忠告や英知を有していることである。イスラームについて学び始めると、私はすぐに大きな影響を受けるようになり、この教えを受け入れることになることになると直感したのだ。

私はキリスト教徒としての教育を受けていた。棚にある聖書より尊い本など存在しないと思っていた。しかし、クルアーンを読むようになって、これは聖書よりはるかに尊いと驚嘆させられたのである。キリスト教には、理性が受け付けられないような多くの伝説や奇妙な教義が存在する。クルアーンでは、そのようなものはすべて排除され、人々が理解できるように、どの観点から見ても正しいと思える事柄を伝えていた。私の中で少しずつ聖書に抱いていた価値が下がっていき、クルアーンが重要になっていった。クルアーンで読んだことは理解できるものであり、好ましい思いとともに驚きも感じていた。つまり、正しい宗教とはイスラームだったのである。私はこのことを確信してムスリムになることを決め、イスラームを信仰することで、やすらぎと愛情の教えを手に入れたのだ。

イスラームの中で私が最も好きな部分であり、また、私を強くこの教えに惹きつけた部分として、ムスリムは互いに兄弟であるという考えがある。肌の色、民族、職業、国の違いを超えて、世界中のすべてのムスリムは互いに兄弟であり、互いに愛し、互いに良くし、互いに助け合うことは、神聖な務めだと感じている。聖書では「あなたの隣人を自分と同じように愛しな

い」と書かれているが、その信条はムスリムにこそ生きづいているものであり、他の教えでは見ることはできない。イスラームにおける兄弟とは、単に言葉だけにとどまらない。世界中のすべてのムスリムは、いつでもどこでも、相手を知っていようといまいと、常に手を取り合い、互いを助けるために駆けつけるのである。

次に、私がイスラームについて魅力を感じる点として、その教えには迷信や理解不能な内容が存在していないことが挙げられる。イスラームの知識は論理的且つ実用的であり、また、知的であり、近代的でもある。イスラームは唯一の創造主を認めている。聖霊という言葉はクルアーンにも出てくるが、これは、アッラーの神聖さを示していたり、ジブラーイルという天使を指していたりする。あくまでも別の神のことではないのだ。イスラームの信条、つまり、命令や禁止事項は非常に明快で論理性があり、あらゆる観点からみて現代の生き方にも適している。普遍的であり、全世界の人々が受け入れることのできる、唯一で真実の教えがイスラームなのである。

(註)クルアーンにおいて聖霊という言葉は、いくつかの形態で用いられています。クルアーン解釈の研究によれば、それぞれの箇所によって多様な意味を表しているとされ、具体的には、ジブラーイルという天使、生命を与え守護するというアッラーの特性、預言者イーサーの魂等が挙げられます。言葉そのものとしては、聖なる魂という意味を示していると考えられます。

#### 41. ファールク・ビン・カライ（ザンジバル/タンザニア）

私がイスラームを受け入れたのは、偉大なる預言者ムハンマドに感銘を受けたからに他なりません。ここ、ザンジバルには多くのムスリムの友人たちがいます。彼らは、イスラームについて、非常に素晴らしい説明をしてくれました。私は、彼らからイスラームに関する本をもらい、家族に隠れて読んでいました。そして、1940年についてムスリムになることを決めました。家族からは反対され、当時の私の宗教だったゾロアスター教の僧侶たちからは圧力をかけられましたが、それでもムスリムになったのです。このことで、私の身にどのようなことが起こったか、どのような困難に直面したのかは、ここで長々と説明するつもりはありません。私の家族はイスラームの信

仰を捨てさせようと、想像できないような手段まで使って私を苦しめてきました。しかし、ひとたび導きを得た以上、私はあらゆる脅迫にも耐え、この正しい教えを守り抜きました。今は、唯一のアッラーとその最後の預言者であるムハンマドを自らの命よりも深く愛しています。

家族が与えてきた苦難に対し、私はジブラルタルの岩山のように対峙しました。この困難に立ち向かうにあたっては、「私はアッラーが命じた道にいる、アッラーはすべての真実をご存知で、私をお護りくださる」という信念が、力と勇気を与えてくれました。

私は、ガイラティという町でクルアーンを学ぶことができました。クルアーンを読むたびに、夢中になっていきました。この世にあっては、イスラーム以外のどの教えであっても、人々に正しい道を示すことはできないと心から理解しています。クルアーンは、人々が幸福に生きるための指針を示し、兄弟愛や平等、人としての道を説き、現世と来世での快く、やすらいだ日々を与える神聖な書物です。これは、人類に対する最大の導きであり、この書物を贈ったアッラーによってもたらされたイスラームは、世界の最後の時まで輝き続けるのです。

#### 42. ジャック＝イヴ・クストー大佐（フランス）

フランスでは、さまざまな分野で名声を獲得した人々の間でも、急速にイスラームが広まっています。フランスにおけるカトリックの最高権威であるパリ大司教が、キリスト教からイスラームへと改宗する人の数が十万人に達したことを認めました。

ムスリムになっているのは、労働者や貧困層だけということではありません。そこには、各界の著名な人が含まれていることも注目を集めています。

その一人として、世界的に知られた海洋学者のクストー大佐が挙げられます。

世界で活躍する人々がイスラームを受け入れていることは、フランス国内に多くの影響を与えていますが、この高名な海洋学者のクストー大佐は、イスラームを受け入れたことは自分の人生で最も正しい選択だったと語っています。

クストー大佐は、『生きている海』というテレビ番組で、海の神秘について解説しています。そして、大西洋と地中海の水が互いに混ざらないことを示した上で、このことが1400年も前に世界へと下されたクルアーンで伝えられていることを知ったのが、イスラームを受け入れるきっかけになったと語っています。

この件について、クストー大佐は次のように語っています。

「1962年に、ドイツ人研究グループが、アデン湾と紅海が接するバブ・エル・マンデブ海峡では、紅海とインド洋の海水が混ざり合っていないということを発表しました。そこで、我々も大西洋と地中海の水が混ざっていないのか調査を行うことにしました。まず、地中海での海水温度、塩分濃度、透明度、海水中の生物を調べ、同様のことを大西洋でも実施しました。

この二種類の海水は、何千年の間、ジブラルタル海峡で接しています。従って、二つの海水は混ざり合い、塩分濃度や透明度などの要素が等しいか、少なくとも近いものであることが考えられました。しかし、大西洋と地中海が最も近接している場所でさえ、それぞれの海水は固有の特徴を保ったままでした。つまり、これらの海が接する部分では、水のカーテンがあって、二つの海水が混ざらないようになっていたのです。私がこのことをモリス・プハイリー教授に話すと、彼はこう言うのです。そんなことは驚くようなことではありません、イスラームの啓典クルアーンには、そのことがはっきり書かれているのですから、と。確かに、このことはクルアーンに正確に記されていました。それを知って、私はクルアーンが神の言葉であることを信じるようになり、真の教えであるイスラームを受け入れることになりました。そして、イスラームの精神の力によって、息子を失った悲しみに耐える力を与えてもらうことができたのです。」

アッラーよ、この愛は何であろう 我が身と心を焦がす  
この喜びは格別で 言葉にならず感ずるばかり

王を離れて 私はどこへ向かうのか  
この心はあなたを愛す 死しても他を愛さずに

誰もが持ち得ない あなたの御前での時  
永遠なる思い出の かけがえのない時  
あなたがいかに偉大かを 少しでも分かる者は  
この時代には あなた程の司令官はないと言う

秘めたる鍵で 我が心を開かせた  
自我の謀反も これ以降意味をなさない  
ナイチンゲールは 忠実なバラを好むもの  
誰が言うのか 厳寒に暖かい春は来ないなど

あなたの言葉は 我が心の不滅の一滴  
あなたの他に 我が魂に救われる道はない  
ああ、世界で唯一なる方よ！  
我ら罪人に これほどの恵みはない

-----

## - 10 -

## ムスリムになった人々の体験記から見えてくるもの

自らの宗教を変えてイスラームを受け入れた、さまざまな国、職業の方々の文章を紹介してきましたが、そこには多くの共通している部分があります。それは、イスラームと他の宗教と間の相違や、イスラームの崇高さについてであり、次のようにまとめることができます。

ーイスラームは、唯一の創造主を唯一の崇拝対象として認めている。その名前がアッラーである。人間は理性的に唯一であるアッラーに指向し、他の宗教でみられる複数の神という概念は、理性ある人間にとって受け入れがたいものとなる。

ーイスラームは、ただ精神的な知識を人に与えるだけでなく、現実世界で何を行うべきかについても教え、導いていくものである。

ーキリスト教では、人が原罪を負って生まれてくることや、この世はその罪を償い、罰を受けるために存在すると主張している。一方、イスラームは、人は罪のない状態で生を受け、すべての子どもたちがアッラーに愛されるしもべであること、また、理性と分別を備えた人であれば自身の行動に責任を問われること、正しい道にいる限り来世で豊かな恵みを得られることを説いている。

ーイスラームでは、礼拝を行う際、あるいは願いや悔悟をするにあたって、人とアッラーとの間に介在するものはない。このようなときに神父のような存在は必要としない。

ーイスラームでは、どの人種、肌の色、言葉、国籍であっても、ムスリムはすべて互いに兄弟であると教えている。アッラーを前にすれば、誰もが等しい存在となる。礼拝をする際には、地位の高低も、財産の有無も、白人も黒人もなく、ムスリムは一列に並んで、ともにアッラーのために額を地につけるのである。

ーイスラームでは、預言者たちも私たちと同じ人間であると説いている。し

かし、預言者たちは、人類の中であらゆる観点から見て最も気高い存在である。預言者たちの役割は、アッラーの命じたことを私たちに伝えることであり、その素晴らしい徳と人格からアッラーが彼らを選び、その役割を与えたのである。イスラームでは、これまでに遣わされたすべての預言者たちのことを敬意をもって認めている。

ーイスラームは非常に論理的な教えである。クルアーンには、理解できないような、あるいは社会生活や科学知識に見合わない内容は記されていない。また、イスラームでは迷信が排除され、偶像や絵画、銅像を奉るといった原始宗教や偶像崇拜、キリスト教で見られるような奇妙な風習は存在しない。ーキリスト教では、人々に神への恐れを抱かせる。一方、イスラームではアッラーを愛するようにする。ムスリムは、アッラーが自分を愛して下さらないことにこそ、恐れを抱くようになる。

ームスリムになるために強制されることはない。クルアーンの雌牛章第256節でも「宗教には強制があってはならない」と伝えている。しかし、キリスト教の宣教師たちは、強制したり利益を約束したりしながら、自分たちの宗教に引き入れようと努めてきた。

ーイスラームにおける礼拝はただアッラーに感謝し、その愛を得るために行われる。礼拝の時刻は一定で、人々に規律正しさをもたらしている。また、1年に1ヶ月間行う断食では、意志を強くさせ、欲望を制御することを教えている。

ーイスラームは、礼拝を行う前に体を清めることを教えており、清浄であることを特に重要視する。また、イスラームにおける礼拝は短時間であり、日常生活に支障が出ることはない。

ームスリムには優しさやいたわり、助け合いの精神が備わっている。キリスト教でもこれらは説法で語られているが、神父でさえ実践していないことが見受けられる。

ーイスラームは帝国主義も共産主義も否定する。また、経済的観点では、貧者は守られ、豊かな者が不必要に非難されることもない。さらに、巡礼においては、世界各地の多様な民族のムスリムが一堂に集まることとなり、世界的に完成された社会秩序を整えている。

ーイスラームでは、酒類、賭博、覚せい剤を禁じている。この世界における最大の災いは、この三つから起こっているのである。

ー人間が死んだ後に何が起るのかということや、来世における過ごし方については、キリスト教の宗教学者たちは解き明かせていない。一方、イスラームでは、この点に関して詳細な説明を行っている。

ーイスラームでは、貧者や客人、身寄りのない者だけでなく、宗教を問わず外国人を手助けすることを勧める教えである。

ーイスラームでは、自らが理解できないことを受け入れるよう求めることはしない。他の教えで見られるような、秘密や奥義といったものは存在しない。

ーイスラームでは、必要ときにはまずクルアーンを参照する。そこに記されていない場合は、預言者ムハンマドの言行をまとめたスンナを参照し、さらにそこでも記されていないければ、専門家の見解を参照することになる。

ーイスラームは歴史上、最も新しい教えである。クルアーンは、啓示された最初の日から、現在に至るまでまったく損なわれることなく、また、一言も手を加えられることもなく保たれてきた。そこには、人々からのあらゆる求めに応じることのできる知識が込められている。今後は他の宗教が啓示されないこと、また、宗教に関する人々の求めに完全に応じていることからみても、それが正しいことは明らかであり、イスラームが真のアッラーの教えであることを明示している。

ーイスラームは、どのような場所でも礼拝を行うことを許可している。礼拝のため、必ずモスクに行かなければならないという義務もない。ムスリムは、他の宗教の礼拝所に危害を加えない。そして、必要があれば、その場所が教会であってもアッラーに祈ることができる。

ーイスラームは、女性を非常に大切にし、大きな権利を認めている。イスラームでは複数の女性と結婚することを推奨しているのではなく、一定人数を超えず、且つ一定の権利を遵守することを条件に許可を与えているに過ぎない。イスラームが啓示された当時、アラブ人は何人の女性であろうと、何ら権利を与えることなく共に暮らしている状態だった。イスラームは、このような悲惨な状況から女性たちを救い、彼女たちの権利を保障すること

になった。また、預言者ムハンマドは「天国は母たちの足元にある」と言い、女性の特別な地位を伝えている。このような女性の地位は、他の教えでは触れていないことである。

ーイスラームは、働いたり有益なことを学んだりするよう勧めている。そして、まずは自らの理性と努力を尽くした上で、アッラーの力添えを求めるよう説いている。「一時間熟考を凝らし、役に立つ仕事をすることは、一年間（義務以外の）礼拝を行うに等しい」とまで伝える教えは他に見ることができない。

ーイスラームとは、魂と肉体を清浄に保つことである。この二つは等しく重要である。イスラームには、愛情や笑顔、優しい言葉、誠実さ、そして善行だけが存在する。

ーイスラームでは、アッラーを「万物の王」つまり、全世界の神であることを告げている。他の宗教のように、自分たちの宗教の信者のためだけの神ではないのである。

ー困窮し、慰めを求める人々は、それをクルアーンに見出すことができる。クルアーンでは、困窮した人々を慰め、樂にし、何をすべきかを伝える多くの素晴らしい忠言を見出すことができる。

## おわりに

多様な民族、国籍、職業、地位の人々が、強制を一切受けることなく、ただ自分の考えによって、あるいはさまざまな宗教を比較した結果としてムスリムになり、それぞれの考えからイスラームについて語っています。その明快で心から発せられる素晴らしい言葉を読めば、自分がムスリムであることをいかに感謝し、この教えをいかに誇りに思うことでしょうか。自分では慣れてしまっていて、当然だと思っていることが他の人から高く評価されると、非常に驚きを感じるものです。イスラームは、プロパガンダを行ったり、キリスト教の宣教師たちが所属する資金豊富な組織のように大金を使ったりすることをしなくても、唯一の神を信じ、兄弟愛、笑顔、誠実さ、寛大さ、ホスピタリティ、他者への助力、祖国発展への努力、信仰や名誉を守るための犠牲心、といった素晴らしい特質によって、他の教えよりも好ま

れるようになっていきます。

イスラームには、悪い考え方や害をなす行動はありません。ただ、イスラームを個人的な利益や政治、悪いイデオロギーのための道具として利用しようとする偽信者たちはいます。スンナの道を歩む人々、つまり、正しい信仰を持つ本当のムスリムは、イスラームを道具にしてしまうことはないのです。また、偽信者たちの欺瞞によって、正しい信仰を損なうこともないでしょう。ムスリムは、どの宗教の信者であろうとも、誰であれ決してその人の権利を侵害することはありません。預言者ムハンマドも告げていたように、72の誤った道にある者は、道を逸脱してしまった人々です。この本の最初でも述べましたが、スンナの道を歩む真のムスリムとは、日に5回の礼拝を行う清らかな人々のことです。イスラームは、宗教上の兄弟に対し、冗談であっても武器を向けることは禁じられています。

アッラーのあらゆる恵みを受け、快適な気候と豊かな水、豊富な資源を有するトルコは、スンナの道を行く真のムスリムを必要としています。この真のムスリムは、手を携えて互いに敬意を払いながら、ムスリムの名を利用する逸脱者やイスラームの敵たちが制作する書籍を排し、一方で、常に努力を怠らずに20世紀の科学技術を追い越さねばならず、そこではじめて、この神聖な祖国がそれにふさわしい水準に達することになるのです。スンナの道を行く学者たちが教えたとおりにアッラーを認めず、イスラームの禁忌を考慮せず、あるいは、外国の考えを吹き込まれて惑わされたり、宗教上の兄弟と敵対したりするような人々は、もはや道からそれてしまっているのであり、祖国に益をもたらすことはないでしょう。このような人々の魂は病に侵されているのです。機械や動物のように、その持ち主の言うなりに動くことしかできず、祖国に大きな災いをもたらしてしまいます。どうか、アッラーがこのような人々の災いから私たちをお守りくださいますように。イスラームを信じる科学者や政治家は、「魂が空虚ならば、その人は何の役にも立つことはない。そして、その空虚感はただ真の宗教によってのみ満たすことができる」といったことを語ります。魂がイスラームによって清められている人、イスラームの禁忌から遠ざかっている人は、悪質なプロパガンダの虜になることはありません。そして、スンナの道を歩む学者たちが指し

示す正しい方向へと進み、ムスリムの兄弟たちと一緒にあって、イスラームや祖国のために尽くすのです。その結果として、現世でも来世でも、アッラーの恵みとご加護に与ることができるのです。

昔から、イスラームに敵対する頑迷な人々は、機会あるたびにイスラームのことを罵り、正しい信条に手を加えようと多くの危害を加えてきました。キリスト教徒や、ムスリムの名を利用する道を外れた者たちにより、たくさんの有害な書籍も出されてきました。ヨーロッパでは、イスラームについて何の知識もないままに、ムスリムのことを悪魔崇拝者であるとか、無宗教論者であるとか、いつも悪事を働く無慈悲で嘘つきの女性蔑視をする人々として描くといった、誤った本が多く見受けられます。それは、アジア圏でも同じです。今日、人々は互いの理解をより深めていけるようになり、正しい情報が知られていくにつれて、旧来の嫌悪感が正しい評価へと変わってきています。キリスト教徒とムスリムを争うように仕向けたり、道を外れたムスリムと真のムスリムを争わせたりするような分裂主義的で破壊を招く考えは、時間とともに減りつつあると感じられます。

現在では、キリスト教でもその教義の不足部分を理解し、正そうとする動きがみられるようになりました。この本を編集している際には、インドから一通の手紙が届きました。手紙と一緒に、その地の宣教師たちが配布しているという「解説書」も同封されており、そこには次のように書かれていました。「神は私たち一人ひとりを創造されました。だから、私たちは皆、神の息子であり娘であります。あなたも、神の息子であり娘です。新約聖書にある神の息子、という表現は、神のしもべということを意味します。つまり、預言者イエスが神の息子であるというのは、神があなたや私と同様に、イエスを創造したということの意味しており、それ以上に神性を有しているということではありません。また、聖霊というのは、預言者イエスに与えられた大いなる精神の力を意味します。これを別の神として理解するのは過ちです。新約聖書では、三位一体という概念は登場しません。神は唯一で、三つの神を信じるという考えは誤りです。さらに、人は原罪を負って生まれてきたという、これまでの教えも誤りです。神に対して、すべての人は自分が行ったことだけに責任を負っています。」

このように、キリスト教の宣教師でさえ、三位一体説というものがいかに無意味なものであったかを理解し、方向を正そうとしています。これも、すべての人が唯一神信仰へと集い始めていることの現れです。こうした軌道修正は、イスラームとの距離を縮めることでもあります。私たちが望むのは、いつの日か、イスラームが全世界に広まることであり、そうならなければ、人々は指針となる教えを失い、人類の破滅へとつながっていくのです。

最後に、クルアーンの援助章で締めくくりたいと思います。

「アッラーの援助と勝利が来て、人びとが群れをなしてアッラーの教え（イスラーム）に入るのを見たら、あなたの主の栄光を誉め称え、また御赦しを請え。本当にかれは、度々赦される御方である」

-----

- 11 -

悔悟のドゥアー

アッラーに対して自らの過ちを悔いるには、「アスタグフルッラー・ミン・クッリ・マー・カリハッラー」もしくは短く「アスタグフルッラー」と唱えます。これは、「主よ、あなたのお気に召さないことを私が行ったのであれば、私をお赦してください。そして、あなたのお気に召すことを私が行わないことから、私をお守りください」ということを意味します。また、このような悔悟のドゥアー（願い）には、「アスタグフルッラーフラズィーム アッラズィー、ラー イラーハ イッラーフウェル カイヤール カイユーマ ワ アトゥブ イライフ」というものもあります。

ムハンマド・マースム師による手記の第2巻・第80章には、次のハディースが示されています。「悔悟のドゥアーを継続して行う者をアッラーはその苦難から救われ、思いもかけないところから糧を与えられる」。

私は朝の礼拝の後、このドゥアーを三度詠むことにしています。このドゥアーを詠んだ後、ただ「アスタグフルッラー」と70回唱えます。悔悟することは、死以外のすべての苦しみから救うものです。そして、死の時が迎えた人が、苦しむことなく旅立つことを助けるものなのです。